連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol. 4 No. 2
第14号
September 2013

対人援助学会

NO. １４　M O K U J I

目次		002
執筆者@短信	執筆者全員	003-012
知的障害者の労働現場　014	千葉　晃央	013-017
臨床社会学の方法　(2)ガスライティング	中村　正	018-026
ケアマネだからできること	木村　晃子	027-031
街場の就活論　vol.14　「まだ、大丈夫」	団　遊	032-034
コミュニティを探して　(4)	藤　信子	035-037
第14回　誌上ひとりワークショップ	岡田　隆介	038-041
映画の中の子どもたち　14　「くちづけ」	川崎　二三彦	042-043
子どもと家族と学校と(開業カウンセラー日誌)　14	中島　弘美	044-047
蟷螂の斧　part 2　様々なシステムと私　第1回	団　士郎	048-059
学校臨床の新展開　14　夏休み	浦田　雅夫	060-062
学びの森の住人たち　(9)　コトバが生まれる時	北村　真也	063-078
幼稚園の現場から　XIV　避難訓練・津波対策	鶴谷　主一	079-084
福祉系対人援助職養成の現場から　14	西川　友理	085-089
先人と知恵から　(2)	河岸　由里子	090-095
不妊治療現場の過去・現在・未来　14	荒木　晃子	096-103
対人援助学＆心理学の縦横無尽　11	サトウ　タツヤ	104-105
ドラマセラピーの手法(4)　ロバート・ランディの「ロールメソッド」	尾上　明代	106-110
日本のジェノグラム　(1)	早樫　一男	111-113
きもちは言葉をさがしている　第13話	水野　スウ	114-119
やくしまに暮らして　第十三章	大野　睦	120-123
お寺の社会性(十二)　～生臭坊主のつぶやき～	竹中　尚文	124-128
こころ日記　ぼちぼち	脇野　千恵	129-132
これからの男性援助を考える　第十二回	坊　隆史	133-139
ノーサイド　第10回　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	140-143
それでも「遍照金剛言う」ことにします(9)	三野　宏治	144-155
男は痛い！第8回　「棒たおし」	國友　万裕	156-164
援助職のリカバリー　(7)　～29歳で、「引きこもり」になりました～	袴田　洋子	165-167
周旋家日記　(7)	乾　明紀	168-169
トランスジェンダーをいきる(6)	牛若　孝治	170-174
役場の対人援助論(6)	岡崎　正明	175-177
新版K式発達検査をめぐって(その5)	大谷　多加志	178-181
十代の母という生き方④	大川　聡子	182-190
電脳援助(4)　効果的なプレゼン　パワーポイントを上手に使おう	浅田　英輔	191-196
日曜寺子屋家族塾の取り組み　3	古川　秀明	197-200
Journey to my PhD @ York in イギリス／Vol　2	浅野　貴博	201-204
養育里親～もうひとつの家族～　2	坂口　伊都	205-208
編集後記	編集長＆編集員	209-210
告知二件　2013年対人援助学会京都大会・届けるプロジェクト		211-212

第14号 執筆者@短信

◆到着順◆

坂口　伊都　新連載第二回

2回目の連載です。悩みながら、書き上げたという感覚でいます。まだ、養育里親として子どもを預かる予定もなく、焦っても仕方がないのですが、モヤモヤとしてすっきりしない感じがしています。まぁ、待つしかないのですけど。

気分を変えましょう。最近、楽しかったのは自主家族事例検討会の仲間でスペイン料理を食べに行った事です。メンバーは、歌うソーシャルワーカー、踊る相談員、五足のわらじ会社員、英語堪能カウンセラー、泳ぐ事務員、つぶやき上手なスクールソーシャルワーカー、犬大好きパイオニア研究員と個性派ぞろいの 30 代から 50 代です。

事例検討会では、全員揃わないのですが、こういう企画では何故かそろう私達。このメンバーが全員そろったのは初めてだったりします。小さな自主「かじけん」ですが、いろいろな立場の人達と交わるのもいいものですね。

古川　秀明

今月から日曜寺子屋家族塾の第三期塾生の募集に入ります。回を重ねるごとに講師の教える力量が上がってきているのが実感できます。

前回告知させていただいた、8月3日の講演会もおかげさまで無事終了することができました。

ドライアイスを使った日曜寺子屋公開授業も好評でした。

私の講演会は親子での参加者が多く、講演の後に学習関連のグッズを買って帰る家族を見ると、微力ながら「学ぶ楽しさ」を家族に提供できているのかなと思います。

今後も日曜寺子屋家族塾の取り組みは続けます。まだまだ試行錯誤の連続ですが、ご指導やご意見を頂ければ幸いです。

浅野　貴博　新連載第二回

京都での、博士論文のための調査も無事終わり、蒸し暑い京都から脱出し、私の郷里である福島県の会津にしばらく帰省していました。

NHK の大河ドラマ「八重の桜」のおかげで、震災と原発事故の影響で途絶えていた観光客もずいぶんと戻ってきているようです。「八重の桜」にちなんだお菓子やグッズをあちらこちらで目にすると、うれしい反面、このブームが去った後のことを、ふと考えてしまいます。引き続き、多くの人が関心を持って、足を運んでくれることを願わずにはいられません。

一時帰国してから、欠かさずに「八重の桜」を見ています。これまでの多くの幕末ドラマの中で、長州側からの視点で美化されていたようなエピソードについて（例えば、’錦の御旗‘の経緯など）、史実に基づき客観的に描こうという強い意志が感じられ、会津人として、毎回目頭が熱くなっています。戊辰戦争時の白虎隊に代表されるような悲劇性を必要以上にクローズアップせず、 丁寧に、そして淡々と描くことで、’賊軍’という汚名を着せられることになった会津藩の無念の想いが薄れることなく伝わったのではと思います。

1928 年、旧会津藩主松平容保公の孫にあたる勢津子さまが、昭和天皇の弟·秩父宮雍仁親王の妃殿下になられたことが、会津人にとっていかに意義深く、重要な出来事であったか、ドラマ前半で丁寧に描かれた様々なエピソードによって、視聴者に深く理解して頂けるのではと期待しています。

岡田　隆介

わたしの選択

人は、常にいくつもの選択肢の中から最適と思われるものを選び（そう信じて）行動に移します。生きることは選択と決断の連続であり、いまもその線上を歩いています。現在の立ち位置は無数の選択の連なりだから、“もしあのとき～していたら”なんて、一つの切片を切り取ってゴチャゴチャ言ってるに過ぎません。

なんてことを思いながら。”昭和52年春、もしも広島市心身障害児福祉センター（当時はそう呼ばれていた）への赴任を断っていたら”と夢想します。家族、友人、仕事仲間のだれとも交わらないパラレルワールドに住んでいて‥。「で、どうなの？そっち側に飛んでもいいけど、ユー、行っちゃう？」「いやいや、めっそうもない」。

さて、半年後にはおよそ40年ぶりに選択と決断の日が来ます。もうどんな選択をしたところでパラレルワールドはないでしょう。ということで、思いっきり楽しんでみます、ファイナル·ファンタジーを！

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」（http://auranomori.com）、府教委認定フリースクール「知誠館」（http://tiseikan.com） 代表。

ふと気がつけば、もう 14 回目の投稿ですね。さてこの夏、我が家では大学3回生の娘がアメリカの大学へ短期留学。高 3 になる下の娘は受験前の勉強合宿。そのすきに、妻と私は以前から行ってみたかったタイのチェンマイ、スコータイへ。ゆったりとした時間が流れる中、久しぶりにほっこりとした気分に浸ることができました。そしてもちろん下の娘が合宿から帰る日に、関空へと滑り込むように戻ってきたのです。

河岸　由里子

臨床心理士　北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

先日生まれて初めてゲジゲジ（正式名はゲジ）を見た。家の中に得体のしれない、気味の悪い虫がいて、大急ぎでつぶした。なんという虫なのか分からなかったのでネットで調べたところ、ゲジだと分かった。しかも4cmほどあったのでオオゲジなのだと思う。ゲジゲジという名前も知っていたし、ゲジゲジ眉などと言う言葉もあってきっとモジャモジャの生き物なのだろうと思っていた。ムカデやヤスデ、毛虫、ワラジムシ、一般に気持ち悪がられる虫は一杯見て来たけどゲジが一番気持ち悪いと思った。なんといっても足の長さが不揃いなのが許せない。長い所と短めの所とがあるのだ。しかも肉食で、飛んでいる我にとびかかって食べるとか。多足の昆虫は蜘蛛までは許せるが、それ以上の多足には出来れば会いたくない。例外として6本足だがゴキブリは嫌だ。ゲジはゴキブリの天敵だそうだ。北海道では殆どゴキブリを見かけないのでゲジがいても嬉しくない。60年近く生きてきて、ゲジゲジに出会わなかったことの方が不思議なのかもしれないが、まだまだ初めての事に出会えるとは幸せなのかもしれない。

國友　万裕

来年の 2 月で 50 歳になります。いよいよ人生の秋です。

今年もお盆は故郷には帰りませんでした。母や弟とはしょっちゅう電話で話していますし、この頃は、Facebook があるので、僕がアップした写真を見ていて、「まあ元気でやっているみたいね。友達もたくさんいて……」と母は安心しているみたいです。母は、これまでずっと僕の不登校のトラウマと闘ってくれました。だから誰よりも僕を理解しています。僕が決して努力をしなかったわけではなく、不登校になってから 35 年近く、普通の人がしなくていいような苦しみをたくさん味わったということ……。不登校という言葉もない頃に不登校になり、不登校を治す処方箋なんて何もない時代に、もがき苦しみ、どうにか非常勤講師とはいえ、自分で生活できるようになるまでには、並々ならぬ苦労があったということ……。そして、今でもPTSDに苦しみ、トラウマをどこに置いたらいいのかわからずに苦しんでいるということ……。

「世の中には外国で子供が暮らしている人だって、たくさんいるから、あなたが一生、帰ってこなかったとしても、あなたが元気ならいいと思っているから」と母は言ってくれます。僕が不登校になったのは、おそらく誰が悪いからでもない、運命のせいです。それがわかっていても、僕は未だに自分を許すことができません。自分を許せないことは苦しいこと、自分を愛せないことはつらいことです。

僕は、故郷を憎むことで、どうにか自分の気持ちに折り合いをつけようとしています。もう故郷には帰らない。親不孝このうえないのだけど、僕のトラウマは、僕が一人で責任を負えるほど軽いものではなかった。結局、悪いのは故郷の風土だと故郷に責任転嫁するしかないのです。男が責任転嫁するのはみっともない！？　いや、してもいいですよね？　だって、俺は、35 年も苦しんだんだから……。

思春期の女の子が、DVやセクハラで、心が壊れたとしたら、世間は皆同情の目で見てくれる。しかし、男子が男性差別で心が壊れても、誰も同情はしてくれない。今はしてくれるのかもしれんけど、あの頃はしてくれなかった。15 歳で、心が壊れてしまった僕は、35 年たった今でも、リハビリ中の身なのです。

憎むことは悲しいこと。偏見をもつことも悲しいこと。しかし、それをよすがに生きることしかできない人だって、世の中には存在するんです。切ないですね。

この頃凹みモード。今回はちょっと重い話になってしまいました（笑）。

岡崎　正明

お盆休み。友人と昼食に行くことに。「何食べる？」「何でも」「近くにハンバーグ屋ができてたけど」ハンバーグかぁ‥。微妙な表情をしていると、友人が「あそこの蕎麦にする？」と変更案。「それだ！」胃がうなずいた気がした。

すでに時間は2時前。店に連絡すると「ラストオーダー2時半です」。

うちから蕎麦屋まで車で飛ばして25～30分。間に合うか？かなりきわどいぞ。

迷っている暇はない。とりあえず店に車を走らせる。友人の運転もいつもより荒々しい。気持は分かるが事故だけはやめてくれ。「蕎麦食いたさの暴走」新聞の見出しが脳裏をよぎる。笑えない。

「間に合うか？」「この時間は道も混んでないし」「素早く安全運転でな」「万が一ダメだったら？」「あの先にスリランカカレーの店があったろ」「あそこも悪くないな」

すでに蕎麦のつもりで待機している胃に、「ひょっとしたらカレー」と言い聞かせる。だが相反する2つの味の準備は中々難しい。気付いたらカレー南蛮蕎麦のことを考えていた。

そうこうしてる間に残り10分。「おい、近道こっちだろ！」「しまった」まさかのタイムロス。胃の中は俄然スリランカ色を帯び始めた。しかしそれと反比例するように蕎麦への未練がこみ上げる。

残り3分。「こりゃアカンかな。まだ距離が少しあるぞ」「ダメかぁ‥」友人もカレーやむなしの雰囲気。蕎麦は土俵際。スリランカで腹をくくろう。そう思った瞬間。まさかの展開。「これでカレー屋も閉まってたりして…」車内も胃内も大混乱。

「スリランカ人に盆休みはないやろ」「でも仏教徒じゃ？」「‥そもそも本当にスリランカ人かも分からん」「ぼちぼち昼休憩とか」「カレー屋は普通3時までやるやろ」「他にあの辺店あるか？」「最悪ここのうどん屋かなあ‥」憶測と妄想。希望と絶望の会話が飛び交う。胃の準備は、もはやあきらめた。

最後の信号。ここを曲がれば蕎麦屋まであと数百m。カレー屋なら直進だ。車の

時計は2時33分。この時計は合っているのか？いやむしろ蕎麦屋の時計は？

「ダメもとで行ってみるか」友人のひと言が私たちの運命を決めた。数十秒後、蕎麦屋が見えた。まだ暖簾がかかっている。落ち着けと言い聞かせ、店に飛び込む。

「まだいけます？」「いらいっしゃいませ、どうぞ～」

どこでも聞く店員のかけ声が、天使のささやきに聞こえた。店の時計は2時35分を過ぎていた。

三野　宏治

関西を離れて 3 回目の盆休みでした。昔は「行くつもりがあれば、どこにでも行ける。会うつもりがあればいつでも会える。行けない、会えないのは自分にその気がないからだ」と思っていました。そして盆暮れ正月の帰省ラッシュをニュースで見るにつけ「なにも混む時期に帰省しなくてもいいのに」と感じていました。

結婚して子どもが生まれて故郷を離れた今、そうではないことを身をもって感じています。行きたくても行けなかったり、会いたくても、そう上手く都合がつかなかったり。そんなことの連続で生活が成り立っている。だから、都合のつく盆暮れ正月に帰るのだと。こんなことを今更ながら理解しています。

今、「何故、混む時期に帰省するのか？」と問われれば、「混んでいても、どうであっても帰省したいから帰るのだ」と答えます。

中村 正

寺山修司が好きなので関連するイベントや演劇があれば可能な限りでかけている。特に今年は寺山修司没後30年なので、かつてないほどのイベントがある（大半は東京で開催されるので残念であるが）。47歳で亡くなった1983年、私は大学院生で研究室の友人たちと寺山論に花を咲かせた記憶がある。

この夏は東京で仕事があるたびにいろんな企画にでかけた。ワタリウム美術館（東京・青山）という現代アート美術館では「寺山修司展 ノック」があった。「ノック」は、1975年4月19日、東京阿佐ヶ谷で行なわれた30時間の市街劇のこと。「あなたの平穏無事とは一体何なのか？ 」と問い、地域の玄関の扉を突然ノックしていったという。「かつて、私は、『街は大いなる開かれた書物である』と書いた。しかし今ならばこう書き直すことだろう。『街は、今すぐ劇場になりたがっている。さあ、台本を捨てよ、街へ出よう』と」という言葉どおりのことが行われた様子が見事に展示されていた（寺山修司『朝日新聞』1975年5月7日）。そして楽しみにしていたのは演劇実験室◎万有引力による「邪宗門」の上演である。なかなかこの題目が演じられる機会がなかったのでわくわくしながら観た。黒衣が主役で役者はそれに操られている。黒衣からの解放が役者の課題でもあるのだが、その黒衣を操る大きな黒衣が登場する。それは＜言葉＞だとされ、その＜言葉＞に操られたこんな芝居はもう止めた！といいながら舞台が解体されていく。その時点で役者は黒衣から解放されることとなる。しかしその解放を語る＜言葉＞自体がすでにつくられたものでしかない。＜言葉＞という大きな黒衣によってコントロールされていることになる。ではいったい自由とは何であるのかという大きな問いを投げかける。役者は勝手に舞台から降りて三々五々解散となる。客はおどおどして何がなんだかわからなくなる。私にはこの混乱は心地よい。

さらに、元・天井桟敷の昭和精吾による「71歳・俺の寺山修司と天井桟敷」と題した語りパフォーマンスも間近にいた人からの記憶をもとにした一人芝居として楽しめた。

そしてもうひとつ。9月になったら青森県三沢市にある寺山修司記念館、そしてむつ市にある恐山にいく予定だ。今年で三年連続となる。私にとってのパワースポットである。ますます時代は亡くなって30年になる寺山修司を必要としているようにも思えてくる。

そして関連する話題をもうひとつ。マガジン編集長の団さんの勧めもあり読んでみたのは『クレイジー・ライク・アメリカ―心の病はいかに輸出されたか』（イーサン・ウォッターズ著、紀伊國屋書店、2013年）という書物。The Globalization of the American Psycheという英語のサブタイトルが内容をよく伝えていると思う。面白かった。アメリカ産の心の病がトラウマ論や何とか療法や新薬とともに世界を支配している様子が描かれている。日本もかなりの分量を割いて巨大な「うつ病マーケット社会」として登場する。

ちょうどその時、朝日新聞の「（インタビュー）新・遠野物語―文芸評論家・東雅夫さん」という記事が目にとまった（2013年8月8日朝刊）。偶然だが別件のメールでスイスのアルプスにいるという同僚の村本邦子さんからこの記事読んだかと連絡があった。これは怪談文学に精通している東さんの取り組みの紹介で、東北の震災怪談の話である。『遠野物語』の現代版だという。死んだはずのひとたちと会ったり話をしたという体験が今、被災地の随所にあるのだという。それを集めているという。同じ話をNHKスペシャルが特集していた。2013年8月24日放送の「亡き人が現れた・・被災地で語られる不思議体験」だ。死者が生者を元気づける。忘れはしない記憶がある。時間とともに、文化とともに、あの世とともに、そして死者とともにケアや癒しがある。「震災体験」としてひとりひとりの物語となっていく。お盆だからというのもあるが、死者の存在は文化の陰翳や感情の深奥や自然の驚異を形成するので心を語る際には欠かせない。もちろん土俗や地域のなかには人を共同へと抑圧する要素もあることを認めた上でもなお、土と地の文化は面白いと思う。決して輸

入できない。寺山修司もまた東北の文化に深く根ざしたアートを創った人である。

しばらくは実に表面的な「心の時代」なるものが続くのだろうけれども、地道にこつこつとこのマガジンはそうしたなかでは面白い機能を果たしていけるのだと思う。確実に自分の言葉や体験をもとに語ろうとする支援と臨床が執筆者の文章から読み取れるからだ。(2013年8月25日記)

浅田　英輔

学校の先生と、ケースの子どもについて話をした。いろいろと問題行動がある子なのだが、その先生、「この子はフツウになりますか？」と。「フツウになる」という言葉にはいろいろな意味が込められていると思う。「フツウに高校行けますか」「フツウに仕事ができますか」「フツウに結婚できますか」その中で全員の了解を得られるのは「普通高校に行けるかどうか」くらいであろう(そういう意味でもない！)。「フツウ」という言葉を使うとき、我々は思考停止しているのではないか。「フツウの仕事」ってなんぞや？「フツウの結婚」ってなんですかね？学生時代、成績もよくてスポーツもできて、でも仕事に就いてない人とか、結婚に失敗(この言葉も怪しいが)している人も「フツウに」いるだろう。そのうまくいかなさ加減が不幸だという人もいるだろうし、「離婚してほんとさっぱりした！」という人だっているだろう。仕事している不幸な人も、結婚してて不幸な人も「フツウ」にいる。「フツウ」という言葉が出てしまったときは、「そこで考えを止めずに、もうちょっと考えてみなよ？」と自分が自分に問いかけているのだと思うことにする。

鶴谷　圭一

http://www.haramachi-ki.jp

メール：osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター：haramachikinder

8月2日、NHK あさイチという番組のディレクターさんから電話が入った。

「ライフジャケットのことで来週でも取材したい」という内容。

最初は話がかみ合わなかった。「夏休みなので、園には誰もいないだろうから取材に協力してくれる保護者を紹介してほしい」と言うことだったが、最近の幼稚園は、たいてい預かり保育を実施しているので夏休みもオープンだ。僕らにとっては当たり前のことだけど、子どもがいない人には幼稚園の最近の実情なんてその人の幼児時代から進んでいないんだ、と感じた。

そして取材当日、ディレクター、アナウンサー、カメラ、音声さんの4人がドライバーさんが運転するワゴン車で来園された。ディレクターさんの指示に従ってアナウンサーと出会うシーンから撮る。その後協力してくれた園児 10 人が模擬避難訓練をして、ライフジャケットでの練習シーンまで、子どもや保護者のインタビューも含めてみっちり3時間撮影して終了した。

放映日は 22 日「あさイチ」の冒頭で防災用具の紹介コーナー10 分の予定･･･おお、出てきた出てきた！と思ったら、イチローの 4000 本安打の臨時ニュースが飛び込む！ここで3分時間をとられて3時間の取材が3分の放映で終わった。テレビってねえ、タイヘンですねえ！僕らよりも一生懸命準備したディレクターさんの気持ちやいかに･･･ご苦労様です。

さすがに全国放送なので、たった3分でも知り合いから「見たよ」連絡が来た。

いちばん驚いたのは、30 年以上も前の高校の同級生から「もしや同級生の鶴谷さん？」のメールが来たことだ。

千葉　晃央

ミニ連載：

■私がしている文章の書き方　3 ■

この短信では私がしている文章の書き方はどんな手順なのかをまとめてみる試みをしています。自分への確認のために始めました。

大きな6 手順

①箇条書きでいいたいことをかく

②丁寧に膨らませて文章にする

③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える

④接続詞等、つながるように加筆⑤「です」「ます」、「である」の判断

⑥音読で確認

⑦黙読でも確認

今回は「③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える」

手順③をいったんプリントアウトします。そして読み返します。パソコンの画面でみつからなかった訂正ポイントが結構見つかります。これはパソコンという画面と紙面という媒体の違いによるものが大きいと思います。パソコンの画面ではどうしても見落としがでます。

読んでいると前後を入れ替えた方がいいことに気が付くことも多いです。ばらばらになっていた、似たような内容も見つかります。ですので、テーマごとにプリントアウトしたものをはさみで切っていきます。そして、カテゴライズするのです。そして、その塊ごとに文章の構成の中でどれを最初に持ってきて、これを最後に持ってきて等考えていきます。(続く)

大川　聡子

連載4回目です。今回から、本文中にメールアドレスを表記することにしました。マガジンを通じてか、最近になって私の論文をお読みいただき、連絡をいただいた方が何人かいらっしゃいます。ですが、私は1 年の半分は実習に出ていて、他にも講義や出張などで研究室にいないことが結構多く、電話ではとても連絡がつきにくい

のが現状です。また、私が博論で著書を何冊も引用させていただいた先生(所属大学が同じ)に「＊＊さんから、大川先生を紹介していただきたいと連絡をもらいましたが、いかがでしょうか？」とメールで

ご連絡をいただき、非常に恐縮したこともありました。こうしたこともあって、興味を持っていただいた方が直接ご連絡いただけるように、アドレスを書かせていただいた次第です。

前号の編集後記で編集長が書かれていたように、マガジンで研究を発信する場を与えていただいたことが、人との新しい出会いにつながっていくのかなと思い、ちょっとわくわくしています。

本編では、今回から 10 代の母親の語りがメインになります。ご意見・ご感想をお待ちしています。

大谷　多加志

足腰の鍛錬をしています。5 月にソフトボールの試合をしたら翌日から歩けなくなるほどの筋肉痛になったので、運動不足を解消すべくランニングを始めました。週に 1 回のペースで 10 回目まで継続中。マガジンの連載とともに、続けていきたい習慣になりました。

また、ちょっとしたきっかけから、連載のテーマである「発達検査」の原典を読むことになりました。この仕事をするからには読んでおきたいと以前から思いながら、「また手が空いたら・・・」と言い訳ばかりで読めていなかった。これも私にとっては足腰の鍛錬です。ふと、いいタイミングできっかけが訪れる今年。きっといい流れがあるんだろうと思う。

竹中　尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

かつて、ある所で墓場によく行きました。ある人に注意を受けました。殴られるかもしれないよ、と。その社会では、悲しみの表現にそのようなこともあるのだと知りました。■感情とその表現は一様ではありません。日本の社会で、キスやハグが受け入れられるようになったのは最近のことだと思います。今でも、都会と田舎ではこうした愛情表現の受け入れ度は異なるでしょう。感情の表現方法は他者の表現を見て覚えることも多いと思います。■最近、お葬式に会葬する人が減りました。人の悲しみに会う前に、いきなり自分に悲しみが訪れたと言うこともあります。お葬式と言う「儀式」でどのように身を置いていいか分からない人を見かけることもあります。悲しみを表現出来ない人が増えています。

川﨑　二三彦

連れ合いを接待する？

退職を前に「有り余っている有給休暇を少しは使いたいな」という連れあいの希望を満たすため、今年 2 月に宮崎旅行に出かけたことは前の前の号で報告した。これで何とか義務を果たしたと思っていたら、そうは問屋が卸さない。

「退職記念の慰労旅行に行きたいわ」

などと言い出したために、今年 5 月、ベトナム旅行を敢行したことも、前号で紹介した。

さて 7 月。私の所属している全国児童相談研究会が新潟で小セミナーを開くというので出かけることにしたのだが、せっかくの新潟である。少し足を伸ばして佐渡に行くのも悪くないなと思った。

「7 月に佐渡へ行こうと思うが、どや」

「行く、行く」

詳しい日程も聞かずに二つ返事で話が決まってしまうのは、やはり退職した身の強みだろう。

それはさておき、佐渡に行く気になったのは、是非とも訪ねたいところがあったからだ。ご存じの方も多いだろうが、佐渡は、彼の安寿と厨子王の母が人身売買いよって売られた地なのである。

「どうもあなたは、安寿と厨子王にえらくご執心ですな」

という声が聞こえそうだが、もちろんそれについては理由がある。嘘と思うなら、厚生省児童局編「児童福祉十年の歩み」（1959 年 11 月発行）を開いてもらいたい。そこにこんなことが書いてある。

「鎌倉時代であるが、この時代には山椒大夫の説話や室町の謡曲などにもみえているように子女の人身売買が行われたようである。その発生原因は、平家の残党のような捕虜からであるものもあったが、多くは貧困に原因しており、とくに寛喜二、三年の大飢饉はこれを促進したものと思われる。幕府はしばしば禁令を発し、これを犯す者は厳刑に処したが、止むことがなかった。　　。

児童福祉に携わる者として、山椒大夫は、つまり安寿と厨子王の悲話は、必ずや知っておくべき歴史の一幕なのである。

ところで、一夜漬けの調査によれば、佐渡には安寿塚が少なくとも 2 か所ある。そこで、佐渡到着初日、最初に向かったのが、佐渡市畑野。森鴎外の「山椒大夫」の結末と違って、この地は生きて母と再会した安寿姫が、京へと帰る途中に亡くなった場所とされていた。もちろん観光客など一人もいなかったが、誰の手によるものか、祠は丁寧に祭られていた。

翌日は、安寿の母が騙され、連れて行かれたという鹿の浦を訪ねることにした。ただし、畑野で目的地を探すのに苦労したので、この日はあらかじめ所轄の警察署で道案内をお願いした。

「あのう、ここへ行きたいんですが…」

「ええっ、安寿塚ですか??」

どうだろう、勤務中の警官誰も安寿塚そのものをよく知らず、総出で PC や道路地図

を調べてくれたのであった。結果、最後は無事に目標地点を地図上に発見、非常に親切な案内をしてくれたのは、大助かりであった。なお、到着してみると、県道 45 号線には大きな標識がありました(w)。

＊

というようなわけで、佐渡旅行は目的を果たした上に、トキを観て佐渡金山跡地も回り、おまけに土産物店で働くジェンキンズさんの後ろ姿もちらと見て無事終了した。のはよかったとして、前号で私はこんなことを書いた。

「今回の旅行(注:ベトナム旅行)が宮崎旅行と違ったのは、帰国後、連れあいが京都に戻らず、そのまま何日か、横浜で単身赴任している私のアパートに滞在したことだ。何かと助かることは多かったのだけれど、部屋が狭くて居場所がない、見なくていいところを覗いている、等々の不都合さがそこかしこに出現する」

今回も全く同じ事態が出来するが、問題は連れ合いがいつまで滞留する気なのかということだ。こっちは一応仕事があるのだし、知り合いの誰一人としていない狭苦しいアパートに居てはさぞかしつまらぬだろうと、お節介ながら考えてしまう。

「佐渡から戻った後、福島県の郡山で仕事があるんだけどな」

うかつにも口を滑らせたために急遽決まったのは、その日の仕事を終えたら、横浜と郡山の中間地点、宇都宮で合流し、鬼怒川温泉に一泊するプランである。もちろん、費用はこっち持ち。

温泉でくつろぎ、6 年かかるという修復工事直前の日光東照宮をぎりぎりセーフで見学、前日の雨で流量を増した華厳の滝も満喫した。

「アンタみたいに、一週間のうちに 2 か所も温泉旅行する者はいないぜ」

「シアワセやろ」

などと、暗に感謝を強要してはみたものの、意に介する様子は見られない。最後はどこへ行く当てもなくなり、苦肉の策として横浜市内某映画館で宮崎駿「風立ちぬ」を観る。

かくして、どうにかこうにか接待も終わり、連れ合いは晴れて京都へ戻っていったのであった。　　(2013/08/25 記)

中村　周平

私事で恐縮ですが、7 月初旬に関東の大学でお話をさせていただく機会がありました。以前、立命館大学の障害学生支援室におられた職員の方に声を掛けていただいたことがきっかけでした。

個人的に大変尊敬する方からでしたので、嬉しさと同じくらいプレッシャーが掛かり…。しかし、学生スタッフの方、職員の方と一緒に、最後までやり遂げることができました。

京都に帰った後、声を掛けていただいた職員の方からメールをいただきました。その最後には、「一緒に仕事ができてよかった」と。言葉にできない嬉しさがこみ上げてきました。

荒木　晃子

＜なぜ？＞ 2012 年度全国の児童相談所で保護した新生児 650 人のうち、541 人(83%)が乳児院に委託され、95 人(15%)は里親委託であったという(読売新聞 2013.8.25)。この結果は、里親委託ガイドライン概要(2011 年厚生労働省)にある「里親委託優先の原則」が反映された数字とは考えにくい。当然ながら、里親となるには様々な手続きや研修を経て、その適性や家族関係が考慮されてしかるべきであろう。選別するためには時間も必要だ。しかし、里親委託優先の原則に伴い、その判定基準や職員の意識にも変化はあるのだろうか。ルールが変わっても、人が人を選別する際の意識変化は不可欠である。一説に、「人間の心理発達段階をみると、誕生から 3 歳までの 3 年間は、人格形成にとって最も大切な時期。生後六ヶ月を過ぎる頃から始まるという人見知りは、まさに愛着が形成され始めたことを意味する。この生後六ヶ月から一歳半くらいまでが、愛着形成にとってもっとも重要な時期である。「臨界期」とよばれるこの時期に、母親の不在や交替があったとき、愛着の傷を受けやすくなり、後の対人関係や社会性の発達に影響が及ぶ危険性が生じる。この臨界期を過ぎると愛着形成は難しい」という発達心理学情報もあることから、うえの調査結果に「なんだかな～」という感が私にはある。むろん、人間は百人百様。乳幼児といえど、ひとりひとりの個性は光る。なので、みな一様に、人の発達とは、愛着とはを語れるわけではないことも理解している。でも、やはり、なんだかな～、なのである。理由は、私の不妊当事者性にある。知り合いにも、また、クライエントさんのなかにも、今この瞬間にも、(登録を済ませ)里子/養子を迎えたい

カップルがたくさん存在する。彼らはずっと以前から、子どものいる家庭づくりを目標に力を合わせて頑張ってきた人たちだ。「いつかきっと、わたしたちも子どもを迎えることができる」と希望を持ちつつ、いまかいまかとその連絡を待っているのだ。想像するに、その数は上の調査で浮かび上がった乳児院へ委託された新生児数を大幅に上回るに違いない。でも、なぜ彼らは出会わないのだろう。施設に委託された多くの新生児たちと、その子たちを迎えたい沢山の不妊カップル。国政は、里親委託優先の原則を方針として打ち出した。

導線の端と端は見えた。その方向性も決まった。無いのは、その導線を作りそれを支える仕組みだ。家庭を必要とする子どもたちと、子どもを迎えたいカップルをつなぐネットワークを、いつか日本中に張り巡らせたい。新たな情報を目にするたび、かつて、ささやかな夢と胸に秘めていた思いは確信に変わり、いま、大きな希望に育ちつつある。

尾上　明代

数日前、テレビのチャンネルをランダムに変えて見ていたとき、ハッとしてリモコンを動かす手が止まりました。

画面には、お伽噺や神話の場面を描いた絵が次々と映し出され、その説明をする人の声が流れていたのですが、それが自分の声だったのです。ほどなくして話し手の顔が映りました。やはり私でした。正確に言うと、約30年前の私です。私は昔、アナウンサーとして、放送の仕事をしていました。その一番最初の仕事が、放送大学のテレビ番組「記号と人間」というシリーズの聞き手でした。それが放映されていたのです。講師は、哲学者の吉田夏彦先生（東京工業大学名誉教授）。なぜこんなに古い番組が放送されているのか・・と思いながら、懐かしく見ていたら、「もう一度見たいあの名講義」という番組枠だったことが後でわかりました。

思いがけない形で昔の自分に会えました。そのおかげで、あれから後の年月を振り返り、いろいろな出来事がギッシリつまった日々を送ってきたことをしみじみ感じることができました。

木村　晃子

この5月から、介護に関する地元の業界紙に連載をしている。ケアマネとして、利用者の想いをどのように紡ぎ支援をしていくか、ということを実践事例を通してお伝えしている。これは、主にコミュニティとのつながりをどのように再生していくか、という視点からの内容が主だ。文字数にして、およそ2500字程度。けれども、週刊という性質上、毎週締切に追われている。

作家になるのが夢なので、締切に追われるのは願ってもないことだ。そちらの連載は既に16回まで書き上げているが、よく書くことがあるなと感心している。とにかく、自分の実践を等身大で伝える機会を与えていただき感謝なことだ。このマガジンの本編を入稿して、次にまた週刊ものの締切が迫っている。好きなことをできる喜びをかみしめながら、「ネタ探し」な毎日を送っています。

北海道　当別町　普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤　信子

「経験したことのない猛暑」の今年だけれど、このフレーズはよくわからない。たとえば来年京都市で最高気温だった今年の気温に１度低いと「経験したことのない」とは言わないけれど、すごく暑いことは確かだろうから、どう言うのだろうか？などぼんやり考えている。いろいろ考えがまとまらなくても、「暑いので」ということにしている。これは案外良いことかもしれず、とかく天候などに逆らわずにできることしかしない、ということは私には向いた生き方のようだ。天候など持ち出さなくても、もともとそうだったじゃないか、と言われるかも知れないが、本当にこの天候には少し参っている。数日前に夏休みが終わったので、今は楽しみがなくなった状態。これはプロフィールではないと今頃気が付いた。

今年の夏休みは、急いで書かなければならない原稿がなかったので、久しぶりにゆっくり本が読めた。それが終わったのが悔しい、という気分の現在です。

水野　スウ

みーんみーん、じーじー、スイッチョスイッチョ、じじじじーー、オーシーツクツク、といった虫たち大合唱団を BGM に過ごしています。これが“沈黙の夏”になっちゃったらそれこそエライことだもんね、と自分にいいきかせ、汗をかきかき（クーラー無し、庭森の緑のエアコンにおおいに救われながら）、夕方になって風が一瞬涼しくなり、同時にヒグラシのカナカナカナカナ、、、、が聴こえてくるとほっとする、夏の日々です。

だけどこのところ、きもちは何だかざわざわ、おちつきません。首相がこのところ盛んに、シュウダンテキジエイケン、と言ってるのがすごく気がかり。私のきもちざわざわの、それも一因です。

自分の国が攻撃されていなくても、同盟国が攻撃されたら、または攻撃されそうになったら、軍を出して一緒になってたたかうことができる権利、集団的自衛権。でもそれは、今の憲法のもとでは9条を変えない限り行使できないことのはず。

選挙中、首相は、憲法を変える決まりの96条を変えよう、と言っていたのに、今はもう96条のことは言わず、9条に指もふれずに、法律を手直しして、あたらしい憲法解釈とやらで、自衛隊を海外に出せるようにしようとしてる。憲法は権力を縛るものであって、国の最高法規。それを無視するなら、それこそが憲法違反だと私には思えます。

3年前、基本的人権のかなめともいえる憲法13条のすばらしさを、ひょんなことから再発見して以来、13条や9条、あわせて96条、97条のことも、簡潔にひとに伝える手だてがないものか、ずっと考えていました。

これまでも、原発やHIV/AIDSのことなど、むずかしいことを私なりにやさしい言葉で、冊子や本というかたちにしてきたことを思えば、憲法に関しても、今が今、そのようにする必要が私にはありそうだなあ。憲法の危機だもの、このまま黙ってはいられないよなあ。

そう思えてきたので、ごくごくささやかなモノ、つくります。来号の短信には、それをつくりましたよ！と過去形でお伝えできたらうれしいな。

自著紹介

『紅茶なきもち～コミュニケーションを巡る物語』著：水野スウ　発行：mai works　四六版 200P　¥1,200（税込）

一般書店の取り扱いはありません。送料一冊160円。お問い合わせはこちらまで。

sue-miz@nifty.com

早樫　一男

今年の夏の暑さは大変こたえました。年齢や体力の衰えをひしひしと感じています。

8 月末から海外旅行に行く予定になっていますので、締め切りの数日前に原稿を送信するということになりました。私にとっては珍しいことです。

第 14 号がアップされた頃、多分、ヨーロッパ滞在中かと思います。

ところで、今回から「日本のジェノグラム」として、連載を始めることにしました。身近で話題になる人物やその家族などについて、考えることができればと思っています。

西川　友里

いくつかの学校で福祉系対人援助職養成をしています。

前回の第 13 号の編集後記で、団先生が「執筆者の多方面での活躍」についてと書いてらっしゃいましたが、私にも、ちょっとした事件がありました。

ここに書いた文章を見て、ある社会福祉法人の方が研修の講師依頼をしてくださったのです。打ち合わせの時、その方は過去に私がマガジンで書いた文章をプリントアウトした書類を持ってこられました。その書類には沢山線が引いてあって、付箋もいっぱい付いていて、「ここんとこ大事ですよね」「うちの施設ではここはこうしていてね」「これ、うちの職員にも同じようなことがあってね…」等々、お話しくださいました。

14 号目にして言ってしまいますが、実は私、文章を書くのが苦手です。そんな私にとって、自分が書いた文章に、線を引いて、付箋までつけて、わざわざ持ってきてくださって、思いを述べてくださって…この経験は、ちょっとじーんとしてしまいました。もうほんとに、人によっちゃささいな事と言われるかもしれませんが、私にとっては、とてもとてもとても嬉しい出来事なのでした。書かせていただいていて、良かった！です。

中島　弘美

「将来、管理職になりたいわけではないし、お金儲けをしたいわけでもなく、ほどほどが良い」と考えている「学生」が多い。

管理職になりたくないのは、大きな責任を担いたくないし、余分にしんどい思いをしてまで働きたくないと思っているからだ。忙しい生活よりも、自由になるいくらかのお金と時間があれば、それで満足なのだろう。

では、先ほどの文章の「学生」の箇所を「働く女性」に置き換えて読み直してみると、どうだろう。

これもまたぴったりくる気がする。学生と同じく、働く女性もそれほど管理職になることを望んでいない。

ただ、結婚をイメージしたとき、できるなら大きな企業に勤めて、しっかり稼ぐ人の「妻」になりたいと思うけれど、自らがそのような働き方をしたいわけではないようだ。

厚生労働省の調査では、総合職で入社した女性も、10 年後には 65%が結婚や出産をきっかけに辞めていた。男性の 29%に比べると大幅に多い数字だ。

学生さんに対しては、「学んだことを活かして長く仕事を続けていくといいよ」と話しているが、最近は「管理職になってよ。その機会がやってきて、一定のポジションを勧められたら辞退せずに引き受けてね」と声を大きくして伝えている。

義務教育のころは、男女ともに学級委員をしていたし、クラス内では明らかに女子の方がしっかりしていた記憶がある。けれど働きはじめるとリーダーシップを発揮する女性管理職はまだまだ少ない。

バランスのとれた働き方でキャリアを積むのが難しい状況ではあるけれど、より暮らしやすい豊かな社会になるためにも、どんどん女性管理職が増えてほしいと思っている。

浦田雅夫

ある学会で福島に行く機会があり、福島の人たちからお話をうかがうこともできました。震災後ではなく、復興もなく、現在進行形で被害を受け続けている人たち。私たちは何ができて何ができていないのか、どこにお金を使う必要があるのか、原発のこと、これからの福島のこと。日本のこと。見立てをしっかりとしないと支援につながらない。

坊 隆史

職場の健康診断の結果を見て愕然とした。LDL（悪玉コレステロール）が基準値を上回っていたのだ。視力と器質的なある項目以外は健康そのものだっただけに、今回の結果で自分は成人期の真っ只中にいることを痛感した。

一歩大人の階段を上がったと考えよう、と強引にプラスに考え直そうとしたものもやはりどこか悲しい。生活習慣を成人期モードに変えていかねば。

松本　健輔

カウンセリングルーム　HummingBird　主宰

http://www.hummingbird-cr.com

子どもができてから仕事のペースが明らかに遅くなった。子どもが熱が出たとか特別なことを除いても、子どもの世話にかなりの時間を取られている。子どもが可愛いので満足している一方、仕事をしていな

い不安がつきまとう。趣味の時間も減った。

人生のステージが変わると、いろいろな変化に適応していかないといけないんだということを最近切実に感じる。この変化も楽しまなければ！！

団　士郎

面白い（怪しい）ことを言うおじさんが舌禍事件で顰蹙（ひんしゅく）を買う。「またか・・・」と思われている老害の人もいるし、失脚に近い結果になる人もある。

そんな可能性のある人は「注意してください！」と側近にたしなめられて、サービストークのつもりの与太話はうそぶかなくなる。自粛である。（ただ、自分を大物だと思っている人は、それでも言う。どうせあと僅かだと思っているから自重することもない。あれは別だ）

問題発言は少なくなるかもしれないが、問題認識が変更されるわけではない。何を思っていても、口外しなければ分からない。要するに言わなければ、ばれないという再学習である。建て前と本音なんて、昔、流行った言い回しである。私はそこに、今日社会の脆弱さを感じてしまう。

先日、東京で継続実施しているWSで、最近考えているいろんな事を話した。終了後、主催者・団遊と長年の友人鶴谷さん（共に執筆者）から「今日は、えらく毒舌でしたね」と言われた。

私の自覚の中に、聴衆の中には聞きにくい人もある警鐘のつもりはあった。医療者、臨床心理士、教員、児童相談所職員などが、矛先を向けられていると思ったかもしれない。それは基本的によいことだと思って話していた。

憂さ晴らしの放言をしなければならないようなストレスを私は溜め込んではいない。今のような現実を若い世代が自覚の薄いまま黙認していたら、世の中はますます酷いことになる！と訴えたい気持ちでいっぱいだ。

でも、確かに言われるように、結果的には毒舌にしか聞こえていなかったかも知れない。そういう話を聞くのを嫌う時代になっている。みんな良いことばかり言う。耳に痛いことを言われても、気分が悪いだけで効果はないと思っている。だから、そんな誰の得にもならない話は止めておけと思っている。

ここにはヒューマンサービス世界でよく言われるポジティヴ発言、ポジティヴ思考の弱点が出ているのではないかと思う。思考はいつも己の言葉遣いの影響を受けている。ポジティヴばかりが作り出すものの限界は意識しておかなければいけないだろう。

誰かが言っておかなければ、自分は気づいていたが、誰も言わないので黙っていたと思うことが、みんなの中にドンドン溜まってしまうだろう。

言っておくのは大事なことだ。発言には正しい場合も、間違っている場合も、バランスの悪い場合もあるに違いない。でも、誰も言わないよりはずっと良い。健康な民主主義とはそういうものだ。

正しい事しか言わない事や、思いやりに溢れたことだけを言って生きていこうというのは、誰かの犯す大きな過ちに立ち向かう勇気を欠いていることになる。その結果、沢山の人が不幸な目にあっても、自分にも責任があった事を自覚する道を閉ざしている。

そういう意味で、自分さえ守れていないポジティヴトークというのがあるのではないかと思う。

中央法規出版７月新刊

「対人援助職のための家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」団士郎　著

定価　1680 円

2013年震災復興応援プロジェクトは9月第2週、むつ市図書館のマンガ展からスタートです。9月 6 日7日は講座・講演もあります。

その後、パネル展は 9 月 30 日～10月 27 日の一ヶ月間、多賀城市立図書館で。11月は岩手、12月は福島の予定です。詳細は順次確定のモノから。

牛若　孝治

ある日のこと。たまたま乗ったバスの隣の席に老人が座っていた。彼は私を見るなりいきなりこう言った。

「いとこが障害者になった」そう言うなり、彼ははらはらと泣いた。彼にしてみれば、白杖を持った私なら、このような話をしても同情してくれるのでは？という甘い期待を寄せていたのだろう。だが、私は彼が描いていたような甘い言葉とは逆に、次のように言い放った。

「あなたが泣くことで、その人の障害が治るとでも思っているのですか！！！」一瞬、場が騒然とした。すると、それまではらはらと泣いていた彼は、気を取り直したようにこう言った。「そうですね。あなたのいうとおり。ありがとう」

「障碍のある人には障害者の話を」。なんの根拠もないのだが、大体においてこのような傾向が強い。まして、今まで障碍のなかった人が、何らかの理由で障碍を負った、という場合、本当に辛いのは、現在障碍を負っている「その人」であるはずなのに、あたかも話題提供者である自分が辛いような口ぶりで語る人が圧倒的に多い。そこで私はあえて言う。

「その人が障害者になったことで、泣いたり愚痴ったりできるあなたより、現在その障碍を現実に体験している当人の方がもっと辛いんですよ」

袴田　洋子

先日、３人の「恩人たち」と久しぶりに飲み会をしました。役所の高齢者福祉課の Ｎ さん、役所を定年退職した福祉部長の Ｋ さん、そして社会福祉協議会の Ｏ さん。

介護保険スタート前年の平成 11 年からですから、もう 15 年のお付き合いになります。コミュニケーションが恐ろしく下手だった私は、「こういう状況ならば、〇〇すべきですよね？」と正論で彼らをねじ伏せて、役所の人たちを攻め、そうとうに追いつめてきました（ということには、後になってか

ら気がつきました）。でも、このＮさん、Ｋさん、Ｏ さんは、私が来ても嫌な顔ひとつせずに、いつも丁寧に話を聞いてくれていました。

「よく、あんなコミュニケーションしか出来なかった私を、排除しようと、潰そうとしなかったですねぇ、なんで？」と酔った勢いも借りて聞いてみました。彼らは、「まあ、袴田さんの言う事は正論だったからねぇ。で、常に、『利用者』の方に向いていたからねぇ」と答えてくれました。

正論を言っていても「言い方」が攻撃的であれば、人から距離を置かれることは、よくあることです。なので、Ｎ さん、Ｋ さん、Ｏ さんの彼らこそが、「利用者の方に向いていた」ということになるのではないでしょうか。

この人たちのおかげで、仕事を続けて来られて、今の私が在ると思っていますが、彼らが、なぜそんなにも愛情を出せる人たちなのか、次回の飲み会で、聞いてみようと思っています。

脇野千恵

◆夏休みとはいえ、教員は毎日のように勤務している。後半にようやく休みを取り、東北に旅をした。昨年の3月にも出かけたが、東北はやはり遠い。新幹線があるが、津波災害があった海岸線へはとても時間がかかる。今、朝ドラで岩手県の久慈市が注目されているが、ここはもう青森に近い所だ。あちこちで「あまちゃん」を宣伝したコーナーが見られた。テレビの影響は大きいと思うが、ドラマが終わった後はどうなるのかと、要らぬ心配をしてしまった。

宮古市、気仙沼市を見て回り、たくさんの土産を買ってきた。私に何ができるのかと考えても思い浮かばない。時間とお金をかけて見た現地の状況を、帰ってきて誰かに伝えることぐらいだろうか。宮古の海岸では、盛岡から来た高校生たちが津波災害跡地を見学していた。県内でも津波を経験していない子どもたちへの学習が実践されているのだなと思った。復興は進んでいるようには見えなかったが、更地に咲くひまわりが、何かを語りかけているように思えたのは私だけだろうか。また、一年後に来ようと思った。

団　遊

家族 4 人で阿蘇へ行きました。夏休み終了ぎりぎりの家族旅行です。阿蘇は、私が小学校 6 年生、弟が 4 年生のときに、二人旅で行って以来です。その頃の記憶から、さほど期待もしていなかったのですが、素晴らしい景観と、圧倒的な地形でした。温泉も豊か。蕎麦も美味しい。あの頃は、弟と「ずーっと草やな。はよ終わらへんかな」とバスでぶつぶつ言いながら、牧草を食べる牛を見ることだけが唯一の暇つぶし、といった感じだったことを思い返し、「歳を取ったのだな」と思いました。そして、助手席に座る、暇そうな 5 歳の息子も、きっと同じことを思っているのだろうなと思いました。

www.danasobu.com

乾　明紀

今回は、前号で書けなかった前々号の続きを書いた。前号は体調不良で内容を変更したが、今回の執筆も結婚準備と仕事が忙しく、危なかった。ただ、体調不良にならなかったので、なんとか書けた。それにしても結婚準備って結構大変ですね。でも、嬉しい悲鳴です。

サトウタツヤ

8／30～9／1まで日本質的心理学会を立命館大学で開催。一般公開企画もあるので、ぜひともお出かけください。

日中韓において相互理解を促進するために、それぞれの「人間性に関するキーワード」に関するシンポジウム、もあります（9／1午前中）

9／1の一般公開企画は以下のウェブサイト

http://jaqp2013.wix.com/jaqp2013#!about1/c201r

を参照してください。

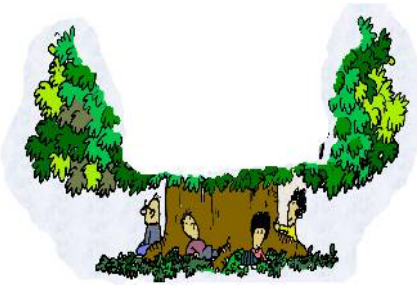
ついでながら、6月末と8月初旬に福島を訪問。8月下旬には福島県副知事をBKCに迎えて懇談しました。　福島県と立命館大学の協定が結ばれるかもしれません。

大野　睦

屋久島が世界自然遺産に登録されて早20年。ここからがまた大事な時ですが、島内で関係機関と観光業者、住民が大いに議論される機会がないように感じています。

私自身はこの秋に青森、そして香港で屋久島の世界遺産登録から20年について語る機会をいただきました。外からの意見、視点、たくさん吸収して屋久島に還元出来たらなあと思っています。

ネイチャーガイド　有限会社ネイティブビジョン　代表取締役　屋久島青年会議所　副理事長　BLOG　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/



1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

14：　20 年前のノートから

時間をつぶす

時間は「使う」ものである。時間は「つぶす」ものではない。今、何に時間を使っているのか？急な変更にどう対応して時間を過ごすのか。それも私たちの仕事の醍醐味である。

私がキャンプリーダーをしていた 20 年前のノートを取り出してみた。そこには、待つ時間ができた時の過ごし方にこんな案が書かれている。

・うたをうたう
・次のプログラムの話をする
・地面の石を高く積み上げるゲーム
・一番の何かを見つけるゲーム
・お化けの話　　などなど

もちろん子どもを対象にした組織キャンプの場面であることを考慮しなくてはならないが方向性として参考になることはあるように思う。なかなか興味深い（笑）基本にかえる意味で開いた 20 年前のノート。なかなか大事なことを当時の先生、先輩から学んでいる。今こうして思えることは幸せなことだ。「集団行動だから勝手なことをしない！」という類のことを支援者が利用者に言う時間があるなら上記を参考にした働きかけの方が豊かである。結果的に「勝手な動き」になっていなければいいのである。

目的に基づいたプログラムに沿って支援は行われる。当然、時間には意味がある。福祉サービス提供中の時間に「意味がない時間を作る」のはあってはならない。

現場ではとても残念な職員の言動に出会うこともある。先ほどの「時間をつぶす」という言い方だ。「誰の時間をつぶしているのか？」「お金をもらって利用者の時間をつぶしているのか？」「職員に何の権限があってその人の時間をつぶしているのか？」と話をしたくなる。

価値観の作り方

行事等での移動時にも職員の立ち位置がある。先頭、中盤、後方少なくとも 3 つの役割がある。

先頭の役割は、プログラムの時間とのズレを意識して、移動のペース配分、前からくる自転車等の安全の確認とその情報の全

体への声かけ、目的地までの安全なルートの把握と選択、横断時に最後まで渡れるかの判断等である。移動時のリーダー的役割となる。

後方の役割は、遅れている、はぐれている人の確認、自転車等が後ろから来た時の全体への声掛けと端によることの促し、うしろの状況を伝え、先頭がペースを判断する材料にするための情報を提供することである。

中盤の役割は、前方と後方との連絡のやり取りの仲介役、利用者の様子の把握である。中盤は行事ならではの景色や気持ちや感じたことを職員が率先して言語化し利用者に語り掛けるのも大切な役目である。時にはいい景色を指さす。心地よい音に耳を澄ます。そういった五感をフルに使って感じたことを表現する。そこから利用者に気づきを促し、共感をする。また利用者が感じて話していることを拾って、全体に伝えたり、発言者である利用者に応じたりしていく。何を拾うのかはプログラムの目的に添って判断する。目的に合致し、参加者で共有したい価値観に基づいた言動に対しては特に拾って全体に共有化していく。そうして、行事等での経験や景色を共に楽しむということがそのグループの集団規範となっていく。感性を喚起する役に徹することができるのが中盤といえる。

ニーズと制限

行事では普段、職場の昼食ではダイエット目的で食事制限をしている人が少し多めに食べることもある。普段買い物を制限されている人がたくさん買おうとすることもある。そんなことも行事では、ある程度いいのではないかと考えている。以前この連載でも取り上げた「愚行権」という観点や、こうした非日常があるからこそ日常が生きてくるのが私たち人間ではないだろうか。

もちろん医療的レベルでの規制や、お金を他人に借りてまで買い物…ということではない。持っているお小遣いの範囲内、状況が許す範囲内である。そういった一見逸脱とされる行為も生活の質（QOL）を考えると短絡的な結論は言えない。大きく影響していることだけは確かである。生きるとは何かである。生命（健康）維持、リスク回避の観点だけで四六時中、人は生きていない。

こういったことをグループワークでは「制限の原則」という。一定の枠の中で経

験を共有することが重要で、それこそが実際の社会の縮図だからである。やり放題のユートピアは世界には存在しないのが現実である。手持ちのお金の範囲内、プログラムの目的に沿った範囲内である。

裸の付き合い

私が「行事とは？」と考えてみると何が最初に浮かぶかというと「楽しむ！」ということばである。

時には根幹を問う意味で、こうした行事とは何か？を考える必要も出てくる。職員も異動、退職、入職と入れ替わりがある。「行事観」を共有していたはずの職員集団もいつの間にかほころびが出てくる。定期的に「行事とは？」を考える時間が必要になってくる。

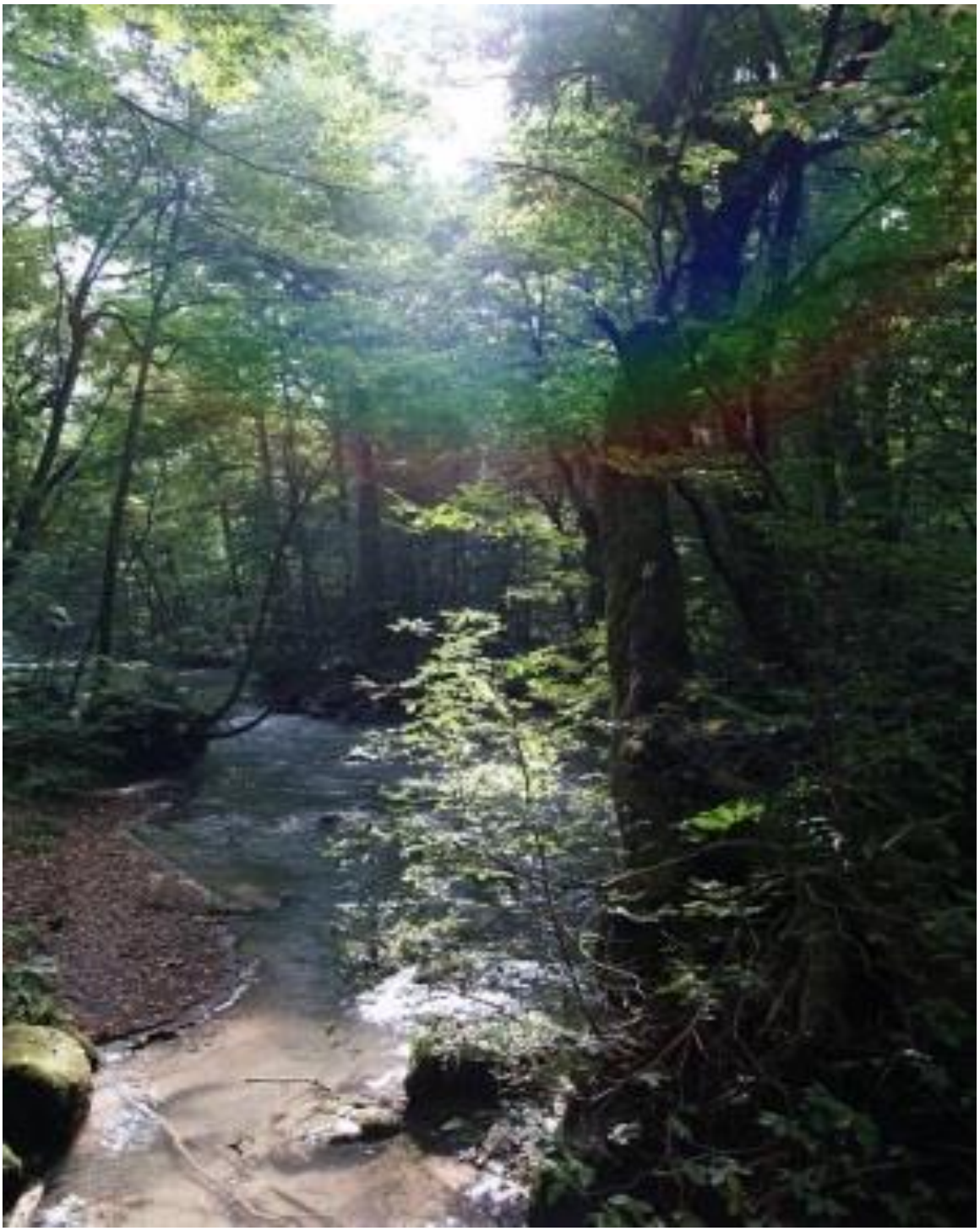
知的障害者の労働現場においては、労働場面での関係性を中心に対人関係が構成される。二者関係でも、仕事の仲間という側面とさらに一緒にお風呂に入った仲間という側面、両方を持つようになってくると関係性は深まる。お風呂に一緒に入った経験は仕事での関係性にも当然影響してくる。仕事の話、行事に行った話しと話題も豊かになる。当然、行事ならではの同じ仕事場ではない人との新たな経験も生まれる。そういった人間関係が広がる、深まることでの日常場面充実の可能性増は行事ならではの効果である。

罪を憎んで人を憎まず

行事の後の疲労感は大きい。普段、労働を中心にしている福祉現場だからといって作業をしていないから楽！とはならない。いつもと違うところに、いつもと違うメンバー構成で行く。当然、いつもと違うリスクがある。それを乗り越えるために、職員間の連携が重要になってくる。まずそれが第一だろう。

トランシーバーを行事で使ったこともある。普段、作業場で使っているからできたことだ。多くの人が集まる観光地ではぐれてしまうことがないように試みた。結果は電波状況がよくなくて意外と使えなかった。

原因の追究もするが、次の時にどうすればうまくいくかを考え、実際に行うことに力を入れるのが私の好みである。原因の追究をし過ぎると、大事なやる気がそがれて



しまうことも多い。「あの職員のせい」、時には「あの利用者のせい」となりかねない。

話し合うことをやめた

夏休みの後には休みの間に何をしたのかを利用者とともに話し合う時間があった。トラブルがあるとみんなで作業の手を止めて話し合った。今は工賃向上、合理化でそういった関わりの部分はどんどん減ってきた。

「〇〇の取り扱い説明書」とかいう本が流行したことがあった。近頃は「〇〇障害の対処法」「〇〇の対応法」など対象を限定した対応法が福祉の世界でも流行っている。これは対症療法的なものである。その場面での調整である。これは相手に変化の可能性があることを諦めていないかと思う。私たちの先輩は話し合う場面を今以上に取り入れていた。言語化、絵を描く、文章を書くといったアウトプットこそが社会で通用する表現である。そのチャンネルを常に持つことだ。かわしたり、避けたり、その場面を無くしたりするだけではない。

変化の可能性に誰が向き合う？

調整機能が花盛りである。人と人との相性組合せを踏まえた調整そんなことばかりしているようになってきた。そしてケース（ケア）マネジメントの概念がいよいよ障害者福祉領域に本格的に入ってきた。制度レベルで採用されたのである。ケースマネジメント概念とソーシャルワーク概念の違いに関する論議は最初からある。マネジメント概念が日本に入る時点でもすでに懸念されていたように利用者の変化を信じることをやめるのかという部分である。このことにどう向き合うのかが障害者福祉領域では今問われている。そして現実にすでに全国の各福祉事業所が直面していることである。調整さえしていればいいのか？ソーシャルワークはどこに行ったのか？

そんなことを 20 年前の自分が書いたノートを見て考えていた。

（写真：橋本総子）

BACK ISSUES

そうじのねらい 13
2013 年 6 月
個別化の暗部 12
2013 年 3 月
グループワークの視点 11
2012 年 12 月
実習生がやってきた！10
2012 年 9 月
月曜日のせいやな 9
2012 年 6 月
所得を決める福祉職？8
2012 年 3 月
世界とつながる社会福祉現場 7
2011 年 12 月
この現場へのたどり着き方 6
障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011 年 9 月
旅行がない！5
2011 年 6 月
職員の脳内回路 4
2011 年 3 月
たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010 年 12 月
利用者が仕事上の戦友 2
2010 年 9 月
障害者自立支援法で不景気に！？1
2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(2)ガスライティング

中村　正

1．映画『ガス燈』から

逸脱行動を正当化している加害者や行為者の言い訳の体系がある。動機や原因を垣間見ることのできる「内言」のように機能している。前回はそれを「暗黙理論」として位置づけて取り出し、加害者臨床の俎上にのせることが重要だと書いた。

加害の後押し理論のように機能している意味づけの体系は社会的に構成されたものであり、加害者が決して一人で考案したものではない。このことが社会臨床からすると重要である。何故なら、自らの動機を構成する意味の貯水池が社会のなかにどのようにしてあり、それをどんな具合に吸収して自らの行動を正当化させているのかについて知ることができ、社会の側の共犯性や暴力性も可視化されるからである。

また、この作業は、社会のもつ加害促進的な意識や態度の諸断片がどのようにして個人の行為として濃縮され、編成され、調合されていくのかその過程を劈開することにつながる。社会のなかのどんな要素が個人の行為次元で逸脱行動として統合されていくのかに関する理解をすすめることに「暗黙理論」は貢献する。その上で、加害者の意識や思考にあった、そうではない行動へと導く更生と保護はどうすれば可能なのかについて、それを加害者臨床として編み上げていくためにもこうした作業は有意義だと考える。まとめておくとこうである。「暗黙理論」は「逸脱の素人理論」ともいえ、加害者臨床や司法臨床の、そしてこの社会がもつ共犯性ともなる意味環境を可視化させることができ、加害者臨床の資源となる。当該個人の更生にとどまらない社会臨床の対象にもなると位置づけている。

ひきつづき同じように臨床社会学の言葉を紹介していきたい。今回は親密な非対称関係を念頭におき、それを息の詰まる関係性へと構成していく過程を扱うことのできる概念について考えていく。ガスライティングをとりあげる。これは被害者が自分を責めるように

Nakamura Tadashi 立命館大学

仕向けるコントロール行動のことである。前回の「暗黙理論」を補完する行動でもあり、犠牲者批判や非難者非難の内実を成している。

ガスライティングとは、イングリッド・バーグマンがアカデミー主演女優賞を受賞した1944年の米国映画『ガス燈』に由来する。監督はジョージ・キューカー、出演は夫役にシャルル・ボワイエ、妻役がイングリッド・バーグマン。1940年の英国版もある。ちなみに双方が収められている DVD がでている。舞台でも上演されたという。マニピュレーション（心理操作）を犯罪に利用することを描いたサスペンス仕立ての映画である。

ガスライティングはこの映画の心理操作に由来して用いられるようになった。親密で非対称な関係がはらむ可能性のある、コントロールし、操作し、場合によっては洗脳と類似した事態が起こりえることを把握しようとした言葉である。長期にわたる監禁事件で被害者の無力化（学習性無力化）がおこるがそれにも近い。

2．虐待･暴力を語る言葉のひとつとして

この言葉に最初にであったのは、訳出するものとしては二冊目になるカナダの心理学者、ドナルド・ダットンの『虐待的パーソナリティ−親密な関係性における暴力とコントロールについての心理学』（中村正監訳・松井由佳訳、明石書店、2011 年。原著は *Abusive Personality*, Guilford Press, 2006）を編んでいるときだった。

ＤＶ被害女性の特徴をとらえた「バタードウーマン症候群」という言葉があり、それを説明している箇所（第 4 章）で用いられている。「緊張が高まっていく段階では、息が詰まるような強い独占欲、言葉による説教、『ガスライティング』（すなわち、女性が現実をみる力を弱めること）または肉体を使った横暴な態度など、その男性が用いてきた虐待の形態が徐々に激化していく」とある。

続けて、「女性達は自身の怒りをぐっとこらえる。男性は反抗の兆候に対して非常に強く警戒するようになる。男性は自分が感じる怒りをかなり他者に投影することから、相手が怒りを表出していない場合でも、怒っていると誤解することがある。」と記されている。

日本の読者にはわかりにくいのでガスライティングに訳注を入れた。「狙われた人物の感覚喪失、妄想、悪評、トラブル等を捏造または演出する。その結果、そうした症状を呈することを訴えさせ、対象者の人格、性格、精神の障害を周囲が感じるようにし向ける。社会的評価を失墜させ、自信、自尊心及び評判を破壊し、対象者の人生をねらいどおりのレベルまで破滅させる。場合によっては自殺に追い込むことも可能である。そうした追い込みの総称を『ガスライティング』と呼ぶ。妻に妻自身が精神病だと思い込ませるストーリーの映画『ガス燈』（1944 年）から命名されている」と。

3．心理的に追いつめられる過程

さて映画は、紹介してきたように妻が心理

的に追いつめられ、自らを責め、病んでいく過程を描いている。モノクロ映画なので、霧の街ロンドンの陰影と妻の不安感が重なる。街灯にガスを点けてまわる点灯人、蹄鉄の音を響かせる馬車もヴィクトリア時代ロンドンを浮かび上がらせ、サスペンスの雰囲気を盛り上げる。

心理的に追い込む夫の目的は妻の財産である。もちろんサスペンス映画としての解決はきちんとつけられているし、娯楽映画としても楽しめる。

ある日ハンドバックに入れたはずのブローチがなくなる。それは夫が隠したのだが。妻はさんざん探すが当然見つからず、夫がくれた大切なものをなくしたと自分を責める。夫はやさしくいいよという。こうした出来事が頻発する。次第に自分の精神状態を疑い、夜ごとかすかに薄暗くなるガス燈の光も、天井から聞こえる不審な音も自分の心が不安定だからだと思うようになる。

ガス燈の炎が弱くなるのは、その時間、テラスハウス（数件が連棟になっているビクトリアンハウス）の別棟から屋根裏部屋に入り込んで妻の叔母が残した遺品のなかから宝石を探す夫がそこでガス燈を灯すとき、ガス管でつながった家のガスの出具合が瞬間的に弱くなり、ほの暗くなるからだ。しかしそれも妻の気のせいにされていく。天井から聞こえる不審な物音は夫の足音だが、それも妻の幻聴だとされてしまい、妻自身もそう思い込むようになっていく。

また別の日、部屋に飾ってあった絵が一枚なくなっていることに気づく。不思議に思った妻が夫に尋ねるがはじめからなかったと言い張る。家政婦に聞いても要領を得ない。本当になかったのかと自分を疑いはじめる。

4．ガスライティングの特徴

こうして自分に自信がもてなくなり、精神のバランスを喪失していく。不安な心がつくられていく様子の演技が迫真にせまる。「これは現実なのか、私はいったいどうなってしまったのか」と閉塞する問いが続く。自分の行動や精神状態に自信が持てなくなった妻は精神的に追い詰められ、正常な判断が出来なくなっていく。

ダットンはDVの被害者の心理的状態としてこのガスライティングを指摘していた。一般的には、親密な関係性と非対称な関係性、つまり逃れにくく、力の関係が支配し、特に訴求しあう関係があるところにおいてガスライティングは起こりやすい。そこでは自分が自分でなくなり、いつも相手のことを考えてしまう、びくびくした生活となり、現実感が喪失させられていく。親しい人から継続した暴力を受けてきた被害者の体験から話されることと重なる。

ガスライティングそれ自体の研究も蓄積されている。いろんな事例が紹介されている。たとえば、会社の同僚を家に招いてパーティを計画したが、夫は事前に参加者の好みを聞いており活きの良いサーモンを手に入れて焼いておくように妻に指示した。しかしその日に買い物にでかけた妻は養殖のサーモンしか手に入れることができなかった。愚かで思い

やりにかける妻だと彼は激怒した。しかもその同僚たちの面前でだ。侮辱と屈辱、勝手な理由と論理の支配、彼の賞賛をもとに生きているような麻痺した感覚に陥ったと語る。

さらに一般化すれば、相手（被害者）に非があるように現実を定義し、構築していく狡猾な手法がこのガスライティングである。重要なことは、心理的な追いつめ行為が被害者の善意、特性そして役割を最大限に利用しているという点である。

映画では、妻の不安定な気持ちとなっている事態が利用されている。その詳細は観ていただくしかないのだが、直前の叔母の死、その叔母が殺された家に住むことの不安、その犯人はまだ見つかっていないこと、その後のイタリアへの音楽留学の失敗による失意、そこで会った一目惚れに近い男性（現在の夫）との結婚などである。不安でいっぱいの若い女性が過呼吸状態となるような要因が複数存在しているといえばわかりやすいだろうか。そして、女性の愛情がガスライティングとして利用されていく。それらは、他者を思い、自己を省み、関係性を維持しようとする関係性志向の妻の意識に棹さしたものである。

妻は自問を続ける。考えすぎではないだろうか、敏感すぎるのではないだろうか、不安感のなせるわざなのか、やはり精神的に不調なのだろう、自分が少し我慢をしていればそれはそれで大事にならないのではないかなどと。しかも夫はあんなにやさしくしてくれているのにと自責の念も高まる。

5. ガスライティングの効果

ガスライティングは、自分にとっての現実の定義が他者主導のなかでなされていくことである。たとえばDV加害男性は決まって「俺を怒らせるな」という。この言葉はガスライティング効果をもつ。

この言い方は次のような経過でつくりだされる。「俺は悪くない。非はない。」という意識（否認の意識）と、「しかし現に妻は傷ついている。」ということは矛盾する。それを解消するために編み出された意識は「妻が私を殴らせたのだ。うるさくしつこく文句をいったからだ。」ということになる。それが「俺を怒らせるな。」という子どもじみた言い方になる。これは妻からすると「暴力の予告」である。

しかし、言われた側からすると、そのきっかけはわからない。「俺の感情にお前が責任を持て」といわれているに等しく、夫の感情や気分への配慮が頭を離れない。一種の心理的なのっとり、つまりマインドコントロールである。しかもそれが愛情や信頼、そして親密な関係性の証しとして意味づけられていく。従来型の女性役割（ジェンダー意識）や、子どもがいれば母役割の意識が動員される。こうして他者との関係性に生きることがあだになっていく。

これは「被害者の非難」（あいつに罪がある）の一種である。さらに、合理化（あいつをしつけようとしていただけだ）、虐待や暴力のつもりはないといいはる（故意ではない）、妻の応答に問題があるから矯正してやった（妻はヒステリックだ、過剰な反応だ、やりすぎだ、

言葉の暴力だ）などとして相手の現実を定義していく。狡猾さはこうした意識を養分にし、DV や虐待を正当化する。

ガスライティングの効果は次のような諸点にあるという。①いつも自分のことを二番目に考えるようになる、②感じすぎではないかと自問自答するようになる、③混乱している感じがする、④誰かにいつも謝っている、⑤よいことが起こっているのに幸福感をえられない、しかもその理由がわからない、⑥夫の行動を第三者に謝っていることが多い、⑦みずから説明したり謝罪したりする必要のないことをいつも抱えている、⑧現実が歪められていることをそうではないと自分にウソをつく、⑨何か単純なことを決められない、⑩本当はこんな人間ではなくもっと楽しい人間だと心のなかでは思っている、⑪希望や楽しみがないと思う、⑫自分は夫にとって満足のいく妻ではないのではないかと思っている、などという事態になってしまう。

（*The Gaslight Effect: How to Spot and Survive the Hidden Manipulations other people use to control your Life*, Robin Stern, Morgan Road Books, 2007, New York）.

6. 愛情への寄生としてのガスライティング

繰り返すがガスライティングは、非対称な関係性と親密な関係性が重なるところで起こりやすい。しかも、与える愛、配慮する思いやり、心配りするやさしさに根ざす。これは「愛情の搾取」である。私は「慮る行為に内在する犠牲や献身の行為を利用した加害者の操作する暴力」と定義している。

ガスライティングを仕掛ける側 gaslighter は、むらのある行動、都合のよい愛情、相手にむかう関心の偏向、そして、まだらな愛情となっている。他方のガスライティングを仕掛けられる側 gaslightee がそのあいだを埋める努力をしてしまう。修復を志向し、改善を訴え、心ならずも自らの非さえをも認め、従属していく。怒らせるなという命令通りに、関係性の維持や改善にむけて行動する。

このガスライティング行為は寄生的な関係性となっている。相手を貪ることになり、共に益のある関係ではない。暴力や虐待への介入が必要な、重篤な事例だけではなく、長期にわたる、慢性的な寄生となることもあり、家庭内暴力の深刻さを物語る。

たとえば高齢期は夫婦二人の生活となる。「老害男性」とでもいうべき実態もこうしたことの延長線上にある。「夫原病」という言葉があり、高齢期の妻の不健康のもとに退職後の夫がなっていると指摘する（石蔵文信『夫原病−こんなアタシに誰がした』、大阪大学出版会、2011 年）。

さらに深刻なのは孤立と孤独、病気と障害、不安のなかで、対人関係、融通がきかないなどというコミュニケーション問題である。

以前の研究ではあるが同じくショックな事例がある。「高い死亡リスクは夫のいる女性、妻のいない男性」という調査結果である。「女性にとって一番の“危険因子”は配偶者」という研究を愛媛大医学部の藤本弘一郎助手（公衆衛生学）グループがまとめた。調査は

松山市に近い宅地化の進む農村地区で実施された。60～84 歳の全員 4545 人のうち、寝たきりや脳卒中、心臓病、がん、骨折経験者を除く 3136 人（男 1326 人、女 1810 人）を 1996 年から約４年半追跡した。亡くなった 201 人（男 111 人、女 99 人）の健康や生活、趣向などを分析、死亡につながるハイリスク因子を探った。その結果、高齢や ADL（日常生活動作能力）の低下は、男女とも死亡につながる高い因子だった。さらに男性では「配偶者がいない」「糖尿病で治療」「たばこを吸う」「過去１年に入院」「過去１年に健診を受けていない」などがリスクに挙げられた。しかし女性では「配偶者がいる」がただ一つのリスクだった。このうち配偶者だけをみると、男性では「妻がいない」ために死亡につながるリスクは、「いる」に比べ 1.79 倍も高かった。一方、「夫がいる」女性のリスクは「いない人」に比べ55%も高く、女性にとって配偶者は“重い存在”であることを示したのである（『毎日新聞』2002 年 11 月 7 日）。

7. ガスライティングに気づくこととのりこえること

ガスライティングは介入が必要な暴力に付随する事例からこうした慢性的な関係性の疲労の事例にまで広がる。

もう一つの事例として日本女性の「更年期」についても同じような関係性の疲労の影響が及んでいるという医療人類学者の研究書がある。

『更年期―日本女性が語るローカル・バイオロジー』（マーガレット・ロック、みすず書房、2005 年）は「昭和一桁世代の女性の語り」に内在させて「更年期の体験」を浮かび上がらせた。「混乱期に生まれ、世界観の激変の中をひたむきに生きてきた女性たちの個人史、そしてあくまでその個人史と結びついた更年期の自覚症状の出現である」と著者はいう。

みえてきたのは、家族の世話を基本にして生きた昭和の家族のなかの女性たちひとりひとりの個人史である。「更年期障害」として医療化され、臨床化される症候群や一般的定義ではなく、「圧倒的に社会的なカテゴリーなのである」と指摘する。更年期を、閉経以降の女性ホルモン「欠乏」と関連づける西洋医学的な概念である「メノポーズ」と同一視し、医療化する傾向を批判し、ある特定の文化でしか通用しない、しかも医療化された概念で人々の苦悩や人生を臨床化することの弊害を語る。

こうして体験を聴き、物語化し、記述することが重要であるとされる。人々の経験に即して問題を定義していくことが大切で、このガスライティングもたくさんの事例をもとに見えない暴力を浮かび上がらせたいと考える。そうすることで見えない暴力への対応が可能となる。

ガスライティングされる側への対処は、たとえば切断する愛を説く「タフラブ」という方向性の気持ちよさ（信田さよ子『タフラブという快刀』梧桐書院、2009 年）、肯定的に NO を言うなどの自己主張が大切なことに気づかせてくれるアサーション的コミュニケー

ションの涵養、そして深刻な事態に陥る家庭内暴力被害者の社会的な孤立を防ぐ相談、防止そして介入の仕組みづくりなどたくさんある。つまり力をつけるタイプの支援の構築であり、女性のエンパワーメントと総称されるものである。

それと並行して、加害の側、ここではガスライティングを行うことの多い男性にはパワーシフトのアプローチとなる。他人を操作して生き、そこで自分を保つということは指摘したように寄生的な生き方である。ガスライティングを養分にした生活のもつ虚構性は自分にかえってくる。行く先には老害化する男性像が待っている。非対称な関係性のなかで自分より「弱い者」をコントロールして保たれる生活は心理的には脆い。さらに操作する相手に依存しているので、最終的には共に倒れることとなる。共同して生きていく関係性としては脆弱である。

多様なタイプの加害男性たちと関わっていると、虚勢としてのパワーに幻想を持っているので、それにかわる、力ではないものによる力づけの支えがいると思う事例が多い。まずはガスライティングに気づくことであるが、その直後に陥る脱力感は彼の男性性意識のなかでは無力さとして観念されるので、虚勢としての男らしさに代わる「つっかえ棒」や「添え木」がいるということだ。私の加害者臨床では、吐露することやつながることを褒め称えることにしている。弱くなること、責任を認めること、支援をもとめること、妻や子どもが逃げていくことなどそれまでの彼らの男らしさからすると真逆の事態になってグループワークや相談にやってくる。

そこで、そのことを受け止めることができていることは強いことであるし、男らしくもあり、潔いよいことでもあると共感し、それを承認する。

そのままでは男性たちはDV防止法、児童相談所、被害側弁護士をののしるだけである。制度批判をとおして怒りをだし、エネルギーにするか、無力感に苛まれ、うつ的になるか、自暴自棄的にアルコールやギャンブルや仕事に浸ることがある。そうではない選択肢としてこうした加害者臨床がくわわるとよい。「弱さの強さ」という逆説とそれを支えることが「寄生する自己」をつくりかえる起点となる。

8. サイレンシング silencing（沈黙させること）の一つとしてのガスライティング

このガスライティングは「加害者との同一化現象」ともいえる。他にも、部活における厳しい体罰によって選手が自らの能力を卑下して厳しい指導にさらに追従していくようになることも同じようなメカニズムである。虐待した親の言い分（虐待を引き起こさせた子ども自身の問題があるといい、子どもを責める）とも重なる。

ガスライティングが起こるところにはなんらかの非対称性と親密な関係性（親子、夫婦、師弟等の上下関係）が介在していることを指摘した。しかしそのパワーは「裸の王様状態」でしかない。賞賛し、服従する「弱者」がいなければ王様ではありえない。

社会臨床からすると、ガスライティングに気づくことが大切である。しかし、虐待、DV、いじめなどの事例について、身体への暴力だけではなく、ガスライティングのような心理操作による暴力を制度化して加害対策にしていくことは難易度が高い。こうした暴力は広くサイレンシング silencing と特徴づけることができ、人格攻撃、侮辱や蔑視、無視、自己否定への誘導などを伴う現象というより広い対人暴力の層を構成している。これらは沈黙を強いる行動である。

ガスライティングはこの一種である。暴力と虐待の形態には多様な内実があることの理解が大切である。家族という親密な関係性がもつ、葛藤、やりきれなさ、切ない努力や行き違いの錯綜であることのなかには意図しないガスライティングも含まれている。ここで紹介している言葉は社会を映す鏡でもあるが、それは窓でもある。そこからみえる風景は暴力や虐待という言葉の奥行きとして理解すべき事項がたくさんある。

紹介したように「更年期」という言葉に映ることは単に女性の閉経後の医療化された心身状態、つまり西洋医学化された障害としての更年期ではなく、「昭和の家族」を生きたひとりひとりの女性であった。それを窓としてみえてくる生きられた心身の姿がある。

「夫原病」も同じようにいえるだろう。臨床を表現する言葉の質量感、陰影そして深奥の理解には、科学性や普遍性の追求だけでは難しい。文化や芸術や宗教の言葉や感性とともに紡がれる、個々の体験を語る言葉が大切なのだろう。ガスライティングも同じように心理的な操作という暴力を可視化させる窓となる。

また、別に詳述してとりあげようと思っている関係性の病理を語る臨床社会学の言葉は数多くあるが、たとえば第1に、ストックホルム症候群と呼ばれる事態がある。これはストックホルム銀行に強盗が入り、長時間監禁されていた女性行員が犯人の行動が激しくならないように同調的で理解する行動を取り、その結果、人質となった行員と犯人が後に結婚するほどに交流がすすんだ事例である。

第2に、モラルハラスメントである。身体的な虐待や暴力のように立証しにくいが、人格非難や侮辱するなどの尊厳を冒す言葉や態度による暴力を意味する。

そして最後に、ガスライティングやこれら二つとは真逆の意味をあらわすモラルマゾヒズムがある。それは自己犠牲や献身の物語。これは相手に罪悪感を抱かせて関係をつなぎとめようとする心性と行動を意味する言葉である。日本の母性イメージに近い。

他にも日本語でいう「甘え」は受動攻撃性ともかかわる態度や心理状態を含んだ関係性を表現する言葉である。これらは、同じ関係性の拘束を意味するにしても、コントロール行動としては、単にパワーで押さえつけるというような分かりやすい暴力とは異なる様式となっている。

9．暴力性の理解の広がりへ

ガスライティングからストックホルム症候群やモラルハラスメント、そしてモラルマゾ

ヒズムという連続性において心理と感情にかかわる関係性における暴力をみると、ある広がりのなかで問題を把握すべきことが理解できる。そうすると、暴力性の含意が、操作性や追従性、場合よっては自発的服従や献身と犠牲にまで広がることになる。その暴力性の中心には他者の自立と自律への干渉ならびに脅威があることが浮かび上がる。この点ではパターナリズムの強い文化を持つ日本社会における対人援助のあり方の吟味も重要となる。対人援助のもつ暴力性というテーマである。これらは別に紹介していきたい言葉である。

ここではガスライティングという手がかりをもとにしてそのことを考えてみた。暴力性の幅も相当に広いということの端緒を示したつもりである。ひきつづき類似の言葉を紹介していきたい。

（2013年8月25日受理）

ケアマネだから
できること

～学ぶということ　仲間との学びの場～

木村晃子

居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

～「家族」というテーマとの出会い～

私は日頃から、それほど多くの研修に参加しているわけではありません。研修に参加することに意義がある！とは考えていません。知識は使えるようになり、どこかで、誰かの役に立てるようにということを意識しているからです。色々な研修の場に参加するだけでは、中々自分の実践に結びつかないように感じています。たくさんのことに手を出せば出すほど、知ったつもりで終わってしまうような懸念を持っています。一般論ではなく、私自身の力量の問題かもしれません。

そのような私は、学びの軸足を「家族」というテーマに置いています。生まれてから死ぬまで、家族を抜きに語られる人生はないからです。家族の問題を扱えるようになることは、特定の領域にとらわれずに済むと思うのです。つまり、家族の問題を扱える、ということは、実践としては、高齢者支援の領域で仕事をしている私が、そこで出会う家族（高齢者以外の世代）問題にも役に立っていくことができるという解釈です。けれども、以前はこのように考えることはできませんでした。家族の問題にどこまで立ち入ることができるのだろうか、といつも躊躇が伴っていました。それは、家族を理解することや、家族問題に介入するための方法も知らなかったからだと思います。具体的な知識や技術を身につけることで、家族の問題に介入していくことを教えてくれたのが、このマガジンの編集長である、団士郎先生でした。

団先生の家族理解のワークショップ（札幌）へ初めて参加したのが、平成２０年の春でした。先輩ケアマネジャーから、ワークショップの素晴らしさを伺っており、なんとかこの学びに参加できないかと調べた結果、札幌で行われていることがわかりました。そこで、期待に期待を重ね学びの日を待ちわびていました。札幌での、家族理解ワークショップは、土日の二日間、各６時間のプログラムになっています。軽快な先生のオープニングトークから、わかりやすく組み立てられたトレーニングプログラムは、衝撃的なものだったことを覚えていますが、何よりも話の初めに、「人の役に立たないような勉強はするな。」という言葉に、私の背筋がピンと伸びた記憶が今でも残っています。人は何のために学ぶのか、ここを突き付けられたような気がしました。この時のワークショップに出会ったことで、学びに向かう姿勢の持ち方は、私自身に大きな変化をもたらせたことは間違

いありませんでした。

～地域に還元する。～

初めて参加した二日間の家族理解ワークショップを終え、興奮冷めやらぬ自分にじっとしていられませんでした。ジェノグラム面接という方法が対象者を理解する方法だということを学んだ私は、どうしてもこのことを周囲の人に伝えたくなりました。ジェノグラム面接を知っている、ということを顕示したかったわけではありません。二日間のワークショップで、対人援助職としての私自身が何やらとても背負いこんでいた肩の荷をすっと降ろせたような気分の良さがあったからです。仕事に熱心に取り組みすぎて、バーンアウトしてしまわないように、などと言われることはよくありましたが、ではどうしたらそれが防げるのか、ということの一つをみつけたような気がしたのです。▸自分がラクな気持ちで仕事に向き合っていく方法を身につけること。▸難しい環境や悩みを抱えた人の相談に応じながら、自分も相談者と一緒になって暗く落ち込んでいる必要はない、ということがわかったのが、このジェノグラム面接でした。▸問題が問題ではなく、問題解決の方法が問題だ。▸人はやり慣れた方法で、問題に対処している。しばしそのやり方は、問題が解決に向かわなくても繰り返されている。▸家族のありようを理解したうえで、その人たちが自分たちで良い方向に向かえるように支援していく。このことの理解ができると援助者はとても肩の荷がおりるものだと思いました。そして、まずは、このことを地域の仲間に伝えよう、と決意しました。自分が学び得たことを地域に還元しようと決意ができたのは、「人の役に立たない勉強などするな。」と言った団先生の言葉に刺激されたからでした。

とにかく、自分の周辺のケアマネジャー仲間に、「素晴らしい研修に参加してきた。知っていると知らないでは、仕事の仕方は随分変わる。一緒に勉強しよう。」と持ちかけて、なんとか興味を持ってくれた仲間数名と自主的な学びが始まりました。私がワークショップで学んだことを伝達する形で、見よう見まねではありつつも、ジェノグラム面接や、ジェノグラムから展開する事例検討を取り入れながら学習会は続きました。平成２０年６月に自主的学習会は始まり、今年６年目を迎える今は、下記のような状況で継続されています。

＊家族理解自主的学習会開催及び参加状況

（当別町：平日夜18時～20時半頃まで実施。内訳には記していないが、毎回初参加者がいる。）

年度	開催月	内容	町内参加者数	町外参加者数
Ｈ２０	６月	学習会	２２人	０
	７月	学習会	１３人	０
	１１月	親睦会	１４人	０
Ｈ２１	５月	学習会	１７人	０
	７月	学習会	１７人	０
	９月	学習会	１１人	０
	１１月	親睦会	１５人	０
	１月	学習会	９人	０
	３月	学習会	１４人	０
Ｈ２２	５月	学習会	１６人	１人
	７月	学習会	７人	２人
	９月	学習会	９人	１人
	１１月	親睦会	１１人	２人
	１月	学習会	６人	０
	３月	学習会	１５人	５人
Ｈ２３	５月	学習会	１９人	５人
	７月	学習会	１６人	１人
＊台風で日程変更	９月	学習会	７人	１人
	１１月	親睦会	９人	０
	１月	学習会	７人	２人
	３月	学習会	８人	７人
Ｈ２４	５月	学習会	８人	２人
	７月	学習会	１０人	６人

	９月	学習会	５人	３人
	１１月	親睦会	１６人	１１人
	１月	学習会	７人	２人
	３月	学習会	１０人	２人
Ｈ２５	５月	学習会	１０人	３人
	７月 ・ ・	学習会	１５人	４人

ご覧いただきわかるのは、初年度である、平成２０年は開催月にばらつきがあり、３回しか実施できていないにも関わらず、翌年以降の定期開催ができている点です。地域のケアマネジャー連絡協議会の付帯事業として認められ、事務局が機能したことです。地域の対人援助職及び機関に対しての学習会の案内をしてくれていたことが定期継続できていた大きな理由だったと思います。けれども、このバックアップは、平成２４年度で学習会の定着を理由に終了されてしまいました。地域でこれだけ継続できている学習の場は他には見当たりません。継続できていることの意味と価値が、「継続定着できているのだから、自分たちで（学習会参加者）継続していってください。」という評価がなされたことに、大変残念な気持ちではありました。けれども、学びたい人がいる限り、この学習の場は守っていこうと６年目に突入の今年は決意いたしました。そして、引き続き学びの仲間が継続参加して、学習会が存続できていることに、「学ぶということを世間はどう捉えているのか。」とやや皮肉めいた問題提起もしたくなるところではありますが、人、様々な価値観があるのでしょうから、小さなことにはこだわらずに楽しく学び続けていこうとは思っています。

そして、毎年１１月には、親睦会と称した内容になっています。この時は、学びは少しにして、飲食をしながらの交流をメインに会を開催しています。

基本的に、この会は学びに興味のある人が自由に参加できる場であり、会費などはありません。職種の規定も設けていません。

この理由に関しては、このような学びの大先輩であり尊敬する当マガジン副編集長である千葉晃央さんが、『対人援助額を拓く』（　村本邦子　土田宣明　徳田完二　春日井敏之　望月昭　［編］晃洋書房）の中の、第９章―地域における学びの場づくりと専門職のつながりー（＊立命館大学で１２年目に学びが継続されている、家族をテーマにした事例検討会について書かれた内容）の中で記されています。（同書ページ１０８、参加費、参加要件）

千葉さんは、参加費の無料設定について、▸実際に学びの場にかかる経費がさほどかからない点（通信にかかる印刷費数百円）▸アドバイザーを引き受けてくれている先生も無報酬であること。▸援助職が研鑽しない理由に研修にかかる費用を理由にしていることが多いことによる経済的負担の軽減と、「お金がないから研鑽しない。」という学ばない理由を他者に責任転嫁していないか、という確認によるものと記しています。

また、参加要件に関しても、▸特定の領域以外の援助職の仕事を知る、その姿に触れる、などの後進育成にも触れられています。

私自身がこれまで、当別で継続的に学習会をリードしてきたことも、千葉さんのまとめられた内容に同感な理由です。ただし、京都立命館大学の事例検討会と大きく異なる点は、アドバイザーとなる先生の存在がないことです。家族を学んでいる途中の私が、覚えたてのことをレクチャーしている形です。けれども、参加者の職種の多様性により（ケアマネ、介護保険サービス関係者、障がい者支援関係者、行政保健師職、小学校教諭、大学教諭、医療ソーシャルワーカー、ＮＰＯ職員など）ピアスーパービジョンの効果が発揮されているように感じています。

当別町は、大都市札幌に隣接してはいるものの、電車で４５分程度の時間を要し、冬は豪雪地帯、

猛吹雪となることも珍しくなく、アクセスが必ずしも快適ではありません。人口も一万七千人と減少傾向であり、小さな農村地帯です。けれども、この町に、この隔月の学習会を目指して、札幌や隣町江別市などの専門職の参加があります。ここで、多職種の交流機会が持たれ、ネットワーク構築の一助になっていると密かに自負しているのは私です。援助職が、通常の業務の展開範囲の中で、公にも非公式にもつながれるネットワークをもっていることは仕事をするうえで、或いは生活していく上でも、大きな強みになります。単に何かの機会によく顔を見る、顔を合わせるということだけでないつながりがこの学びの場には生まれています。学び自体が「共通言語」となっていくのです。

～共通言語としての学び～

同じ学びを継続している仲間とは、学び自体が「共通言語」になっていく、と初期のころ、団先生が教えてくれました。それがどんなことを意味しているのかは、当初ははっきりと自覚していたわけではありません。

けれども、家族を学び始めてから、その意味を徐々に実感することは多くなりました。そして、昨年その意味が確信に変わった出来事がありました。

平成２４年９月、マガジン連載でもおなじみの早樫一男先生、岡田隆介先生、そして団士郎先生を中心とした「家族造形法ざんまい」という研修が同志社大学を会場に開催されました。一度は京都へ足を運んで、同じような学びをしている方々と一緒に学んでみたい、と常々考えていたこともあり、この研修への参加に迷いはありませんでした。人生初京都が研修という機会であることに、自分のマジメさが表れているなと感じました。余談ですが、関西空港に入り、特急はるかに乗車し、京都駅へ向かい、何かに乗り継ぎ（確か地下鉄）、研修会場である、同志社大学に到着した時の安堵感。そして、名前こそ拝見したことはあるものの、面識があるのは、団先生のみ、という会場で真っ先に先生を探し、見つけ一安心も二安心もしたところです。けれども、次の瞬間からは、名前を存じ上げていた方々に次々にご挨拶ができ、その後の研修でもアウェイ感が全くない形で、研修に楽しく参加することができました。それは、私の性格が図々しいということではなく（たぶん、そうではないと思っている。）、学びがもたらす「共通言語」というものが、その場の振る舞いや、学びから得られるシンパシーの高まりにつながったのだと思います。「これだ！初対面であって、初対面でないのかもしれない。同じ学びに基づく相手への振る舞いの似通っているところが安心感を生みだしているのではないか。」そう思いました。

二日間の研修は多くの学びと感動を得て終了することができました。台風の影響でやや早めに研修が終わったこともあって、駅の近くのカフェで、千葉さん（マガジン副編集長）や、同じく連載執筆者である坂口さんと、旧知の間柄のような弾んだおしゃべりの時間を持ったことも思い出されます。これは、単なる思い出話ではなく、このお二人とは年齢も近いこともあって、この後の私の人生に大きな影響を与えてくれた出会いでもあります。これは、単に馬の合う友人を得た、ということではないように感じます。同じことを学んでいるという信頼感もありますが、情緒的にだけではない、冷静な側面の関係でもあるような気がしています。言いたいことを、言える時に話す。無理に詮索しない。ただ受け止める。そのような関係でもあるかもしれません。何かに正義という決着をつけたり、不要なアドバイスを尚早に口走ったりしない関係は、同じ学びから得ている作法のような気がしました。

～変わること、変わらないこと。そして地域に根づくことを目指して～

平成２０年に私自身が学びを開始した「家族」

というテーマについて、私自身と周辺環境がどのように変化したか、反対に何が変化せずに今に至っているかをまとめにしたいと思います。

変わったことと言えば、地元の学習会に継続参加している人との通常業務のしやすさというプラスの効果、町外の仲間とのつながりができたことです。また、開始当初は、福祉関係者だけの学びだったことに加え、学校の先生や大学の先生などとの参加もあることから、普段関わらない領域の仕事の内容についても知ることができるようになったと思います。継続的に開かれている会があることで、リアルタイムに遭遇した「どうしたら良いだろうか。」ということに集まった仲間で検討ができる場ともなっております。

そして、この当別の学習会に参加している仲間が、札幌で開かれる団先生のワークショップに参加すること増え、学びがもたらす「共通言語」の範囲が広がっています。

地域の仲間が、同じ学びを通して仕事や仕事以外の場面でつながりがあることは、支え、支えられるネットワーク資源を自分が持っていることです。それぞれの職場や部署で一人だという立場の人であっても、孤独な仕事をしないという形は、バーンアウトを防いだり、一人で悩むことも減らせるのではないかと思います。それは、地域の援助者がその場で継続した支援を展開できることであり、それが地域や支援対象者にとっての益になっていくことでしょう。

私自身の変わったことと言えば、地元の学習会だけでなく、家族をテーマにした研修会等に招いていただく機会が増えたことがあります。利用者支援をしていると、本人だけでなく、本人を取り巻く家族への支援についても悩まれ援助職の方の声はよく聞きます。私が家族を学ぶ前に躊躇していた、「どこまで家族に関わってよいのだろうか。」という戸惑いです。家族はいかようにも変化ができる力ある存在として、家族を理解する方法と、支援方法については、日々の私の実践を伝える機会に恵まれました。そして、仲間が肩の力を抜いて、支援対象者の方にしっかり向き合うことができるようになったというお話も伺う事が増えました。

変わらないこと。それは、最初の頃と同じように「家族」をテーマに学びを続けていることです。私自身が「家族」を対象にしたケアマネであることや、当別町で「家族理解の学習会をしている」という認知も広がっている実感があります。そして、１０年後も２０年後も同じように家族を学んでいる確信があります。

「変化はいつも少しずつ」という言葉も、団先生からかけていただいた言葉でした。何も変わらないな、と感じながら始めていた学習会でしたが、５年の実績が随分と変化を遂げたと思います。日々の小さな変化は目立ちにくいのですが、続けている限り、少しずつ少しずつ変化と進化はしていくと思います。

ケアマネだからできること、として学びの場を作っていくことも、自分や仲間に、そして地域に対してできることだと感じています。
人は、何のために学ぶのか。何かを学ぶことで、学びのアングルから見えてくる世界が変わってきます。見える世界が変わると、自分の行動範囲も広がります。その行動範囲の広がりは、さらなる出会いにつながっていきます。そして、行動が変わっていくという面白い循環が生まれるのだと思います。

職業人としての、専門性を磨くというミッションもありますが、何よりも自分が人生を楽しむことができるようになったのが、「家族」というテーマとの出会いでした。

引用文献：『対人援助額を拓く』（　村本邦子　土田宣明　徳田完二　春日井敏之　望月昭　［編］晃洋書房）

街場の就活論 vol.14

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

「まだ、大丈夫」

「全員を、幸せにします」

最近、企業の新卒採用活動の支援をしている仲間がこんなことを言っていた。「今の時代は、採用コピーを一本決めて、求める人物像を伝える時代じゃありません。個性尊重と言っては言い過ぎですが、コピーも複数走らせて、より多くの人を受け入れられる土壌を見せる時代です」。

新卒採用活動をする企業は、自社が求める人物像や企業姿勢を伝えるために、採用コピーを考案し、色々なシーンで活用、展開するケースが多い。自動車のホンダが「負けるもんか」をキャッチフレーズに、消費者とコミュニケーションをはかっているが、あれと同じようなものだ。例えば、

「仕事を選ぶこと。それは、生き方を選ぶこと。」（SAZAVY グループ）
「前にしか、進まない。」（コクヨ）
「良い服は、世界を変える。あなたが、世界を変える。」（ユニクロ）
「本命の、君へ。」（フジテレビ）

など。
従って、新卒採用活動を制作面から支援する各社にとって、これまで、第一関門がこのキャッチコピーの考案といえた。ところが、この流れに変化が起きているというのが、冒頭の仲間の指摘だった。学校や専攻、男女、志向性によって複数の入り口を設け、それぞれにコミュニケーションプランを立てて展開する方が、より多くの人にリーチできるのだという。

「なるほどな」と思う事例もいくつか思い出されるので、頷きながら、さてこれは一体何が起きているのか？　と考えてみた。すると、前号に引き続き、これはまたもや「決断の先送り」支援ではないかという考えが浮かび始めた。

＊　＊　＊

「いつ決めるの？」「まだでしょ！」

就職先選びというのは、高校、大学選び以上に慎重を期す決断である（と考える学生が多い）。昨今のように、ブラック企業、倒産、リストラと、いささか誇大気味なネガティブキャンペーンがマスメディアで展開されると、まだ社会を知らない学生が慎重になるのも無理はない。そのような状況下で、本命企業を決めることは、根拠がないがゆえ

にとても難しいことだ。

加えて、新卒採用活動のために開発されたキャッチコピーは、
「おまえを待っている！」や
「キミがやらなきゃ誰がやる！」的な、
情熱的ともいえるが、いささか押し付け気味なものも多い。これは、冷静に見ると、転校初日に、
「あなたが好きだ！」
とラブコールを受けるようなもので、警戒心が働くのも無理はない。「そんな甘言にはだまされない」という心持ちである。

人生の第一歩目、できれば失敗したくない、という気持ちは分からなくはない。まして、何につけても「自己責任」で片付けられる世の中である。それならば、自らと深く向き合った上で確信を持って就職先は決めたいと思う。ところが、社会経験のない学生が、自らと深く向き合ったところで、そもそも将来の夢やビジョンが見えるわけがない。その結果、このような状況下にある学生にもっともフィットするコミュニケーションが、

「まだ決めなくていいよ」

に傾いてきているのではないかと思うのだ。
「決められないよね、その気持ち、わかるよ」
と言ってもらうことが、一番学生の心に響く。

＊　＊　＊

手遅れの寸前が、一番金になる

「まだ大丈夫」というのは、世代を問わず、人に受け入れられやすいコミュニケーションであることに、疑いはないだろう。

「どれだけ太っても、40 代ならまだ大丈夫」
「50 歳で独身？ぜんぜん大丈夫」
「70 歳からの保険加入？まだまだ大丈夫」

現実的に大丈夫かどうかは別として、渦中当事者は、そう言っても励ましてもらうと、嬉しいものだ。そして、そのような状況で決断を究極まで先延ばしにさせて

「ほんとに、そのままでいいの!?　ヤバイよ、もう」

と煽り高額商品を購入させる、というのは、豊かになった日本の消費喚起方法のひとつの大きな軸になっていることは、世の中を見渡せばすぐ分かる。その考え方の応用が、新卒のコミュニケーションにも出始めているのではないか？　という風に思えたのだ。

「決められないよね、その気持ち、わかるよ」
と共感し、
「だから今はまだ決めなくていいよ。入ればキミに合う働き方がきっと見つかるから」
と決断の先送りを奨励する。しかし実際に会社が個々人に合った仕事を作ってくれるわけはなく、結果、若年者の離職率ばかりが向上する。その状況を、おじさんたちは
「いまどきの若い者は…」
と嘆き、その一方で若手の突き上げがないことに、少しばかり安堵する。団塊世代を中心にが突き進む、目指せ「逃げ切り」、「後は知ーらんぺ」の法則である。

＊　＊　＊

必ずしも就職する必要はないが――

多くの大学生にとって、就職活動は、人生ではじめての大きな決断のときだと思う。まず、就職するか、しないかを決めないといけない。その後、ど

の企業に行くかを決めないといけない。その割に情報が豊かなわけではない。限られた、それも装飾された情報の中で、決断しなければならない。だがこれらは、今に始まったことではなく、ずっと繰り返されてきたことだ。

そこで大切なのは、自らの決断を「良いもの」にすることだと思う。決断した時点では、良いも悪いもない。決断は時間をかけて、成功になったり失敗になったりする。

決断は重ねるほどに上手くなる。だから決断を先送りにさせる取り組みは、大げさに言えば、人間を弱くする取り組みのように、僕には思えてならない。その一端を、就職活動の小さな出来事に感じた、仲間との会話だった。

文／だん・あそぶ
立命館アジア太平洋大学非常勤講師
「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。

コミュニティを探して

（　4　）

藤　信子

前号に「病気→薬」という図式を植え付けるのに、ＴＶや町で見かける広告量の多さも関連しているのではないかと書いた。個人の思考や行動に対してＣＭの影響が大きいということを、今更と思われるかも知れないが、少し考えてみても良いのではないかと思う。東日本大震災後、原子力発電所が稼働しないので電力不足になるという時に、私が不思議だったことの一つがＴＶの放送時間が短縮されなかったことだ。ＴＶを付けているのはそんなに電力を使用しないのだろうか？それにしても、ずっと昔のように昼間は放送しないと誰も考えなかったのか。それともＴＶというのは、極めて大事なメディアなので放送を短縮するわけにはいかない、と考えている人がいるのだろうろうか？新聞のＴＶ欄を見る限りそ､そうだろうかと思うけれど｡そこで、これは全くの邪推だけれど、もしかしたらＣＭのスポンサー企業との関連で、そう簡単には放送時間が短縮できないのではないのだろうか、と考えている。人の生活に必要でないものを作って売らなければならないから、あ

んなに騒ぎ立てて、商品名を皆の記憶に植え付けようとしているのだろう。意識に登らない弱い刺激を提示して、見た人が気付かないうちにコーラを飲みたくさせた閾下知覚の実験の話を持ち出さなくても、あれだけの商品の連呼にさらされると、購買欲がでてくるのではないだろうか。

CMが悪いとかという話ではなく、量の問題だと思う。浴びせかけるような流し方というのは、考える暇を与えない。私にとって必要なものかどうか、他のものと比較して手に入れる価値があるのか、など考える暇はない。そんなオーバーなと思うかもしれないけれど、何度もきれいな映像を見たりしていると、それはいいもののように思えるのではないだろうか。例えば震災前オール電化のマンションをしきりに宣伝していた。私から見ると、ミレニアム問題を経験しているので、単一のエネルギー源での生活というのは、リスクが大きいと思うから、とても良いとは思えないけれど、立場を変えれば高齢になった時の火の管理など便利なものかもしれない。でも今から思うと、よくもまあ電気を沢山使えというばかりの発想には驚いてしまうけれど、電力会社は原子力発電で、沢山の電気がまかない続けられるからと思っていたのだろう。

私がCMの押し付けるような方法に考え込んでしまうのは、そのような方法が教育にもつながっているのではないかと感じているからである。日本の 1990 年代の子どもたちが 1950 年代の子どもたちに比べ、主体性や自発性、想像力が乏しくなっていること、そしてこれは、直線的な成長をイメージした価値観に沿ってより早く答えを出す社会を作ってきたからではないかと、私は考えている（藤 2011）。個人の発達の問題だけでなく、現代の社会が持っている問題である直線的な成長を信じる価値観に対しては、対象に関わりながらいろんな見方に気づき、考えることを重ねることで、自らの価値観を考え続けることが必要なのではないかと考えている。ところでそのように考える時に大事なことは、何だろう。

価値観を押し付けられずに、上関原発に反対した祝島人たちは、自分たちの島の歴史と文化を誇りに思い、そして美しい大自然があったからこそ、平和に豊かに暮らしてきたという思いから、30 年にわたって原発に反対し続けた（福島の事故後準備工事は中断となっている）（山秋　2012）。自分の土地で、海で採れるものの豊かさを知っているからこそ、それを守りたい、子孫に伝える必要があると考える強さが、土地の自然や暮らしを離れ、大きな官庁や会社のデスクで数字を見て考えることと、対峙していけたのだと思う。1971 年以降、原発を作らせなかった地は 30 か所以上あり、現在運転している原発は 1970 年までに計画が浮上したものだけだという（山秋　2012）。現在の原発の立地は 17 か所（50 基）だから、1971 年以降各地の人々の凄まじ

い努力があったのだということが理解される。祝島のデモは 1982 年に始まり、2012 年 11 月で 1150 回になったという（山秋　2012）ことを少し考えてみても、各地でどんなだっただろうと思う。そんなことを考えると、日本の各地には自分たちの自然や暮らしを大事にしたいと、工夫したり頑張る人たちがいるんだと、少し元気になれるような気がする。

　私にとって大切な暮らしという時に、何を手掛かりに考えるのだろうか。大量消費を促す米国資本に対して怒っていたＪＩＣＡでニカラグアに行った看護師の話を思い出した。伝統的なニカラグアの食事をしていると健康に良いのに、マクドナルドが米国から入ってきたので､自分の家で鶏が産んだ卵を売って、マックとコーラを買うという、理不尽さを彼女は怒っていた。地元でとれた食材より、ファーストフードの方が美味しく、おしゃれなのだろうと思う。しかし、やっぱり変だと思った方がいい。ベトナム戦争の時、アメリカ軍は兵士の士気を保つために、ベトナムのジャングルの中にまで、ハンバーガーを届けたというが、これは中毒と言ってもいいんじゃないだろうか。目の前にある素材から、味を引き出すことを考えることも、直線的成長という価値観や押し付けに対して私らしい価値の模索だと考え、実行していこうと思っている。

―文献―

藤　信子（2011）多様な個性を受容する子どもを育む．教育と医学 59（3）13－20

山秋　真（2012）原発をつくらせなかった人びと－祝島から未来へ．岩波新書

第１４回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ２

～その4　家族の交流パターンを変える～

岡田　隆介

広島市子ども療育センター

１３．交流パターンを変えるロールプレイ（迷宮の入り口を中心に）

「では対策の説明をしますね。そのあとで、図２を念頭においてロールプレイをやっていただきます。迷宮の入り口からコミュニケーションが始まると悪循環に一直線となるので、その対策は問題の場面を見ないようにすること。人間、見ないと腹は立たない。知らぬが仏に近い感じかな。つまり、見ないことで問題を取り上げてのやりとりを減らしていく。へんな言い方だけど、問題がある限り対話は途絶えません。クドクド、ガミガミ対ウルサイ！という定番やりとりができますから。ある意味、対話が問題を持続させる一因でもある。じゃあどうする？そこを見ない代わりに、日常のなんでもないフツーに注目します。ほら、ただの野草38と思って見向きもしなかったものが、実はローズマリーだかレモングラッセだ呼ばれたら、どうですか、注目しませんか、話題にするでしょ。せっせと水やりだってします。まあ、そんな感じです。スルーしていたフツーをウォッチと言いたかったのですが、かえってわかりにくくなりましたか。さてＡさん、どうです、再度やってみます？」

「（Ａ）はい、やってみたいです。Ｂさん、またお願いできますか？」

「（Ｂ）わたしもやりたい」

「じゃあお願いします。ホワイトボードは、よく見えるところに置いておきます。それから、途中で混乱したり行き詰まったりしたら、ストップをかけて、メンバーのみなさんにアドバイスを求めてください。みんなで考えましょう」

「（Ｔ役）最近はどんな様子ですか？」

「(M役) 夜遅くまでネットにつないで、ゲームをしていています。昼頃起きてくるのも、学校に行かずにゴロゴロしているのも、相変わらずです」
「(T役) そうですか。なるほど。お母さんとしてはストレスがたまるでしょうね。どうやって、発散しておられるのですか？」
「(M役) 発散なんかできません、たまる一方ですよ」
「(T役) たとえば、長男さんと話をするとか、そういうときはいかがです？」
「(M役) おばあちゃんの所にいますから、めったに話すことはありません。たまに電話してくると、お金のことですから。クラブの合宿費がどうとか」
「(T役) なるほど、長男といってもまだ自分のことでいっぱいなんでしょうね」
「(M役) そんな感じです」
「(T役) そのストレスですが、どういうときに貯まりますか？」
「(M役) どういうときって、さっきいったように夜中までネットしているからうるさくて」
「(T役) 夜中に部屋まで見に行かれるわけですね？」
「(M役) 眠れないときは、そうしますね」
「(T役) はい、それで？」
「(M役) 言い争いになりますけど、こっちは早く寝たいので引き下がります。それで余計にイライラして目がさえてきて、朝まで寝られないですよ。あっちは朝までやるから、どうせ同じでしょうけど」
「(T役) それじゃあ、無駄骨？」
「(M役) そう、余計にストレスですよ」
「(T役) さっき、眠れない夜っておっしゃいましたが、そうじゃない夜は？」
「(M役) 寝てしまったら気になりませんよ、眠ってるんだから」
「(T役) お薬飲んで？」
「(M役) そう、飲んでも眠れない夜はね、ホント、辛いですよ」
「(T役) あの、こんなふうに言えないでしょうか。つまり、夜中に注意しても効果はゼロでどっちみちネットは止めない、注意するだけ余計にイライラして損だと」
「(M役) もちろん、それはわかってます。でもイライラしてきたらね、言わなきゃ気が済まないし・・」

「(A) ちょっとストップしていいですか？Bさん、すみません。ええと、自分では“見ない”を助言したつもりなんですけど、Bさんの腑に落ちている様子が全くなくて」
「Bさん、そうなんですか？」
「(B) 諦めろって言われてる気がして、ちょっとイラッとしたかなぁ」
「(F) 傍で見ている分には、意図ははっきり伝わってきました。あえて言うなら、注意しても変わらないことより、注意しない方のメリットを強調したらどうでしょうか？」
「(G) ストレスから入ったのは自然でよかったですけど」
「(E) 注意する夜と寝てしまう夜を並列で話したのは、とてもよかったと思います」

「（Ｊ）私もそう思います。同じように並べる話し方で、昼起きとか夜間徘徊の場面に広げていったら、“見ない”の提案の意図が徐々に伝わっていくように思います」

「そうですね、ここまでいい感じですよ、Ａさん。新しい工夫は、基本的に今までのやり方に変えて、となります。いままでの努力を否定される予感がした家族が、不安と警戒、期待と緊張を抱くのは自然なことです。ですからＢさんの反応は当然なんです。援助者も一緒になって不安になるとお互いの不安が増幅しあうから、Ｊさんのアドバイスに従って前に進みましょう」

「（Ａ）ありがとうございます。やってみます」

「（T役）あの、夜間に帰宅する時がありましたよね。その場合はどうなんですか？やっぱりストレスがたまりますか？」

「（M役）補導されたりしないかと心配はしますけど、静かだからよく眠れるんです。その間に帰ってくることが多いので、それほどストレスではないかな」

「（T役）これだって、帰るのを待って注意しても効果はないでしょうし、むしろ先に眠ってる方がお互いにストレスにならないわけですね。実際、補導されたことはないしね」

「（M役）そうです」

「（T役）問題の場面に出くわさないってことはお母さんの健康にとって、とても重要な要素ですね。じゃあ、昼過ぎに起きてくる頃合いを見計らって買い物にでかけるのはどうでしょうか？お子さんはお母さんが帰った頃には部屋に戻ってる。ことさら不機嫌になる理由もないし」

「（M役）確かに・・」

「（T役）クリニックの医師だって、ストレスはできるだけ減らすように言うでしょ？」

「（M役）その通りです」

「（T役）どうでしょう、できるだけ腹立たしい場面には遭遇しない、その方向でやってみませんか？具体的には、忘れずに眠剤を飲んでさっさと眠る、昼に起きてくる頃には買い物に出かける、夜帰って来る前に寝てしまう。もし子どもさんがこれみよがしになにかやらかしても、乗せられずにペースを守るのです」

「（M役）でも、それだとスレ違い親子になってしまいませんか？将来のことなどを話すチャンスがなくなってしまわないか、心配なんですけど」

「（T役）それはストレスとは別のことですね。その点についてもちゃんと考えてますから」

（拍手）

「はい、ありがとうございました。お二人とも慣れてきましたね。では、感想を聞いてみましょう。Ａさん」

「（Ａ）はじめの頃はオロオロした感じがありましたが、途中でみなさんに助言してもらってからは時間がたつのが早かったです」

「（Ｂ）正直、インターバルの直前はイライラしてました。でも、後半になって理解できるとスッキリし

ました。いまは、早く実行してみたいという気持です」

「いや、それはすごいですね。どなたか？」

「（D）昼起きてくる頃を見計らって買い物に行くというアイディアがよかったです。よく面接中に思いついたものだと感心しました」

「（J）さきほど、並べる話し方で昼起きとか夜間帰宅とかほかの“問題”場面に広げていったらと気軽にいったのですが、それを見事にやってのけたのがすごかったです。驚きました」

「（I）一貫して、できそうにないことは求めなかったのがよかったです。お母さんはウツがあるし」

「（C）楽しい面接をしようとしているのが、とてもよかったです。それだけでも、来てよかったと思われるでしょう」

「（F）そうそう、私も部屋が明るくなった感じがしました」

「（H）実行可能と思えるような具体案がちりばめられているのがよかったです」

「みなさんが感じておられたことは、私も実感しました。お母さんが“できるかも”と希望の灯を照らしたからでしょうか。では休憩を挟んで、いよいよ最後のロールプレイです。みなさんの呼吸が合ってきて、このまま終わりに近づくのがもったいない気がします。合宿でもしましょうか？冗談ですけど」

「（A）ほんとですね、合宿したいです」

「（C）私も賛成です」

「みなさんうなずいてらっしゃるから、とりあえず自発的なネットワークでつながってみたら。合宿とか勉強会の企画は、そのなかでゆっくり検討されたらいいかもしれません。とりあえず、休憩しましょう」

映画の中の子どもたち

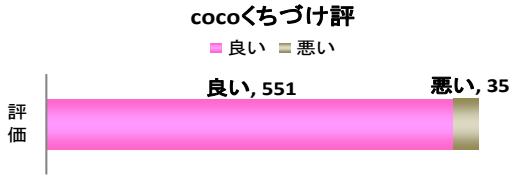
第14回 くちづけ

―間違ってやしないか、この物語―

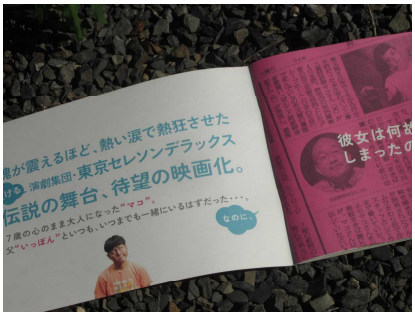
川﨑　二三彦

絶賛

本連載で、私がいつも末尾で紹介しているのが映画案内 coco のホームページ。「Twitter から映画の評価が分かる ＆ 映画の鑑賞記録が残せる」という謳い文句で、ほとんど全ての映画が網羅されており、今回取り上げる「くちづけ」も例に漏れず、下図のとおり（2013 年 9 月 8 日現在）、圧倒的に高い評価を勝ち得ていた。



ちなみに、もう一つの映画ガイドである「Movie Walker」でも、最高評価の星 5 つが 4 割を超えて最も多く、平均でも 4.2 と高い。寄せられた声も、「多分今年一番の映画。傑作です! さすが、伝説の舞台といわれるだけあって脚本がいい！　久しぶりに上映後化粧直しが必要なほど泣きました」だとか、「こういうの（注：Movie Walker の評価やコメント）は参考にさせて頂く事はあってもレビュー投稿なぞしない私が、どーしても投稿したくなってID を取ってしまいました……。それぐらい良い!!!」「ボロボロに泣くしかないのですが、見終わったあとスッキリして清々しい気持ちになれるのは、愛に溢れた物語だからでしょうか」といった絶賛で溢れかえっていた。



「ウウム、伝説の舞台の映画化なのか」「評判もすごく良いし、タイトルも何となく好ましい」

迷わず私も出かけることにした。

ちょ、ちょっと待ってくれ

映画は、知的障害者のグループホーム「ひまわり荘」を舞台に、そこで暮らす人々やホームを支える人たちの日常を、時にコミカルに、時にはシリアスな問題も投げかけつつ描き出していく。中心となるのは、早くに妻を亡くし、最近このホームにやって来たその名も「愛情いっぽん」という漫画家と、彼が男手一つで育ててきた障害をもつ娘マコ。映画のスタッフやキャストが実際のグループホームを取材もして作り上げたという本作は、障害者差別にかかわるエピソードや、簡単にはいかない彼らの現実生活も織り込み、ものすごく感動的というわけではないとしても、それなりに了解できる内容で進行する。

だが、映画がクライマックスに近づくにつれ、私はいやな予感に襲われた。事前にストーリーは見ないようにしていたのだけれど、この展開ならば、どうしたって先が読めてしまう。

「やめてくれ」「ちょっと待てよ、おい!」

という心の声もむなしく、物語は最悪のコースを辿るのであった。

「親子心中」の研究

ここ数年、私は「親子心中」に関する研究をおこなっており、古くは戦前の時代を含むさまざまな文献を集め、さらに新聞報道を整理して最近 10 年間の全ての事例を把握。加えて、子どもが死亡し親が生き残った事件の公判

を傍聴するなどして、事例の詳細な検討も試みている。

ところで、子どもを殺した被告側弁護士が、公判の中で必ずと言っていいほど用いるのが、「被告には、子どもに対する愛情があったからこそ、こうした行為に及んだのです」という理屈だ。実はこれ、戦前からわが国に根強く存在しており、たとえば、「親が自分の最愛の愛子を殺して心中を図るという行為は日本人としてその肉親を愛さんとする一つの最も美点の現れであるとも見られます（昭和 9 年）」といった発言は、その一例であろう。

ただし、公判を傍聴すればするほどに感じることは、「親子心中」、つまり「子殺し心中」は、どのようなものであっても、子どもにとっては理不尽きわまりないということだ。だから、「わが国の歴史においては、児童の人権を抹殺した親子心中という言葉を安易に用い、美化し許容してきた」として、多くの研究者が「心中」という用語の使用そのものを避けている。

子どもの無念

もちろん、事件は起こる。古今東西、つまりは洋の東西を問わず、過去から現在に至るまで「子殺し心中」事件は発生し続けている。だから、「ひまわり荘」での生活を映し出す前半部分からするとかなりの違和感は否めないものの、諸般の事情が重なり、追い詰められた父親が娘を殺すしかないと考えた物語があっても、もちろんよい。

だが本作では、「愛情いっぽん」という命名が象徴しているように、まさに「肉親を愛さんとする一つの美点」というとらえ方に傾き過ぎて、＜子殺しの理不尽さ＞という視点がほとんど感じられないことだ。換言すれば、「ウーやん」との結婚を夢見、「殺さないで、お父さん!」という内心の叫びを聞き届けられないまま殺害されたマコの無念さが、いっぽんの「愛情」に隠され、置き去りにされているようでならないのである。

想定外

しかも腑に落ちないのは、子を殺害した父親が、いかに余命幾ばくもない状況であったとはいえ、私の想定と違って「心中」を図ろうとさえしなかったことだ。むろん、「死ね」というわけではないが、あえて作者に問いたい。

「娘を殺めた上で、父親は余命を全うし、マンガを描くんですか」「娘がウーやんと結婚するのは、はなから論外だったんですね」と。

蛇足だが、この展開だと、障害者同士の結婚なんてあり得ないということが暗黙の前提にあると読めてしまう。

そんなモヤモヤが頭をかき乱したのであろう、号泣した人には誠に申し訳ないが、映画館を出た途端、私は思わず毒突いてしまった。

「××××」（4 文字伏せ字）

＊

なお、妻を亡くして父子家庭で障害児を育てる父が、癌で余命がないことを宣告されて呻吟する映画なら、中国・香港映画「海洋天堂」と瓜二つ。こちらは心中未遂から物語が始まるのだが、本作と比べてみるのも一興だろう。

＊ 2013／日本
＊鑑賞データ 2013/06/14 横浜ブルク
＊公式 HP http://www.kuchizuke-movie.com/
＊ Twitter への投稿 http://coco.to/movie/20982

＊題名を click すると本文へ移動します。

第 1 回 プレシャス
第 2 回 クロッシング
第 3 回 冬の小鳥
第 4 回 その街のこども
第 5 回 八日目の蝉
第 6 回 いのちの子ども
第 7 回 ラビット・ホール
第 8 回 サラの鍵
第 9 回 少年と自転車
第 10 回 オレンジと太陽
第 11 回 孤独なツバメたち
第 12 回 明日の空の向こうに
第 13 回 旅立ちの島唄

（これまでの連載）

子どもと家族と学校と

⑭

『体調不良と不登校』

CON カウンセリングオフィス中島

中島　弘美

子どもが病気になり学校を休むと、そのことをきっかけにして、学校に行きづらくなる場合があります。大人でも病み上がりは、つらいものです。

今回は病気や体調不良で学校を欠席することと、不登校状態の欠席がテーマです。

風邪それとも不登校？

「風邪をひいて発熱が続き学校を休みました。しばらく静養して熱は下がりました。学校に行ってもいいと医師から許可がおりても、しんどいから無理だ、行きたくないと言って家にいて、結果的に長期欠席になりました。病院で改めて検査をしたのですが、特に体に悪いところはなかったのです」

このような話を聞くと、どこまでが風邪でどこからが病気でないのか、その区別がわかりにくいと感じる。

病状はすっかり回復したにもかかわらず、学校に通わないとは、いったいどうなってしまったのだろうと家族は理解できない思いでいっぱいになる。

体調が悪いから学校に行けない

これまで小学生から大学院生までの不登校状態にある子どもさんとその家族への支援を長年してきた。

すると、からだがしんどいから学校に行けなくて休むという話題がたびたび登場する。

学校に行くべきだとわかっているけれども、朝になると起きられない、お腹が痛くてトイレに入りそのまま出られなくなる。前日の夜は、わりと元気で翌日は行くつもりでいるけれど、登校すべき時間が近づくと何かと体の不調がでてきて、欠席するといったぐあいだ。

病気でないときの欠席は要注意

体調不良を訴えるものの、なんとなく、子どもの様子がおかしいなと周囲が感じ始めたころには、不登校の可能性が濃厚になっている。

何日ぐらいの欠席で不登校と考えれば良いですかと尋ねられることがある。統計上は、年間 30 日以上の欠席をした児童生徒を不登校状態としているが、明確な理由がないのに休んでいる場合は、すぐにでも支援が必要で、相談に行くことをすすめている。

不登校かどうかを明らかにするよりも、病気ではないのに学校を休まなければならないほどの状況は、緊急事態で、蓄積された「何か」があるため、すぐに対応が必要と考えるからだ。

何かが無理になる停滞状態

欠席理由は、何なのか、その正体はとてもわかりにくいものだ。あるひとつの要因というよりも、いろいろな事象が絡み合って、がんじがらめになっていると考えられる。

怠けているのか、それとも、わがままや甘えなのか？あるいは根性がない？と欠席しているのは、子どもの性格によるものと考えがちだが、まずは、今いきづまっている状態に向き合うことが大切だ。

本人や家族は、不登校と認めたくない気持ちと、それでも登校できない状況があわさると、その影響がさらにひろがり、次の事態をひきおこす。

欠席日数がかさみ、気持ちばかりがあせってしまい、とくに親の方が、頭を抱えて、何が良くなかったのかしらと、原因さがしの渦に入り、不安定になってしまうこともたびたび起こる。

なかでも体調不良の場合は、気持ちの危機感がさまざまな症状としてあらわれているかもしれないので、体調回復とともに、しんどくさせている何かに向き合う必要が求められる。

では、こんなとき、親や教員はどのように対応すればよいのだろうか。

「なんとなく休む」を回避する

今日は学校を休むと子どもが言っているあるいは、登校時間になっても行こうとしない様子なので休むことになったとしたらそのあとどう過ごすのかについて考えてみたい。

無理やりに親が引っ張って学校に登校させるようなことはしなくてよいけれど、ここからは、親の出番。

登校時間を過ぎた場合には、これからどうするのかについて、見通しを示す必要がある。

それは、体調不良への対処。つまりできるだけ病院に行き、診察を受けることだ。

欠席の意味づけ

ここでポイントとなるのは、どうして休んでいるのかの意味づけを明確にすること。つまり、体調不良で休んでいるのなら、病院にいき、診察をうけ、病気かどうかを診断してもらい、病気の場合は、医師の指示にしたがって、その日はきっちりと療養する。

診察の結果、学校を休むほどの病気ではないことがわかったとき、登校できそうならば、家で過ごさずに少しの時間で

も学校に行くなど、子どもと話し合いをして、めりはりをつけることだ。

これは、親の態度を子どもに示すことと、学校への報告は、医療機関による診断や病名を伝えるためである。

あいまいなままで、欠席を続けることだけはできるだけ、避けたいと考える。

ここで、あるエピソードをひとつ。

長期欠席の相談に来られたある家族は、医療機関に行き、診察を受けたところ実際に病気を患っていることがわかった子どもさんがあった。

それは次のような経過だった。

朝になると体がだるくて、何かをする気力もなく、しんどいといって、学校を休む。自宅ではゴロゴロとよこになって静かに午前中を過ごすが、午後は少しずつ元気になり、比較的食欲もあり、明日は大丈夫、登校できると話す、ということが繰り返された。

これだけゆっくり家で過ごしても登校できないのは、てっきり不登校だと両親は思って、まずは、親が学校の紹介で相談面接にやってきた。念のため、受診をしたところ、疾患が見つかり、すぐに入院。こんなにしんどかったのは、病気だったのだと、その結果に青ざめた。体も頑丈で大きく、うちの子どもが病気にかかっているとは想像していなかったという。

このような経験からも、病気かどうかの診断をしっかり受けておく必要がある。

欠席した日の過ごし方

では、ここで、以下のような過ごし方はしないようにという例をあげてみたい。

それは、体調不良だけれど、病院に行くほどでもないと家族が判断して家にいる状態だ。

そのような欠席が繰り返されると、朝の登校時間が過ぎれば、まるで休日のような気分になって、すっかり、自分のペースですごしてしまう可能性が考えられる。

そのような過ごし方になっているとすれば、その生活スタイルを長く続けないように改善する必要がある。

子どもの気分転換のために、親子で買い物や食事に行って、「明日は行くのよ」と念を押しても、とくに効果があるとは考えられない。

もしも、ゆったり過ごせる時間がある場合には、親はやるべきことをしてすごし、子どもも、静かに過ごす。

そして、子どもは、とりもどさなければならない勉強の時間などに充てるなど、休んでいる自覚を持つことが、新たな行動に移行するきっかになりやすい。

ただ、学校などで大きなトラブルなどがあり、充電期間を必要として休んでいる場合は、別である。

あくまでも、あいまいな状態は避けたいということであって、授業が行われている時間帯から、おやつを食べる。制限なくゲームして過ごすことは、親は許可しない、一貫した態度を示すことだ。

学校は欠席理由を把握すること

また、学校側の対応も家族に対して明

確にしておく必要がある。それは、欠席理由の把握だ。

保護者とのやりとりで、病欠だと報告されていても、きがかりな様子が感じられる場合は、家族とともに協力して子どもさんをサポートする準備はいつも整っていることを示す必要がある。

家族にプレッシャーを与える必要はないけれど、可能な限り学校はかかわっていくということを示しながら、スクールカウンセラーや専門の相談機関とのコンタクトなど、適切な紹介先を明示していくことになる。

病状は気持ちの叫びかも！

うれしいことや悲しいことなど自分の気持ちを表現できる子どもは、周りの人も理解しやすいが、体調不良を訴える子どもの傾向として思い当たるのは、なかなか言語化できないし、困った状況に陥っている自覚があまりないことだ。

体調の悪さは、本人に代わって、体が悲鳴をあげている可能性が多いので、何か問題を抱えていることはないか、最近の小さな変化や違いはないかなど、子どもを取り巻く出来事を理解するように周囲は配慮する必要がある。

改めてわが子を知る

体調を崩していた子どもが回復していく経過でよくあることは、親、教員など日ごろ子どもとかかわっている周囲の大人があらためて、子どものことを知ることだ。

こんなことを考えていたのかとか、こんなことを望んでいたのだとか、これが負担になっていたわけかと発見がある。

うちの子は、こんな子だと理解しているつもりでも、知らないことがあり、思春期などを経験すると、わが子が大変身していることもある。

親も子もしばし立ち止まり、新しい何かをスタートさせるべき機会のようだ。

突如、変更しております！

蟷螂の斧

（とうろう　の　おの）

様々なシステムと私

第一回

団　士郎　仕事場D･A･N／立命館大学大学院

このマガジン連載では基本的に、書きたいことを書きたいように書いている。Part①１９９０年の京都児童相談所の一年を振り返る連載は楽しく終えた。Part②の連載もそのつもりだった。いくつか考えた末、ＫＩＳＷＥＣ（京都国際社会福祉センター）で２５年近く継続している家族療法訓練のある一年を取り上げて、たまたま存在する逐語録（千葉晃央・記録）を整理しながら連載することに決めた。金剛出版２００２年刊「ヒトクセある心理臨床家の作り方」の続編のつもりもあった。

ちょうどこの時期に、長年のある意味で念願だった、家族の構造に関する教科書づくりが実現した。「対人援助職のための家族理解入門」中央法規出版２０１３年刊である。私はこのスタンスで飽きもせず四半世紀、家族を見つめ続けてきた。

そう思って、「さて次の仕事は対人援助学マガジンの新連載　第二回目・・」と思ったのだが、まったく気乗りがしなかった。一応仕上げた長い二回目の原稿を見ながら、パート１に続いて又、過去のことを書くのか・・・と思ってしまったのだ。

今、私達の周りには、いろんな意味で家族を巡る事件や出来事が山積みである。そこに目を向けず、過去の出来事を書いていることが面白くなくなってしまったのだ。そんな時には変更してしまえばよい。自分が気の入らないことをやることはない。義務感で書いたようなものが面白くなるはずがない。ＫＩＳＷＥＣの訓練記録は、またそのうち、違った形で手を付けたくなる時が来るかもしれない。

こういう事態は昔、「児相の心理臨床」という身内の雑誌の連載でも起こしたことがある。そして確か二度の変更後、開始した連載が結果的に「ヒトクセある心理臨床家の作り方」になった。

「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」という箴言もある。第一回で期待してくださった方があったらごめんなさいね。

◆月◆日　業者研修会

大阪で講演を引受けることが少ない。業者（今回は「田中教育研究所」田中ビネーの所だ）の研修会の一部を担うこともまずない。なのに今回引き受けたのは、「木陰の物語」をまだ知らない人に紹介できたらと思ったのだ。私が自分で届けられる範囲には限界がある。他の人のネットワークに参加させて貰うと、思いがけない遭遇もあるものだ。そこで滅多に仕事でいかない大阪城公園内の大阪 TWIN21 MID タワーに行ったわけだ。高層ビルの 20 階、いかにもビシネスって空気感たっぷりの大きな会議室に昼休みに着いたのだが、ちょうど民間資格カウンセラーの取得試験やポイントの説明を熱心にしているところだった。そこで１３０人の幼児教育関係者向けに二時

間の講演。ほぼ初対面のみなさんに、アロハシャツ姿、レジュメなし、９０分三連続講演の真ん中でというスケジュールだったのにも、二時間やりたいと言ったからかどうかは知らないが、開講１２時３５分という変則。私はいつもの調子だ。受講生の中には、自分の中の専門家のイメージとのギャップを感じた人もいただろう。でも、これこそ専門的仕事なのだよ。二時間、あっという間だったでしょう？

厳しい時代だからって、専門家の仲間に入れて貰って、仕事なら何でもやりますというのは違うのです。

今は、そんな事が分かれ目ではなく、自分は何をしているか、していないか。どこに軸足を置いて機能しようとしているかが問われている。

専門風の言葉を駆使し、世渡り上手な社交でクリア出来るなんて認識が、そもそも過去のものなのだ。

高齢者が老後のことを考えると、今の間に堅実な投資を考えておかねば・・・と思って振り込め詐欺などに引っかかる図式と同じ事が、仕事の世界でも起きている。

自分を弱小だと定義して、少しでも有利な技術の学びで未来の安心をなどと、資格商売が加速する。

でも実際は、そういう小市民的自己防衛や、資格を取って自分の未来を守ろうなんて志向性は役に立たない。そんな志が低いものが、長続きしないことは自分でも分かっているはずだ。次々変化してしまうものを追いかけても、自己信頼感はいつまで経っても届かない。残念ながら、持ち込んだ「木陰の物語」の売れ行きは低調だった。翌週、京都の教育相談研究会に８０冊持ち込んだのは完売だったから、大違いの結果になった。

この近くにあった劇場でミュージカル「アイーダ」劇団四季を見たのはもう 10 年以上前のこと。娘が入団してまだ役をもらえない頃にゲネプロ（開演直前の通しリハーサル）を関係者がみせてもらえるという。関係者扱いされるのも嬉しく出かけていった。

◆月◆日　ＫＩＳＷＥＣ　ＷＳ

京都国際社会福祉センター（ＫＩＳＷＥＣ）・家族療法ワークショップ STEP　1 と題した三日間の入門講座を、もう２５年以上も継続している。今回３１名の参加。これをメモしている今は、タッグを組んでいる早樫さんのジェノグラムの書き方の実習中。この前の時間は私が面接ＶＴＲを使って、「観察」とは何が見えるのかをワーク。

STEP1 は研修プログラムとして、かなり洗練されてきていると思う。２０年、何度も改定を加えた現在の形は、そう誰にも真似できないだろう。自画自賛だと言われても分かる人には分かる。

あちこちで実施されるワークショップやロールプレイなど、実習を伴ったプログラムを見る。参加者もじっと講義を聴いているより退屈ではないから受けも良い。しかし、その中味に関して私には疑問がある。

それは随分昔のＷＳでの経験から、今も継続する感覚だ。最初の体験は外国人講師を迎えた二日間のＷＳ。希望を募ってロールプレイをしていたが、私は退屈していた。通訳付きの、構成度の低いやりとりはダラダラしているだけだった。中央に集まったプレイヤーと事例提供者、スタッフは集中していたかも知れないが、観客ポジションに同じ緊張感はなかった。高い金を払って、人の輪の外縁部でうんざりしていた。

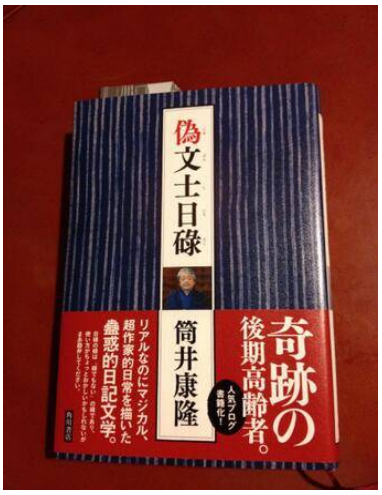
他にも、壇上で行われているロールプレイの稚拙さにあくびをかみ殺していた経験もある。多くの場合、理論・講義に比べて、実習の課題構成度が低いことが原因だと思った。その一方で、参加型のプログラムにすると単純に活性化してしまう受講者にも原因があると思っていた。だから実習を含んだプログラム構成の充実は、とりわけ関心事だった。

STEP　１　で実施中のプログラムの練られ方は中身だけではなく、使用空間の多様さや、使用機器や部屋数やホワイトボードの数からも、理解してもらえるのではないかと思う。

三日間の修了証を手に、参加者が満足のコメントを残して、それぞれの居場所に戻ってゆくのを玄関で見送る。自然に生まれた毎回の習慣だが、気持ちを素直に形にするとこうなる。年齢層も職種も様々な３１人が、異口同音によく学べたと実感を語ってくれるSTEP　１　だ。

今ここに若干の懸念があるのは、近年、公的機関に勤務する人の公費派遣の出張研修参加が増加していることだ。基本的に学びは、個人が、自分の中で金、時間、エネルギーの三本柱を負担したときに、その人の中に力として定着すると思っている。

◆月◆日　ＢＯＯＫ　筒井康隆



今楽しんでいるのはこの本。筒井康隆氏は高校（大阪府立春日丘高校）の先輩だ。そして同志社大学文学部文化学科でも先輩だ。私は心理学専攻で氏は美学専攻だったと思う。そして更に、氏が最初に就職した乃村工藝社は、中学生の時に出会って今に至るまで兄弟のような付き合いのR.A.君が定年退職まで務めていた会社だ。

だから一方的に筒井さんは格別なような気がしているのだが、実のところなんだかずっとモヤモヤしている。ちょっと引け目を感じるのは、小説があまり好みではなくそれ以外の著作の大ファンだということだろう。

◆月◆日　カウンセリング？

♪　よく働いてはいるが、仕事ばかりしていると思ったことはない。何一つさせられていることはないのでストレスもない。具体的に動けば、ささやかでも成果が届くのは喜びだ。

今朝も相談室で長い経過のある人と話しながら、彼の努力が報われ、事態が動いている事が彼を支えているなぁと思っていた。結果は人を元気にしてくれる。大きくなくても構わない。他との比較でなくて良い。自分にとって、一歩前進を実感できるように支えることが成果に繋がる。これは単純なことだが、とても大切なことだ。

♪　木曜日、午前中はある組織の相談室で諸々の相談対応。本日は継続の方と新規の方。組織の相談室なので、その枠の中の人とその家族の問題ということになるのだが、これがなかなか興味深い。担当するようになってもう十五年が過ぎた。

主観的なものだが、ここでの私の問題改善率はけっこうなものだと思う。子どもの相談、親子関係、夫婦の問題、病気・介護絡みの課題、職場関係、男女問題と、いうならば「中流小市民日本人」の相談の幕の内弁当である。

ここに効果的に働きかけることが出来ていることで私は近年、少々自信家なことを言っているような気がする。

とても大変な事態や酷い状況のケースに精一杯関わる援助職の人達をご苦労様と思う。そんな相談やそこでの出来事や事件が、世の中の話題の中心になる。あちこちの現場（職場）でも焦点はここに偏りがちだ。

しかし、例えば今日社会において、多くの市民の子育てへの関心の中心が児童虐待ということはない。高齢者が皆、ボケるわけではないし、男がみんなＤＶをするわけではない。著しい問題が、話題もエネルギーも全部持って行ってしまうような社会づくりには用心が必要だ。

警察が凶悪犯罪捜査に重点を置いて、軽微な犯罪をおざなりにした結果、社会の秩序は乱れた。犯罪の検挙率は下がり、軽微な犯罪は増加した。まだまだ諸外国に比べれば安全な社会だとは思う。しかし、ジワジワ崩れているものは、ある日堰を切ったように蔓延する。

市民社会は名探偵を求めていたのではなく、街のお巡りさんを求めている。だからＫＯＢＡＮが世界で話題になる。街の治安回復を地下鉄の落書きを消すところからというのは、ニューヨークで成功した取り組みだと聞く。同じメカニズムがあらゆるところで起きる。特殊疾患や

重篤な症状に対応する神の手ばかりをもてはやす社会は、町医者の生き甲斐を削ぐ。

しつけの行き届かない子の診察に手こずりながら尽力していた小児科医が、クレーマー両親にうんざりして看板を下ろす。我が子に小児科を継がせない。

一方、その正反対の動きしかできていないのがマスコミである。叩きやすい小市民の悪を徹底的にたたく。そのくせ、大きな不正や虚偽には向き合う気概も調査能力もない。原発報道に関する日本のマスコミを見て、世界のメディアからの日本評価は大暴落した。汚染水はだだ漏れだったのに、情報は漏れてこないなんて、東電はどこに壁を作っているのだろう。

スポンサーあっての一企業だから・・・とか、ジャーナリストも生活があるなどと戯言をいう。そして、ちいさな不正のあった小市民を叩いて、次に何か新たな事件が起こると直ぐ忘れる。大きな相手には、最初から抱き込まれていて、何も出来ないというのはどうしたことだ。

アラブの春のデモは早々に報じた新聞やＴＶが、原発反対の首相官邸前デモの報道に、随分消極的だったのには驚いた。

そして次々に、隠してあったことや、見ぬふりをしてきた汚染や失策が明らかになる被災地の現状を明らかにする事にエネルギーを向けようとはしないのはなぜだろう。

国民の７０パーセント近くが「今の生活に、まぁ満足だ」と答えたという調査。被災地ではどうだったのだろう。「あの人達のことは置くとして、私は今、それなりに満足です・・・」なんてことを言っていたら、我々に明日はない。どんなことも、他人事であるはずがない。

しかし、こんなことばかり言っていると嫌われる。

人々はほんわかしたぬるま湯が好きな時代なのだという。その湯はきっと原発からの夜間電力でまかなわれた、お得な料金で沸かしたものなのだろう。何がお得なのかは考えない。

♪　相談室の新件は、新任中間管理職女性からの相談。係員にとって、バランスの良い業務進行管理とはのノウハウを伝授する。カウンセリングではなく戦略会議である。

私の近年の相談は、ますますカウンセリングではなく、相談・作戦化している。気をつけないと細木大明神のようなことになってしまいそうだが、占ってはいないし、運命だなんて思ってもいない。でも型どおりの受容や共感などとも思っていない。

気持ちのことばかりを大切だと語る世論が、いつの頃からか形成された。感情が大切ではないわけはない。しかし、寄ってたかってそんな話ばかりしていると、どうなるかを示しているのが、今の世の中ではないか。

自分で出来るレベルにある人には、頑張って貰うのが一番である。依存的な病人ばかり大量生産して、短期的マーケットを築いても、未来に勝算はない。

◆月◆日　東京

本郷三丁目で家族心理学会の常任理事会。新幹線の車内でＤＶＤを一本観ようと思った。加えて、書きかけの原稿作業もしたかったので、わざわざ本数の少ない「こだま」を選んで乗った。「のぞみ」なら２時間チョットで着くところを４時間。

それでも余裕をみて京都を出発したのに、「都内のゲリラ豪雨で一時運転を見合わせた影響で・・・」と小田原でストップ。「定刻通り、小田原駅を通過しました。あと１０分ほどで新横浜・・・」じゃないのかよ！と心の中で突っ込んではみたものの、結果、この分では遅刻かもという事態に。なんだかなぁ. . . と思うが、もともと大した役割もしていない理事なので、まぁ良いか。　世界はおおむね私とは関わりなく動いている。

結局、ぎりぎり定刻に間に合った常任理事会は、議題が多かったため２１時３０分頃終了。

通常なら日帰りも可能な会議なのだが、翌日はノルマのない日だったので、いつも使うビジネスホテルを取っておいた。

翌朝、一日フリーな東京で、さぁどうしようかと思案。恵比寿にある写真美術館ホールで、映画「ビル カニンガム&ニューヨーク」を観ることにする。制作の喜びを満喫して生きる８４歳のファッションカメラマンを追いかけたドキュメンタリー。ＮＹのファッション界では知らない人はないが、重鎮でも何でもない。みんなが写真を撮って欲しがるが、権力とも金とも離れたところでカメラマンを満喫する生き方自由人。

カニンガム氏の縛られることの少ない時間の過ごし方に、幸せな気分になり、新たな創作のアイデアが生まれた。

その後、本館の東京都写真美術館で見たのは女性カメラマン米田知子の作品展。ある場所の写真をみせられ、そこにはどのようないわく因縁があるかという短い解説を示されると、見えるものが少し揺れるのが面白い。

◆月◆日　被災地復興応援プロジェクト

♪　終日、９月のむつ市を皮切りに、岩手、宮城、福島と四県で開催三年目になる被災地応援家族漫画展用パネルの制作。手間のかかる作業で、やっと５作品中２作品完了。８月半ばまでに仕上げなければならないから早めの準備をする。東北以外の場所（京都、埼玉でも開催）での漫画展開催の希望があればお知らせ下さい。

♪　三作目のパネル作業進行具合の関係で、キリの良いところまでやりたくなり仕事場泊。今週２泊目だ。そんなに仕事ばっかりしてどうするのと言われそうだが、出来上がっていくのが嬉しいばかりという幸せ。

午前３時１５分、第三作がとりあえず上がった。プリントアウトすると早速間違いが見つかったが、これは全作品完了後の修正だ。全作業の半分が過ぎて、まだ時間はたっぷりある。明日もこれにかかり切れる。今日はもう寝て、明日の昼前から第４作に取りかかるかな？それとも、気分転換に文章仕事をするかな?

♪　また、昨日から泊まり込んで一日仕事場に籠もっていた。パネル漫画展の準備を九割方仕上げる。業者さんにデータを渡してＢ全版パネルにしてもらうまでには、まだしばらくある。これから細々手を入れていく。三回目ともなると、定例の作業、スケジュールの感じがする。

３年目になるのだから漫画展に関しては、もう少し事前告知活動に力も入れようと思っている。たくさん来ていただく必要は無いのだが、開催していることを知らなくて来られない人があるのはつまらない。

まずは８月３０日金曜日午後から９月９日までむつ市図書館にギャラリーにて（これは、マガジン発行日には終了している）。つづいて、１０月１日から１０月２７日までの約一ヶ月、宮城県多賀城市立図書館で長期展示。

その後も、１１月第一週は岩手県宮古市（予定）で、１２月の第一週は福島県（福島市。11 月中旬には二本松市でも）で、漫画展＆プロジェクトプログラムを開催する。都合のつく巡り合わせがあったらおいで下さい。（写真は２０１１年第一回むつ市図書館ギャラリー。中村正、村本邦子と）

同時に会場で、小冊子「木陰の物語　第三集　―side by　side―」も配布する。

こんなことが何になるのかなどと短絡的なことは問わない。復興とは何か、支援とは何かなど、簡単に答えは出ないし、出たところでそんな言葉はきっと不十分だ。

あの大きな被災と、そこから続く現在のような全体を網羅できない事態に向き合うには、今、出来ることを、それぞれが継続して担うことだろう。

◆月◆日　マンガ集団「ぼむ」

この店でこのようなものを食べながら、月例の漫画集団「ぼむ」の集まり。４０年以上も、それぞれが無事元気で活動しているのだから、先ずは良いだろう。もう少しクリエイティブなプランが出てきてもいい気もするが、仲間の年齢を考えるといつまでも先頭を走りたがるのもなぁとも思う。

メンバーの篠原ユキオは８月末に東京で三度目の個展。今、大きなキャンバスに一コママンガを描いているらしい。観に行くのが楽しみだ。

私は彼のような絵描きではないので、そういう作業はできない。我々のグループにはそういう作画のできる人が三人いる。カワキタカズヒロ、柳たかお、そして篠原。この三人は読売国際マンガ大賞のグランプリ受賞者である。世界中から１万５０００点くらいの応募がある大規模な賞で、賞金もグランプリは２００万円。三人はやはり絵描きとして実力者だ。

◆月◆日　Ｃｉｎｅｍａ　アメリカ映画

「ペーパーボーイ」は曲者の映画だ。「プレシャス」の監督の次回作。こういうのを観ると、自分の中にあるアメリカの歴史記憶が蘇る。日本が今のようじゃなかったように、アメリカも今みたいじゃなかった。

米国が抱えていた問題は、貧富の差だけではなく、様々な人間の生活の匂いがしていた。１９７０年代を描いた暑苦しい、湿気の高いアメリカ映画、好きだな。

パニックと自分の家族だけを助けようとするヒューマニズムがセットになった泣けパニ（泣けるパニック映画）の対極にあるような作品だ。

◆月◆日　日常

♪　朝から雑誌連載の「木陰の物語」新作下書き完了。午後からは大学院の「家族療法・家族面接技法」の授業。その後、桃山ＫＩＳＷＥＣに出向いて家族療法入門講座を３時間弱。

予定通り、スムーズにこなして終了後、Ｃ君と時々行くめし屋・伏見食堂で遅い夕飯を食べながらいろいろ話す。ここのおばちゃんは、「２２時過ぎると、おかずは全品半額になるから、ちょっと待っとき！」と以前教えてくれた。その時、２１時５５分くらいだったのだ。

食べながら新刊「家族理解入門」の感想を聞かせてもらう。なかなか楽しい。

♪　少しゆっくりしていたせいで、ぼんやりとスタバで原稿をいじっていた。だが「ぼつぼつ何かの締切かなぁ･･･」と思ったりしていたのは、完全にボケていたわけではないということ。でも、８月にも同じようなことがあったから、やはり少し惚けてきているかも。

今日中に発送しなければならない原稿が複数あった。夜は大学なので夕刻までに、途中まで書いて置いてあった各原稿を、納得のいくよう仕上げて三件、必要なイラストも二枚仕上げて送信しなければならなかった。そんなわけで、急に活気が出てしまった。あーぁ。

♪　大学院の前期プログラムが今日で終了。後期から始まるＭ１クラス生の顔見世もあった。後期から４人の教員で１０名の院生を１年半、指導することになる。社会人が４人含まれているのは良いが、全員女性は家族クラスター開始以来、初めてのことだ。皆、興味関心も多岐にわたっていて、今後の展開が楽しみだ。

◆月◆日　Ｃｉｎｅｍａ　宮崎アニメ

久しぶりに公開初日の映画館で、「風立ちぬ」を観た。宮崎駿さんが思い入れのある物と人の人生を、走馬燈のような物語に仕上げた大人のための作品。

主題の一つに結核が登場するので、我が身の経験から思い出す記憶があって、いろいろ考えてしまった。

この作品、世間は賛否両論だそうだが、私にはいい映画だった。批判の中に、今の感覚であの当時のあり方を責めている人がいる。そういう人はおそらく、将来又、その時の感覚で、今を責めるのだろう。

私はそういううつろいやすい正義感のようなものを信用しない。長続きするものしか信じないのは、自分に確信があるからではない。時代に左右されるところを自分も持っていると思うから、声高に今を叫ばない。今など、明日の過去に過ぎない。

しかしだからといって、現在に無関心な人のあり方も支持しない。否応なく形成されている今の意味を吟味することなしには、過去も未来も語れない。

時代は同じ所を回っているのではないはずなのに、今また日本社会は、過去にもあった空気を醸し出している。選挙で選んでしまった者たちの愚かしい行いに、選んだ側が引きずり込まれてゆく。

意見の違いや、見解の相違を「ねじれ」等という別の言葉に置き換えてイメージ選挙戦略を立てたあざとさで、まんまと結果を手に入れて、それを恥じることのない政治家が、まともな大人であるはずがない。

経済のことばかかりロ走る政治家は、「要するに、金だ！」と言っている事になるのを、平気なのはなぜだろう。そんな言い草が下品である認識は、日本社会の大人の良識として身につけてきたはずなのに。

◆月◆日ＢＯＯＫ　ｼﾞｬｰﾅﾘｽﾃｨｯｸ

Facebook でどなたかが、お勧めになっていたのをみてａｍａｚｏｎで夜に注文。翌日には届く魔法のようなシステムの気持ち悪さは、又別の話題だが、この本の中で触れられる日本社会の鬱病の蔓延とは無関係じゃない。

読み始めたらとにかく面白い、面白い。第四章の「メガマーケット化する、日本のうつ病」から読み始めたのだが、久々に膝を鬱、いや打つ、うつ。

要するに抗うつ薬パキシルの販売戦略と医療者のコラボレーション。だからこれを、米国製薬メーカーの日本進出戦略だと思えば、大成功した事例である。

数年前まで、ほとんど業績というようなもののなかった国で、爆発的成功を収めたビジネス物語。だから、ビジネス書の所に置かれていたらいいのだろう。筆者が書いているのはそういうことだ。

この本で取り上げられているのは四つの国の別々の精神疾患。それぞれ違った精神風土の下の疾患を、ＤＳＭ標準にラベリングして、治療目標もアメリカ標準化して治療理論や薬を販売する。

抗うつ剤の効能に関する疑義を医療ジャーナリストに批判されたことをうけて、米国精神医学会会長ナダ・ストットランドは、「現実には誰もがやっている活動に対して、医者だけが堕落しているとみなすのは不公平だ」と語ったという。

この意見の正直さは、面白すぎて笑えない。臆面もなくこんな事が言えるメカニズムが、あらゆる事の経済化であり、グローバリゼーションなのだろう。

◆月◆日　禍害ということ

対人援助学マガジン連載中の中村周平君のことが、今日の朝日新聞で大きく取り上げられている。学校スポーツ事故の再発防止に関して、「過失責任を問う流れでは、被害者は救済されないし、再発防止への道筋作りとしても弱い」という話。ぜひ、無料 web マガジンの連載をご覧あれ。

この問題は今、同根である柔道における学校スポーツ事故問題として注目を浴びている。柔道界は最近、ごたごたが続いているが、この問題とも無関係ではない。

学校スポーツの中で、柔道とラグビーが飛び抜けて重大事故が多い。これはネット統計などみれば直ぐ分かる。加えて、諸外国の同競技の学校スポーツ事故件数と比べると、日本がやたら多い。この事実にはもっと誠実に向き合わないと何も変わらない。

周平君はラガーマンだが、そのたどり着いた姿勢が凄いのは、彼は被害当事者として学校や関係者の過失を問うという従来型の裁判モードから脱却しようとしてきたことだ。

誰かに重大な過失があったから、重大な事故が起きたという文脈では、不可抗力に近いかたちでも起こりうる学校スポーツ事故は語れない。誰かに悪意や重過失があったから起きたという発想は、そうでなければ事故は起きなかったという根拠のない結論に導く。

そして当然、状況そのものへの改善の議論にはならず、過失責任者を指弾して幕引きし、問題点には着手されない。

◆月◆日　大学院

♪　Ｍ２修論の第一段階の詰めが迫っている。それなりのものにするなら、この時期の絞り込みが的を射ていなければならない。たった一つの言葉との遭遇。それに出会えると、自分の中の問題意識や疑問、好奇心などがググっと釣り上げられてくる。そんなフックになるキーワード探しに、今日も一時間半付き合う。

問題を見つける面白さは尽きない。いろんなジャンルから入学してくる応用人間科学研究科・対人援助領域。中でも我が「家族機能・社会臨床クラスター」は、世の中に対する疑問と好奇心の巣窟である。

♪　Ｍ２には最後のポスターセッション。５つに分かれたクラスターごとに、３０分ずつの発表が入れ替わりで３時間続く。ここまでくると問題意識もそこそこ面白くてなってきていて、期待の持てるものも多い。しかい一方、まだまだ緻密化しない総論もあって、早く身の程を知らないとと心配もする。

♪　立命館大学院応用人間科学研究科の十周年記念に刊行した二冊。家族クラスターを卒業した院生たちが沢山、それぞれ活躍している分野のテーマで書いていて嬉しい。２冊合わせて５５０ページの大部。機会があれば、部分的にでもご覧いただけると有り難い。

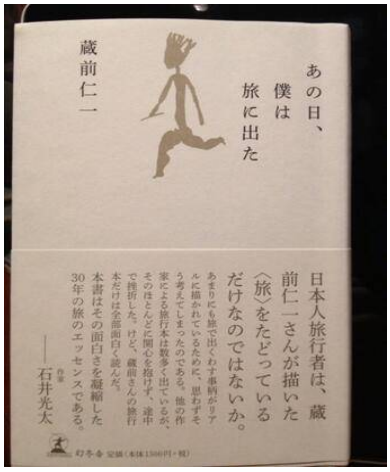
私は、十年以上継続している地域でのワークショップが、どのような根拠で形成され、その継続が何をもたらしたかを「融合と連携」という言葉で整理して書いている。

「地域ネットワークの形成」というありきたりな話題が、真に形成定着するために、何が自覚されていなければならないかを書いたつもりだ。

◆月◆日　旅行人

発売を心待ちにしていた本を見つけた。蔵前仁一さんは「旅行人」という雑誌を長い間出していた人だ。

その愛読者の集まりが京都であった時に出掛けて、お目にかかったことがある。二十年以上も前のことだったか。旅好きな私には、とても近しい感じのする著者だ。旅することとそれを語る事は楽しい。



私の中にあるもので、比較的露出の少ないのが、旅の体験談だ。仕事で文章化はしたことがない。息子達との「父子旅」はマンガにした事があるが、妻との旅の失敗談は書いたことがない。そのｙり、どこかに書いてみるかな。

◆月◆日　自由時間

木曜１４時。今週のノルマが終了して、週末の出張ＷＳの入っていない今週は、日曜深夜までフリーだ。何をしようか、何もしないでいようかと考える贅沢。とにかくいい自由時間。

まずこの映画「偽りなき者」をみる。緊密な地域ネットワークというか、閉鎖社会と言うか。同じ事でも言い方によってずいぶん違う。これがある事件を通じてコロコロ入れ替わる怖さを描いた映画。

嘘とか本当とか、加害とか被害とかに、当事者だけではなく周りも揺れる。主人公はその場に留まって和解。しかしそこに沈殿したものは、これからどんな意味を滲ませていくのだろうか。

パンフレットの隣の果物皿は、入ったことのなかったショッピングビルの地下にあるフルーツパーラー。女性客が圧倒的な店は、ちょっと気恥ずかしい。だからこそ、ジュースやコーヒーではなく、本日のフルーツ盛り合わせを注文。食べ始めてから気づいて慌てて写メ。マンゴー、オレンジ、バナナ、パイナップル、スイカ、ブルーベリー、キウイ、バニラアイスクリームで 900 円。いろどりは似ていたけど美味しかった。

◆月◆日　ＢＯＯＫ　季刊雑誌

季刊「マグナカルタ」の第３号。どれくらい売れているか知らないが、まだ継続発行されている。おっさん向けの読み物かもしれないが、第３号なかなか読みどころが多い。

新連載のサントリー佐治敬三（故人）社長の物語。鳥井一族の子でありながら佐治姓を名乗り、サントリー躍進の名物社長になった人の家族の物語が興味深い。

この雑誌の編集長は島地勝彦。開高健との交友でしられ、何冊も本の出ている業界有名人。企画も面白く、対人援助学マガジン連載企画の参考にもさせてもらおうかと思ったりした。（インスピレーションだけですけどね）

面白いと思える雑誌が少なくなった。かつて愛読していた雑誌はほぼ皆、休刊になった。雑誌は時代の生き物なのだろう。

だから思うのだが、「対人援助学マガジン」などという季刊雑誌を三年も続けていられるのは幸せだ。

私は趣味でこれまでミニコミはいくつも出してきたし、マンガの同人誌も長々発行してきた。新聞のコラム連載や雑誌連載、出版社から本もマンガで１０冊、家族心理臨床系で１０冊あまり出せた。それぞれ楽しく、嬉しい経験だった。

そして今、かなり勝手な編集長として季刊誌を出し続けている。世の中とインフラがこんなことを可能な状況を形成してくれていればこその快挙だと思っている。

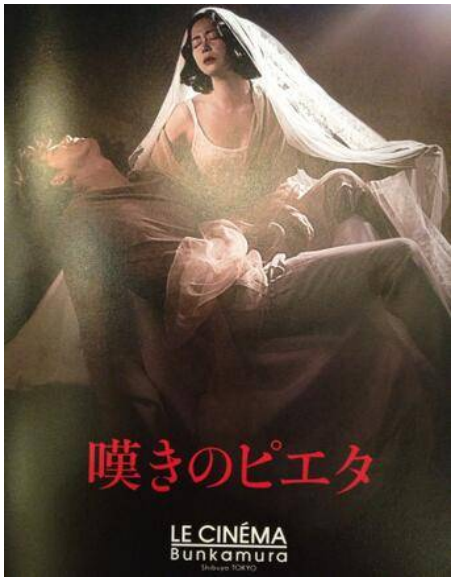
カラーの頁、自由な構成。頁数にこだわらない掲載。一人作業ならＨＰかブログになったのだろうけど、それよりもマガジンが魅力だ。

◆月◆日　Ｃｉｎｅｍａ　京都シネマ

是非ともこれはと思っていたので、時間を作って京都シネマでこれを観た。母の愛を知らない男が愛に目覚め、それを失う物語。知らなかった時よりも幸せだったろうと思わせてくれるが、残酷な結末。

おそらく皆、観たものが異なるのではないかと思われる物語の顛末だった。

予め失われた世界で生きてきた者は、己の喪失を知らない。誰かがそれを失うことに、どれほどの苦痛を味わうかも想像できない。ただし、それが不幸かどうかは、簡単には言えない。知らない方が良いという事態は少なくないように思う。



しかし知らない者は永遠に、知った上でそれを乗り越える苦しみと、その試練から得る人生の価値の両方を知らないままだ。

この映画のことは、家族療法学会誌に連載中の「映画の中の家族・連想映画館」で次回、書くことになると思う。

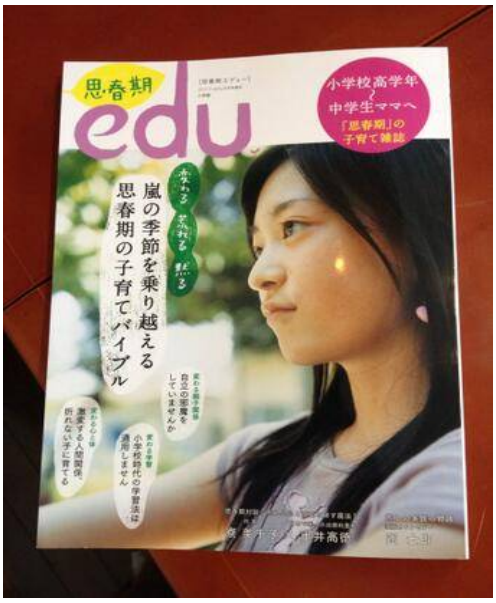
◆月◆日　連載

♪　午後からペン入れを始めた「木陰の物語」新作が完成。絵を描くだけではなく、完成までに手間のかかるパソコン仕事もあるのだが、出来上がると嬉しい。

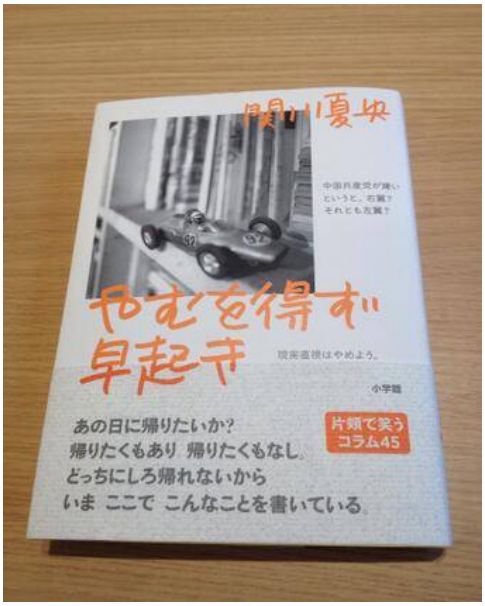
毎月一作、１４年も続けている事がもたらしてくれる幸福感がある。作品を連載し続けることで「漫画家である」と自認できるのはいい気分だ。

♪　三日間留守にしたので、仕事場Ｄ・Ａ・Ｎのポストは一杯。その１つがこれだった。連載誌とは別の増刊号。既にあるものを編集して１冊にと聞いていた。

新たにレイアウトされた木陰の物語「三千里」を読んでウルッときてしまった。過去に自分の描いたものを読んで、いったいなんだそれはと思う。物語の働きは不思議だ。



♪　そもそも、「家族の練習問題」という私の本のタイトルの由来はこの本の著者にある。関川夏央著「ソウルの練習問題」はとてもいい本だった。そのことがずっとアタマにあって、木陰の物語を本にするとき、タイトルを求められて出てきたのが「家族の練習問題」。まもなく第５巻が出るが、こんなに続けられるとは思わなかった。



長男（遊）が発行人として仕切ってくれているから続刊出来るのだが、コンスタントに細く長く売れる商品になっている。第一巻が今でも売れてくれる。２００５年末に発行したのだから八年も前だ。

関川さんは「週刊現代」に毎週、こんなことを書いておられるのかとちょっと驚く。とにかくコラムが濃い。

◆月◆日　BOOK　堤　未果

書いてあることはおそらくこのような事であろうと読む前に分かっていた。岩波新書の大ベストセラー「ルポ貧困大国アメリカ」の続刊三冊目である。著者は放送ジャーナリストばばこういちさんのお嬢さんで、ＨＩＶ訴訟団原告で参議院議員の川田龍平氏の妻だ。

で、読むとやっぱり面白い。アメリカさん、もう少しちゃんとやろうよなんて思う。米国に暮らす人たちの圧倒的多数は、少し賢明さの足りない弱い庶民（ごめん。チャンスの平等、そしてアメリカンドリームなんて絵空事に、丸め込まれているからね）。

一握りの悪賢者に何もかも、もっていかれている。民主主義と資本主義の名の下に、結果自己責任の競争原理をたたき込まれて、負けたら仕方がないと思わされている。ルールがフェアじゃない。ローンの払えなくなった一戸建ての家から、車一台に家族乗り合わせて放り出される父親に、イラクに行けば美味しい仕事があるよと誘いかける金持ちがやっているのが自由競争なものか。

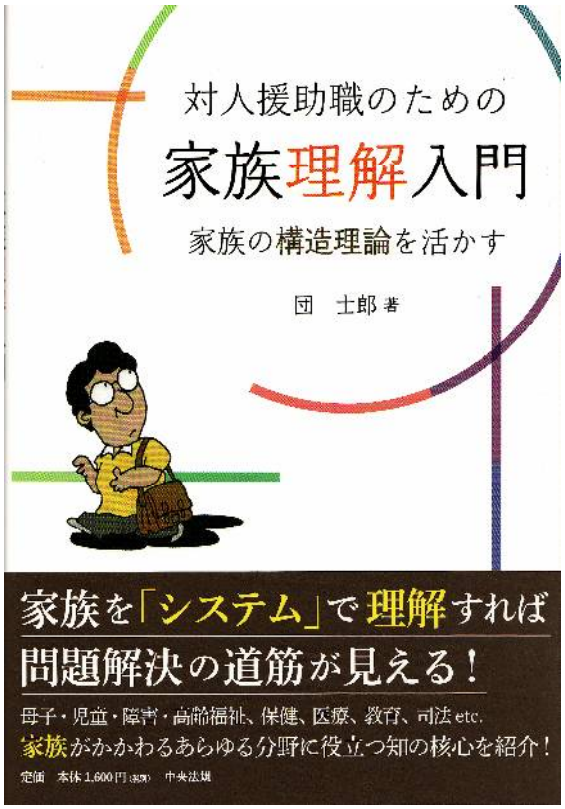
この本では、アメリカの農業を支えてきた中小経営者を、食品製造過程の安全管理強化と称して沢山の書類手

続きで追い込んで、土地を手放させてしまうやり口が書かれていた。

アメリカンフットボールじゃないんだから、勝ちか負けかしかないなんて事はない。悔しいだろうなぁ、普通のアメリカ人、もっと怒ったら！と思った。

◆月◆日　家族療法学会＆・・・

三日間、家族療法学会で東京、船堀。学会三十年の総括シンポを聞いていると、いろいろ思いだすことがあって楽しい。しかし新しいことを学んでいるという感覚の楽しさはもうない。長くやってきた末の合点に会う旅のような気分だ。会場で広島の岡田隆介さんとダベっていると楽しい。それにしても、なんだかあちこちから、いろいろよくしてもらって感謝だ。



新刊書「家族理解入門」中央法規出版も、学会場で用意された 40 冊完売だったときいた。ありがとう。

引き受けていた事例検討は、提出者のＹ君が楽しんでくれていたようなので、それで十分。司会の先生にはほとんど活躍の場がないようなことで、申し訳なかったが。

ＷＳも会場一杯の参加者の中には、経験豊富な方達も沢山いらしたのに、楽しんでいただけているようだった。

引き受け過ぎ感はあったが、こういう結果だといいかなと思う。この気分が継続していたのか、来年 2014 年の神戸での家族療法学会のワークショップも、大会長の植村さんの依頼で、引き受けた。「ジェノグラム面接法」を又やることになる。工夫を加えておこう。

そうだ、来年は京都教育大で開催の家族心理学会でもワークショップを引き受けることになるような流れだ。来年も暇にはならないなぁ。

＊＊

最後に、新刊書について、今私の思っていることを述べておく。

この本に関して私はとても満足している。編集者の手を通して完成した一冊の本として気に入っている。そして同時に、初めてなのだが不安もいっぱい持つことになった。

理由は、これは専門書のジャンルに入れざるを得ないし、同時に読む人にとっては手引き書のカテゴリーにも入ると思うからだ。

ここでは、「私は家族とはこのようなものだと思う」と宣言している。しかしそれは当然、私の考える家族にすぎない。それを誰か他の専門家の理論や概念で補強していない。構造派のミニューチン氏が、「私が言っているのは、そんな意味ではない」というかもしれない。

それくらい、私の届く範囲の今日の日本の家族を考えた。きっと役に立つと思うが、正しいかどうかは疑問な所があるに違いない。

そんなことを考えているので、出版した後も、ちっとも終了しない。度々手にとって、ランダムに拾い読みして、「うん、やっぱりそうだよね！」と独りごちている。

2013/08/25

学校臨床の新展開

― ⑭夏休み ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

夏休みに入ったある熱い暑い日の朝、京都駅前に大勢の小学生たちが集まっていました。前に立つ大人が、「そしたらみんな、お父さんやお母さんになんて言うんだっかな？」と問うています。すると、みんなが「行ってきまーす」と声をそろえて応えています。どこかの子ども会か何かと思いきや、大人たちのTシャツの後ろには大手の塾の文字が。夏といえば夏期講習。いや、しかし、みんなはどこか楽しそう。そうです、最近の塾は勉強だけではなく、こういう自然体験合宿などもやるとは聞いていましたが、あまりにも大勢の子どもたちにびっくり。帰宅後、大手塾のホームページを見てみますと、こんなことが。

「一流の大学を卒業したからといって、社会で活躍できることにはならない。ただ進学すれば良い、もう、そんな時代ではなくなっているのです。」

そうそう、親が一番身に染みてわかっているでしょうと思いながら、ホームページを見てみますと、子どもたちに向けてさまざまな仕事を紹介したキャリア教育のページや保護者向けのペアレンティングまであります。さらに、安全対策もバッチリ対応していることを強調し、「お客様相談室」まで設けてフリーダイヤルで対応されています。少子化のなかで生き残りをかけた戦いだけに、各塾ともいっそう教育理念が問わ

れ、サービスの価値が問われるのでしょうか。最近では、勉強だけではなく学童保育的な機能を持たせた塾も出ています。親のニーズに合わせたり、企業が先読みした親ニーズがあらたな親のニーズを生んだりしています。いま教育産業は、このように子どもに関するあらゆるサービスをパッケージにして販売するわけですが、これらのサービスはどの子もすべて享受できるわけではありません。貧しい生活のなかで、親が子どもを塾に行かすことが難しい家庭の子どもたちは、さらに、さまざまな機会を失うのではないかと思います。

夏休み、テレビでは次年度の新入学生用のランドセルの CM が流れています。昔のように赤と白というだけではなく、色もバリエーションが増えているようです。早いなと思っていると、知人が、もう大分前からやっていますよと。CM や販売は年々、早くなって今ではゴールデンウィーク明けくらいからやっているようです。私にはランドセルを見ると思い出すことがあります。児童養護施設に勤めていたときの S ちゃん（新１年生）のことです。S ちゃんには、親がいますがランドセルを買ってあげることができませんでした。S ちゃんにとっては、つらい現実でした。そのため、施設が量販店から寄贈を受けたランドセルを職員から受け取り使っていました。（なお、東日本大震災が起きる前まで、日本中でいわゆるタイガーマスク現象が起きていたというのは記憶に新しいかと思いますが、それ以前から、施設へのランドセル寄贈は行われていました。）

そんな S ちゃんが、集団登校の列の中で、前にいた同じ新小１年生の近隣の友達のランドセルを傷つけたというのです。帰ってきた S ちゃんに「どうしたのかな」と聞くと大きな瞳に大粒の涙をためて、いつまでもいつまでも泣いていました。S ちゃんの友達のランドセルは大きな傷がついてしまったため、私は同等品を求めて購入し、S ちゃんと一緒に先方宅を訪れ、謝罪と弁償をしました。帰路、S ちゃんは泣きながら、お母さんにランドセルを買ってほしかったこと少しずつ訴えました。友達のランドセルはブランドのランドセル。S ちゃんのは、量販店の安価なランドセル。見た目にも歴然。でもそのことよりも、ランドセルを買ってあげたくても買ってあげられなかったお母さんの気持ちや、ランドセルを買ってほしくても買ってもらえなかった子どもの思いを大切に取扱わなかったことで、S ちゃんがほかの子どものランドセルを傷つけてしまったのだと思わないではいられませんでした。

夏休み、親子で楽しく過ごすことができる人々の傍らで、多くの児童養護施設では年々、家庭への一時帰省がかなわない子どもたちが増えているといわれています。S ちゃんもまた家庭への帰省がなかなか実現できずに、夏休みを施設で過ごすことが多かったのです。

さて、この夏休み、京都の花火大会で痛ましい事故がおきました。犠牲となられた

方々のなかに 10 歳の子どももいます。ご家族や、関係者そして何よりもご本人の思いを考えると胸が痛くなります。

「夏休み」、「花火」というと私には忘れることのできない記憶があります。何年生だったでしょうか、小学校低学年のある夏の夜、花火大会の花火を見に行こうと母とふたりで出かけた際、家の近くのクリーニング店から猛烈な炎があがっていました。私と母は火災の第一発見者だったのです。近隣に消防車を呼んでもらうよう知らせましたが、なかなか消防車がこないなか、火のむこうから「助けてー」「あつい」と泣き叫ぶ声が聞こえました。どうすることもできなかった思い、どれだけ熱かったんだろうと思うと、とてもつらかったのです。この体験が対人援助専門職の端くれであるいまの私の源のひとつかもしれません。

今回は、「夏休み」というテーマで思いつくままに書いてみました。

「学校の先生は夏休みがあってよろしいなー」という人は今でもいるかもしれませんが、私がスクールソーシャルワーカーとしてかかわる中学校の先生方は全く休みがない夏休みを過ごしておられます。補習、クラブ活動、生徒指導、研修…。授業がなくても心が休まらない日々です。この国の教師たちは、働きすぎではないでしょうか。先生方の傍らにいてそう感じない日はありません。

学びの森の住人たち
(9)

ー学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるものー

アウラ学びの森　北村真也

8-2. コトバが生まれる時

1. メイクの中の私

アウラの森へは、電車とバスを乗り継ぎ１時間以上かけてやってくる子どもたちも珍しくありません。現在高校１年生になるカオリもそんな遠方から通っている不登校の女子でした。

カオリが生まれ育ったのは、山間部のとある集落でした。幼稚園、小学校、中学校、そして高校と、彼らの多くは同じ学校へと通っていきます。地域には、コンビニが２軒と小さなスーパーが１軒。集落内を歩けば、自ずと顔見知りの誰かに会うといったそんな生活環境の中にカオリは育ったのです。そこは、小さな社会ですから、みんなと仲良くやれている間はいいのですが、いったんその人間関係が崩れだすと、途端に人間関係が苦しくなってしまいます。苦しくなっても、そこに逃げ場がなくなってしまう。そんな環境が彼女を苦しめていたわけです。

「カオリが、初めてアウラにやって来たのはいつだったっけ？中３の夏だったかな？」
「夏。７月くらいから」
「じゃあ、いつから学校へ行ってなかったの？」
「中学２年。というかもう中１の終りかな？中２なる前くらいとか、そんな感じ」
「それは、どうして行かなかったの？」
「最初に学校休んだのは、朝起きる時にものすごい頭が痛くなって、それで、ほんとうに割れるように、こめかみが痛くなって、“痛い”って言ったら、お母さんに“じゃあもう今日は休んでおき”って言われて…その日から全部ダーって崩れていって…」

「それ、もう１年の終りくらいやな？」
「１年の終りくらいに。それからもう全部がなんか、いやになって…うん」
「ああ、そうなんや」
「行かないようになった」
「そしたら、まあ最初はただ頭痛くなってということがあって…、なんかこう些細なきっかけだったわけ？」
「うん…、でもその前から学校以外はあまり家を出なかったりしていて…いつもだったら私は活発だから、休みの日とかでも“どっか行こう、どっか行こう”とか、お母さんらに言ってどこかに連れてってもらってたんやけど、でもそれがもう１年生の終りくらいからお母さんらに“どっか行こうか”って言われても“行きたくない”って言うようになって…」
「どうしてなの、それは？そのあたりの話は知らないわ。どうして急にそんな風になったわけ？もともと活発やった？」
「もともと、めっちゃ活発やった！身体動かすことがめっちゃ好きやったし、外出たり、買い物はしなくてもウィンドウショッピングっていうか…お父さんがそういうの好きやから、そんなことにもちょこちょこ連れてってもらったりっていうのが、楽しかったんやけど、でもそれさえも何かどうでもよくなって…」
「どうしてなの、それは？」
「うーん…何やろう？何か全部に無気力になって。自分が好きやったネイルのこととか…、休みの日とかは爪塗って遊んだりっていうことを毎週のようにしてたんやけど、でもそれも全くしなくなって。それで髪の毛のケアとかも…」
「それ１年の時やろ？」
「１年の終り」
「うんうん」
「それも全部しいひんようになって…」

大変活発だった女の子が急に無気力になっていく、その理由もただ頭痛がするというだけで、最初はよくわからない。わからないのに無気力になっている自分を見て、もっと無気力になってしまう。これは不登校の子どもたちに共通して起こりうる状況だと思います。

「とういうことは、もともとおしゃれやったんだ。そういう意味では、わりとおませさんだったわけや」
「そう」
「だって中学１年の女の子ってそんなことに関心のある子と、そんなこと全然なんも思ってへん子とかって結構いっぱいいるんじゃない？」
「うん、いるいる。で、私らの場合やっぱり人数が少ないから…、その中で私はずっとそんなことが好きやったから…、だから私は早かったんや。メイクとかネイルとか全部早くて…」
「どうしてそれ早かったの？何かきっかけがあったん？それはおばちゃんの影響なの？」
「やっぱりテレビの影響なんかな？」
「ふんふん」
「私が好きな倖田來未っているやんか。

小学校の３年くらいからずっと倖田來未が好きで、その倖田來未のネイルショーで爪がゴテゴテにやっているのがかっこよくて、それを見ていてかっこいいなって思って…」
「小学校３年の時に？」
「そうそう」
「へえ、なるほど」
「それで、最初ネイリストになりたいって思って…。まだ小学生やからそんなたいそうなメイク道具は買えなかったけど、おもちゃ屋さんで売っているような本当に子どもだましの 3000 円のキットみたいなのを誕生日に買ってもらって、一人で遊んで…」
「なるほど…、そんな女の子がそのまま中１になって…、周りの子らはそんなことにあんまり関心なかったの？中学１年の時…」
「中学１年の時は…関心はあったけど、みんな実践しようとはしなかった…」
「持ってなかったわけ、お化粧道具を？」
「そう。やっぱり中学１年生やったらお金も限られてくるし、買えるものだって少なくなってくるし…で、メイクのやり方だって、最初はみんなわからない状態やって…」
「カオリは、その時にはいろいろ持ってたわけ？」
「そんなに持ってなかったけど、でもお母さんの妹から化粧品もらったりして自分でやっていたり。それとか雑誌見て“こんなことしたら目大きくなるんや”とかを暇があったら読んでいたりとか…」
「なるほどな。そんな状況と１年の終りくらいになんか急に無気力になってきたみたいなことは何か関係があるの？」
「どうなんやろ…でもそれは多分関係ないと思う。でもやっぱり結局は学校行きたくないっていうのが頭痛いっていうことに…」
「それはやっぱり友達関係なの？」
「うーん…」
「あるいはその人間関係があまりに変化がないのがやっぱりいやとか、そんなことなの？」
「それは…どうなんやろう」
「こんな話も聞いたことあるなあ。カオリがお兄ちゃんの同級生たちと、もともと仲がよくて…。カオリが中１のときは、お兄ちゃんは中３にいてたんでしょ？」
「中３にいてた」
「で、そこはみんな結構仲良かったんだけど、それが２年になったら当然その同級生たちは卒業して学校を出てしまう。そのことは大きかったの？」
「ものすごく大きかったかもしれない」
「へえ。どういうこと、それって？」
「それは、同じ学年の子とかは、友達同士で“ものすごく仲のいい”というようなことを言っていて裏では“何なのあの人”みたいな感じの会話をしているのを見ていたから…」
「そんなのが嫌やったの」
「それが嫌で、“そんなのが嫌なんやったら最初からいやってその人に言えばいいやん”って思うんだけど…」

「でも狭い人間関係やからなあ」
「そうそう」
「“ああいうところ、嫌いなんやけど”って言うことがあるんだったら、その人に直接言ってあげればって思うのが私だったの。私は、そういう嫌なことがあったらもうその人にズバっと言うタイプやったから、基本的にそんな陰口をいうことはなかったんやんか。私自体がサバサバしているから。私は“嫌いや”と思った人には関わらないし、そんな上辺だけの人間関係は必要ないと思っている。でもまあ一応は仲良く見せなあかんけど…。それで、１年生の中でのそういうストレスを３年生にぶつけていたの」
「ああ、なるほどなるほど。聞いてもらっていたわけや。それ男子？それとも女子？」
「男子も女子もいる。でもやっぱり男子の方が多かった」
「それを分かってくれていたわけ、彼らは？」
「そう。その男子の３年生の友達とかやったら“だるいなあ”っていうのを聞いてくれていたし、クラブの中の女子の先輩らやったら“同い年の学年といるのが嫌なんやったら、私らと一緒におればいいよ、面倒見てあげるからおいで”って言ってくれていたし…」
「なるほど」
「やっぱり年上やから、私が失礼なことしても目をつぶってくれるところがあって。ちゃんと注意することはしてくれるし、私の悪いところを気付かされる時もあるし。だから１年生の中でたまっていたストレスっていうのを３年生に言ってたんやけど、でも３年生が卒業しちゃって私が２年生にあがっていった時にはけ口がなくなって…」
「わかるわかる」
「誰に話したら、よかったのかな、みたいな」
「その時って、自分の本心を言ってもちゃんと受け止めてくれる、みたいな存在やったわけやろ、その３年生が…」
「そう」
「で、それがいなくなったわけやんか。だからカオリとしては辛いわけや、それが…。その時、カオリの家族っていうのはその代わりにはならなかった？」
「なんか…３年生がいいひんようになったことで、私は全部シャットアウトしちゃったんや」
「そのことで？」
「うん」
「よっぽどショックやったわけや、それが」
「ショックって言うか、なんて言うか…そりゃ３年生が卒業することは当たり前やし、その通りなんだけど、でもお母さんらに話すとかいうことが全くなかった。お母さんに話聞いてほしいって思うこともなかったし…。それでもうずっと一人部屋に閉じこもってずっと音楽聞いてっていう生活が、そこから始まった」

幼い頃からメイクに関心を持っていたカオリは、同級生たちとの間でも目立つ存在だったのかもしれません。いや、学校全体、

あるいは地域の中でも目立った存在だったのかもしれません。そんな彼女は、同級生たちとの人間関係で躓きます。そしてそのストレスを彼女は自分の２年上の兄の同級生たちにぶつけ、受け入れられていきます。でも、その先輩たちとの関係が、ますます同級生たちとの関係を悪くする方向に働き、２年生になった時、先輩たちの卒業と同時に、彼女は学校に完全に自分の居場所を失っていったのです。

「それで、アウラに来て、最初は地元の町が嫌やと。あの学校も嫌だし。風景も嫌だし、近所も嫌だし、何もかもが嫌だみたいなことを言っていた。とにかくカオリはそこから脱出したいみたいな、そんな話をしていたような気がするんだけど、そんな思いだったんじゃない？」
「うん」
「なんかそんな気がするんだ。それで、そんなのだったら高校は好きなところへ行ったら？って、私が言っていたように…。だけど何にも勉強しないのだったらダメだし、とりあえずしっかりと勉強して力つけたら？っていうことを多分言った」
「でも、そういえば思い出した。カオリが一番最初に来た時は、確かノーメイクで来てた」
「うん」
「でも、ここに来る頃には多分メイクしないと外に出れないような状態になってたのとちがうかな」
「うん」
「あれはどうしてなの？コンプレックスがあるわけ？」
「コンプレックスだらけ」
「そのコンプレックスっていつ頃から強くなってきたの？」
「やっぱり中学校は入ってからとかかなあ…」
「もうメイクしないと外へ出れなくなったのはいつから？」
「中学校２年生の時」
「もうメイクしないと外へ出れなくなってしまったら、学校へ行くのはつらくなるよなあ。学校はメイクしたらダメなわけだろ？」
「そう。だから学校に行く時でもファンデーション塗ってアイプチして…とかやってたんやけど、でもそれもばれて、メイク落とせって言われて…。その時は落とすふりしてたけど、学校のトイレ入って、またファンデーション塗ってアイプチして…っていうのをずっと続けていた。学校の先生に何回注意されても眉毛そることやめなかったり…」
「じゃあカオリにとってメイクってなんなの？」
「…自分を隠す手段」
「あ、そうなんや。っていうことは、みんなの前でありのままの自分を出せないっていうことか…」
「うん、そうかなあ」
「自分に自信がないわけや」
「うん、自信なんか全くない」
「だからそういう自分を隠さないといけないわけや、とりあえず。今でもそう思ってる？」
「ちょっと薄くなった」

「自信がついてきたんだろうね、きっと」
「うん」
「そうか。一番最初はノーメイクで来ていたけれど、次くらいからいきなりメイクが始まったような気もするんだけど…」
「あの時は、お母さんから“初対面からメイクしていいかわからないから、メイクやめなさい”って言われて…」
「で、私がいいって言った？」
「うん。“ノーメイク無理なんですけどいいですか？”って聞いたら、塾長が大丈夫だよって…」
「そうだったかもね。それから、アウラで一生懸命勉強していて、結構よく頑張ってたんだけど、ある日突然ぷつっと切れたかのように…。あれいつ位だったかなあ？一ヶ月たったくらいかなあ？」
「多分７月の半ば頃に来て、それで２週間くらいやって夏休み入って、その後も１週間くらい頑張ってたんやけど、でもそこからぷつっと糸が切れたようになって…」
「その頃から…。どうしてぷつっと切れたわけ？」
「…自分的に苦しかったりもしたのかな？」
「そうかもわからんなあ…」
「今ではそんなことなくなったけど、毎朝メイクに２時間かかるような状態やったし…」
「来るのに？そうか、メイクに２時間！なるほど…それは知らなかった。朝早く起きないといけないわけや」
「ごはんも食べないといけないし、服も着替えないといけないし、バスの時間とかも考えていたら結構早く起きないといけないし、それなら早く寝ないといけないんだけれど夜が寝られないから…、だから朝起きられないようになって…。それでお母さんに“どうして起きられないのや”って責められると…、自分でもどうして起きられないのかわからないのに急かされると、また自分の中で混乱して、夜がまた寝られないようになって…それがまた繰り返して…」

カオリにとっての「メイク」は、自信のない彼女自身を隠すための術であり、表現だったのかもしれません。だから、メイクそのものではなく、その奥にある彼女の自信のなさが私には気になっていました。大事なことは彼女自身がその自信を取り戻すこと。それができれば、彼女のメイクは気にならなくなっていくと私は思っていました。しかし生活場面では、彼女はメイクによって幾度も躓いていきます。そしてその躓きが彼女の自信をますます失わせ、それが再びメイクに反映され、また何かで躓いていくという悪循環の構造を作り出していました。だからその循環をどう開放していくのか、そのことも私自身は意識していったのかもしれません。

「わかる。そういう状況やったんだ。そういう状況がずっと続いてたんや。それでまた少し来れるようになったけれど、まただめみたいな状況が続いて、私も“もうダメかな”って一方で思い

ながらも…、私はカオリとカオリのお母さんとの関係に結構注目していたんや」
「ふーん」
「というのは、まずこの２人は、基本的に関係が深い。例えば、カオリはだいたいお母さんとは喧嘩したりとかむかついたりとかいろいろあるけれど、でもお母さんのこと結構気にしている。お母さんとも私は喋りながらいつもそんな風に思っていた。あんまりぺらぺらとよく喋る人ではないけど、カオリのことを結構思っているんやなあ、という思いがあって…。ただでも、カオリ自身はなかなか前に進めないような状況があったから、お母さんに喋ろうと…。それで、その頃お母さんと喋ったことで覚えていることが、当時お母さんもとても精神的にきつくて…、というのはお兄ちゃんのことがあった。それから自分も夜勤があったりとかで、結構不規則な状況があった。ここに来るのも当然お金がかかるし、自分ももう限界やと…。で、本当にもうどうしようもできないというようなことを、お母さんは私に訴えるわけや。まあそれは受け止めてあげないと、という思いもあったんだけれど…、その時に一つ提案したことが、“いつもがみがみばかり言ってないで、たまには２人で温泉でも行ったらどうですか？”っていうことだったんや。でもそれは結局行ってなかったんやろ？」
「うん」
「でも、あの頃はいつも愚痴しか言わへん、そんな関係になってたやんか。ちがう？だから私は、そんなのお母さんもしんどいし、２人で羽伸ばすっていうのかな、そんなことを一回やったらどうですかっていうのを提案した。お母さんからそんなこと言われてどうやった？結構びっくりしたやろ、そんな話があったら…」
「びっくりした。なんでなんやろうって思った」
「嬉しかった？」
「嬉しくなかった。困惑した。なんでなんやろうって…」
「なんでこんなこと言うんやろうって？」
「そうそう。だってお母さんずっと、“学校も行かないのだったら外に出るな”とか…、お父さんもそうやったけど、“服買ってほしい”ってお父さんに言ったら、“なんでどこも行かへんやつに服買わなあかんねん”とか言われていたりしたから…だからなんでいきなりどっか行こうって言い出したのかがわからなくって…」
「実は、私がそこに関わってたんや」
「塾長やったか！」
「でもあれからなあ、お母さんだいぶ楽にならはったんや。私にしんどくてたまらないって言っていた時が多分ピークやったような気がして…。お母さんが楽になるっていうことは、カオリも楽になるんだろうなって私はどこかで思ってた。だっていつも怖い顔して…そんなことしかない母親ってどうかなって思ったから…」
「でも、本当にあの時くらいからお母さん吹っ切れはったよな。中学校行か

なくてももういいや、みたいな」
「そう、お母さんももうどうしていいか分からないような状況だったから…。だからもう強制しないでおこうと…」
「だからあれから…ちょっと雰囲気が変わってきたような気がする。お母さんがまずちょっと変わったような気もするんやけど…」

2. もう一つの進路

順調に滑り出したカオリのアウラでの生活ですが、突然ぷつっと糸が切れたかのように、それは頓挫します。いつものカオリの行動パターンです。彼女は、突然アウラにやって来なくなったのです。たとえ来てもやる気をすっかりなくしていました。そこで、私は彼女とお母さんとの関係に目をつけていきます。結構、けんかをしているのですが、お互いに相手のことを気遣っている二人。私はお母さんの気持ちや態度が変わることで、カオリ自身に変化が生じていくことを期待していったのです。そして実際、それが大きな契機となって、カオリは再び動き始めることになりました。

「そうだった、そうだった。それで、私がカオリに結構大事なことを喋っている場面があって。それは何かというと、カオリは初めてここに来た時に、学校が悪いとか自分のところの地域が悪いとか、友達が悪いとか、だから私は行けないのだと私に言っていたけど、でもアウラに来ても同じだった。そこで、それってどういうことなんやろう、って私が問い直したんや。結局は、今まで周りがどうやこうやって、周りのせいなんだっていうことを言ってきたけど、でも実はそうじゃないかもしれないと…。それにこんな話もした。カオリの一番の課題というのは何かというと、いつもある程度ストレスがかかってしまうと、いつも突然ぷつっと切れてしまう。そこが変わらなかったら、学校に行ったって、仕事をしたって同じことが繰り返されてしまう…」
「うんうん、言われた」
「それでなんて言ってたっけ？カオリの課題について…」
「“何かの根本を見つけ出さなあかん”って…」
「そういう風に言ったなあ。だから要するにカオリの中にあるパターンっていうのが、全部途中で“もういいわ”って投げ出してしまう。だからそれは働いたってやっぱり同じことが繰り返されるし、結婚したって“もういいわ”って投げ出してしまったら一緒だし…。だからそこがカオリの中で変わっていかなかったら、カオリは幸せに生きれへんかもわからんっていうような話を言ったような気がする」

「されたなあ…」
「あれいつかなあ…年末かなあ」
「12 月の頭かなあ」
「それが 12 月の頭で、12 月の終りのあたりで病院に行くわけや」
「クリスマスくらい」
「それはどうしてやったの？それは私が提案したんだったかな？それともお母さんがそう言ったんだったかな？“寝られないのだったら病院行き”って、お母さんが…」
「その時はもう私がアウラにも行かなくなった時で、来ても昼からとか…そんな感じの時。お母さんが朝送るって言っている時に、私が用意している途中でまた眠たくなってしまって…。お母さんに“もうそんなに寝られないのだったら病院行こう”って言われて…」
「それで病院行ったの？」
「うん。それで初めて病院行って…。病院行き始めてから、まあ順調にいって…」
「そうそう、それで年明けてカオリはちゃんと来れるようになり始めたんや」
「…なり始めたんやけど、2 月の下旬から 3 月の頭まで休んじゃった」
「それはどうしてやった？やっぱり進路の不安みたいなのもあったんかな？これからどうしていくかとか…多分 1 月の頭とか全然進路決まってなかったでしょ、まだ…」
「うん」
「決まってない。“どうしようか”ってずっと言ってた。進路決まったのが本当に 2 月の後半とか 3 月の頭とかとても遅かったから…」
「カオリは、最初友達が行こうとしていた携帯で試験が受けられて卒業できるような通信制高校に行く、そんな話だったでしょ？」
「うん」
「それは、絶対だめだと思ったんや。それは、カオリにとって大事なことは携帯でどうこうとか、そういうことじゃなくて、アッコと一緒で…。カオリにとって、アッコという一つのモデルがあったことは大きかったでしょ？」
「うん」
「だから結局“カオリも地道に生きろ”って。私はそんなことを言ったような気がする」
「うん」
「“粘り強くこつこつと、それを継続できる力がカオリの自信になるんだ”っていうっていうことを…」
「言われた、言われた！」
「だから適当にやって高校の単位とるとか、そんなの絶対ダメだって言ったような気がする。それと、カオリの住んでいる町に私が行って一番深く思ったのが、コンビニの駐車場に行った時に“カオリはこういう世界の中で生きてたんやな”って、それをものすごく思った」

年が明けてから、私はカオリの住んでいる町へと足を運びました。彼女の視界に入ってくる風景や聞こえてくる音、そして肌に感じる空気…。彼女の生活のリアリティを私は自分で直接感じてみたかったのです。

「駐車場じゃなくて中の…」
「フードコートみたいなところ？そうかそうか」
「そうそう。あそこで、1時間とか2時間だらだらと、雑誌読んでいたりとか…そんなことで時間つぶしたりしていた」
「私はその時、思ったんや。“この子はこういう世界の中で生きているんやな”って。あの時初めてわかったわ。なんかこういう…」
「狭いなあって思ったやろ？」
「そう思った」
「やっぱり…」
「あそこのコンビニのところが高台みたいになってるやん」
「うんうん」
「下のほう、学校とか見えたのとちがったかな」
「うん、見える見える」
「そうや。こういうところにあるんだなあって思いながら…で、そのことのちょっと後に…雪が降った日や。カオリがバスに乗ろうと…」
「そうや！そこからや！」
「それであの時に…雪が降った日にカオリがビニールを足に巻いてとか言ってバスに乗れなくって…あの時に泣いて電話してきたんじゃなかったかなあ…」
「うん」
「私がすごく心痛めたのは、そんな状況でアウラに行けなくて家にいてたらお母さんが“アウラも行かないのだったらもう学校行きなさい”って言われて、それで、それやったら学校へ行こうかなって思って行ったら、しばらくは保健室にいて、“その顔やったら学校でうろうろするわけにいかないし帰りなさい”って言われたんや」
「うん、そうそう」
「それで、でも家に帰ってもまたお母さんになんか言われるし、外は寒いし…」
「いや、その時お母さんは仕事の遅番で、昼からもう出ていたから家にはいなかったんだけど…」
「なんか泣いて私に電話してきたような気がするんや。“私、行く場所が無い”とか言って…」
「ちがう、塾長が電話してきて…“大丈夫か？アウラに来ないで、何してるの”って電話してきたんや。それで“今日こんなことがあったんや”って言ったら、もう思い出して泣けてきて…」
「あれは、それまでにカオリの住んでるところに行っているから、なんかこう…現実感があるわけや。なんか…かわいそうやなあって…」
「それ言った！」
「そういう風に私は思った気がする」
「そうや…。“コンビニの駐車場は寒いし、いれないしなあ”って言って…。私、泣いているのに笑いながら言われたからなあ…」

私がカオリの住んでいる町に行ったことは、彼女にとっても何らかの意味を持ったように思います。彼女の生活世界をどこかで共有している感覚を互いに持ち始めたのかもしれません。実際、それまで揺れていた彼女の進路はそれ以降トントン拍子で決

まっていったのです。

「そんなこともあったような気がする。それで…そんなことがあった後に進路も決まっていった？」
「そう…」
「アウラに週 2 回通って、通信制高校に所属して、そして地元でアルバイトをはじめる。アウラ、通信制高校、アルバイトを三つ巴にして進路を設定するというのが、カオリの進路指導だった」
「そうそう」
「なんかそれで、アルバイトをどうにかしないといけないというので、私がアルバイト先を一生懸命リストアップして…でもああいうことをやったことでお母さんがなんか“けっこうあんたも本気やな”とかいうので、お母さんがいろいろと職場に声をかけてくれたのと違ったかな？」
「うん。“お母さん何にもしてくれへん”って言ったら、“あんたは、やるやるって言っていて口だけだということがあるから、バイトお願いしますって言っているのに結局嫌やって言って辞めたら相手に迷惑になるから、だから声をかけたり聞いてみたりっていうのは、あんたがちゃんとやるって決めてからじゃないと私は嫌やった”ってお母さんも言っていた」
「そうやそうや」
「“じゃあ声かけてくれるの”って言ったら「“一回聞いてみる”って言ってくれて、お母さんが聞いてくれて、そこからもうトントン拍子でバイトにも行けて…」

こうしてカオリは、春からもアウラへと通ってくることになりました。今度は通信制高校に在籍して、地元のスーパーでアルバイトをしながらです。そんな彼女の姿を見て、私は「ずいぶんたくましくなったなあ」と心から思っていました。私はそんなカオリに、アウラに来てからの 10 ヶ月を総括してもらいたいなと思いました。彼女なら、この自分の変容の期間をどういう風に意味づけていくのかを知りたかったのです。

「そうやったなあ。しかも中学校卒業してから、カオリはまだ一回も休んでないし…」
「うん」
「高校のこともちゃんとやるし、アルバイトもちゃんとやるし…まあ絵に描いたようになんか…、そういうことをずっと続けると、だんだん自分に自信もついていくでしょ。お母さんに話を聞いていても、家庭も平和で…なんかよかったなあと思いながら。だからカオリが、7 月にはじめてアウラに来て、まだ 1 年経ってない。10 ヶ月くらい…」
「経ってないけどめっちゃ長かった！」
「この変化っていうのはやっぱり大きいかなあと思うんだけどなあ」
「うん」
「カオリの中でこの 10 ヶ月くらいの変化っていうのはどういう変化やった？」
「えー…何が？」
「この 10 ヶ月の間にずいぶん変化し

たでしょ？」
「めっちゃ変わった、と思う」
「その変化っていうのはどういう変化なの？カオリなりにコトバにしたら…」
「やっぱり気持ち的には全然変わってる」
「どんな風に変わってるの？」
「まず、メイクしないと外へ出られないというのがちょっとは治ったやろ？そんなバシバシのつけまつげして、めっちゃ濃いわけではないやん。そんなことがなくなったし…だいぶ、昔より自分のこと好きになれている感じ」
「なるほど」
「それとか、1年生とか2年生の時とかの過去を振り返りたくないとか思ってたけれど、今ではそれもいい経験やったなって思えるようにもなったし…」
「すごい」
「私が生きていく上でそれが必要やったんかな、とかって思えるし、ちょっと自分に余裕が出来てるから…」
「ふうん。すごいよね、なんかね。私なんか、カオリの薬はまだしばらくいるのかなって一方では思ってたんや。そう言ってたでしょ。だからカオリにとっては、一つはここ、通信制高校に在籍していて、それからアルバイトやって、それから病院も行って、それで、それ全体を私たちが見届けるということいいかなあ、っていう風に思ってたんだけど。病院はもう…薬は飲まなくてもやれるし、すごいものやなあとか思いながら…。だからアウラの存在って大きかったよね」
「大きかった」
「どういう存在なの、アウラって」
「アウラ？アウラっていうか…塾長が大きかった」
「大きかった！どういうことなの、それは…」
「なんか…どんな私でも受け止めてくれるような…」
「そうなんだ。私の存在は大きかったわけ、カオリにとっては？」
「うん、大きかった」
「それはあの…中学1年生の時のお兄ちゃんの同級生たちと似たような感じがするの？」
「似てないよ」
「それは違うの？どんな風に違うの？」
「お兄ちゃんの同級生と似ているってことは全く無い」
「でも彼らも、カオリがどうであっても受け止めてもらえるみたいに言ってたでしょ？」
「ああ。でもなあ、…塾長は、全部を見えて私に言ってくれる。お母さんのこととか、学校のこととか、まあ全部いろんなことを考えて私に言ってくれるやんか。でもその先輩らは、その時に“はいはい”って聞いてくれるような…」
「その時だけだということ？」
「聞いてくれているけど、ほんまにお兄ちゃんみたいな感じの存在やから…。塾長みたいな感じではなかった」
「そうか」
「よしよし、とはしてくれるけどめっ

ちゃ周りのこと見れている、っていう感じではなかったし…」
「じゃあ、そういう意味では、“私のことわかられてるなあ”っていう感じがあったの？」
「うん、うん。“カオリは今こんな状態やで”って言ってくれたのも塾長やし。“学校行けないことに落ち込んで、またそれで学校行けなくなって…っていうのがカオリのサイクルなんやで”、って私に言ってくれたのも塾長やったし…。お母さんも分かってなかった。もう何でなんやろうってずっと言ってはったから…」

彼女の話を聞いていると、アウラ＝塾長、そんな図式が浮かび上がってきます。彼女にとっては、自分の生活世界にわざわざ足を踏み入れ、自分のつらかった気持ちを共有してくれた塾長、つまり私が大きな存在となり、またそれを媒介としながら、自分自身を変容させていったのかもしれません。

「うん、なるほどなあ。なんか一連の話を聞いていくと…よかったねえ、なんかねえ。そう思うわ。だからまあ、人生って無駄がないよなと思うな」
「深い話やなあ」
「私も本当にそう思うんだ。アッコとかにもよく言っていたけど、不登校になる必要性っていうのかな…そうやって自分が傷ついていかなくちゃいけない必要性っていうのかな、そんなのがある。カオリもさっき言ったように昔はそういう傷ついたものは消したかった？」
「うん」
「でもそうじゃなくて、やっぱり傷ついていく経験だって人生に必要な１コマなのかもしれないし、そういうのがないとわからないっていうか…」
「早い段階で知ってよかったなと思う。人を信じすぎるのがあかんっていうか…」
「どういうこと、人を信じすぎるって？」
「だから人を信じすぎて傷ついたから、だから全部が全部信じられる人じゃないんだということがわかるっていうか…」

「こんな風にもう１時間くらい…カオリは語った。私もこうしていろいろ質問しながらだけど…。どう、こういう時間って、喋ってみてどう？改めてなんか気付けるっていうのか…」
「思い出すよな。思い出話になったからよかった！」
「その通りやと思うね」
「“こんなことあった！”って今ではもう笑っていえるけど…」
「人間ってそうなのよね。自分がまさに辛い時って思い出すことも拒否してしまうっていうのか…。でも、やっぱりそれで自分が辛い状況から脱出した時に、“自分はこうやった”とか、“あの時に辛い思いしてそのことが今となってはすごく大事だった”とか、そんなことがわかる自分は、結構幸せな状態にあるんじゃないかなっていう気がするんだよね」
「うん」

「だからこういうことを語ることで自分の幸せっていうか、今の充実感みたいなものを実感してほしいっていう思いもあるね」
「うんうん」
「で、私は人が変わるっていうのに興味があるわけなんだ。だから“私なんか生まれてこなかったらよかった”とか、さっき言っていたみたいに自分を否定している時ってそうなんだ。“私なんて生きていても意味がない”とかさ、結構それに近いような状態ってあったでしょ、きっと…」
「うん。何回も死のうと思った」
「でもそうじゃなくて、そういう自分の価値っていうのかな、そういうのをもう一回それぞれの人が見出してもらえたらいいなあって。そういうのにやっぱり関わりたいなっていう思いがあるのかなあ。まあでもよかったよね。とりあえずしばらくこの状態でいって、お金もちょっと貯め始めて、まあでもやっぱりこれから将来どういう風にしていくのかとか、なんかいろんなこと考えていかないといけないように思うよね」

こうして私のカオリへのインタビューは終わりました。私がこのインタビューを通してみたものは、彼女が語る物語とそれに裏付けられている彼女の変容でした。「物語」と「変容」との間には大きな関係があります。そういう意味では、多くの不登校の子どもたちは、最初コトバを持っていないのかもしれません。カオリの場合も、それは「メイクをする」という行動で表現されていました。その背景にあった劣等感、孤独感、あるいは閉塞感を彼女はメイクという行為の中で表現しようとしていたのかもしれません。だから私たちのカオリへの関わりは、その背景にあった彼女の感情を共有することから始まったのです。そしてやがて、彼女はコトバを持ち始め自分自身の物語を語り始め、大きく自分の進路を切り拓いていったのです。

3. それぞれの物語

「ボクは、病人として生きていたいわけじゃない」ドクターからストレスのあまりかからない生活を奨められ、そう語ることで受験生への道を歩み始めるようになっていったタクヤ。彼はその後、ドクターに自ら薬を止める宣言をし、受験を突破していきました。

「ひきこもりは、3 年すれば飽きる」と笑いながら話してくれたキヨシ。彼は自らひきこもった苦しみの塊のような 3 年間をそんなコトバで表現しました。

「2 年前の私に、あんたの 2 年後はこん

な風になってるんやと言ってやりたい」と力強く語ってくれたユキエ。彼女は、過去の自分に別れを告げ、新しい自分自身を再出発させようと宣言したのかもしれません。

そして「私、行く場所がない」と泣きながら自分の心の奥底にあった感情を伝えてくれたカオリ。彼女はそのどうしようもない辛さをメイクというカタチで表現しようとしていたのかもしれません。

こんな風にアウラの森の不登校の子どもたちは、どこかの段階で自分たちのコトバを持ち始めます。それまでは、なぜ自分が苦しいのか、なぜ不安なのか、なぜ身体がつらいのか、それらはわからないままだったのです。しかし彼らがコトバを持ち始め、自分たちの物語を少しずつ語り始めた時、彼らはその思いを誰かと共有し始めるのです。でも最初から、そうなるわけではありません。コトバが生まれるためには、いくつもの段階があるように思います。そのステップを彼らは一つずつ、時には後戻りしながらも上っていくのです。

また子どもたちの物語が、同時に家族の物語を生み出すこともよくあります。不登校という出来事は、家族にとっては大きな課題としてのしかかってきます。子どもが不登校となったがために、夫婦の関係が揺らぎ始めてしまうこともよくあります。夫は妻の子育ての仕方を批判し、妻は夫の無関心さを批判するのです。実際こうしたことで家族がバラバラになっていったケースも私たちは身近に見てきました。

しかし、その一方で子どもが不登校になったことで、家族の絆が強くなり、この困難を家族全体で乗り越えたケースも目にしてきました。「この子が不登校になったおかげで、ようやく私自身が親になれた気がします」そう話される親御さんも結構おられます。不登校という問題を契機に、家族自体がそれぞれを見つめ直し、新しい家族として再出発していけることは何よりうれしいことなのです。

不登校の子どもたちが傷つき、ボロボロになった状態から再び歩き始めるようになる時、その再出発のタイミングにコトバはとても重要な役割を果たします。かつて P. フレイレが記した『被抑圧者の教育学』の中に出てくる対話としての教育のように、コトバを媒介としながら彼らは自分たちの辛い過去を相対化し、そこに新たな意味を見いだすのです。もちろんその際に先生や仲間たちとの関係が大きな励ましとなることは言うまでもありません。

そしてコトバは、やがて彼らの人生の物語としてより大きな意味を持ち始めます。アウラの森での経験が、その後の彼らの人生の中に活かされる時がやってくるのかもしれません。成功体験の蓄積は、その後の行動に大きな影響をもたらすからです。また物語は、第三者にも感動をもたらします。子どもたちの変容が、家族の変容を促し、仲間たちの変容を促すのはそのためです。そして彼らの周りの変容は、再びその子の変容を促すのです。そこには物語を媒介にした再帰的な循環構造が出現し、アウラの森は、そんな循環を意図的に実現させる仕

掛けとなり得るのです。

毎年、年度末にはアウラの森の卒業式があります。今年も4名の不登校の子どもたちがアウラの森を巣立っていきました。それは手作りの卒業式でしたが、子どもたちも、そして私たちも涙の式となりました。みんな最初はつらく記憶からも消し去りたいような状態から始まりました。でも、今、本当に別人のようになって今日の日を迎えることができたのです。

ある卒業生の一人が式の中の答辞で、こんなことを語ってくれました。

「私は、今まで自分が何かにつまずくと、誰かのせいにしたり、何かのせいにしたりしていました。でもここに来て、先生たちと出会い、みんなと出会うことで、少しずつ勇気をもらい、ようやく自分自身と向き合うことができるようになったと思います。そして、少しずつ強くなれたように思います」

それは、力強いコトバでした。記憶から消し去りたいと思っていた不登校の記憶が、彼らにとってなくてはならない経験に置き換えられるとき、私たちの仕事も終わるんだなと感じた瞬間がそこにありました。

『幼稚園の現場から』

14・「避難訓練・津波対策」

原町幼稚園（静岡県沼津市）　園長　鶴谷主一

震災から子どもたちを守る！

前回は、紫外線から守る！というタイトルでしたが今回は「震災から守る！」です。
最近の幼稚園や保育園は子どもたちをいろんなものから守らなければなりません。地震、津波、火事、台風、放射線、高温（熱中症）、紫外線、流行性の病気、不審者、アレルギー、怪我、人間関係、害虫、害獣、親？･･･まず子どもたちが安心して生活できる前提があって、はじめて教育活動が出来るということは、当たり前のことですが、挙げればきりがありません。

文科省の管轄下にある学校法人ですから、世間で何か事件や事故が起こる度に、文科省から「お宅は大丈夫ですか？」という文書がメールで届きます。注意喚起だけの文書、対応を報告しなければならない文書･･･次々に届きますので、ほんとうにいろんな事をそれぞれのケースに合ったレベルで決めていかないと「守ること」に振り回されかねない状況もあります。

そんな中で、今できる最高レベルでの対応をして、その内容を利用者（園児の保護者）に周知しなければならないのが「震災」への備えです。

静岡県の現状

静岡県はもともと東海地震の発生地帯ということで、学校の耐震化は他地域の約２倍の基準で（全国基準Is値0.6に対し県基準はIs/Et値1.0）積極的に耐震化を進めてきました。そのおかげで県内学校の県基準の耐震化率は私立幼稚園で92.4％（平成23年度）と高く整備されています。

原町幼稚園も2009年に園舎を建て替え、耐震化の非常に高い構造でしたので、震災前は地震と火事の想定で避難訓練を行っていれば、ほぼ安心という心持ちだったのです。

しかし、2011年の3.11東日本大震災以降、原町幼稚園の避難訓練もやり方を大幅に変更しました。今までは頭の片隅にしか存在していなかった「津波」が、その大きな脅威を伴って「どうするんだ！」と迫ってきたからです。

それまでは東海地震だけだったのに、南海トラフ巨大地震という最大級の想定が現実味を帯び、耐震性だけで無く非構造部材（建物にあとから付けてあるもので天井板などの落下物）の対策など、新しいデーターに基づき新たな対応が生じてくるとともに「これで大丈夫」という気持ちは常に持てなくなってしまいました。

これは日本中の海岸線のそばに住む人々に共通することだと思いますが、通学区に境界のない幼稚園や保育園では、その影響が顕著に現れました。翌年から沿岸部にある園の入園児数がガクッと減り、内陸部の園がグッと増えたのです。静岡のあ

る地域は２クラス分、約60人以上の人数が動いたところもあるのです。原町幼稚園も海から500mに位置しますので影響は避けられませんでした、更にあれから３年経ち現在は、じわじわっと人々が内陸に移動し始めているのを感じます。

さて、本題に戻しましょう。
原町幼稚園の避難訓練は主に地震と火事の２種類に分けられますが、今回は地震について書いていきますが、まず3.11前の訓練手順を見て下さい。

①「地震が発生しました」という放送を入れる。或いは鐘を鳴らしながら避難を喚起する。
②机の下に隠れて落下物から身を守る。（放送がなくても揺れたら隠れる習慣づけ）
③「ゆれが治まりました、避難を開始して下さい」という放送があったら避難開始。
④防災ずきんをかぶり、ハンカチで口を押さえて先生について外に出る。
⑤このときに「お・か・し」のきまりを守って速やかに避難場所の園庭へ移動。
⑥園庭に着いたら先生に点呼してもらい、全員の安全を確認する。

以上が子どもの動きです、職員は人数把握、初期消火や通報訓練などの動きを確認します。

《お・か・し》のきまり
・押さない
・駆けない
・喋らない

たいていの幼稚園で取り入れられていると思いますが、「駆けない」が子どもにわかりにくいので「走らない」だよ、と言い換えたりします。「おはし」のきまりでも良いわけですね。

園庭から屋上へ

3.11以降、大きく変わったのは避難場所です。それまでは「建物から離れる」ことが避難の大前提だったわけですが、津波から逃げるには少しでも高いところへ移動しなければなりません。残念なことに原町幼稚園の周辺には高台も無ければ、10分以内に逃げ切れるような高くてしっかりした建物はありません。「園舎の屋上に逃げるしかない」という結論でした。

2013年６月に公表された「静岡県第４次地震被害想定」のレベル２（最大クラスの地震・津波想定）によると、沼津市の建物全壊、焼失は約6,000棟、最大津波高は10m。

幸いなことに園周辺の津波は2.8mで17m高の堤防でじゅうぶん防げる想定でした。駿河湾の海岸線が直線的な地形になっているからかもしれません。正直ホッとしました。

幼稚園の建物は地震での倒壊は無いと言い切れるほど頑丈なので、屋上に逃げられるわけです。データーをいいますと、海抜８ｍの地面に２階建ての園舎、その屋上までの高さが７ｍあるので、もし堤防が決壊しても15mを確保できています。では、安心かというと、先に書きましたように「これで大丈夫」という気持ちにはなかなかなれないものです。

「もし、想定以上のものが来たら･･･」ということは常に頭にあるわけです。そこで助かる可能性が１％でも高くなるならばそれを実践しようと、ライフジャケットを導入することにしました。

では次のページで今年度第１回目の避難訓練の計画書をご覧下さい。

平成 25 年度　第１回避難訓練（地震・津波訓練）

《ねらい》
　○命を守る大切さを知り、そのためにどう行動すれば良いかを身につける。
　○地震発生時の行動の仕方と避難の仕方を覚え、実際に地震が発生したとき、冷静に的確に行動ができるようにする。
　○押さない、駆けない、喋らないの３つのきまりを守り先生の指示を聞きおちついて避難する。
（教職員）
　○園児を安全に速やかに避難誘導し、いのちを守る対応が的確にできるように訓練する。
　○一人の見落としもなく、全員の避難を速やかに確認する。
　○日頃からの出席人数の把握を習慣づける。
　☆屋上に避難することの問題点、対策、避難後の対処などを洗い出す
　想定される問題：混雑、所要時間、広さ、火災時の対処、必要なもの、滞在時間･･･

《日時》2013 年５月 20 日（月）　10 時 20 分開始

《訓練内容》
　①地震発生という想定で、園内放送を流す。
　　→・机の下などに隠れる　・ドアを開ける　・出席簿を持つ
　②ゆれがおさまったという想定で、園内放送を流す
　③避難開始
　　１）年少・年中は屋上へ　→人数確認→人数報告→ライジャケ装着
　　※ライジャケの装着が出来た子どもはしゃがみ、まだの子どもは立って待つ
　　２）年長は一旦わくわくホールへ→人数確認→人数報告→ライジャケ装着→装着後屋上へ
　④１階から上がる職員（※職員名）が火災の有無を確認し、携帯電話、名簿をもって屋上へ
　⑤揃ったら再度人数確認→人数報告
　⑥避難誘導完了→避難訓練についての話→解散
　※この後「待機」と情報収集、情報発信

《事前準備》
　○各クラスにて地震の際の避難のしかたについて話をしておく。紙芝居の活用等。
　◎うくっしょんを装着練習し、ハーネスをゆるめておく。
　　仰向けで浮くことで安心なことを聞き、床で楽しくリラックスしながらシミュレーションしておく。※ことさら脅さないようにする。

　○避難の仕方について確認する。
　・地震の時は、まず落下物や倒れてくるものから身を守り、あわてて飛びださないこと。
　・誘導に従い、お・か・し、のきまりを守って避難すること
　・保育室に残ったり、隠れたりしないで、先生の誘導に従うこと
　・狭い屋上で人数を数えるので、数えやすいようにクラスごとに並ぶこと
　・ライジャケの装着手順の練習

　◎普段から行っておくこと
　・クラスの出席人数を常に把握
　・園生活マニュアルで地震発生時、東海地震注意情報などの対処について読んで確認しておく。
　○園用「うくっしょん」の確認
　〇全園児名簿と災害マニュアルを屋上に常備　・備蓄品の管理　・情報発信のための準備
　◎園バスコースでの避難場の指定と確認

計画書を見て頂くとわかるように、

＊防災ずきん　→　ライフジャケット

＊園庭に避難　→　屋上に避難

＊点呼で終了　→　点呼の前にライジャケ装着

の３つが大きく変更されました。

避難訓練は、何回も繰り返して身体に動きを覚えさせるものですから、つい園庭に逃げ出さないように頭を切り換えなければなりませんでした。

年間６回の訓練を行いますが、年少児が入園して落ち着いた頃に、第１回目を行います。もう少し早くても良い気がしますが、避難訓練の緊張感がこわくて幼稚園が嫌になってしまう子どももいるので、最初は落ち着いて段取りを覚える事を目的とします。回を重ねていくと、自由に遊んでいる時間や抜き打ちの時間に訓練を入れてバージョンアップしていきます。

ライフジャケット

ライフジャケットを全員が装着し終わる目標時間は５分です。ライフジャケットの導入から扱いについて説明します。

■浮くっしょん

2012年度から防災ずきんをやめてライフジャケットに切り替えました。数ある種類の中から選んだのは、モンベル社の浮くっしょん。レジャー用と違って津波対策として開発されたことと、クッションタイプで管理が整然とできる点を評価しました。

ただ、装着すればOKではなく練習が必要だということが後にわかったのですが、これは後述します。

「浮くっしょん／モンベル製」

http://about.montbell.jp/release/disp.php?infomation_id=167

■整備の手順

ライフジャケットを園の備品として備えることも考えましたが、個々に購入して頂くことにしました。ネームプレートに個人情報を書けるので、万が一流されたときに個人が特定できることと、避難時に職員が速やかに子ども本人に浮くっしょんを手渡すことができるように、背にマジックで大きく名前を書くためです。

園児以外の来園者、大人用、休日の預かり保育の子ども用は園で備えました。

■置き場所

浮くっしょんの売りの一つがクッションとして普段使いつつ非常時に装着できる、というものですが、幼稚園では自分のクラスに常に居るとは限らないので、まず屋上に行け！その次に浮くっしょんを装着しよう。という流れにしてあります。

なので、屋上にクラスごとに袋（IKEAの大きいブルーの買い物袋がピッタリ）に入れて常備し、長い休みは家に持ち帰ります。ほんとうは、毎日持ち帰るほうが良いと思いますが、子どもの持ち物が増えることと管理を考えると、毎日は難しいと考えました。

■練習が必要

浮くっしょんは、流れてくる瓦礫から頭を守り、水中で足が障害物にぶつかったり引っかかったりしないように、仰向けの姿勢で水面に平行《ラッコちゃんの姿勢》で浮かぶように設計されています。

レジャー用の物だと力を抜くとうつ伏せに倒れてしまう危険がありますが、浮くっしょんは気を失っても気道を確保するというコンセプトになっています。

しかし、仰向けがこわいのです。

水慣れしていない子どもたちは仰向けになることができません。ざっと数えてみると仰向けて問題なく受けるのは年少児の20％、年中児は50％、年長児は80％でした。これでは本番に役に立たない。

そこで練習が必要になるのです。

今年の夏に保護者向けに発行した園便りをご覧下さい。

☆ライフジャケット・浮くっしょんの練習を！

夏休みに、浮くっしょんを持ち帰ります。
昨年は東部スイミングスクールさんの協力を得て大きなプールで着用訓練を行いましたが、いきなり大きくて深いプールに行くのは抵抗感が大きいだろうということから、今年は園のプールでやってみました。安心感があったようで、最初怖がっていたお友だちも、徐々に慣れる様子が見られました。（年中長）
年少さんははらっぱ発行の前に訓練ができませんでしたので、夏休みに家庭でやっていただく練習に期待します。水慣れしてしまえば、なんでもないことですが水が怖いお友だちは、なかなか仰向けに浮くことができません。ご家庭でもいざという時に備えて浮くっしょんの練習をしておいて頂きたいです。

☆練習のポイント

■最初に！正しく装着すること！

・ウエストベルト、股ベルトはしっかり締めて身体にライジャケを密着させる。（必要以上に締めすぎない）
・バックルがしっかりしまっているか確認する。
※ベルトがゆるいとクッションだけ浮いて
自分は沈んでしまいますので注意して下さい。

持ってるからだいじょうぶだよ

■浮くっしょんを装着しての練習手順例（参考に！）

『ラッコちゃんになろう！』

①大人が支えながらゆっくりと仰向け（ラッコさん浮かび）に浮かべて引いてあげる。

point：恐怖心を持つと身体を固くしたり、手足をバタつかせて不安定になってしまいます。あくまでもやさしく、身体をつかんで横向きに、慣れてきたらクッションで頭を包むように持ってあげて気持ちを安心させながら仰向けでゆらゆら引っ張ってあげます。とにかくリラックスリラックス！

頭がホールドされているので安心

②慣れてきたら、徐々に手を離して自分だけで浮いていることに気付かせる。

point：頭をホールドしていると安心感があって、子どもの手はおなかのおにぎり型のクッションの上に、ラッコちゃんの姿勢完成です！そしたら、「ちょっと手を離してみるよ〜」とゆっくり離して自分だけで浮いていることを感じてもらいます。このとき、耳に水が入るといやがる子がいるので徐々に慣れていきましょう。
浮くっしょんをつけると浮いた姿勢から立ち上がりにくくなるので、不安になったら起こしてあげます。

③浮かぶことに抵抗がなくなったら、バタ足で進んでみる。

ほら、じぶんでういてるよ！

point：ここまでくるとかなり良いです。手も使って仰向けカエル泳ぎのように進むことも出来ます。更に自分で自由に体勢を変えられれば完璧です。泳げなくても、浮くっしょん頭がホールドされているので安心やレジャー用ライジャケを付けたまま海や川で楽しめます！
※レジャー用ライジャケもバランスを崩すとひっくり返って起きられないことがあるので練習は必要です。

この手紙の最後は次の文章で締めくくっています。

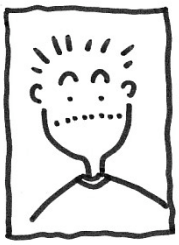
さいごに！**とっても大切なこと！**

練習というと、一生懸命やり過ぎる大人の方がいます！
なかなかできないとイライラしたり、口調がきつくなったり。子どもは、水がこわいのに、もう一つこわいことが起こって練習どころではありません。泣き出してしまったりして、二度と練習したくなくなります。･･･これでは**逆効果**になってしまいますので、

子どもにとっては**あくまでも“たのしい水あそび“**としてお子さんの性格に合わせて取り組んで下さい！

さて、今回は津波の心配の無いところに住んでいらっしゃる方には現実味の無い話題だったかもしれません。ライフジャケットを園用とは別に家庭用として購入される保護者の方は、初年度は数人いらっしゃいましたが、現在はほとんどいません。すでに防災意識も薄れてきたのか、第４次想定で安心したのかもしれません。

私のオススメは、幼児～小学校低学年のお子さんを持ちの方は、ライフジャケットを持っておくと良いですよ、ということです。夏の水の事故も毎年減りませんが、海や川のレジャーの時に子どもに浮き輪では無くライフジャケットを装着させることで、一緒に遊ぶ親の安心感は倍増しますし、行動範囲も広がります。防災意識も高められ、いざという時に浮けば助かるんだ、という意識を持っていられるようになるでしょう。リビングのソファーに、それから自家用車にも装備しておくと、いつどこで津波に遭っても助かる確率０％か１％以上の可能性か、その違いは大きいと思います。



ツルヤシュイチ

（幼稚園勤務32年/うち園長11年）

http://www.haramachi-ki.jp

mail：osakana@haramachi-ki.jp

福祉系対人援助職養成の現場から⑭

西川　友理

お勉強って大変！

　ここ半年ほどの間、私は、ある資格試験の勉強を頑張っており、先日、気合入れて受験してきました。
　その結果…不合格でした。
　どれだけ、どれだけ悔しかったか！あんなに、勉強したのに…！
　そのかわり、
「あぁ、こういうことかぁ…仕事しながら勉強して、不合格で悔しいって、こういうことかぁ…。」と、身にしみて解りました。
　社会人の社会福祉士国家試験受験生に対し、
「お仕事しながらの受験勉強は大変ですよね。」
と、言っていたのですが、実際仕事をしながらの受験勉強を体験したことがなかった私です。
今回の受験勉強と不合格を踏まえて、
「お仕事しながらの受験勉強って、ほんっとに、大変ですよね！」
と、今までとは違う感慨をもって口にするようになりました。
　次回は絶対に合格したい。その思いから、自らの受験勉強を振り返り、さらに仕事でしょっちゅう目にする社会福祉士国家試験受験生の皆さんが、どんな風に受験勉強をしているのかを参考にしてみることにしました。

様々な勉強スタイルと共通点

社会福祉士国家試験は19科目の5択問題150 問から成ります。その合格率は、例年大体26%～28%程度。昨年は18.8%とえらく難しかったのですが、いずれにせよ４人～５人に１人しか合格しないテストです。受験勉強はかなり大変なものになります。

少なくとも過去問題を何年分か解く。大体3年分を3回やるとか、いや5回やらないと合格しない、とか、4 年分を 3 回やるのがベスト、などと、指導者によって諸説ありますが、要は何年か分を繰り返しやって、出題の形式に慣れることが大事、と言われています。

また、基礎から勉強しようと19科目分の教科書を全て読むのは大変です。最近は各社が受験者向けの参考書を発売しているので、それらを活用します。今や「大事なところをこの一冊に…」「一問一答形式で…」「間違いさがし形式で…」「絵や図でビジュアルを重視した解説を…」等々、工夫を凝らした参考書が発売されています。自分にあった参考書を探し出し、熟読します。

それでもわからないところや覚えられない所は、ノートにまとめたり、単語帳を作ります。まとめたものの紙の分厚さが増えていくさまを見ると、なんとなく「やってるやん、私！」という気分にもなります。

…だいたいこのあたりまでは皆さん共通して実践していらっしゃいます。

勉強をする時、参考書をじっくり読んだり、ノートにまとめるなどして知識を得、「暗記」することは受験勉強の基本です。これは、勉強時間を捻出し、一人でコツコツと頑張れる事です。

難関を突破し合格された皆さんは、これに加えて、各々のご事情に合わせた勉強スタイルを作り上げていたようでした。

子どもが小さいから毎日 21 時には一緒に寝てしまう、という受験生は、

「朝の 4 時に起きて、子どもが起きてくるまで、毎日勉強していました。」

とのこと。同じく小さい子どもがいるママさん同士で受験勉強のサークルを作り、早朝４時に当番制で一問一答の問題と解説のメールを配信し、目覚まし代わりにしていたとのことです。

「出題をする、という責任があるから、いい意味で緊張感がありました。」

とのこと。

ある大学では、受験生の学生達が、模擬問題を自分達で作り、出題しあうサークルをつくっていました。

「五択問題を一問作るだけでも大変です！解説もしっかり出来なあかんし…。」

「古いデータで作問しちゃっていたり、正誤判定が出来ない問題文になったりすること、あるでしょ？」

「あるある！問題を間違えて作ってしまってないか、確認作業の方に時間がかかります。たくさん資料を読むから、結構勉強になります。」

と言って、週に一回、お互いに「勝負じゃ！」と言いながら出題しあっていました。

記憶力に自信がなくなってきたというミドルエイジのサラリーマン。奥様に定期的に介護保険や医療保険の説明をしている、とのことです。

「といっても、全部暗記してたわけでなくて、資料の類を見せながらですけどね…『みのさんの番組みたい！わかりやすいわー、あなたすごーい！』って言われて、調子に乗りました、えへへ。」

「なるほど、ごちそうさまです（笑）」

「参考書やら市役所のパンフレットやら参照して説明してたら、いつのまにか全体的に理解出来ていきましたわ！」

…あ、そうか、と気付きました。しっかりと受験勉強をしていらっしゃる方々のうち、ある一定の方々は単に知識を溜め込むと言う「暗記」だけではなく、「解説」という形でアウトプットをしているのです。ママさんや大学生のサークルは、出題する問題を考えその解説を考えるということで、サラリーマンの方は、奥様に教えるという事で、アウトプットなさっています。

そういえば以前、学生各々にキーワードを担当してもらい、「翌週には、皆に自分の担当キーワードについて解説すること」という内容の授業を半年実施したことがあります。授業終了後、受講していた学生からは、「とても大変だったけど、自分が担当したキーワードは、ものすごく理解できたし、後々まで結構覚えている」と言っていました。

だれかに対し「解説する」というプロセスを踏むと、理解力が格段に上がるようなのです。…なるほど、確かに私は地道にノートに書き写したり、単語帳を作ったりと、１人で黙々と知識を溜め込む「暗記」型の勉強のみで、アウトプット型の勉強は何もしていませんでした。もしかしたら、これが今回の不合格の原因の１つかもしれません。

理解が出来ると解説も出来る

また、今回私が受けた資格試験の中で、全体像を把握していれば、単純に判断できるところを、細かいうろ覚えの知識に引きずられ間違えてしまった問題がいくつかありました。全体像を把握していない状況では、おぼろげに覚えている細かい知識の一つ一つが、かえって判断を鈍らせる原因となり、その都度つまずく小石のようになってしまっていたのです。

小中学校でやった漢字や英単語の小テストのように、覚える範囲が一定程度決まっているものなら、何よりも細かい知識を暗記する作業が優先されます。しかし、総合的な知識や深い理解を必要とする試験については、細かい暗記物は後回しにして、まずは全体を大づかみで理解することを優先させると、自然と細かい知識も覚えやすくなるのかもしれません。細かい知識が有機的な連携を持って存在しているということがわかり、芋づる式に覚えられるようになるためです。

ところで、この大づかみな理解の仕方というのは、人に解説をする時に必要なプロセスなのです。逆に言えば、細かい知識をいくら沢山覚えていたとしても、全体を把握していなければ他者に解説が出来ないように思います。

「伝える」と「解説する」の違い

単に知っている事象を誰かに「伝える」というのは、情報を右から左へ流すという作業に過ぎません。写真を見せたり、辞書のある部分を見せるといった行動と同じで

す。「暗記」したものを口に出す、紙に書くといったこともこれにあてはまります。

しかし、人に「解説する」ためには、まず解説したい事象そのものの来し方、行く末、背景、他への影響など全体像を把握しなければなりません。そうすることで、その事象の重要な意味を持つ部分、たいして重要ではない部分、他の事象とのつながりといった、情報の濃淡が見えてきます。頭の中で整理が出来るのです。

それから、解説をする目的にあわせて、その事象のどこに焦点を合わせるのかを考えます。時には全体像を把握した際に、たいして重要ではないと感じていた部分に、焦点を合わせる必要が出てくることもあるのです。

それらを踏まえた上で、解説をする相手をシュミレーションし、その事象をどう話せば伝わるのか、本来の意味や構造を損なわないように気をつけながら、相手が解るように話を加工しなければなりません。

そういった準備を経て、実際に解説をします。解説中にも相手の反応を見つつ、表現を工夫します。

これが解説の一連の手順になると思います。

いざ実際に解説をしてみると、自分はどこが解っていないのかがどんどん判明する、といった事もあります。そうなればまた調べ直しをすることで、その事象に対する全体の理解が深まっていきます。

「伝える」を
「解説する」に戻す作業

そういえば、授業をしていると、時々こんなことがあります。

ある事象について解説をします。同じ事象について3回、4回と授業を繰り返すと、ある程度、話の道筋が出来ていきます。上手く言えませんが、「説明が完成されていく感じ」がします。すると突然、今まで全く気にならなかった所、きちんと説明出来ていると思っていた所に、違和感を持つようになるのです。

「あれ、これほんとにこの解説でいいの？…なんで前回まで気付かんかったんやろ？」

このような違和感を持ったときには、その事項について資料を見る、精通している人に話を聞く等、もう一度調べ直します。そしてそれまで知っていた内容よりも、より深く、事情や実態を知ることで

「あー、そういうことか！」

と納得出来ると、やっと違和感なく「解説」が出来るようになります。

特に私は社会福祉に関する事項を教えているので、社会が変化するにつれ、それまで行っていた解説とその時々の社会情勢にギャップが生じやすいのかもしれません。そのギャップを持ったまま、解説するのは、自分の中でも無理があるのです。

しかし、私が感じる違和感は、社会情勢とのズレ、といった要因だけではないように思います。おそらく、授業は単に情報を伝えるものではなく、理解してもらうためのものだと思っているから、自分の説明がマニュアル化し、単なる情報を伝える作業になりつつあるという時に、心のどこかから「こんなの授業じゃないよ！」という違和感が生じてくるのではないかと感じてい

ます。そうなると、それまでの理解をさらに深める必要が生じるのです。

理解の深度と伝わる深度

個人的な感覚ですが、解説する側の理解の深度が、そのまま聞いている相手に伝わる限度であるように感じます。もちろん聞き手の中には一を聞いて十を知る人もいますし、それ以前からの経験や身につけた知識と統合し、何かしらの気づきに繋がる人もいます。ただ、解説する側がよくわかっていない話は、多くの場合、聞いている相手にもあまり理解してもらえないようです。極端に言えば、教科書のある部分を読むなど、全く同じ文章を発している場合であっても、その差は生じます。声の抑揚の付け方や言葉を切るタイミングといった非言語的な表現が大きく影響しているのではないかと思います。

これを逆に解釈すれば、相手が
「なるほどねー！」
と感心してくれるほどに伝わった事項については、自分は結構理解していると判断できるかと思います。もちろん誤解していることを自信満々に伝えている可能性があることを疑ってかかる必要はあります…が、いずれにせよ、単に知識を頭に入れるという事は理解するという事ではなく、理解するという事と理解を深めるという事もまた、違うようなのです。

勉強するということ

このように考えると、単純に物事を暗記するということは、勉強というよりも、作業に近いのかなと思います。勉強の手法の1つに「暗記」はあるけれど、単に暗記しただけの知識は、使わないとすぐに忘れてしまうことからも、暗記＝本来の勉強ではない、ということが解ります。
「ある分野を勉強するということは、その分野を知る、覚える、というだけじゃなくて、理解する、さらには理解を深めるっていう事なんだなぁ…。」
気が付けば、とても基本的な所に戻ってきていたのでした。

…さぁ、もう一度チャレンジするとしましょうか！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

※今回書いた内容に関連して、面白い情報を得たのでご紹介します。

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで開発された「学習パターン」というものです。ホームページには、「自律的で創造的な学び方のコツをパターン・ランゲージという形式でまとめたもの」と説明されており、39のパターンがまとめられています。この中に、「アウトプットから始まる学び」「はなすことでわかる」「教えることによる学び」といったものが見受けられます。その他、勉強や研究活動に使えるパターンが提示されています。

「学習パターン（Learning Patterns）」
慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス　学習パターンプロジェクト
http://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp/index.html

先人の知恵から
2

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

最近、北海道も温暖化が進み、夏の暑さも厳しくなってきた。東京では百数十年ぶりに一日中 30 度以上と言う日があった。二酸化炭素などの排出ガスの増加、人口の増加、森の減少等温暖化の原因は複合的だ。「今さえよければ、自分さえよければ良い」では地球の温暖化は防げないし、その結果子孫の繁栄は望めない。どこかで諦めてしまう前に、先を見据えた取り組みを始めなければならない時に来たと言えよう。

先日テレビで二酸化炭素を人工光合成により有機物に変換させる装置を作った女性研究者の話を見た。この装置の変換効率が上がれば、温暖化の防止に大きな効果が期待できる。この女性の言葉が「『出来たらいいな』を『出来る』に変える」であった。それを聞いて、「為せば成る、為さねば為らぬ何事も、為らぬは人の為さぬなりけり」を思い浮かべた。

やる前から諦めてしまう人に考えてもらいたい。そんな言葉も含め、いくつか選んでみた。

今回もあ行から次の７つ。

- 朝寝坊に成功者なし
- 朝(あした)に紅顔(こうがん)ありて夕べに白骨となる
- 明日(あした)は明日の風が吹く
- 足の跡はつかぬが筆の跡は残る
- 足を削(けず)りて履(くつ)に適(てき)せしむ
- 当たって砕(くだ)けろ
- 頭剃(そ)るより心を剃れ

＜朝寝坊に成功者なし＞

「朝寝坊をするような怠け者はいずれ貧乏になり生活に困る」との意。「朝寝朝酒は貧乏のもと」も同様。

不登校の生徒の中には、朝が苦手なが多い。朝「目は覚めているけど体が動かない」と言って、ずっと布団に入っている。母親が何度起こしても起きない。一方で何か楽

しいことがあるとさっさと起きて出かける。そんな子どもたちを見ているとこの言葉を言いたくなる。

学校に行く事が楽しい子もいるが、そうでない子も沢山いる。楽しくないから行かないと言う選択が許されるようになった（？）のは最近の話だ。お腹が痛い、頭が痛い、吐き気がする、教室が嫌、嫌な子がいる、嫌な先生がいる。理由はなんとでもなる。いじめ等で本当に行けなくなっている子はともかく、「不登校」がこれだけ一般的になって、各クラスに数名は不登校の生徒がいるような時代では、ちょっとしたことで不登校になれる。

不登校児に対し、『頑張れ』が禁句になって久しいが、本当にそれで良いのかと迷う日々。「裕福に暮らしたい」、「楽して暮らしたい」と思っている今時の子ども達のためにも、「朝寝して居る様では将来楽な暮らしは望めないよ。」とはっきり伝えたい。

一方で保護者もシフト勤務などで朝起きられないケースに出会う。子どもが学校に行くのを見送ってから寝る人もいる一方、子どもが一人で起きて用意をし、忘れ物をしたり、衣服も同じものを続けて着ていくなどの状況に気付かない人もいる。朝ごはんにパンでも用意してあれば良い方で、何も食べずに登校する子もいる。子どもが自立的になると言う意味ではプラス面も少しはあるだろうが、保護者として、子どもへの責任の果たし方はこれで良いのだろうか。朝子どもと向き合えない分、夜ゆっくり向き合っていれば良いが、それも無い保護者もいる。こういう家では子ども中心ではない。精神疾患を抱えた保護者もいるので一概には言えないが、もう少し子ども中心で対処できないものかと思う。

例え昼寝をしたとしても、学校がある日の朝は
子どもを見送れる時間に起きられないか。保護者が面倒くさがっていれば、子どもも面倒くさがってしまうだろう。その結果不登校になったとしても「なるべくしてなった」ということになる。一生続くわけではないので、せめて小学校卒業までは朝出来るだけ見送ってほしいと思う。

＜朝に紅顔ありて夕べに白骨となる＞

和漢朗詠集(注１)の藤原義孝(注 2)の詩の一節からとられたものだが、浄土真宗の僧侶がこの一節をよく使ったことから広まった。朝健康そうな顔をした若者が、夕方には急に死んでしまうこと。

人の生命は短くはかない、生死の予測は出来ないことから世の無常を説いている。

男女の平均寿命が 80 年を超え日本は世界一の長寿国になった。医学も発展し IPS 細胞も出来て、臓器の入れ替えも近未来には可能になりそうな時代だ。長く生きられると言う思いが一般的になっているが、明日の事は分からない。

明日自分が死ぬことになっても悔いの無い生き方をして行きたいと思う。

＜明日は明日の風が吹く＞

先の事を心配せず、成行きに任せて生きようということ。無駄な取り越し苦労はせず、その時になってから心配しても遅くな

い。前からくよくよしてもどうにもならないこともある。「明日の事は明日案じよ」とも言う。

特に不安の強い母親や子どもたちでは先々の事ばかり心配し、しかもネガティブな想像の中で不安を大きくしている。まだ 1 歳にもならない子どもの大学まで考えている保護者がいる。子どもが一日学校に行かなかっただけで、不登校の心配どころか、引きこもりになって、親の年金をあてにして暮らすようになるのではと心配している保護者がいる。ちょっと友達と言い合いしただけで絶対に許してくれないと思い、学校に行けなくなる子どもがいる。テストで 100 点じゃなかったから、自分は駄目だと思い込み翌日のテストを受けられない生徒がいる。こうした母親や子どもたちにこそ、この言葉を贈りたい。

今日が悪い日だった時、明日はきっと今日より良い風が吹くと思えれば、本当に良い風が吹くものだ。

英語では Tomorrow is another day.（明日という日もある。）

＜足の跡はつかぬが筆の跡は残る＞

「足跡はすぐ消えるが筆跡はいつまでも残るから、文字は気を付けて書かねばならない」の意。

今で言えば、「メールでのやり取り、ラインの書き込みは慎重に」ということになるか。

ラインの書き込みが殺人事件の全容をつかむ情報になったケースがあった。その時のラインの内容を見ると只の口喧嘩なのに、そのまま殺人事件に発展するとは驚くばかりである。

あの事件でなくても、ラインの書き込みで友人関係に亀裂が入る事例のなんと多い事か。書きこんでしまったものは消してももう元には戻らない。メールの利点は送る前に読み直す事が出来、話し言葉よりは冷静に検討できることだろう。しかし、感情のままにメールするのであれば、そのまま面と向かって、話し合うか喧嘩した方がずっと良い。

子どもたちの世界だけではなく、大人も同じようなことをしている。

ブログやプロフ、個々のホームページなど、個人情報がダダ漏れの状態であってもその危険性について十分に検討していない。そのような中で個人の中傷、曖昧な情報や根拠のない情報を不特定多数に流した弊害について、あちこちで警告を流していながら、未だに改善されない。

正しい情報かどうかを見極める力を持たないならば、こうしたメディアに触れるのはとてつもなく危険なことになる。

1 歳の子どものおむつが取れないと相談に来た母親がいた。彼女はこうしたメディアで「1 歳の子のおむつが取れた」という情報を読んで、それが一般的なものだと誤解し、自分の子どもの発達が遅れていると心配したのだ。相談に来てくれたから修正が出来たが、もしそう思い込んでいて、自分の子どもがいつまでもおむつが外れないとイライラして、叩いたりするようになったらと思うと本当に怖い。

もう少し自分の発する言葉に対し、責任を持って、メールやライン、ブログに書き込みをすべきだ。そして、閲覧者は、根拠

のあるデータなのか、偏った情報源ばかり見ていないかを、自分で判断しなければならない。

テレビで〇〇ダイエットや××健康法の話が流れれば翌日のスーパーマーケットのメイン商品はその〇〇や××になるのを見聞きした方は多いと思う。実際〇〇や××を買った人も周囲に一人や二人ではないだろう。メディアの影響とは恐ろしいものだ。他人の行動をコントロールしてしまう。ラインにも同様の力があると思う。

小学生からスマホを活用している今の時代だからこそ警鐘を鳴らそう。そして、出来れば、小中学生など、人を傷つけるかどうか、又正しい情報かどうかの判断が未熟な子ども達には、メールやブログ、ラインでのやり取りを制限したいものだ。

＜足を削りて履に適せしむ＞

出典は淮南子(注３)。物事の本末を取り違えていることの例え。靴を足に合わせるはずが、足を靴に合わせて削ること。

いつの時代でも親は子どもに様々な期待をかけるものであるが、子どもの能力・可能性を理解せずに親の希望に合わさせようとするケースを多く見かける。

ある女子高生は３歳からピアノを習わされていた。母親はこの子が小学生の時にグランドピアノを買い与えた。家は公営住宅で、ピアノが一部屋を占領することになった。彼女は母親に言われるがまま頑張って練習し、ある程度のところまでは行ったが、それ以上は感性の問題や技術の問題もあって進まない。彼女の心は高校に入ってすぐポキッと折れた。母親の期待に添おうとして頑張ってきて、思春期に心が折れる典型的なパターンである。

これは医者や教員の子どもなどによくみられる。本人の能力や得意分野、可能性を無視して、「〇〇にならねばならない」を押し付ける保護者から、子どもを守るのも我々支援者の務めだ。

また、よく講演会などで「トンビは鷹を生まない」と話すことがあるが、この言葉の意味を保護者が理解していれば、子どもに無用のプレッシャーをかけることは減るだろう。

ある女子大生は、中高一貫の私学に入り６ 年間医者になろうと頑張った。周りでチャラチャラと遊んでいる子たちをしり目に勉強一筋で、友人関係も希薄な中、孤独に過ごした６年間。結果が良ければそれも報われただろうが、行きたい学校には行けず、医者の夢も露と消えた。周りでチャラチャラしていた子が結局彼女より良い結果を残していた。彼女は今就職を前にして、中高の６年間を否定し続けていた。浪人すれば良いと言う人もいるだろうが、彼女にはそれは許されなかった。何故医者になろうと思ったのか。そこには絶対的権力を持つ親の、命令に近い思いがあった。彼女は一生懸命親の思いに添おうとしたのだ。

昔、纏足と言う風習が中国にあった。小さい足が好まれる時代は、中国ばかりではなくヨーロッパにも見られた。女性が大きな足をしているのは美しくないと言われており、冷たい水に足を漬け、ワザと小さめの靴に足を合わせたりしていた。

靴のサイズも十分そろっている時代である。自分の好みとサイズに合った靴を選ぶ

ように、自分の人生も自分に合ったものになるよう自ら切り開いていってほしい。そして親はそれを見守り、陰ながら支えていければ一番であろう。

＜当たって砕けろ＞

成功するかどうかわからないが、とにかく思い切って決行せよと言う事。極めて困難な状況を打開するための決意をうながす言葉。

相談業務で出会う人は、「どうしたらよいのか分からない」とほとんどの人が言う。正直「どうしたら本当に良い結果につながるのか」は誰にもわからないのが現実である。現状維持は少なくとも今のままか今より悪くなることもあるので、ほんの少しの変化が、もしかしたら今より少し良く思える日常に繋がればよいだろう。

我々支援者は、そんなことを思いながら、相談者と共に今のやり方と異なる何かを探し、考える。しかしそれを実行してもらうことはある意味「当たって砕けろ」状態である。

くよくよ考えていても時間ばかりが経って変化は起きない。熟慮することは大事だが、決断と実行も大事である。当たって砕け散ることもあるが、それも人生。「失敗は成功の基」とも言うではないか！

英語では Take a risk! （リスクを負え！危険を冒せ！）というところか。

＜頭剃るより心を剃れ＞

外見より精神の方が大事であると言う事。形式主義への戒め。六道講式(注４)に「たまたま頭を剃って心を剃らず、衣を染めて心を染めず、恥じ恥ずべし」とある。又、鴨長明が「そりたきは心の中の乱れ髪、つむりの髪はとにもかくにも」と詠んでいる。

英語では Cowl does not make the monk.（僧衣が修道僧を作るのではない。）

世の中、「見た目はとても素敵なのに、性格が・・・」と言われる人がいる。反対に「洋服にシミが付いていたりしても平気だけど、性格や言動は素晴らしい」と言う人がいる。どちらが良いかと言えば後者だろう。

昔から外見だけ立派な人の本来の姿が分かった時に「化けの皮が剥がれた」とか「メッキが剥げた」などと言ったものだ。内実伴わない場合はどこかで化けの皮が剥がれる。どんなに着飾っても、内面的なものはカバーしきれない。心を磨いて行けば、心の美しさが外見にも影響を及ぼしていく。どうも外見にばかり囚われがちなように思われる昨今だが、どうすれば心を磨けるのか？

一つには、他人との比較にばかり気を取られないようにすることではないか。

昔から他人と同じような服装やファッションをする人がいるが、最近は、情報が多いことと経済格差が少なくなったことから流行を追いやすくなり、個性が感じられにくくなった。もちろんファッション等には流行があり、流行を重んじる傾向は、今も昔も変わらない。しかし最近の様子は、流行を重んじると言うより、「周りと同じようにしている＝流行を追っている＝標準・良い」という考え方があるのではと思える。

「流行を追っていない＝標準以下」と言う強迫観念があり、日本人の集団意識の強さがその思いに拍車をかけ、ますます標準外を良く思わない傾向があるように感じる。しかし、それが自分自身に合っているかどうかの検討はしているのだろうか？

皆が同じだと安心する。しかし人には個性があるので全く同じにはならない。だから他人と違う事を気に病まず、それを「才能」として生かしていけば良いのではないか？時には流行に逆らってみれば、自分が流行を生み出す側になるかも知れない。他人との比較を気にしないと言うことは即ち自分に自信を持つと言うことだろう。

もう一つは、優しさを身に付けると言うことではないか。優しい気持ち、それは憐れみとか同情とかではなく、穏やかで暖かい気持ちである。そういう気持ちになれるのは自分自身を認められ、自分がそれなりに恵まれている、幸せであると感じられるところから始まると思う。恵まれていると言う意味は、金銭的なことではなく、心が豊かであるということである。欲得で物事を捉えたりせず、どんなことでもあるがままに受け止められる心のゆとりであろう。他人に対し優しい気持ちで接することが出来れば、他人はその人のことを心のきれいな人と感じるだろう。「心を剃る」とは、心をきれいにすることなのだと思う。

妬んだり、憎んだり、嫌ったりしないなどということは、聖人でもなければ出来ないと言うだろう。子どもには人を嫌う事も、憎むことも、妬むことも必要だ。万人を愛することなどできない。この言葉は子どもに向けての言葉ではない。我々大人が、大人として意識すべきと説いているのだと思う。

大人は子の鏡である。大人が広い心、優しい心でいられるなら、子どもたちが虐待されることも、理不尽なプレッシャーに潰れることも、心を病むこともないだろう。

この言葉は自分自身の戒めとしても常に心にとめておきたい。

今回はここまで。次回をお楽しみに。

注１　和漢朗詠集　藤原公任（ふじわらのきんとう）撰の歌集。平安中期 1018 年ごろの成立。全２巻。藤原公任は百人一首にも選ばれている歌人。「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」

注２　藤原義孝（よしたか）　平安時代中期の歌人。百人一首では「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな」が選ばれている。

注３　淮南王劉安（わいなんおうりゅうあん）（紀元前 179－122）が学者を集めて編纂した思想書。老荘思想を中心に儒家・兵家・法家・墨家思想も取り入れた知の百科全書。諸子百家の一つの雑家の書物とされている。

注４　六道講式　六道とは生命が輪廻転生を繰り返す「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」を指す。講式とは漢文の読み下しによる声明曲で、木魚などの楽器を使い、仏、菩薩、祖師などの徳を称えたり、実績を述べたりするもの。「我等適々（たまたま）頭（こうべ）を剃って心を剃らず。衣を染めて心を染めず。」とある。

連載 14

法廷に残した痕跡

荒木 晃子

傷痕の変遷

今おもえば、文中に記述のある、(当時は)身体に残っていたであろう後遺症も、私の見る限りでは誰も気づかないほどに回復し、現在の彼女からは想像すらできないほどだ。

B 子さんが 20 年前に書き綴った心中に、私から何も問うことはなかった。もし、彼女が自ら“それ”を語ることができるならば、この資料を私に渡すことはしないだろうと考えたからだ。裁判記録には、後悔、懺悔、怒り、憤り、悲しみ、疑念といったあらゆる言葉で、当時の彼女が感じていたであろう心情を表現している。その頃の彼女が知る限りの言語を用いて、その苦しみを訴えたかったに違いない。表現しても、しつくせないほどの心中があったかもしれないのだ。おそらくそれは、身体に残る後遺症とはまた別に、こころに大きな傷跡を残していたはずだ。しかし、裁判を起こした当初はあったはずの「その傷」を、現在の彼女から感じることはできない。B 子さん本人も、**「今でも、後悔はしていない」**と、確かに語っていた。その真偽のほどを、いまいちど確かめなければ、そう思った。

彼女はただ、時の流れに身もこころも委ねたわけではなかった。少なくとも、不妊治療中に起きた医療事故に対しては、自らその真偽を確かめるための裁判を起こしている。移りゆく歳月を、自らの意思でつかって生きてきたのだ。裁判所に提出した報告書に、**「せめて、精神の健康だけは保っていきたいという思いがあるからこそ、この胸に残る疑念を払拭したいと、切に願っている」**とあるように、また、先述した山口氏の著書にも、**「身体に残る後遺症は一生消えないかもしれません。しかし、こころにだけは後遺症を残したくないのです」**ともあるように、後遺症が残る身体とは別に、自身の内面にわき起こる疑念を払拭し、明日を生きるための裁判だったのだ。

やはり、20年という歳月は、彼女の身体とこころの変遷に必要な時間だったのだろう。

過去に起きた出来事を語ることを選ばなかったB子さんに、当時の状況やその際の心情を、いまさらながら、たずねることは避けたい。ときに、大きなトラウマとなる出来事や、ショッキングな事件に遭遇した体験を回想する作業は、その当事者にとって、苦痛以外のなにものでもない追体験にかわる恐れがあるからだ。特に、話し手がその経験を、あえて話したくない場合や、時間の経過と共に、話さなくてもよくなった場合には、無理に聴きだそうとする行為そのものが、できた瘡蓋をはがすような結果に終わる可能性は否めない。ふさがった傷口を再び広げる行為にかわる危険性があることには、注意を払わなければならない。今回のB子さんもしかり。用心深くアプローチする必要がある。こころの傷は外からは見えないがゆえに、丁寧かつ慎重に、焦点を定め、ぶれることなく、そろりと近づいていかねばならない。まずは、目の前にある資料の中から、当時のB子さんを知る手掛かりを探すことが先決だ。確か、裁判の終結までに、原告として意見を述べる機会は、冒頭陳述の他にもあったはずだ。それを探してみよう。

最終意見陳述

裁判の結審の前に、その機会は確かにあった。

先に結論をいうと、その後、判決として、裁判長より和解勧告が出され、被告側医師と医療法人に和解金額が提示されている。その金額は、原告側が求めた損害請求金額とはかけ離れてはいるものの、判決そのものは、実質、「原告側の勝利」を意味する。厳密に言うと、勝訴判決が出たわけではないが、原告側の主訴が却下されなかった、つまり、訴えが認められたことになる。判決文には、個人の医療過誤裁判では、異例ともいえる高額な和解金額が提示され、それに加え、原告が0病院に支払った医療費全額が返還されること、とある。

判決を目前に、約５年にわたる経過を闘い抜いたB子さんが、最後に法廷に提出した文章を、以下に紹介する。

【甲第六五号証】

私は来月三九才の誕生日を迎えます。丁度九年前、三〇才になった私は、「不妊」という病気を治療するために決心をして、勇気をもって専門病院の門を叩いたのです。

おそるおそる病院に足を踏み入れたその日から、私の生活は一変してしまいました。それからというもの、数年にわたって、長く辛い治療の日々が始まったからです。しかし、長年に及んだ苦しい不妊治療も、主治医の指導に忠実に通院した日々も、いま思えば、それなりに充実した時間ではあったと思います。その時期の私は、例え、どのような状況であっても、その胸中には常に、「これで子どもが授かるかもしれない」と、夢と希望を抱いていたからです。そのおもいは、不妊の治療に伴う、いかなる苦痛をも耐え忍ぶ、精神力を支えてくれました。

しかし、平成三年六月0病院で発症したSJ症候群という病気は、私の内にあった強い精神力も、夢も、希望さえも、粉々に砕いてしまったのです。本当に恐ろしい病気です。

私を含めて、家族も周囲の人たちも、かつ

て見たことも聞いたこともない凄まじい症状でした。ある人は、その時の私のさまを、「まるで、一見して、原爆で被爆した人間と同じようだった」と語ってくれました。何も見えず、何もわからなかった私は、病と闘いぬきました。そして、その戦いで受けた傷は、あまりにも大きく、四年半を経過した現在も、身体じゅう、いたるところに、その傷痕を残し、さらにその傷はあまりにも深く、こころにまでも刻み込まれています。

SJ 症候群に対するこころの傷は、病院への不信感や、薬剤や治療への恐怖心といった形であらわれ、どこの家庭にでもある常備薬の服用にも、細心の注意を払っていますし、体調に不調を覚えた際にも、まず、病院の選択も限られた範囲の中でのものとなります。(ある日などは) 意を決して、受診してはみたものの、「既往症」の欄に、SJ 症候群と書きいれると、2 度ほど、投薬及び、治療自体を断られた事さえあるのです。このような事態は、今後も変わる事はないのだと、半ばあきらめています。

さらに、SJ 症候群が残した傷痕は、まだ、身体じゅう至るところにあります。現在の私は、一見して“普通の女性となんら変わらない”ように見えると思います。その外見からは、SJ 症候群が、どんなに恐ろしい病気であったのか、決して察する事さえできないと思います。しかし現実に、私は、あの病気を境に、別人のようになってしまったのです。

例えば、現在でも、外出の折には、顔や首に残る (黒い) シミを隠すために、いつもより念入りに化粧をしなければなりません。以前は何よりの自慢だった、“父親譲りの太く黒い眉毛”は、もう、まばらにしか生えていませんし、まつ毛も薄くなりました。また、熱い夏はもちろんのこと、年間を通して、首から足の爪先まで、肌をすべて覆い隠すような衣服を選んで着用しています。

以前から私は、四季の中で、夏が一番好きで、海へプールへと、友人や家族、そして、愛する主人とよく出かけたものでした。しかし、この数年間は、水着を着用した事さえありません。素足で外出する勇気も出ないのです。その原因は、現在もなお、全身に残る、皮膚を覆い尽くす世界地図のような、黒いシミによるものです。

それらは、以前の私には無かったもので、いまだ消える事もなく、決して“普通の女性の肌”の状態ではありません。さらに、一部欠損した (ままの) 手足の爪を、人目に触れる事の無いように、外出の際には、細心の注意を払っています。日常の、家族や友人との楽しい会話の途中でさえ、突然せき込んだり、自ら涙腺を十分補充できなくなった両眼には、常時点眼薬は欠かせません。現在も続く、眼科、皮膚科への定期的な通院も、おそらく、私の一生を通して日常のこととなるでしょう。そして、このような、日頃の細かなこころ掛けや、小さな苦痛も、それが度重なり、毎日のこととなれば、それは (やがて) 大きな負担となり、普通の人々が当然のように送れるはずの毎日も、私にとっては、生活そのものに疲労を伴うのです。

九年前には、不妊治療のために通院を始めたはずでしたが、今は、SJ 症候群の後遺症の悪化を防ぐためだけに、限られた専門医がおられる病院へ、通院を繰り返しています。

その原因となり、さらに、ある意味では、私の運命を決定づけたともいえる、SJ 症候群の発症から、現在に至るまでの約五年間は、私にとって何十年にも感じられるほど、長く

苦しい時間でした。そして、その間にうしなったものは、あまりにも多すぎて、すべては語り尽くせぬほどです。たとえば、具体的にひとつの言葉にするならば、「人生に何度かチャンスがあるならば、私は、その中で、とても大きな、そして、最初で最後であったと考えられるチャンスのひとつを失った」のです。

一般的に、女性の出産可能な年齢には制限があり、私は、そのタイム・リミットを、いま、まさに迎えようとしています。三〇才の誕生日と時を同じくして、その準備と治療にかかり、近年急速に発展を遂げている不妊治療の先端技術に、その身をゆだねた直後に、何らその成果をみないまま、現在にいたっているのです。

ひとくちに、不妊治療といっても、ただ“身体の一部の疾患を治療する”という意味以上のものがあるのです。それには、社会的にも、精神的にも、肉体的にも、複雑な問題や要素がからみ、強い意志と、忍耐と勇気を要する治療でした。そして、家族の理解と励ましを受け、経済的な問題などをすべてクリアしたうえで、健康な身体で受けるのが望ましい治療だったのです。

そのような治療を数年継続し、何ら成果が得られなかったのは、自らが望んだ試練ですから、仕方のないことと考えております。しかし、その後、子どもが授かるか授からないかは、時が来れば、いずれかの結果が得られるはずでした。あの、いまわしい病気さえ、発症しなければ、そして、発症と同時に、不妊治療にみる現代医学の高度技術をもって、早期に対応できておれば、その後の不妊治療に耐えられる体力・気力が今でもあったと思います。以前に可能であった治療が、今は不可能なものとなってしまいました。(それが)無念でなりません。

平成五年五月三十一日付の報告書で、症状については詳しく書かせていただきましたが、その苦しみは、この世のものとは思えないほどでした。また、その苦しさは、0 病院で入院中は何ひとつ癒されることはありませんでした。そして、その苦しみから生じた、いかなる疑念に対しても、病院からは納得できる返答を得られず、さらに裁判での病院側の回答内容も、満足できるものではありません。

例えば、私は昭和六三年十一月が、0 病院の初診であり、0 医師の証言にあるような処置は、それ以前には受けたことがありません。また、SJ 症候群に関しても、裁判開始以前に、直接本人から説明を聞いた際には、「その病名はきいたことがない。知らなかった」と答えておられたはずです。

当時の私は、医師を信頼し、我が身をゆだね、生命をも託していたのです。

現在、子どもを授かるだけが、人生のすべてだとは、もちろん考えてはいませんが、(それは) 少なくとも、私に与えられた大きな選択肢だったのです。それ (その選択肢をもつこと) を継続する事さえ不可能になった今も、「なぜ? (こんなことになったのか)」と、問いかけずにはいられないのです。

判決を前に、私たち夫婦が、四年以上の間、問い続けてきた (待ち続けてきた) 回答を、法廷で得られることを、うれしく思っております。同時に、一人の患者が勇気を振り絞って投げかけた、小さな疑問の答えを、直接、その主治医から得られなかったことが残念でなりません。

コスモシン (抗生剤の名称:コスモシンは、B 子さんの公判中、副作用による事故が相次ぎ、国内では製造販売中止になった) の投与

が、私の治療に必要なものであったのか。SJ症候群（の発症）が、どうしても避けられないものであったのか。それを病院側が予見しにくい、見つけにくい特異な症状であったのか。（その際の）治療が遅れたり、当時や現在も（私の身体に）残る、肉体やこころの症状が、やむをえないものであったのか。裁判所の公正なご判断を仰ぎたいと思っております。

また、判決をいただいた後は、現在残されている、「私の人生の可能性」のいずれかを選択して生きていこうと考えております。

ありがとうございました。

【平成八年四月十日　B子さん著名】

以上が、４０歳を目前にしたB子さんが、手書きで書いた最終陳述書である。本来ならば、自筆の書面をそのまま紹介したいところだが、**「達筆ではないので、それは遠慮したい」**と、本人からの希望もあり、文中の()内に必要な説明を加筆したうえで、書き写すこととした。

闘いの痕跡

預かった資料にひと通り目を通す作業には、結果として、膨大な時間と労力を費やすこととなった。しかもそれが、医療裁判の記録だったのだからなおさらである。法律用語の専門性もさることながら、医療裁判ともなると、日常的な用語の使用頻度が減少し、その分証言内容や医療事故が起きた際の状況説明などの記録は難解を極める。資料には、状況証拠など、B子さん夫婦が裁判に至る経過に始まり、その終結までの公判中、すべての証人尋問や証言記録が書き記されている。裁判所に申請された証人は、２名の原告を除き全員が医師であるため、その証言内容も当然専門性が高い。まるで、そこには、原告である“B子さんというひとりの女性”の存在を無視するかのように、彼女に起きた病変とその医学的対応に焦点を絞り、詳細に語った記録がある。この内容を本人が直接聴いていたとしたら、怒りと羞恥心、そして、大きな憤りを覚えたのではないか、同じ女性として、そう感じずにはいられない内容であった。

一例をあげると、生殖医療領域の病態に対する医学的対応は、子宮内部や膣など、女性器を含む女性の生殖器官に対する処置がなされるのであって、当然ながら、証拠保全手続きを経て提出されたB子さんの当時の医療カルテにその争点がある以上、証人尋問の際に、例え部分的にであれ生殖に関わる記述が採用されるのは、しかたの無いことだろう。しかし、どう考えてみても、自分の婦人科医療カルテが、公開された法廷で読み上げられることを想像すると、決してこころ穏やかではいられないはずだ。ましてや、それが不妊を治療するという、できれば、だれにも知られたくない類の医療カルテなら、なおさらではないのか。

さらに、争点の中核となるSJ症候群の後遺症に至っては、生殖器官を中心とした病態が、今後原告夫婦にどういった支障をきたすのかも論点のひとつとなっていたため、夫婦の性行為に関する質疑応答が、被告医師と原告代理人（いずれも男性）とのあいだに交わされている。訴訟は民事とはいえ、法廷は公開の場であり、その傍聴席には、関係者以外にも、本事件に関心を寄せる民衆がいたとしても不思議はない。つまり、限られた空間とはいえ、公共の場で“夫婦の性”に関する論争が繰り広げられたこと

になる。そのことを思うと、いたたまれない気持ちになる。

私が、そんなおもいにかられたのは、その点に関してだけではない。彼女にSJ症候群の重篤な副作用が生じてから裁判の最終陳述までには、６年ほどの歳月が流れている。しかも、最終陳述の際に提出したB子さんの陳述書には、その時もなお重篤な後遺症が残っており、日常生活に支障をきたしている、との記述がある。つまり彼女は、後遺症と闘いながら、さらに、法廷でも闘っていたこととなる。二重の苦痛を味わっていたわけだ。後遺症を抱えつつ、医療者でも法律家でもないB子さんは、専門家たちが繰り広げる質疑応答を、どんな思いで聴いていたのだろうか。そう思うと、今度は彼女を痛ましくさえおもう。

それともう一点。どうしても、B子さんに確認したいことがあった。当時、彼女が手書きでしたためた最終陳述書の一文にそれはある。彼女はその末尾を、**「(前略) 判決をいただいた後は、現在残されている、「私の人生の可能性」のいずれかを選択して生きていこうと考えております」**と結んでいる。公判の冒頭提出した訴状には、**「(前略)このような、無念な気持ちを１日も早く拭い去って、主人と二人の人生を、大切な家族と共に、将来は健康に過ごせるならば、と、最近、やっと考える事ができるようになってきた」**とあったのだ。この二つの文章を対比させてみると、B子さんのおもいが、大きく変化していることに気づく。裁判が始まった頃、彼女は、**「主人と二人の人生を、大切な家族と共に、健康に暮らす」**ことを願い始めていた。しかし、裁判の終結を迎えた頃、彼女は、**「現在残されている『私の人生の可能性』のいずれかを選択して生きていこう」**と結んでいる。

「二人の人生を生きる」ために始まった裁判が、その終結を迎えたころには、**「『私の人生の可能性』を生きる」**ための闘いにかわっていたのだ。この「違い」だけは、彼女に直接確かめなければならない。自ら作成した文章に、彼女が気づいていないはずはない、そう推測する。彼女が私に、“知ってほしい”と手渡した資料も読み込んだ。しかし、これだけで、彼女の語りたかった過去を、すべて知り尽くしたとは考えていない。とはいえ、例え一片であっても、いま、それを知った私に、彼女は何を語ってくれるのだろう。聴きたい衝動にかられる自分に、「それを語るか否かは、彼女自身が決めることだ」と自戒する。彼女の資料を読み終えた“今の気持ち”をそのまま伝え、気負わず、こころを静寂に保ちB子さんの前に佇めばいい、自分にそう言い聞かせ、はやる気持ちを抑えつつ、面会希望の旨を伝えた。

＜ひとくちメモ＞

面接場面で必要に応じ、話し手の話を、聴き手が要約し明確化することをフィードバックと呼ぶ。その目的のひとつに、話し手の主訴の確認がある。その際、聴き手の反応(例えば、何を理解し、何が分からないか)を伝えることで、互いの認識や、引き続き展開する関係への合意を確認することが可能となる。面接関係で起きるこのような“やりとり”には、聴き手が常に話し手の話に傾聴し、受容し、共感することがその前提となるが、その際、私ならばこうするとか、私にはそう思えない・できない・許せないといった、聴き手の否定的な主観が

入ってはならない。「聴く」際に必要な、傾聴・受容・共感する聴き手の態度は、常に、客観的・社会的・観察的といった多面的な視点で、援助者として、必要に応じた柔軟な発想と、“話し手にはない思考”が役立つ場合が多い。

フィードバック

しばらくぶりの面会であった。よほど急いだせいか、せき込みながら入室するB子さんをみて、以前より、もっと身近な存在におもえたのはおそらく私だけではなかったのだろう。

「ごめんね！遅くなっちゃって」

着ていたコートを素早く脱ぎながら、彼女は以前にもまして、気軽にひとこと詫びを入れた。そのあといつもの椅子に、ドスンと音をたて深く腰掛け、**ふぅ～！**と、声に出して大きく息を吐く。その様を、黙って見つめていた私の視線に気がついたのか、にっこりと、久しく見る事のなかった満面の笑みを浮かべた。多少緊張気味に、彼女の来室を待っていた私は、その笑顔に充分に応えるだけの笑顔を返す。久しい再会をとてもうれしくおもえたからだ。まるで、旧知の親友にやっと出会えたような、ほっとした感覚がある。

互いに挨拶をかわし、「その後、いかがでしたか？」と、いつも継続面接の冒頭にかける言葉を口にすると、B子さんは、その言葉を待っていたかのように、口火を切って話し始める。

「本当は、あのあとずいぶん悩んだのよ」

なにを？と、思わずたずねそうになるのをこらえ、ただうなずく。

「そう・・あなたに、“あれ”を渡して良かったのかなぁ、って。いきなり、裁判記録を渡されて、困っているんじゃないのかなぁ、って」

B子さんは、渡したことを後悔しているわけではなかった。“受け取った私”を気遣い、困惑していたのだという。

話し手が聴き手を気遣ったり、聴き手の反応を気にしたりすることが、面接場面にはよくある。経験上では、そのほとんどが、「聴き手が話を理解できているか否か」、または、「話をする自分をどう思っているのか」、「自分の考えは間違っていないか」など、話し手が、聴き手の反応を確認したい場合が多い。ラポールが形成された両者の関係を“失いたくない”と話し手が考え始めた際や、聴き手の力量を確かめる試し行動でもある。

このままではいけない、そう気付いた瞬間、私の口が反射的に開いた。

「大丈夫です。反対に、私としては、こんな貴重な資料をよく開示してくださったなぁと、感慨深い思いで読み続けていたのです。そして、あらためて思うことがありました。それは、これまでの人生を生き抜いたB子さんの“生きていく力”のすごさです。資料を拝見しただけでも、その時B子さんの身に起きた“事の重大さ”を知ることができました。それは、おそらく、想像を絶するほどの苦しみを伴っていたであろうこと。その出来事は、誰もが予想できなかったであろうこと。そして、それがB子さんの不妊治療の結末だったのだろうということ。資料を読みながら、私の中でいろんな思いがグルグルとめぐっていました。その中で、私が最も気がかりに思ったのは、それを体験したB子さんの“おもい”です。

そもそも、子どもがほしいという理由で始めた不妊治療が、結果として、生死の境をさまようほどの重篤な症状にまで至ったのですよね？」

あっけにとられたように、“語りはじめた私”を眺めていたB子さんは、無言のまま頷く。その頬がこころなしか赤く高揚していることに気付いたものの、そのまま話し続けることにした。

聴き手が語る時

「勿論、B子さんにとっても、また、ご家族にとっても、想像だにできない事件だったと思います。そして、その後、後遺症を抱えた状態で臨んだ医療裁判を5年も‥。B子さんが、どういったおもいで裁判に臨んだのかは、訴状にあった陳述書を読みました。そのことを含め、そこから長い裁判の期間中、どういうおもいで過ごされたのか、そして、その後、そのおもいを抱え、どのように生きてこられたのか、とても気がかりでならないのです。理由は、裁判冒頭の訴状にあった陳述書と、裁判終結直前の最終陳述書に書いておられた、“B子さんのそれぞれのおもい”にあります。書面には、裁判を始めたころのB子さんのおもいと、5年という歳月をかけて裁判を闘い抜いた後のB子さんのおもいがありました。いま、その二つの書面にある“気持ちの変化”を、確かめずにはいられない私がいます。B子さんの体験は、私にとって、とうてい考えが及ばない出来事ですし、お恥ずかしいことに、想像すらできません。“単なるアクシデント”では済まされないし、“それも運命だった”という言葉では簡単には括れない、そう思うのです。それと‥あの裁判記録の中の証拠写真に写っているB子さんからは、誰も現在のB子さんを想像できないはずです。あれほどむごい症状のB子さんをみて、正直、私はおもわず目をそらしてしまいました。ごめんなさいね、こんなこと言って‥いけないとわかっていても、その頃のB子さんをおもうと、かわいそうで涙を流さずにはいられなかった。そのことを、最初に謝罪させてください」。

一気にそこまで話し終えると、いつの間にか涙を浮かべ、肩で息をしている自分があった。ドキドキと心臓も波打っている。この分だと、おそらく話の終盤はいつもより幾分声も大きかっただろう。いつになく、感情が高ぶっていることに気づく。そのせいか、今は無精にB子さんの返事がほしかった。思いのほか、必要なフィードバック以上に話過ぎた懸念もある。しかしながら、今はそれでいい、とも思う。すべてをみせてくれたB子さんに対して、一切駆け引きの無い、私の胸のうちを差し出したかった。

一秒が長く感じる。“なんでもいい、私が投げかけた言葉に反応してほしい”、こころの中で、そう叫んでいた。瞬きもせずじっと彼女を見つめる私の目が、間違いなくその胸中を語っていたに違いない。私はただ、彼女の言葉を待つしかなかった。

（次号へ続く）

対人援助学＆心理学の縦横無尽１１

サトウタツヤ＠立命館大学文学部心理学専攻

福島県浪江町　訪問記

二〇一一年三月に発生した東日本大震災。その直後の大津波は福島県双葉郡大熊町・双葉町に立地する福島第一原子力発電所を襲い、大量の放射性物質が環境中に放出されました。周辺住民を含む多くの人々が強制避難に追い込まれたり、自主避難を選択せざるをえなかったことは周知の通りです。

放射能は主として爆発のあった３月１２日ー１５日にかけて大気中に放出されたのち、風に乗って北西の方角へと流れ、やがて雨によって地上に降下しました。放射能が風にのって広まるということは、風が吹かない方角には広まらないということを意味しますから、予測は可能なはずでした。

さて私は、二〇一三年六月、関係各位のご厚意をえて福島県浪江町を訪問することができました。現在、浪江町は、放射線量の高さによって、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の３つの区域に区分けされています。

「帰還困難区域」については少なくとも５年以上は帰還して居住することが困難だと考えられています。この区域にある浪江高校津島校は、原発事故後数日間だけ避難所になっていましたが、すぐに閉鎖され、そのままです（写真上）。

JR 浪江駅は「居住制限区域」にありますが、その近くの民家は崩れおちたままでした（写真左)。あるいは、この２年間の間に崩れたのかもしれません。いずれにせよ、片付けもされていません。

「避難指示解除準備区域」は引き続き避難指示が継続されるものの、住民が帰還できるよう環境整備を目指すとされた区域です。つぎの写真は津波で水田に運ばれた漁船です。２年たってもこのままです。よもやこの２枚の写真がもともと水田だったとは誰も思わないでしょう。

ドラマセラピーの手法（4）
～ロバート・ランディーの「ロールメソッド」

尾上 明代

ドラマセラピーにおいて、非常に重要な概念の一つは、言うまでもなく「役を演じる」ことである。

ドラマで「役を演じる」ことと、実人生の中で「役を演じる」ことの差異（実はほとんどないという言い方もできるが）の一つは、それが架空の設定か否かという点である。しかし、そのことよりももっと重要なのは、「実人生での役」は、無意識に「演じている」ことが多いが、ドラマセラピーでは、さまざまな役を「意識的に」演じることで、自分の現実の状況や課題についての客観的な理解や視点を得て、新しい方向へ発展させることが可能だという点である。

今号では、役割理論などの研究と実践で知られるドラマセラピスト、ロバート・ランディーの開発したロール・メソッドというアプローチを紹介したい。

彼の手法を解説する前に、まず架空の設定で「役を演じる」（自分とは違う考え方、感じ方、パーソナリティーをもつ「他者」になって行動する）ことで、例えばどのようなことが起きるのかを具体的にイメージしてもらうために、私のセッションから、ほんの一例を提示する。「役を演じる」という枠組みを提供すると、参加者は、「自分自身」の感情や考えについて、しばしば大きな気づきを得るのである。

シンデレラの選択

ある連続セッションで「赦す・赦さない」というテーマを扱った。このテーマは大きく深い。参加者たちは、当然、テーマに関してのさまざまな感情、状況、背景、経験などを、それぞれ持っている。それでも、安全な距離を保ちつつドラマワークを積み重ねて多くの視点を提供することで、グループ全体が一緒に一つの共通のテーマを探索することが可能になる。そして身体性を伴う深い気づきが発生する。

さまざまな役を皆で楽しみながら、演じることに十分に慣れてもらったあと、シンデレラの一場面から、彼女が継母と姉たちにいじめられるところを演じてもらった。その直後、参加者全員が２チームに分かれてシンデレラ役の人を説得するゲームを行なうことにした。まず、このシンデレラが

母親たちを赦すべきだと思う人たちと、赦してはいけないと思う人たちに分かれてもらう。左右、二手に分かれた両チームの真ん中にシンデレラが立ち、両方から説得を受ける。それぞれのチームメンバーは、自分たちの主張の方が正しい理由を彼女に訴える。シンデレラは、自分の心が動かされることばがある度に、そちら側に移動する。

「絶対に赦しちゃダメ。あんなひどい人たちを赦すことなどできないはず。」

「いつまでも憎しみの感情を持っていたら、自分が辛いから、赦した方が良いよ。」などという具合に、両方のチームは、何とか彼女を自分たちの考えの側に引き込もうと「対戦」する。もちろん、簡単に答えの出るものではないので、シンデレラは、いろいろな意見が出るたびに、右に寄り、また左に戻りしながら、全員の意見に真剣に耳を傾ける。本来このゲームは、説得される人が、どちらかに決めたところで終わるのだが、今回は、結論を出すことが目的ではないということを皆に伝え、両方の立場からのさまざまな意見を十分に引き出すことに集中してもらった。

いろいろな考えがほぼ出尽くしたと思われたところで、両チームのメンバーに、反対側のチームと役割を入れ替わるように指示した。皆は自分の考えにどっぷりと浸って熱中していたので、この突然の指示に驚き、ほとんどの人が無理な注文だというような表情を浮かべた。気が進まない雰囲気ではあったものの、皆は役を交代し、物理的にも左右のチームが入れ替わった。

自分の「本当の」気持ちとして、絶対に赦すべきではないと思っていた人たちが、「赦した方が良いという人の役」になり、またその逆の人たちも、「赦してはいけないという人の役」になって、同じような説得合戦が始まった。すると、「役になった」という意識が大きな手助けとなり、皆はたった今とは反対の主張を次々に言い始めた。中でも一番説得力があった参加者は、シンデレラの今後の人生を誠実に思いやる様子で、なぜ赦した方が良いのかを力強く訴えた。本人自身も驚くような、そして他のメンバーも感情が大きく揺さぶられることばであった。反対側の役（そちらが実際の人生での自分の真の感情であったと、その人はワーク後に述べた。）にいたときには、出て来ないことばであった。このワーク終了後、複数の人が以下のような同様の感想を語った。「赦してはいけないと言う側に行って説得していたときは、自分がこうあるべきだと頭で考えて正しいと思った側に行ったつもりだったが、その説得理由がほとんど口から出て来なかった。しかし、反対側に行ったとき、説得理由がすらすら出てきて、実は自分はこちら側の考えだったということに気付いた。こちら側に来て話さなかったら、わからなかったと思う。」「無理に反対意見の側に来て、赦すべきだと言ったとき、前よりずっと言いやすくて、本当は自分はこっちだったとわかった。実際に動いて話すという身体性が、このような気づきをもたらせてくれたと思う。」

とてもシンプルな事例だが、「何々の役」という枠組みで、即興のセリフを言って演じるという行為が、このような気づきを可能にしたのである。

ランディーの「役」の捉え方

ロバート・ランディは、アメリカにおけるドラマセラピーのパイオニアの一人で、ニューヨーク大学大学院にドラマセラピーコースを創設した人である。彼は、ドラマセラピーにおけるロールセオリー（役割理論）、ロールメソッド、そしてロールシステムを提唱していることで知られている。３年前、初めて来日した際、立命館大学大学院応用人間科学研究科でも招聘し、講演とワークショップをしていただいた。院生たちにロールメソッドを直接体験してもらえる機会を提供できたことを嬉しく思う。

彼のロールセオリーとその方法論、人間理解は、ドラマセラピーのセッションに利用するだけでなく、根本的な人間理解をどのようにするかという観点から発想されており、その適用範囲は広い。

人生は劇場のようだ、とよく言われるが、モレノ（サイコドラマ・ソシオドラマの創始者）は、実は人生は劇場そのものなのだと言った。ランディーもこのことを強調し、更に進めて「諸個人には、何か固定的な役、本質的な役があるのではなく、その都度、演じていく役の総和がその人なのだ」と主張する。

その上で、彼は次のように説明する。人は実際の生活の中で、役割を与えられてそれを演じている。その時に演じている役割は、その人にとっては、主役としての役割であり、その役を演じる・行動するために、彼・彼女は、その他の役を背景に押しやっている。人は、もともと、いくつかの大きな矛盾を抱えたまま生きることを受け入れることで、実際の人生を生きていくことができる。その意味で、異なった自分を抱えながら、一定のバランスを求めて旅をしているようなものだ。そして、そのようなバランスが崩れた場合、人は、何とかそのバランスを回復しようとして様々な活動を行う。しかし、どうしてもそのバランスが上手にとれない状態が続くとき、つまり矛盾が隠れて、一つの役、一つの方向だけに固定されると、情動、身体、そして対人関係などに様々な問題が発生する。つまりそのような問題が発生しているときは、そのバランスが崩れている、と理解できる。

彼は、古今の理論家（アリストテレスからユングまで）を幅広く引用しながら、このような人間の見方に立ち至った。そして、ロールセオリーの根本を次のように言う。

「役（ロール）」と「対向役割（カウンターロール）」、そして「ガイド」

外に現れている役割を、彼は役（主役）と呼び、その役に隠れているもう一方の役割を、カウンターロール（対向役割）と呼ぶ。この対立は、善悪、敵味方のような対極・二項対立のようなものだけでなく、親と子、兄と妹、など補完的とも言える対向軸も同様に扱う。人が外面、内面の問題に対処できないとき、このバランスが一方に偏っていることが多く、この２つの対向的な役割を理解し演じることができることにより、その対立、分裂、不安に、より良く対処できる、と彼は主張する。つまり、役と対向役割を理解すること、そのバランスこそが大事だとした。

しかし、その２つを統合するのは誰だ？との問いが出てきて、それに答えるために彼は考察を重ね、二つの橋渡しをする抽象的な役を、ガイド（案内役）として想定した。そして、これは純粋に抽象的な役割であって、主役と対向役割との間を行き来できるようにする操舵手、案内役であるとした。三位一体としての三者であるが、しかし、この役が、その人の本質的主体である、との立場はとらず、人の主体は、あくまでその人が演じる役割の総和であるとの見解を維持しているといえる。

彼は、その人の役割の全体を、ロールシステムと名付けた。そして、狭い、固定したロールシステムから、数多くの役割を包含して有機的に働くロールシステムへと進展させることを目標とした。

彼は、この役割理論をよりよく理解し、実践できるように、役の分類法（タクソノミー）に向かい、基本的に人に現れる役割を古今の演劇から８０数種類取り出して、それらの役の意味について詳細な解説をしている。（例えば、主役の本質の一つを「ヒーロー」として捉えた場合、ヒーローの本質を、未知に立ち向かい、精神的な未開の地に乗り出す意気だとした。）また、それらの役割の演じ方の特徴を、主張的（＝抽象的な思考に基づく演じ方）と表象的（＝直接的で情動的な演じ方）分け、役との距離が遠いとき（前者）と役との距離が近いとき（後者）のそれぞれの演じ方がもたらす影響にも注目した。

つまり彼は、人は可変的で自己主張的でありながらも、他者との相互関与に規定された様々の役割を演じていると言っている。また、これらの役割は実際の人生の場で起こっているが、実は、主体の内面にその関係が映し出されており、その人の内面で起こっている役割についての認識だと主張する。他者との関係の中で演じている、主体の「役」と「対向役割」と「ガイド」の様々な組み合わせを、他者との関係のようにとらえて演じながら、矛盾があってもそれらの役割を統合できるかどうかが、実践の課題となる。

ロールメソッド

実際のドラマセラピーのセッションではこの理論はどのように適用されるのだろうか？

彼は次のように言っている。ドラマセラピストは、クライエントに接するとき、そこには表れていない役割がその人にはある（隠されている、抑圧されている）のではないか、という前提・理解をする。実際のセッションは、いろいろな手法を使って、その人の「主役」を探査しつつ、その「対向役割」を探し出していく旅となる。自分や他者が様々な役を演じ、それを役割交換したり、吟味しながら進めていくのだが、そのときガイドの役割も探査する。最初はドラマセラピストがその役割をする場合が多い。

セッションの実際の進行は以下のような手順で行われる：

１．役割を呼び出す。
２．役割に命名する。
３．その役割を演じつくす。

４．代わりとなるような派生的役割を探索する。
５．それまで行なった役割演技について考察する。
６．仮想の役割を日常生活に関連付ける。
７．様々な役割を統合し、自分のロール・システムを機能させる。
８．他者に影響を与えるような社会的なモデルとなる。

この進行は、直線的というよりは、行きつ戻りつしながら上昇するような螺旋的なものと言えるだろう。

セッションは、現在の自分が演じている役割を理解し探し出すことから開始し、最終的な目標は、クラエントが、主役も、対向役割も、ガイドの役も、自分の内面に取り入れることができるようになって、自分自身をより大きなパースペクティブで把握できるようにすること、さらに、自分の役割にのみ集中している自分から、他者に影響を与えるような社会的モデルにまで自分を拡大させることである。

一旦バランスがとれる状態になっても、人生はさらに変化していくだろう。その都度の問題を、自分自身で統御するための基本的な枠組みを、ランディは、ロールシステムの変化、進展、拡大として見ていき、その理解の仕方の基礎に古今の演劇から抽出した、役割のタクソノミーを置いているのである。

ランディーは、自分が３０年以上かけて開発してきたロールセオリー、ロールメソッド、ロールシステムではバーバルな考察を統合化の重要な契機にしているが故に、高機能障害に適しており、低機能障害には適していないのではないか、との懸念を示していた。しかし後に、低機能障害者にも有効な結果が示された状況を受けて、さらに対象が拡大することを期待している。

最終的に彼は、（多数の）役割の統合化を言語だけに頼らず、行動・演じることそのものによって行なうという他のアプローチ（モレノ、ジョンソン、エムナ―ら）を挙げて、ことばで話すことと演じることの両方による役割の統合の意義を認めている。

ランディーの理論と実践は、役に焦点を当てたものであるが、ドラマセラピー全体の基礎概念であり、すべてのドラマセラピストが共有し、意図的に使用しているものだ。更に、役割理論として意識化されてはいなくとも、他の多くの心理療法、そしてドラマ的手法を使う多くの活動の背後で働いている力が、実はこのロールセオリーで提示されている現象・変容であると言える。

文献：

Landy, R.J. (1993). Persona and Performance. New York. The Guilford Press

Landy, R.J. (2009). Role Theory and The Role Method in Drama Therapy.
In Johnson, D.R. & Emunah, R. (Eds.), Current Approaches in Drama Therapy C.C.Thomas.

Landy, R.J. & Butler, J.D. (2012) Assessment Through Role Theory
In Johnson, D.R. & Pendzik, S. (Eds.), Assessment of Drama Therapy. C.C. Thomas.

日本のジェノグラム

早樫　一男

連載を始めるにあたって…

対人援助現場において、家族理解は不可欠です。その際の貴重なツールとなるのが“ジェノグラム”だと考えています。

そもそも、“ジェノグラム”に出会ったのは、「ジェノグラムのはなし―家系図と家族療法―」（石川元・渋沢田鶴子訳　明治図書）でした。海外の著名な人物のジェノグラムとその解説は、大変興味深く、また刺激的な内容でした。出会ったことに感謝です！

さて、これから、連載を試みるのは、日本の家族を題材にした“ジェノグラム”であり、日本の家族の物語です。

ジェノグラムとは…

「ジェノグラムの話」によると、ジェノグラムとは、《三世代以上の人間関係を盛り込んだ家族関係図》であるとされています。

例えば、児童相談の現場においては、子どもと父母、さらにその祖父母、また、父母のきょうだいになります。対人援助現場において、三世代以上の家族関係を聴き取るのは容易ではないかもしれません。しかし、“三世代以上”ということは心がけたいものです。この点は作成上のポイントの一つだと言えます。

また、《複雑な家族模様を一目で把握できる》ものです。視覚的に理解しやすいというのが、“ジェノグラム”の長所です。

“見やすく”　“わかりやすく”作成することは、作成上の大切なポイントだと言えるでしょう。

そして、《症状や問題が家族という場でどのような関係にあり、時の流れにつれてどのようにつながっているかということを様々な面から推理することができる》のです。この点は、“ジェノグラム”を通した家

族理解につながるものであり、家族の見立て（仮説）やアセスメントができると言ってよいでしょう。

そもそも、“ジェノグラム”は「血縁の歴史」です。さらに、「伝承される心の歴史」「心理的関係の歴史」なのです。

また、治療・介入的側面として、《家族と一緒につくっている最中に、家族メンバーが自分たちを新しい視点から見直し始めることがあるので、“ジェノグラム”はジョイニングの一方法としても重要》です。私は相談面接の早い段階で、“ジェノグラム”を利用者とともに作成しています。

Aさん（59歳）の家族

Aさんは２０歳の頃にBさんと結婚。間もなく、男児が生まれたのですが、その子が３歳の頃に夫婦は離婚。男児はBさんが引き取りました（Bさんはその後再婚）。

３４歳の頃、４歳下のCさんと再婚しました。その２年後、女児が生まれました。再婚から１１年後、再び離婚となりました（女児はCさんが引き取りました。また、Cさんは離婚後、まもなく再婚。相手の男性との間に男児が生まれています）。

Aさんは、４年前に２１歳年下のDさんと再々婚。１歳になる男児がいます。

それでは、「作成の基本」を参考に、Aさんのジェノグラムを作成してみてください。

作成の基本の紹介

表記の工夫

①男女

男性は□女性は○　□や○の中に年齢、そのそばに名前を記入することもあります。故人の場合は■や●、または□や○の中に×を加えます。

②夫婦

男性（□）、女性（○）を横線（実線）でつなぎます。その際、□や○それぞれから縦線（実線）を下し、横線でつなぐとよいでしょう。

また、男性が左、女性が右を基本とします。しかし、結婚・離婚を繰り返している場合など、男性は右、女性は左といった基本通りにいかないということはよくあります。“見やすく”“わかりやすく”をモットーに工夫してみてください。なお、内縁（同居）の場合は点線でつなぎます。

離婚の場合は、夫婦をつなぐ横線に斜め二本線を加えます。その際、子どもを引き取らなかった親の近くとします。別居は斜め一本線です。

③子ども

夫婦（男女）をつなぐ横線から縦線を下し、男の子（□）や女の子（○）とつなぎます。左が年長として、右にいくほど年少となるというのが基本です。しかし、離婚や再婚を繰り返している家族（ステップファミリー）の場合、やはり、基本通りにいかないこともよくあります。

Ａさんのジェノグラムが完成できましたか？

Ａさんのジェノグラムを作成する場合、Ｂさん、Ｃさんの再婚をどのように記載したらよいかということについて、戸惑いがあるかもしれません。

私は、Ｂさん、Ｃさんの再婚については、以下のような記載の工夫をしています。参考にしてください。

改めて、“見やすく”“わかりやすく”

離婚や再婚のご家族に出会うことが多くなっています。繰り返しますが、“見やすく”、“わかりやすく”をモットーに、素早く、的確に作成できるように努力しましょう。“ジェノグラム”の作成は 経験を積み重ねることが何よりも重要なことです。

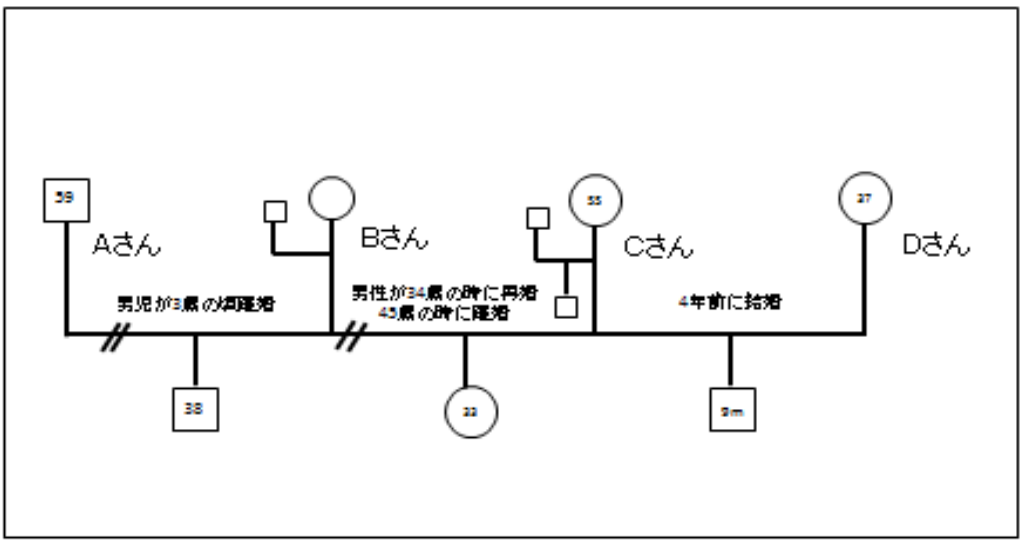
ジェノグラムから考える

Ａさんのジェノグラムは三世代以上にわたる家族情報ではありません。しかし、分かっている家族情報の範囲の中だけからも、さまざまなことが思い巡らせるのではないでしょうか？

あなたは、Ａさんのジェノグラムから、どのようなことを思い巡らせますか？

（つづく）

Ａさんのジェノグラム



きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第13話

水野　ス ウ

30年目の「紅茶の時間」

週に一度、家をひらいての「紅茶の時間」は、今年でちょうど30年。だからといって、何かとくべつなことをしよう、とまったく思わないところが10年前の自分とは違うなあ、と感じています。

毎週必ず誰かしら来てくれたから続けてこられた、紅茶という場。とくべつなことは何もしていない、ということをしてる場所だけど、それこそが紅茶の身上なんじゃないか、と、ここ2､3年ますます思うようになりました。

常日ごろ、あれやこれやの“すべきこと”に追いまくられているような気のしている人たちが、ここへやって来て、何も要求されずに、そのままの私でいいんだ、って勝手に感じること、そういうきもちや空気を体験すること。それもまた、今の紅茶の役割の一つなんだろうな、と度々思います。

これまで紅茶の時間の周辺についていろいろ書いてきたけど、今回は、ふつう紅茶の記憶のアルバムから、その何頁かをふり返らせてくださいね。外から特別ゲストがくるわけでなし、ときめきのドラマがくりひろげられるわけでなし。それでも私にとって、紅茶は毎週おもしろい、そのあたりのことを。

紅茶一杯分のＫさんの介護休暇

最も古い紅茶仲間の一人、Ｋさんとの出逢いは、紅茶をはじめる前。彼女がバスガイドの卵さんだった頃、その研修先でのことでした。

Ｋさんは結婚後、すぐに出産。ガイドの仕事をやめて、二人目が生まれる直前、というタイミングで紅茶がスタートして、それ以来の常連さんです。私に娘が生まれ、一緒に子育てする仲間がほしくてはじめたのが紅茶だったから、彼女と私、年は一まわり近く違えど、互いの子育て時代が、紅茶の歴史ともあわせてほぼ重なっている、というわけです。

舅、姑、小舅さんたちもいる大家族の中の、長

男のお嫁さんであるＫさん。ほかの家族は日中は家にいないとはいえ、幼子二人の子育てと大所帯の毎日の食事づくり。

持ち前の前向きの明るさと素直さで、彼女がその家族から愛されてることは話のはしばしからうかがえたけど、それにしてもこの若さでよくやってるなぁ！といつも感心していました。私にはとても出来そうもないことだったから、余計に。

その頃のことをＫさん、「じーちゃん、ばーちゃんにもよくしてもらってたけど、あの時期、週に一回、子連れで堂々と家をあけられる、家族公認の場所があるってこと、私にとって本当に救いだったんだよ」と言っていました。

子育てが一段落してからは、ばーちゃんに協力してもらいながら、Ｋさんは大好きなバスガイドの仕事に復帰して忙しくしていたそうです。当然紅茶へは足が遠のく、それでも何年かしてふっと、「やっぱり自分には紅茶が必要！って思ってん」と、彼女はいつの間に再び、旅のガイドをしない水曜日に、紅茶によく来るようになりました。

それからまた10数年がたち、舅さんであるじーちゃんの認知症がだいぶ進んでからだも弱って来た時、家族会議の上で出した結論は、施設でなく、できるかぎりこの家でじーちゃんを最期までみんなでみよう、でした。その中心になるのは、ばーちゃんとＫさんだけど、足りない所はヘルパーさん、地域で在宅医療を応援し、往診もしてくれるお医者さんに助けてもらいながら。

ガイドの仕事を入れず、じーちゃんの在宅介護に専念する日々のＫさん、それでも紅茶にはひんぱんに来ていました。介護の要支援度があがるにつれて、彼女の在・紅茶時間は短くなって、最終的にはほんの30分だけ。行き帰りの時間をふくめて、彼女が家をあけられる時間の長さが、文字通り、紅茶一杯分。彼女はそれを、「私の介護休暇」って呼んでいました。

それから数ヶ月後。ひさびさに紅茶に来たＫさんが、その日はなぜかずいぶん長居しています。

今日は長く居ても大丈夫なの？と訊いたら、Ｋさんは晴れ晴れとした顔で、「おかげさまで、じーちゃんを見送りました。いい最期やったよ」。

それからだいぶたった日の紅茶で、Ｋさんがしみじみと言ったこと。

「私ね、ほんとに紅茶があったから、やってこれてん。ここで一週間分のストレスをリセットしてね、よし、またがんばるぞ〜。そうやってあの時期を乗り切れたんだよ」

ここに来れば、自分がせいいっぱいやっていることをよく承知してくれてる人たちがいる、ということ。それが、彼女にとってはこちらが思う以上の、大きな支えだったのかもしれません。

お茶一杯の介護休暇中のＫさんに、仲間の誰一人、がんばってね、なんてことさら言わないところがいかにも紅茶らしく、それもきっとうれしいことだったろうな、と思う。一杯のお茶の時間がこんなふうに誰かを、確かに救うこともある、そう気づかせてもらえたことに、こちらこそ、感謝、でした。

そうそう、介護中ですら水曜になると、「ばーちゃんが、今日は紅茶いかんでいいが、って言ってくれてた」そうな。そういう関係性を築いてこられた彼女がすごいなと思うし、家族の他のメンバーも次つぎ、介護の助っ人に巻きこんでいって、最終的には家族の誰もが、じーちゃんのお世話を自分もできた、と思えるようにしていったところが、なんともすばらしい。

そのことが、筆まめな彼女の介護日誌「じーちゃん日記」を読ませてもらってよくわかりました。じーちゃんの体調、したこと、言ったこと、ドクターの診察、ヘルパーさんのアドバイス、家族の応援、などを細かに綴った「じーちゃん日記」は、大学ノート６冊にもおよび、そのノートは今も、家族の介護が必要になってきた紅茶仲間の間を、ぐるぐるとまわっています。

Ｆくんの１年目のあいさつ

今からもう6、７年前の春。電話口から、「あの〜、僕、紅茶に行きたいんですけど……」と若い男の子の、くぐもった声。

「はい、どの水曜日でも1時からあいてますよ。ちっともはやってなくて、特別なこと何もしてないけど、それでよければどうぞ」と言ったら、早くもその翌週にやってきたのがFくんでした。ゲゲゲの鬼太郎みたいに、前髪長くたらしたヘアスタイルで。

幸か不幸か、そのお初の日に限って、紅茶はめちゃめちゃ大はやり、人でいっぱい。Fくんにしたら、私から聴いていた話と全然違うし、おおいにひと疲れもしたろうし、これに懲りてきっと彼はもう来ないだろう、と思っていたら、翌週もその翌週も、彼は紅茶があくと同時にやってくるようになりました。はじめは電車をのりついで、やがて、交通費が高くつくからと、途中からは50ccバイクに乗って1時間余りもかけて。

あいかわらず長い前髪で、ほとんどの時間うつむいている彼が、いったいどんな顔をしているのか、私にも初めのうちはよくわかりませんでした。あまり人と話さず、私とも必要最小限しか話さず、たとえたらまるで岩みたいに、じっとそこに居ることが多かったFくん。

それでも、初訪問の日から半年目くらい、床屋さんに行ったとみえてこざっぱりした頭でやってきたその日、彼がとてもかわいい顔をしていることに、そしていい表情していることに、私ははじめて気がついたのでした。

たまにぽつり、と話す彼の言葉から、最初は、紅茶に来たら何かしてくれるだろう、というあわい期待を彼なりに抱いて来ていたらしい、ともわかりました。そりゃ残念だったねえ、紅茶って何にもしてくれないとこでしょ？と言ったら、はい、と苦笑してうなづいてた。

そう判明したにもかかわらず、彼は毎水曜日、変わらずこの場所にやって来ました。今何してるの？学生さん？と訊いてくる人のことが苦手な彼だったけど、しだいに免疫もついたのか、うまく避けるところは避けつつ、やがて私たち夫婦や顔なじみになったお母さんとなら、少しずつ話もするようになっていきました。

それから季節が一巡りした、ある日の紅茶。Fくんが、入って来るなりきちんと正座して、あらたまった口調でこう言ったのです。

「僕が紅茶に来だして、今日でちょうど一年経ちました。紅茶は、誰にも、来ちゃいけないと言えない場所なので、水野さんには迷惑だったと思うけど、僕をずっと居させてくれて、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします」

びっくりしたと同時に、彼は今日、これを言うつもりで来たのか！って思ったら、思わず胸が熱くなりました。そして、紅茶の、彼なりのとらえ方、「誰にも来ちゃいけないと言えない場所」という言葉にも、はっとしたのです。確かに紅茶は、仲間たちのこころを傷つけたり、場の安心を脅かしたりする人でない限り、誰が来たっていい場所だものね。

「そっか〜。今日で一年！本当によく来続けたよね。すごいよ。私にはおそらくできないこと。だって誰も特別やさしくしてくれるわけじゃないし、ある意味、ほっとかれてる。そんな中ずうっと来続けたって、根性あるってことだもん。

迷惑じゃなかったけど、ちょっと困りはしたかな、だってあなたの期待に紅茶はこたえられそうにないし、いてもそう楽しくはなさそうだったもんね。だけど、髪を切ったあたりから、お母さんたちとも会話が続くようになってきたね。笑ったら、笑顔がとてもよかったね。

そういう変化を見せてくれたのがとてもうれしかった。だからこっちこそ、来てくれてありがとう、です」

てっきり、彼は不登校だったんだろう、と私は思っていたけれど、それは違っていました。とても無理しながら、学校には休まず行っていたそうです。そして大学へも行き、卒業もした。だけどその後の、社会に出る段になって、いろいろとむずかしくなってしまったようでした。

彼が何度も私に訊いたことは、

「コミュニケーションって練習すればうまくなりますか」

「練習したら、僕もふつうに人と話せるようになりますか」

彼が一年間紅茶に通い続けたのは、おそらく、紅茶が居心地よかったからではなくて、きっとほかに行く所がなかったから仕方なく、だったのだろうと思います。だけどその間、これといった練習はしなかったにもかかわらず、いつのまに、紅茶に来た人と、ふつうに会話をするようになっていった彼。

さらにはこんな発見もしていきました。

「悩んでるの、僕だけじゃなかったんですね」

「お母さんたちにも、いろんな悩みがあるんですね」

「いつも明るくて愉快なあのお母さん、あの人にもしんどい時があったんだ、ってはじめて知ってびっくりした」

黙って岩のようにただそこにいて、いろんな人のうれしい話、悲しい話を聴くだけだったあの時期も、それはそれで、彼がひととコミュニケーションをとるための助走がわりになっていたような気がします。

やがて彼はバイトをはじめて、紅茶で職場のぐちをいってはみんなで聴き、「あのきつい職場でもう半年たったんすよ〜」などと、誇らしそうに言ったりもするようになりました。

「この前、サポートステーションの人といろいろ話してたら、なんと3時間たってたんすよ」。

おー、雑談がそれだけ続くって、会話のキャッチボールができてるってことだよ、ずいびん進化したんだねえ。

めずらしい顔ぶれの人が集まった日の紅茶で、時に突然始まることのある自己紹介リレーも、前は大の苦手だったけど、いつのまに自然体で自分のことを語るようになっていました。

ここ数年は、彼なりの卒業時期を迎えたのか、彼が紅茶に顔を見せることはなくなりました。だけど、紅茶が彼の人生の一通過点だったように、どこにいようと、対ひとへの免疫を少しずつつけながら、彼なりのペースで歩いていってくれるといいなあ。それが、紅茶の家主のささやかな願いです。

Yさんの School of Life

Yさんが初めて紅茶に来たのは、「紅茶の時間」を金沢の小さなマンションではじめたばかりの頃、なので、もう30年近くも前のことになります。

だけどその当時は、すごく活動的なお母さんたちばかりそこに集まってるように思えて、彼女はなんだか気後れしてしまい、それからずっと紅茶には足が向かなかったそうです。

やがて風の便りに、紅茶が津幡に引越したことを聞いて、何年ぶりかに行ってみたら、前とは違う感じの“ふつうの”お母さんたちが来ていて、昔みたいに混んでなくて、これなら自分に向いてそうだと時々来るようになって以来、今ではすっかり紅茶のおなじみさんになりました。

果樹園をしている農家のお嫁さんなので、作業の忙しい時期には来られなくなるけど、それ以外の週は夕ごはんの支度に間にあうまでの数時間を、よく紅茶で過ごしています。

そんな彼女は、私がお話出前の旅先からもどった紅茶でいつも、ね、どうだった？よかったでしょうね、と尋ねてくれる。訊いてもらえると私も話しやすくて、思い出すまま語りだすのが毎度のこと。

ある時、「なんかここんとこもやもやしてたんだけど、その原因がわかったの！」ってYさんがうれしそうな顔で言いにきました。

今度行った時、きっとあの話を聴こう、あれはどうだったか知りたい、と楽しみに出かけるけど、たまたま、その日初めての人が来てたり、別の話題が先に出てたり、が重なって、ここ何回か分のお土産話を、ずっと聴きそびれてたこと思い出した。そうか、そのせいでもやもやしてたんだってわかって、ああ、すっきりした、と。

毎週のふつう紅茶で、いろんな不思議な人に出逢えること、仲間たちと本音でしゃべれることもだけど、それ以上に、家とは違う空間に週一回身を置くことが、自分にはとても大事なことだと年々わかってきた、とYさんは最近よく思うそうです。そして、まだ行ったことのない土地での紅

茶お土産話を聴くことも、それと同じくらい、自分の世界をひろげてくれる大切な機会だって気づいた、と言います。

ああ、そうだったんだね。日ごろ、舅姑さんたちと家にいることの多いＹさんにとって、お土産話は心がよろこぶごちそうみたいなものだったんだね。その話から、彼女が感じたり、学ぶこともたくさんあるのだって。

それは私にしてもおあいこでした。興味をもって聴いてくれる人がいるから語ることができる。語ることで私自身、その時々の出前先で学んできたことが整理され、深められて、自分のものになっていく。学びのインプットとアウトプット。そういう相互作用のぐるぐるが、私にとっての貴重な学びなのです。

紅茶の時間のことを、私はつねづね、school of life, 人生の学校、と呼んでいるけど､Ｙさんにとっても私にとっても、紅茶が“学校”だと思うのは、つまりそういうことだったのでした。

お土産話のおすそわけ―映画「大丈夫。」

というわけで、その日の紅茶で、Ｙさんにしたお土産話を、ここでも少しおすそわけ。

「川越紅茶の時間」の13周年にあわせて、川越の仲間たちが実行委員会をたちあげ、1年半近くかけて準備してきた上映会、「大丈夫。～小児科医・細谷亮太の言葉」というドキュメンタリー映画のお話を。

□　□　□

映画がはじまって、最初に聴こえてきたのは、細谷先生の「私は、悲しい時に泣けなくなったら医者をやめるべきだと思っています」という言葉だった。

40年来、国際聖路加病院で小児がんの子どもたちを診てきている細谷先生。小児がんは、今では7,8割の子どもたちが治る病気になったそうだ。だけども、それでも見送らねばならない子どもたちがいることも、また本当のこと。

夏、子どもたちと一緒に行く北海道のキャンプは、もう15年続いているという。病気のことを告知された時のきもちを、語る子ども。将来、何になりたい？と訊かれて、お医者さんになりたい、とか、ソーシャルワーカーになりたい、と応える子どもたち。

キャンプ以外にも、聖路加病院の診察室で、細谷先生が子どもにお話ししている場面や、細谷先生が山形のご実家の医院で診察している場面。映画のナレーターも兼ねる先生の、自然な声、語り口、そして何度も口にする「大丈夫。」の言葉。

場面が暗転し、映し出されるのは、その折々の細谷先生の俳句。それも先生の、やわらかな筆の字で。

「がんの子の　おはなし会に　鬼やんま」
「生キ死二の　はなしを子らに　油照」
（夏のじりじり暑い日のキャンプ場で）
「みとること　なりはひとして　冬の虹」
「悲しきときのみ　詩をたまふ神　雁渡」

あんまりにもつらくて、悲しいことが続くと医者をやめちゃおっか、って思いたくなる時、先生にだっておありだそうだ。

だけど、それではあまりに申し訳ない、なんとか続けて行こうと思う時、俳句が生まれてくる。そうやって悲しみの底からたちあがる俳句が、先生の生きていく知恵のひとつでもあるらしい。

入院している子どもたちと、先生はいつも、いいこと探しをする。

吐き気がなくてごはんたべれてよかったね／昨日より緑がきれいでよかったね／今日お母さんが来てくれてよかったね／点滴一回で入ってよかったね。

そうか、この先生も、ちいさなよかったを、一生懸命に探すのかあ。いいこと探しをしてると、きもちが少しずつ元気になってくる、とも言ってらした。

毎日の暮しでも、紅茶でも、ちいさなよかったを、私も仲間も、いつも探してる。見つけたら、それを言葉にして伝えあう。

映画見るまでそうとは知らなかったけど、細谷先生と私たち、おんなじことしていたんだなあ、と、その場面が、とりわけうれしかった。

15年間が凝縮された、どの場面のどの言葉も、何気ないようでいて、一つひとつ、なんでこんなに心にしみるんだろ、響くんだろ。

「いのちを考えるときに、亡くなった人のことをベースにして考えると、本当によくわかりますよね」っていう先生の言葉を聴いた時に、あ、って思った。

細谷先生は病院で毎日、生きている子どもたちと向き合っている。だけどそれと同じか、もしくはそれ以上に、亡くなっていった子どもたちとも向き合っているんだ。

僕のこと、忘れないでね。いつも私のこと思いだしてね。もういなくなってしまった子どもたちから、そういうメッセージを確かに受けとっていると気づいてからは、もう医者をやめよう、って思わなくなった、という細谷先生。あの子たちを忘れない、ってことが僕のしごと、またそうすることで、僕自身も生かされている、と思うきもち。その哲学に裏打ちされているからこそ、医者という仕事を続けていけるのだろう。

――「大丈夫。」は、お祈りの言葉。

映画の最後に、この言葉がでてきた。映画をみてる間中、そう感じていたからなお、こころに響く。伊勢真一監督の編集も、ほんとにすばらしいドキュメンタリー映画だった。

上映後は、先生と監督による対談。こんな二人三脚トークを、もう150回もされてきているという。 すかさずインタビュー役の紅茶仲間が、「そんなにしてきて、いやになりません？」ってつっこんだら、楽しそうに笑いながらの、細谷先生のお返事がなんともすてき。

「いやになりませんねえ。それは、みなさんが紅茶の時間にいらっしゃるのと同じように、僕にとっての a kind of pleasure で」

お二人の息のあったかけあいトークを聴きながら、ああ、お医者さんが臨床以外の現場を持ってるって、なんて貴重なことだろう、と思った。

出逢った子どもたちから受けとったいのちのメッセージを、ライブでくり返し語れる場がある、ということ。語りながら、先生は何度もその子たちと再会するのだろう。そして、彼らのいのちを伝え続けていくこのしごとに、先生ご自身が、きっと何度も助けられたり、支えられたりしてきているのだろう。それがまた先生の、いま病院にいる子どもたちと向き合う、あらたな力になっているような気がした。

□ □ □

以上、映画「大丈夫。」からの、おすそわけお土産話でした。

「ふつう紅茶アルバム」の続きはまた次号で。

2013.8.24

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十三章
子どもの感性

親との時間

夏休みの屋久島はいつにも増して家族連れの観光客で賑わう。私の友人や知人が家族を連れて屋久島に来たり、屋久島を故郷とする家族が帰ってきて過ごしたり、屋久島に暮らしていても屋久島の大自然の中でゆっくりと子どもと遊ぶ機会をそう多く作れるわけでもなく、そんな家族の案内をさせていただくことが私の忙しい夏のひとつの楽しみでもある。そしてこの夏休みも初めての屋久島を過ごした家族に出会えた。いつも忙しく夜遅く帰ってくる父親の背中を彼はどのように見ているのだろうか。家族揃って出かけることはあっても父とふたりだけで旅をすることに緊張していたのだろうか。彼は言葉少なく私の話に応えていた。聞けば元々おとなしい性格だと言うが楽しんでくれれば良いな、とだけ願っていた。子供にとってはそれが屋久島でなくても何処でも良かったかもしれない。でも父は屋久島に連れて行こうと決めていた。

弟や妹がいて、母がいる家での時間とは違い、父が自分のことだけを見ている。屋久島の大自然にふれ、時間が経つにつれて彼の表情は豊かになってゆく。そこにあるのは特別な自然ではない。本来あるべき自然の中で、緊張はほぐれていったのかもしれない。

樹を見て森を見ず

大人にしてみれば､ガイドブックに載っている名所を巡ることが観光の大きな目的に思えてしまう。でも子供の感性はそこだけにはなく、でこぼこした山道を自分の足で歩くことが楽しかったり、そこに暮らす生き物たちを眺めていることの方が楽しいのかもしれない。目的地に向かって歩くことより、その森を楽しんでいる様子は、いつも大人が樹を見て森を見ていないことを教えてくれた。

大きな成長

海の水がしよっぱい、山を歩くのはしんどい、砂浜を歩くと靴に砂が入って痛いから嫌だ... など子供たちが自然を楽しむには入口から大きなハードルがある。自然の中で精いっぱい生きる生き物の姿はそこにいるだけで子供たちを成長させる。もっともっと楽しみたいと思うようになるのだろうか。気がつけば嫌いだったはずのことに自ら立ち向かっている。目の前で生きるチカラをもらっているのだろう。もちろん自然の中では、死に向き合うこともある。それでも目を背けず、しっかりと何かを感じている様子がはっきりと見える。

伝えたいこと

思えば、こうして都会で暮らす子供たちに日本の本当の自然の素晴らしさを伝えたくてネイチャーガイドという仕事を選んだ私。この夏は、限られた時間の中で、数家族と朝から晩まで一緒に過ごし、屋久島の自然を案内した。子供にとって初めて会う私は屋久島でいつも楽しいことをしていて、それが仕事だという。そんな仕事があることを都会で暮らす子供たちにしてみたら不思議かもしれない。でも、屋久島に帰ってきたら遊んでくれる人がいる、とでも覚えていてくれれば幸い。子供たちに伝えたいことは多くを語る必要もなく、この屋久島に来たら感じることの出来る日本の自然の素晴らしさを記憶の片隅にずっと残っていてくれさえすれば良いと思う。もちろん、その背景には日本が歩んできた時代があり屋久島ならではの歴史がある。それはまた大人になってから知って深く理解する機会があるだろう。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

お寺の社会性

― 生臭坊主のつぶやき ―

十二

竹中尚文

1. 病院長の怒り

先日、知り合いの病院長が怒っていた。患者さんが亡くなった。身寄りもなく、生活保護を受給していた。市の委託を受けた業者が遺体を引き取りに来た。誰も送る人がいないので、手の空いている病院スタッフがお別れをしようと言う話になった。その旨を市に問い合わせたら、お骨になったら連絡するので引き取りに来てほしいと言われたそうである。

私も同じような怒りを感じたことがある。今年の冬、門徒の方が亡くなった。その門徒の方も生活保護受給者であった。私は生活保護受給者の方からは御布施をいただかない。公金による御布施はいただけない。だから、ボランティアでお経をあげるつもりでお葬式に出掛けた。しかし、それも認められなくなった。市に委託された業者が遺体を引き取りに来る。それには誰も付き添えない。そして、お骨になったら連絡をするので受け取りに来いというのである。近所のおばさんが、「私らは、ゴミか？これって、ゴミと同じ扱いじゃない！」と言って泣いた。

病院長の怒りもこの点にある。

2. 死んだら終わり

ここ近年、生活保護受給者への風当たりは厳しい。また、貧困についても、何も知ろうともしないで自己責任で片付けてしまう。

仏の目から見れば、人間の歩みは氷の上を歩くようなものじゃないかと思う。たまたま厚い氷の上を歩いているが、知らずに薄氷を歩くこともある。また、踏み抜いて冷水に溺れることもある。だから、私は貧困を自己責任という言葉でくくることに与しない

生活保護受給者は死んでからもペナルティーを受けなければならないのか。生活保護受給者は人として送られてはならないのか。葬儀は贅沢なのだろうか。どうしてこんなことになったのか。

「私らは、ゴミか？」という発言があった。人間は死んだら、ゴミだと考える人もいるらしい。人間の死に、意味を考えない人がいる。他の言い方をしてみると、「人間、死んだらおわり」ということでもある。今、無宗教という言葉と共にこのような考えは広まっている。

無宗教を標榜する人は、お骨を拾わない。お骨を拾うと宗教行為が始まるのだから。無宗教という言葉は、死者と生きる者の断絶を意味している。

生活保護受給者の葬儀を認めないのは、私たちの社会の意識の変化によるものである。

3. 仏と私はつながっている

人間の考えや感じ方は、状況によって変わることがある。仏は私と一緒にいると言っても、見えるのか？触れられるのか？と言われそうだ。仏の存在についての水掛け論をするつもりはない。

私は、人の臨終に呼ばれる。そこで、いわゆる枕経を上げるのである。その時、「人間は死んだら終わり」とは誰もが思っていない。誰もとは言い過ぎかもしれないが、ほとんどの人はそんな風に思っていない。この時、人は亡くなった方と縁が切れ

たとは思わない。死んでも繋がっているのである。

4. 念仏の力

長野さん夫婦は駆け落ちをしてきた。今では駆け落ちなんていう結婚形態を聞くことは少ない。ちょっと昔のことである。長野さんは、私たちの寺の門徒になった。夫婦で一生懸命に働いて家も建てた。夫、次いで妻と相次いで亡くなった。若くして亡くなったとは言え、息子は成人していた。一度は会社勤めをしていたが、母親の亡くなった時には会社を辞めて家に居たようだった。その後、彼はアルバイトなどで生活をしている様子だった。祥月命日のお参りだといっても、仕事で不在だからと断られることが多かった。その内、だんだん自宅にいることが多くなった。身体の調子が悪いので、あまり仕事に行けないと言う。それと共に、経済状態が悪化しているように伺えた。時々、食べ物を届けるようになった。

久し振りに彼の近所を通りかかったので、訪ねてみた。げっそり痩せた彼がふらふらと出てきた。「どうした？どこが悪いのか？」と尋ねた。食べ物がないと答えた。食べていないだけではなさそうだった。彼の言動が少し、気になった。ツテを頼って彼を精神科の病院に連れて行った。食事をしていない彼の健康状態を併せて診てほしかった。診断の結果、彼を入院させた方がいいと言われた。

私は、入院をすれば食事もちゃんととれるし栄養状態も改善すると思った。彼は入院をしたくないと答えた。彼の病気が予想外に進んでいることに気が付いた。それから「入院しろよ！」「いやだ！」というやり取りがあった。その間も彼の病状は目に見えて悪化した。彼が「いやだ！いやだ！」と叫ぶように言っているときに、私は「誰があんたの親を送ったのだ。親の言っていることだと思って聞け！」と叫んだ。彼は急におとなしくなった。翌日、彼は

入院した。一ヶ月後には、彼は血色もよくなって退院した。

こう言うと、彼が入院をしたのは私の言葉によるように聞こえるが、そうではない。私の言葉で、彼は母親の思いを思い出したのだろう。入院してから分かったのだが、彼の母親は亡くなる前に彼を病院に連れて行き治療を受けさせていたのだった。母親は、彼の病気のことやその先のことを心配しながら亡くなっていった。その思いを彼は知っていたのだ。だから、「親の言っていることだと思って聞け！」という言葉に反応したのだと思う。彼は、病気の中でも亡くなった母親の思いとつながっていたのだと思う。

私は彼との出逢いの中で、いろんな事を学んだ。病気になることの辛さ。病気は人間の誰もがなる可能性がある。また、その中で彼の人間性を保とうとする力、それは充分に尊敬に値する彼の力である。それは仏とつながっていることに支えられている力であるかもしれない。

坊主の言い方ではあるが、仏と人間はつながっている。仏を思う、すなわち念仏である、その念仏には力がある。

5. 仏によって

この夏に富山さんが亡くなった。数年前に富山さんのお兄さんが亡くなった。その七日参りで聞いた話しである。彼はお経と法話の後、お茶を飲みながら、唐突に語り出した。

富山さんは 40 年ほど前にお嬢さんを交通事故で亡くしている。そして 20 年ほど前に経営していた会社が倒産した。その時の話しである。

あの日、富山さんは金策に走り回ったそうである。どうしてもお金が作れなかった。どうしようもないと思った。このまま命を絶つしかないと思ったそうである。最後にお嬢さんの亡くなった場所に行こうと思ったそうだ。できれば、そこで死にたいと思ったそうだ。

その場所に自動車を停めて、時間が止まったような時間が流れた。こ

のままここで死んだら、娘に会わす顔がないと思ったそうだ。それから、彼は山あり谷あり谷ありの人生を送って、この夏に亡くなった。決して楽な人生ではなかったが、いい人生を送った。一生懸命に生きた。

あの時、お嬢さんのことを思わなければ、富山さんのこの人生はなかったかもしれない。あの時だけではない、富山さんは、ずっとお嬢さんのことを思いながら人生を送ったような気がする。

そして、今年の暑い夏、富山さんはやっとお嬢さんと出会った。

人の死に出会うことによって、私の人生に意味を持つのである。

こころ日記

「　ぼちぼち　」

(9) 同じ親なのに…

脇野　千恵

同じ親なのに…

　中学校の３年間はあっという間に過ぎていきます。まして教師の立場からすれば、何度も繰り返す学年配置に、教える内容も把握しているので、ついつい変化のない授業をしてしまいがちなのですが、慣れというのは、本当に恐ろしいなあと思います。

　とはいえ、入学してきた子どもたちの様子を見ながら、３年間を見通しての学習計画を立てていくのが常となっています。特に３年間での学習の成果によって、子どもたちの進路先が決まってきます。義務教育最後の３年間でどのように育てるのかが、私たち教員の大切な仕事です。小学校の６年間でつけた力を基礎にしながら、中学校３年間で、少しずつ進路について考えさせていきます。高校入学が最終目的ではなく、この子の１０年後はどうだろうか？などと想像しておかなければならないと考えています。

　しかし、最近は生活に慣れるのに精いっぱいの一年生でも、早くから進路について不安を感じる生徒がいます。

「先生、私の今の成績で〇〇高校に行ける？」

「偏差値どれだけ取ればいいの？」

　という質問に、行けるとも行けないとも言えず、いつも返答に困ってしまいます。

　まだ一年生なのに、もう進路を決めたがったり、あきらめてしまう子が多いのにはびっくりです。生徒の半数程がスマートフォンを持っている現状の中、私たち教師よりも色々な情報を得ています。進路の情報も、親子共に翻弄されている

状況があるのではないかと思っています。

小さい時から母親が病弱で、父親が懸命に子育てをしてきた家族がいました。長男が高学年の時、看護の甲斐なく母親は亡くなってしまいました。二男の弟はまだ小さく、母親の死が理解できていたかどうかわかりません。

長男Ｋ郎が中学校に入学し、担任を持つことになりました。ある程度の家族の情報を得ていたので、家庭訪問時には、自然と母親の不在についての話題になりました。

父親は、早くから母親は病気だったので、子どもたちもその生活に慣れていたこと、そして、母親の死についても受け入れているのではないかといった話をしてくれたと記憶しています。

父親は、会社員。父子家庭を何人か見てきていますが、実にきちんと整理整頓された暮らしに、少々驚きました。日々の学校への行事や、連絡など不備があったことは一度もありません。よくできた父親だと感心したものです。

Ｋ郎は、２年生の時も何の問題もなく、部活動や学業に励む学校生活を送っていました。３年次、また再び彼を担任することになりました。１年時より、身長も高くなり、思春期を迎えたちょっと大人な少年になっていました。どちらかというと、寡黙でシャイな性格。褒めても、嬉しいという表情をあまり出さない。本当に心の内が想像しにくい子でしたが、思春期にある子どもたちは、ほとんどがそのような感じなので、あまり気にも留めませんでした。

３年生になると、夏の部活動の引退とともに、検査によって高校合格が決まるという、人生初の厳しいハードルを越える時期がやって来ます。そのプレッシャーに押しつぶされそうになる子が、入試に近くなるとぞくぞくと出てきます。あのいつも冷静なＫ郎もその一人でした。

夏休み明け、２学期がスタートしたころから、彼は休み時間でも必死に受験勉強をする姿が見られました。それまでは、休み時間に好きなキャッチボールをしたりと、友だちとの時間を大切にしていました。

しかし、あまりの勉強の熱心さに顔つきもこわばり、ますます笑わない生徒になっていったので、心配して面談をすると、

「先生、僕は□□高校に絶対入って、Ｋ大に入ります」

と、強い口調で言いました。私は説教が嫌いなので、相手の言葉に傾聴するということに徹しています。一度も彼に、勉強頑張らなくては、などと言った覚えはありません。むしろ、もう少し肩の力を抜いてみたら？といったアドバイスをしたくらいです。Ｋ 郎の成績は、頑張りに反比例し、悲しいかなドンドン下がっていきました。しかし、最終進路先を決めるにあたって、親子ともに□□高校への受検を頑としてあきらめませんでした。

担任としては、できるだけ失敗をさせてはいけないと、安全パイを勧めます。これは長年の勘というものでしょうか？Ｋ 郎が□□高校に受かる確率は、とても低いと思っていました。

残念なことに、私の勘は、現実のものとなってしまいました。結果を知った彼が、大丈夫だろうかと心配をしましたが、卒業式の次の日、礼を言いに学校にやって来ました。

「先生、僕頑張ります。絶対Ｋ大に入りますから！」

そういった彼の言葉が、今でも忘れられません。なぜ彼は、そこまで頑張ろうとするのか？私にどう言ってもらいたかったのか、まだまだ頑張るので見ててくださいというメッセージなのか、今でもその真意を考えることがあります。

Ｋ郎の弟？

さて、弟が入学してきました。Ｋ郎の弟とはつゆ知らず、大変な子が入ってきたというううわさだけが耳に入ってきました。

朝の打ち合わせで、弟のＭ志の問題行動が毎日のように報告されていました。

例えば、思春期にありがちな深夜徘徊、窃盗、万引き、恐喝などなど。１年生からその子を中心に、学年は落ち着かない状況になっていきました。学校で指導を受けると暴れる、どの教員にも暴言を放つ。こんな生徒は、山ほど接してきていますが、根底にあるものは、大人への信頼の欠如だと考えられます。小学校の先生、あるいは家庭の中でのＭ志との関係はどうだったのだろうか？

しかし、相変わらず学校では、手に負えない生徒は１４歳まで何とか持ちこたえ、それを越えれば一気に更生させてもらえる
所へ、というビジョンを持っていました。何度も担任をする中で、警察のお世話になる生徒もいましたが、何とか施設送りだけは回避してきたつもりです。本当にその子にとって、処罰的な対応が子どもを良くするのかと、今でも自問自答する毎日です。

Ｍ志の父親は何度も学校に呼ばれ、今後について教師から指導を受けました。父親は、家でも暴れ出し手に負えないので、もう他機関に任せたいという意向を示しました。

最近気になるのは、家庭的に基盤があるにも関わらず、子どもの荒れに対して、施設に預かってほしいと、本気で申し出る親が目立つことです。これは育児放棄というのでしょうか？

一方で、発達障がいではないかと訴える親がいることも気になります。思春期の子どもはとても繊細で、毎日心は揺れ動き、色々な葛藤と闘っています。友だち関係に日々気を使い、一緒懸命生きています。子どもの荒れにきちんと向き合おうとしない親と教師の何と多いことか。

実は、Ｍ志と兄のＫ郎とは良い関係ではありませんでした。母親を亡くした時は、兄よりもまだ小さい頃です。いくら父親が手を抜かず子育てをしていたとはいえ、その時期母親代わりをしてくれる人がいたか、彼を理解する人がいたのかが気になります。

父親からは、賢くて努力家だった兄と常に比べられて大きくなったＭ志。Ｋ郎がＫ大に行くと言ったのも、どうも父親の学歴第一の考えに影響されてのことだったようです。当時、外見からは想像できなかった本当の父親の姿が、Ｍ 志の父親であることを通して見えてきました。

Ｍ 志は、父親を憎んでいました。こんな自分にしたのは、すべて父親だと思っています。兄はうまくやった。Ｋ 大には入れなかったが、それなりの名の知れた大学に入ることができた。自分は、勉強もできないし、父親から嫌われている。進路なんてどうでもいい。と保健室で吐露したそうです。

私はＭ 志が卒業間近になって、初めてＫ 郎の弟だということを知りました。そうだったのか。

Ｋ 郎はとても頑張り屋だから、家の中では、Ｍ 志は息が詰まる毎日だったろうなあと想像できました。

同じ親であるのに、どうしてこのような違いが出てくるのでしょうか？父親は、Ｍ 志にも同じように勉強をさせ、それなりの期待もしたことでしょう。しかし、期待されることに反抗できたのは、弟のＭ志だったのかもしれません。兄のＫ郎は、□□高校からＫ大に行くという父親の期待に応えようと、だからあんなに頑張っていたのだということがわかりました。

父親にとっては大変だったかもしれませんが、感情の起伏が激しいＭ志の方が人間らしくていいではないかと思いました。

勉強だけがすべてではないと言いながら、高校入試を優先させ、そこから落ちこぼれた子は、親でも疎ましくなるものなのかと。

やがて、弟のＭ志も卒業していきました。どうにか入学できる高校が見つかり、元気に通学していると聞きました。

将来、父親とこの兄弟はどのような関係をもって暮らしていくのでしょうか。１０年後の彼らが、あの時はああだったこうだったと、思春期の頃のことを語れる仲になっていてくれればと思います。

（中学校教員　　脇野千恵）

第12回　これからの男性援助を考える

男性のライフサイクルから職場のメンタルヘルスを考える

坊隆史　松本健輔

はじめに

現在、うつ病をはじめとする精神疾患患者数は平成 23 年には 320 万人を超えた（厚生労働省、2012a)。その中には仕事に就いている人も多く、在職者の精神疾患による休業や生産性の低下は企業の経営課題に直結する社会問題となっている。そのため職場のメンタルヘルスは医学や心理学などの対人援助の学範のみならず、経営学や法学の新たな研究領域としてそれらの概論書にも紹介されつつある（例えば井形・池島・北村、2012)。産業現場においても職場メンタルヘルスの専門家サービスであるＥＡＰ（従業員支援プログラム）を導入する企業が増加するなど、メンタルヘルスがひとつの産業として盛り上がりをみせている。伝統的な性別役割観で「男は仕事、女は家事」と叫ばれてきたように、男性と労働は強く結びついている。今回は職場のメンタルヘルスをキャリアやライフサイクルを中心に考え、男性援助につなげていくことにする。

キャリアとライフサイクル

職場のメンタルヘルスの領域では、その不調について精神医学や精神保健学の観点から検討されることが多い。とくに仕事のストレスと疾病の関連についての研究は数多く報告されており、その知見は職場のメンタルヘルスの援助実践でも幅広く活用されている。例えば米国国立安全衛生研究所(NIOSH)が提唱した職業性ストレスモデルをもとにした作成された職業性ストレス簡易調査票（厚生労働省、2005）は、仕事の質と量、上司や同僚の支援の数量的評価からメンタルヘルス疾患の一次予防（未然予防）につなげる信頼性と妥当性の高いツールとして用いられている。現在ではその改訂版である新職業性ストレス簡易調査票（厚生労働省、2012b）が広まりつつある。

こうした医学的視点や職場に顕在化しているストレッサーからのアプローチは職場のメンタルヘルス対策の核心ともいえるが、それらに加えて近年はキャリアやライフサイクルの観点からも職場のメンタルヘルスについて語られる機会も増えつつある。Hall（1976）はキャリアを「個人の生涯を通じて、仕事に関わる諸経験や諸活動に関連した態度や行動の、個人に知覚された連鎖」と説明している。現在では初等中等高等教育でキャリア教育が学習指導要領に含められており、それぞれの段階に応じた社会的・職業的自立に向けて必要となるキャリア教育が行われている。厚生労働省も主に青年期に対しての職業能力開発、就労支援というキャリア支援を実施しており、キャリアと言う言葉がより身近になっている。

ところが、Hall の定義でもあったようにキャリアは生涯つまりライフサイクルを通した視点が大切であるにも関わらず、成人期以降のライフサイクルはこれまであまり重視されてこなかった。日本の場合、一度就職をすると年功序列の終身雇用が前提であったため、30 歳代以降のキャリアについて考察を深める必要性が少なかったということも考えられよう。ところが、1990 年代のバブル崩壊、近年ではリーマン・ショックなど経済危機に加え、雇用形態の多様化や各種企業や団体の統廃合が繰り返され、画一的なキャリアモデルだけでは現状にそぐわなくなってきている。こうした労働環境の変化と時を同じくして、職場のメンタルヘルス問題が顕在化されるようになってきており、現状にマッチしたキャリアモデルを再構築していくことが重要となっている。とくに成人期以降のライフサイクルや発達課題を再検討していくことは目下の課題であろう。

こうした現状において、組織開発やキャリア発達の研究者たちはメンタルヘルスにおけるキャリア発達や成人のライフサイクルの重要性を指摘してきた（石橋、2012 など）。ところが実際の職場のメンタルヘルスの援助場面ではまだまだ浸透していないように思われる。これは後述の事例でも紹介するが、メンタルヘルス不調者が出現するとどうしても目の前に出現している疾病性に注目してしまい、その背景にあるその人のキャリア観や志向性に焦点があてられることが少ないからである。

一方で南（2003）が男性のキャリア発達の特徴を「男性にとっては『職業生活』の領域が極端に肥大している」と指摘しているように、男性のた

めの職場のメンタルヘルス支援においても男性のキャリアやライフサイクルの視点は必要である。こうした指摘に先駆け、Levinson,D（1978）が男性 40 人の個人史から成人期（とくに男性）のライフサイクルおよび発達課題について検討したことは男性援助にとっても意義深い。そのライフサイクルのあり方は次頁の図に示しているように成人期が重視されている。さらには男性の発達に焦点を当てており、こうした成人ライフサイクルや成人キャリア発達の視点を活かして支援をしていくことはこれからの男性の職場のメンタルヘルス支援のヒントになるのではないだろうか。Levinson,D のライフサイクルに沿った男性援助に関する考察は次回以降に深めていきたい。

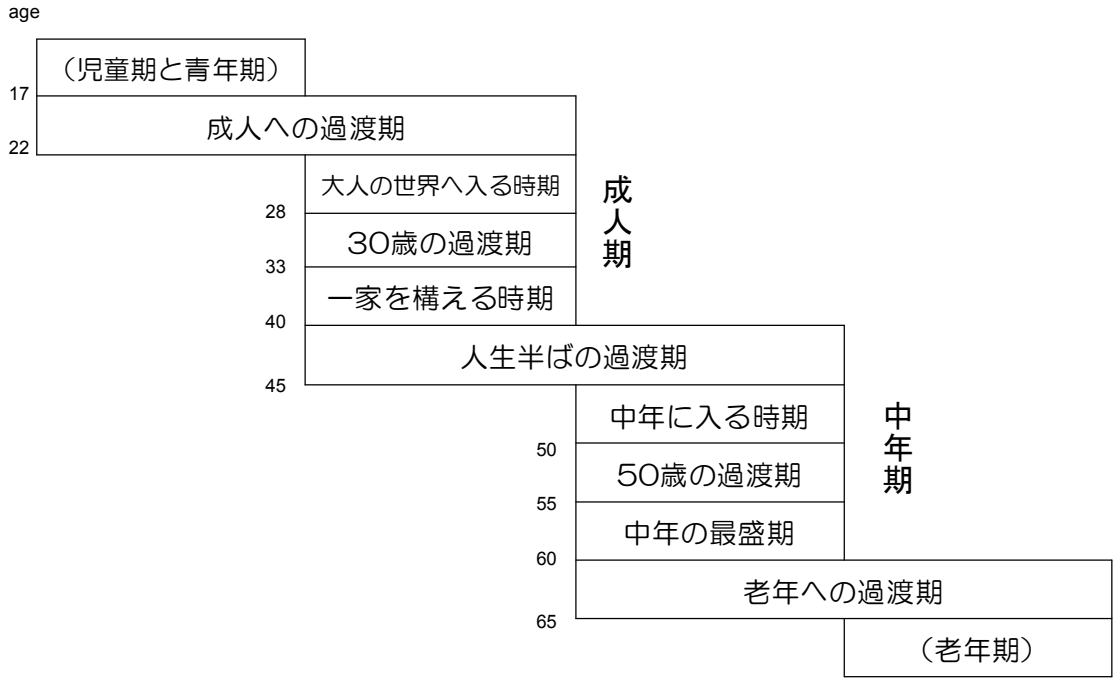


図. レビンソンのライフサイクル(Levinson,D.J. 1978を南(1980）が訳)

ライフサイクルの視点からみる男の仕事上の悩み

これまで職場のメンタルヘルス支援にはキャリア発達やライフサイクルなど生涯発達心理学の視座を含めて検討していくことの意義と、仕事に依存してしまいがちな男性の援助に活かせる可能性について述べてきた。ここではライフサイクルの視点で捉えたことで効果的に援助することができた男性の職場メンタルヘルスに関する相談事例を紹介する。筆者が相

談を受けた類似した複数の事例を組み合わせたものである。特定の個人の事例ではないことをご承知おき頂きたい。

Ａ氏　30 歳代　営業職

四年制大学を卒業後、大手製造業に入社したＡ氏。Ａ氏は営業職に配属され、持ち前の誠実さと明るい性格から顧客の印象は良く、順調に受注を増やし、表彰を受けるほどの成績をあげた。年々成績を順調に伸ばし、将来の幹部候補生として上司の期待も高かった。入社 4 年目に結婚をして、仕事と家庭ともに周囲が羨ましがるほど充実した日々を送っていた。

高い実力と誰からも好かれる人柄のため、難易度の高い仕事や後輩の指導が増えていったものの、難なく仕事をこなしていたＡ氏。ところが入社して８年目に突然、欠勤が増えはじめた。繁忙期でもなく、難易度の高い仕事もここしばらくは特にみられなかった。翌日の出勤のことを考えると緊張して睡眠が充分にとれず、その結果事務スピードが低下し、残業が増え、ますます会社への足取りが重くなるという悪循環。ほぼ全部残っていた年次休暇を７割ほど消化した時点で、上司が Ａ 氏の不調に気づき、企業内の心理士の面接を受けることとなった。

＃１　Ｘ年Ｙ月

Ａ氏と心理士の初顔合わせ。心理士は入社から現在までの経緯と現在の体調面のことを中心にＡ氏から話を聴いた。今回の不調はＡ氏自身心当たりがなく、それがゆえに不安で仕方がないという。妻は欠勤が増えていることを心配してくれていて専門医受診を勧めてくれているが、敷居が高くて受診していないとのこと。心理士が信頼性と妥当性が確認されている質問紙検査を実施したところ、中程度の不調レベルであった。結果をフィードバックした上で専門医受診が望ましいが、心理士との面接を継続すること、上司と心理士との連携を了承してもらうこと、一定の勤怠と業務パフォーマンスの目標値を設定してそれが満たされなくなったら専門医を受診することに同意してもらった上で医療機関には行かないこととして面接を終えた。

＃２　Ｘ年Ｙ+１月

＃１より４週間経って勤怠状況はやや改善したものの大きな変化はない。仕事の内容、職場環境、家庭ともに不満はないという。この時点で心理士は専門医受診を勧めようと考えていたが、「こんなことになるなんて入社時点では考え

もしなかった」とＡ氏が何度も繰り返すことが気になり、大学時代の様子、入社までの就職活動のことなどを尋ねた。その中で大学は法学部出身で漠然と法務関係の仕事をしたいという希望はあったものの強い願望はなく、周りに流されるがまま就職活動をし、とにかく社会的評価の高い（就職人気ランキングの高い）企業にエントリーをし、たまたま一番先に内定をもらったこの企業で貢献していくことを決めたという。法務という希望では内定をもらえないと感じたＡ氏は内定をもらえることを重視して採用面接時に営業を希望したという。入社後は営業の仕事に面白さを見出し、順調に職業生活を送ってきた。ところが 30 歳を過ぎ、業務が増えるに従って「このままでいいのか？」、「本当に自分のしたかったことはなんだろう？」と考えることが増えてきたことが語られた。心理士はＡ氏が過去の出来事を率直に話してくれたことを評価しつつ、および職業アイデンティティの揺らぎ、また男性ジェンダーの視点から 30 歳代の既婚男性の悩みについて解説をした。Ａ氏はこれまで職業アイデンティティやライフサイクル上の課題と心身の不調を重ねて考えたことがなかったらしく、こういう視点からメンタルヘルス不調を考えることができると驚いたと同時に何らかの気づきを感じたという感想が語られた。前回の取り決めを継続することに同意を得た上で今回もすぐに医療機関を受診することは見送ることとした。

＃３　Ｘ年Ｙ+２月

＃２から４週間後の面接。Ａ氏よりこの４週間は自分のやりたいこと、ライフサイクルについて内省を続けたことが語られた。また入社の経緯や現在の迷いを妻に初めて相談し、妻からは厳しくもサポーティブなコメントがもらえたらしく、「妻とこんなこと（職業アイデンティティの揺らぎ）を話せるなんて」とＡ氏は苦笑いしつつも嬉しそうに報告してくれた。この４週間の間に「経済的な事情からこの会社を辞めるわけにはいかない。でもいつかは法務関係の部署に挑戦したいことを上司に伝えつつ、それまでは営業で自分を鍛えようと思う」と考えられるようになり、「なんだか腹をくくれた気がした」という。まだ不眠は多少残るものの、気持ちはずいぶん楽になり、出勤に影響が出ることはなくなった。まだ注意は必要ではあるものの、症状が改善したこと、なにより不調についての内省ができたことから定期的な面接を終結することにした。上司に対してはＡ氏に了承をもらった上で、上司に今回の不調の経緯を説明し、変化があれば心理士に相談して欲しい旨を伝えた。

Ａ氏の事例はご覧の通り、一見医療的ケアが必要そうだが、心理発達的なアプローチ（その中には男性ジェンダーの視点も含まれる）により危機

状態を乗り越えた事例である。＃１の時点で医療専門職へつなげなかったことには議論の余地があるかもしれない。なぜなら睡眠不足で会社への足取りが重くなり欠勤が増えたとなると、一般的な職場のメンタルヘルス支援では専門医の受診および産業医面談がファーストチョイスとなることが多いからである。ところが医療的ケアでは気分の低下や睡眠不足などの疾病性のケアはしてくれるかもしれないが、必ずしも心理発達的な視点でのケアをしてくれるとは限らない。そういう意味で心理士につながり、キャリアやこの時期独自の男性の心理発達の側面から語りを重ねることができたことは、Ａ氏にとっても対処療法でなく、今後の職業生活につながる長期的なメンタルヘルスケアにもつながったのではないだろうか。

Ａ氏が就職活動の時点でやっていきたい仕事に向き合えば良かったというご意見もあろうが、筆者はＡ氏を責めることはできない。サバイバルのような就職活動では、とにかく内定をとりたい、ということを優先させる学生が多くおり、その戦略を否定することができないからである。入社前のキャリア観が育成されることが理想であるが、現状の教育環境では難しい。そのため学生たちの受け皿である企業側もＡ氏のようなメンタル不調があるということを想定して対応した方が合理的かもしれない。そうなれば、やはり医療的ケアだけでなく心理発達的なアプローチのメンタルヘルスケアが必要ということになろう。

おわりに

―ほとんどの男性は自分の人生を生きていない―

これはオーストラリアで家族の問題に取り組んでいる臨床心理学者のビダルフ（Biddulph,S）が「男の人って、どうしてこうなの？」の冒頭に記した言葉である。「男は〇〇であるべき」といった伝統的な男性ジェンダーや、職業生活が肥大したキャリア発達観により、男性の人生は固定的になりがちである。こうした男性の生き難さを表現している名言ではないだろうか。

現在の日本も同様の傾向がみられる。多種多様な生き方が認められているとはいうものの、成人期の男性はどうしても何らかの形で働いていることが求められる。その中には就労に楽しみを見出している男性もいれば、仕事以外の楽しみのために働いている男性もいるし、生きるためにやむを

得ず惰性的に働いている男性もいるであろう。自分の人生を生きるために仕事とどのように付き合い、どのように折り合いをつけていくか、男性を支援していくにあたり切り離せない課題ともいえる。男性ジェンダーと職場のメンタルヘルスについては次回以降の執筆者（坊）の担当回でさらに深めていくことにする。今回はこれにて一旦クローズ。

文献

Daniel J. Levinson　1978　The Seasons of a Man's Life [南博（訳）1980 人生の四季―中年をどう生きるか　講談社]

井形浩治、池島真策、北村實（編）　2012　経営と法―学びのエッセンス（第 2 版）　中央経済社

石橋里美　2012　キャリア開発の産業組織心理学ワークブック　ナカニシヤ出版

厚生労働省　2005　厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究事業「職場環境等の改善等によるメンタルヘルス対策に関する研究」
URL　http://www.tmu-ph.ac/topics/stress_table.php

厚生労働省　2012a　患者調査
URL　http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/10-20.html

厚生労働省　2012b　厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究事業「労働者のメンタルヘルス不調の第一次予防の浸透手法に関する調査研究」
URL　http://mental.m.u-tokyo.ac.jp/jstress/

南隆男　2003　キャリア開発の課題　金井壽宏（編著）　会社と個人を元気にするキャリア・カウンセリング　日本経済新聞社

Biddulph,S　1994　MANHOOD　Finch Publishing Pty Limited　[管靖彦（訳）　2003　男の人って、どうしてこうなの？　草思社

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（１０）

～第Ⅴ章　克服期

～今、事故と向き合って～～

中村周平

今回は、大学院進学後、修士論文のテーマに悩む院生生活について触れていきたいと思います。卒業研究、修士論文で「スポーツ事故」に焦点を当てようと試みたのですが、どうしてもテーマとして選ぶことができませんでした。無意識のうちに、そのテーマを避けようとする自分がいました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を

手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=H とする。

1　修士論文におけるテーマ

大学院進学後、修士課程で研究しようと考えていたテーマは、学部の卒業研究でおこなっていた「障害学生支援」でした。私が学部時代にもっとも時間を費やした研究であり、日々支援を受けながら大学生活を送っていた当事者でもあったことから、私の中で数少ない研究を深めていけると考えていたものでした。しかし、卒業研究のテーマを考えた時、この「スポーツ事故」を取り上げたいという思いもありました。

S:「うーん、調停が終わったのが 2008 年の 12 月頃だったので、その頃にちょうど卒論書いてたんですよ。(中略)ただ、そのとき、二つ卒論のテーマで迷ってて…一つは『障害のある学生の支援』。自分が大学に入ってから、こういう支援があって、こういう風に支えられてるっていう。もう一つは、『スポーツにおける事故』のことを。実は中村先生(担当教員の方)に、進学のことでご相談したことがあって。その時に『スポーツの事故はどうなんや？』っていうアドバイスを頂いてたんですけど。(中略)中村先生のところをお伺いしたときに、その前に同志社のラグビー部で講演したことがあって」

I:「大学に？」

S:「はい。実は、同志社大学のラグビー部が 2007 年のお正月くらいに不祥事を起こして、警察沙汰になって。そのあと、再発防止委員会みたいなのが立ち上がったときに、調停でお世話になった弁護士の方がメンバーでおられて…。その方も高校でラグビーをされてた方だったんですよ。そのこともあって、再発防止の検討会の一環で『君の体験を話してくれへんか』ということでお話いただけて。それを話したのを、たまたま、ある新聞が取り上げてくれはって」

I:「そうなんや、へぇー。」

S:「はい、関西地域限定やとは思うんですけど、ちょっと載してもらったのがいろんな人の目に入ったみたいで。先生が一回『これについていろいろ教えてくれへんか』みたいな話をしてくれてはったんで」

I:「先生もそれを見てはったわけや？」

S:「はい。テープとかで録音できてなかったので、一応、自分が憶えてる範囲の文字おこし…パワーポイントとレジュメと記憶をたどりながら文字おこしをして、先生にお送りしたこともあって、二つのテーマで卒論を迷ってました」

I:「なるほど」

S:「ただ、調停が終わってなかったことと、調停の内容が自分の思いとはかけ離れてたこともあって、踏み切れなかったですね」

I:「そっちを取らへんかったわけやな？大学における障害者の支援のことについて、のことを選んだわけや」

S:「そのほうが、この…」

I:「書きやすいわけや」

S:「書きやすいですよね、やっぱり」

私や家族の人生を大きく変えることとなった学校のグランドでの事故。私の人生にとっても大きな出来事でした。担当教員の方の助言もあり、どちらのテーマで卒業研究をおこなっていくか迷っていました。しかし、その当時は調停の最中であり、一向に終わりが見えないことに大きな不安を感じていました。卒業研究として深めるには抵抗があったのだと思います。調停が終わっても、かかった時間の長さと、失ったものの大きさから、これ以上「スポーツ事故」について触れたくない、これ以上周りの人からいろいろ思われるようなことはしたくないという思いがありました。

2　「スポーツ事故」を考えていく中で

大学院進学後、初めての個人発表を控え、担当教員の方にオフィスアワーをもっていただきました。その際、「スポーツ事故」についても話題にあがることがありました。

S:「ホンマに夏ごろまでは他大学へヒアリングとかも行って、障害学生支援の現状を関西だけでも把握できたらなって思って、やってまわって。A3両面刷り2枚くらいにまとめて、それを持って中村先生のオフィスアワーに行ったんですよ。先生も障害学生支援の方にも興味を持ってくださったんですね。ただ、『君はもうひとつテーマ持ってるのに』っていう話をしてくれはって、そのことについても少し触れてみたらっていうアドバイスをくれはったんで。最後に箇条書き程度にその事故のことを書いて、初めてのクラスターで発表したときに、自分が短い期間ではあるんですけど裏付けを持ってやってきたものよりも、最後に書いた3,4行に先生方も『すごく興味のある問題やね』っていうことを言ってくださって。そのときに、あらためてこのスポーツの事故っていうことがあまり知られてなくて、それを進めていくこと。ある意味ドロドロした部分と、もう一つはやりがいですよね。そういうことに初めて気づいた、こんなに重みのあるテーマなんかなっていう…自分で言うのもあれなんですけど。で、その後、どうするかを迷って…」

先生方から「スポーツ事故」について多くのコメントをいただくことになり、それがもつ社会的な意味の重さについて、あらためて感じることになりました。ただ、テーマとして扱うことを決心するまでには至らず、次の発表までに今後どのようにしていくか、私の中で模索することとなりました。

ちょうどその頃、宝ヶ池球技場でおこなわれる高校ラグビーの全国大会京都府予選の決勝を久しぶりに観に行くことになりました。調停を起こしてからの3年間は、全く見に行く機会がなかった、というより観に行く気持ちになれませんでした。

S:「発表と発表の間に、たまたまうちの後輩ら成章高校と伏工の決勝戦観に行ったんですよ」

I:「ほー」

S:「ほんまに久々やったんですね。調停の最中はどうしても行けなくて」

I:「そりゃそうやわなぁ」

S:「調停が終わって初めての11月に行って、そのときに空気が変わったんですよ。僕がスタンドに入った瞬間に、今までにぎわってたグランドが急に静かになったりとか、成章の応援団の前を通ったとき、みんな僕のことは知ってるんですけど、当然誰一人声は掛けてこないし、僕もホンマに知ってるっていう人だけパラパラっと掛けてきてくれはる感じで。なんかその場の空気がすごく気持ち悪くて…」

I:「なるほど」

S:「すごい居づらい雰囲気やったんですよ」

I:「なるほど」

S:「そのときに、なんで後輩応援しに来ただけやのに、こんな思いせなアカンのかなとか、居づらい雰囲気はなんなんかなとかいうのが、すごいひかかって。それが自分自身、ずっとこのテーマで書けなかったこととか、調停では深めてきたけど自分の言葉を持って外へ発信していくことが、若干抑えていた分…いろんなことを考えることになって」

私が球技場に足を踏み入れた瞬間、何も悪いことはしていないのに、この場にいることが良くないことのように感じました。「自分は、ただラグビーが好きで試合を見に来ている。自分の母校が出ているならなおさら応援したい気持ちだってある。なぜラグビーで事故にあったというだけでこのような思いをしなければならないのか」。私の中で、今まであえて遠ざけてきた「スポーツ事故」のことをあらためて考えていました。このままではいけないのではないかと。

平成２５年７月１６日付の朝日新聞に、自身の事故について取材しいていただいた記事が掲載されました。

http://www.asahi.com/shimen/articles/TKY201307150537.html

記事に書かれていたことは、確かに10年前の自身の気持ちでした。原因がわからないことや、

徐々に感じていく周囲との温度差に憤りすら感じていました。

でも今回、自身が何より伝えたかったことは、そういった過去ではなく、「今」でした。

スポーツ事故をテーマに、修士論文を進めていく中で、何度も自分の過去を振り返りました。そして、「被害者」の立場でいることで、事故と正面から向き合うことを恐れている自分がいることに気が付きました。自身が事故の被害者として、学校や指導者に反省を求めてしまう姿勢でいたことや、相手の立場になって思いを巡らせられなかったこと。それが、原因究明をより困難にし、再発防止の妨げになる、一つの要因になっているのではないかという、客観的な視点に繋げることもできました。そして、事故から７年後、かつての指導者の方々にその想いを伝える機会を作っていただき、お互いの当時の想いや葛藤を共有することができました。

自己満足かもしれません。でも、この数年の成章高校の先生方や、ラグビー部の指導陣の方々との関わりのなかで、長い歳月で開いてしまった大きな溝を少しずつ埋めてこれたのではと思っています。

自分の過去を振り返る機会をくださった大学院の先生方、事故ともう一度向き合いたい自身の想いに応えてくださった成章高校の指導陣の方々、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、そんな今を、自身の事故を知っている、もしかしたら、自分の事故で心に大きな傷を負ってしまったかもしれない方々に伝えたいという気持ちで取材を受けました。そして、自分がラグビーを好きでいられた一番大きな存在である、中学高校時代の先輩方、同期、後輩にも、事故のあとに伝えられなかった、ラグビーをやってて本当によかったという気持ちを伝えたかった。

大変恐縮ですが、この場をお借りして、本当に伝えたかった想いを書かせていただきました。最後まで読んでいただきありがとうございました。

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第９回

脱精神科病院 「わが国の脱精神科病院②」

三野 宏治

前回まで二回にわたり明治初年から大正期における精神病／障害者がおかれた状況について、関連法（精神病者監護法と精神病院法）成立過程での議論をもとに紹介した。少ないながらも明治期から大正初期にかけ精神科病院がいくつか建設され、精神病／障害者（その他の者）が収容（治療？）をされた。同時期に呉秀三を始めとした精神科医の幾人かは政府に対して「公の責任において精神科病院建設をすすめるよう」働きかけを行った。他方、政府は精神病／障害者（その他の者）を〈私宅監置〉するための手続き法である「精神病者監護法」をまず成立させた。呉たちは「精神病者監護法」を批判し「精神病者監護法」のもと〈私宅監置〉されている精神病／障害者の実態を調査した。その上で治療と病院建設の必要性を訴えた。呉たちの活動もあり大正期になり「精神病院法」が成立したが「精神病院法」成立後も公立の精神病院／病床は増えなかった（現在でもそれほど多くはない)。「精神病者監護法」と「精神病院法」は 1950 年まで併存しそれぞれ機能していたという点だ。そのことは「精神病院法」成立後も病院・病床数が増えず〈私宅監置〉が増えたことからもわかる。ただ強調すべき点はそれぞれの法律がそれぞれ独立したものとして存在し機能していたという点だ。1950 年に「精神衛生法」が成立し「精神病者監護法」と「精神病院法」は廃止され〈私宅監置〉が禁止される。これが前回述べた大まかな内容だ。

今回は「精神衛生法」の成立過程から「精神衛生法」がどのような性質を持っているのかという点と、当時の精神医療の様子を紹介することで「脱すべき」もの（場所）は何か（どこか）についての論考の緒としたい。

筆者の問題意識は「精神衛生法」によって「精神病者監護法」と「精神病院法」は廃止されたが、「精神衛生法」は「精神病者監護法」と「精神病院法」の性質が統合されたものであるという点にある。そして「精神衛生法」は改正を繰り返して（名称を変えて）いるが

その性質は変わっていない。つまり「精神病院法」がもつ治療・保護という性質と「精神病者監護法」がもつ保護・監置という側面である。いうまでもないが、治療・保護は本人の希望を基盤とし保護・監置は社会防衛つまり社会あるいは本人以外の者の要請によるという性質がある。

終戦直後の精神医療

まず、終戦直後の精神医療を概観する。終戦直後は経済的にも社会的にも混乱していたことは自明のことであり医療もその例に漏れない。病院総数が 1941 年に 4858 に対し 1945 年では 645 と 7 分の 1 に激減していることからも十分な医療が提供されていたとは考えにくい。精神科についても 167 あった病院が 32 に、病床数も 23,958 から 3,995 に減少している。治療法に関しては向精神薬が登場したのが 1952 年であるため終戦直後には薬による治療は存在せず、戦前から行われていた各種ショック療法が引き続き採用されている。ただ、インシュリンショック療法は関しては物資（インシュリン）の入手が困難であるため実施例は少ないようだ。この時期に多く採用されたのが電気痙攣療法（電気ショック療法）である。同様の理由でロボトミーが多く実施されたのもこのころである[i]。

他方、入院患者はどのような様子であったのか。電気ショック療法の実施例が増えたことは述べたが、全身麻酔を施すことが省略され実施されたため患者にとって恐怖の対象となったという。全身麻酔を省略された理由が物資の不足であるのか他の理由によるところかは筆者の管見では見つけ出せなかった。しかし物資が比較的潤沢な時代になってからのとなってからの電気ショック療法についても全身麻酔で実施されていたという例がある。それは治療・看護者の数や手間または薬物療法では治療費がかさむといった理由によってであるという[ii]。治療対効果の問題や経済的の視点は精神科治療（精神科だけではないだろうが）の変遷を確認する際に要素の一つとして見落とせない。1950 年代後半から私立精神科病院が増加する。増加の要因しては制度・政策による誘導がある。他方、その政策を病院（治療者たち）が引き受けたことで病院が増加した。治療手間がかからぬ方法を採用することで多くの患者が治療できる。これは経営の視点からも病院経営者にとって肯定的に受け入れられた。精神科病院入院が治療を目的にするだけではなく社会防衛の役割を担ったことは述べたが、戦後になって精神科病院での入院治療は治療と社会防衛だけではなく経営という要素が強くなる。その経営と治療（方法）は無関係ではなく密接に関係するのだがそれは改めて述べる。

終戦直後の物資の不足は医薬品だけではなく食料品にも及び多くの入院患者が餓死したという。広田によると 1945 年の東京都立松沢病院（当時は東京府立）在院者数が 1169 人であり死亡者は 478 人である。そのうち栄養失調による死者数は 298 人である。死亡者 478 人の中には戦災等による死者も含まれるが、食糧事情状態の悪化が入院生活にも多大な響を与えていたことがわかる[iii]。では、入院していない精神病／障害者の様子はどうであったか。1950 年に「精神衛生法」が制定され〈私宅監置〉が禁止され

るまでは「精神病者監護法」は効力を持っていた。1947 年の調査では千葉県に 111 の私宅監置室がおかれていた。〈私宅監置〉がなされていなかった精神病／障害者の様子に関してかかれた資料などは見つけることはできなかったが、多くの国民同様（それ以上）に食糧・日常品などの物資調達に難儀していたことは想像に難くない。

精神衛生法成立からみる法の性質

冒頭に筆者の問題意識が「精神衛生法」は「精神病者監護法」と「精神病院法」の性質が統合されたものであることは述べた。この「精神衛生法」がもつ性質は次の金子準二の言葉からもわかる。

> すでに昭和の初年ごろから，精神病者監護法と精神病院法とを一本化し，整備したいとの希望があって，官民いずれでも研究し，その試案が精神衛生会などにもあったが，昭和 24 年日本精神病院協会が全日本の私立病院の結束を目標として設立され，多年の要望である精神病者監護法と精神病院法とを一本化した日本精神病院協会案を作成し，当時の中山寿彦参院議員に提出し，中山参院議員の尽力によって条文整理があり，議員提出案となって決定したもので，民間精神衛生運動の結実である（岡田 1964）

金子は「精神衛生法（案）」（金子私案）を作成した人物であり、戦前内務省で精神病／障害者行政に関わっていた医師である。金子の発言からも「精神衛生法」は二つの法を統合したものであり、「精神病者監護法」を否定したものではない。そして金子私案が「日本精神病院協会」内の法令研究委員会でまとめられている。日本精神病院協会は 1949 年 7 月に「全国の私立精神病院をもって構成する」として設立された。

日本精神病院協会設立に関して、広田は前年に出された「医療制度審議会の答申」と関係があると述べている。医療制度審議会の答申の内容を広田の著作から引用する。

(イ）開業医制度は存置すること。
(ロ)公的医療機関を速やかに整備すること。
(ハ)公的医療機関の経営主体は，将来原則として都道府県等の地方公共団体たらしめること。
(ニ)収容施設の従業員につき一定の基準を設けること。
(ホ)適当な地域毎に主として公的医療機関である総合病院を「メディカルセンター」とし，これを開業医等の利用に供するとともに，医療関係者の修習機関とすること。
(ヘ)社会保険制度を整備し，特に公的医療機関は全面的に社会保険診療並びに生活保護法による医療助賛を行うこと。
(ト)医療機関は保健所，その他の保健予防衛生事業に積極的に協力すること　等

広田は答申の「将来的に精神病院は国営とする」との一文に注目し、日本精神病院協会設立への影響を指摘している。つまり、「精神科病院を国営とする」ことが現実的には困難であったにしろ私立精神科病院は「国営とする」という文言にたいして反応し、協会設立がなされたというのだ。

さて 1919 年の「精神病院法」制定時に「憐れむべき同胞のために病院を設置する」という趣旨の政府によって示されている。他

方、「精神衛生法」成立過程では「精神病院法」制定時で出されたものとは違った考えが示される。以下に示す中山議員のおこなった法案の概要説明からもわかる。

> 第一に荷も正常な社会生活を破壊する危険のある精神障害者全般をその対象としてつかむことにし，従来の狭義の精神病者だけでなく，精神薄弱者及び精神病質者をも加わえることにした。第二に，従来の座敷牢による私宅監置の制度を廃止して，長期にわたって自由を拘束する必要のある精神障害者は,精神病院または精神病室に収容することを原則とした。このために精神病院の設置を都道府県の責任とし，また入院を要する者で経済的能力のない者については，都道府県において入院措置を講ずることとし，国家はこれらの費用の二分の一を補助することにした。第三に，医療及び保護の必要な精神障害者については，警察官，検察官，刑務所その他の矯正保護施設の長のように，職務上精神障害者を取扱うことの多い者には通報義務を負わせるほか，一般人は誰れでも知事に医療保護の申請ができることとし，医療保護が必要であるにかかわらず，これが与えられない者のないように，国民のすべてが協力する態勢をつくりたいと考えたのである。第四に，人権蹂躙の措置を防止するため，精精神衛生法の制定神病院への収容にあたっては，真の病気以外の理由が介入しないように，精神衛生鑑定医制度を新たに設け,その二人以上の鑑定の一致を病院収容の条件とした。第五に，自宅において療養する精神障害者に対して巡回指導の方法を講ずるほか，精神衛生相談所を設け，誤った療養による弊害を防止し，さらに進んで精神衛生に関する知識の普及に努力することにした。第六に，精神衛生行政の推進と改善をはかるために，精神衛生審議会を厚生省の付属機関として設置し，関係行政官庁及び専門家の協力によって，この法律の施行に万全を期すことにした　（広田 2004）

中山の説明から、法律の性質が「社会生活を破壊する危険のあるものとして精神障害者の対象を拡大し病院に監置する」ためのものであったことがわかる。これは社会防衛の視点に由来しているといえる。しかしこの「精神衛生法」について、金子私案が「日本精神病院協会」内の法令研究委員会によってまとめられていることを考えると医療側も「社会生活を破壊する危険のあるものとして精神障害者の対象を拡大し病院に監置する」ことを否定していなかったと考えられる。「精神病者監護法」制定時には政府の要請によって精神科病院が社会防衛のための装置として意味を付与され、呉を始めとする医師たちはそれに反対をした。他方、1950 年制定の「精神衛生法」では「精神病者監護法」と「精神病院法」双方の性質を受け継ぐことで、結果として精神科病院が社会防衛のための装置としての機能を、医師を含んだ医療の供給側からも与えられたといえる。

措置入院＝社会防衛のための隔離であることは、1965 年の公衆衛生審議会の「措置入院制度」審議の行政側からの意見陳述からも明らかである。同審議会の公衆衛生局長の発言を紹介する。

> 国としての医療保障は保険で行なっている。足りぬものは生活保護でまかなっている。この基本は崩せない。結核などの公費負担は医療保障を前提としていない。これは公衆衛生、感染防止からの公費負担である。精神衛生法は社会防

衛的な考え方に基づいた公費負担である。これを医療保障的に扱うことには省内の反対・抵抗が強い。（広田 2004）

この考えに対して私立精神病院協会の代表委員は協会理事会で次のように述べ、審議会においても同様の発言を行った。

精神神経学会は本条項について、自傷・他害の表現を不適当とし、文言として廃したいとの意向であるが、これを除くことには危険を感ずる。措置入院費は社会防衛ということが趣旨であり、この線が崩れると国庫負担はむつかしい。そのため予算減となるのでは困る。表現は美しくとも、実際面がなくなっては困る。（広田 2004）

「公費による措置入院が崩れてしまうのは困る」という私立精神病院協会の主張は病院経営の観点からみての「困る」のであろう。1950 年以降、公費による措置入院措置入院は増大しそれに連動するように精神科病院数・病床数は増えている。もちろん精神科病院数・
病床数増加の要因が措置入院だけに求められるものではない。では、どのような要因で精
神科病院数・病床数が増えたのか。そしてそれはどのような結果をもたらしたのかについ
て述べる

精神科病床数増加について

終戦直後の精神科病院・病床数は他の医療機関と同じく極めて少ないことは述べた。その後、精神科病院数・病床数は増大していくのだが、それは私立精神科病院の増加といって良い。1945 年に 32 であった精神科病院数は 1955 年には 260 となり、1960 年には 506 となっている。病床数については 1945 年に 3995 であったものが 1947 年に 17196 と増え、1949 年には 15762 と減少している。ところが 1955 年には 44250 と増加し 8 年後の 1963 年には 136387、1973 年には 265904 と急速に増加していることがわかる。さらに国公立病院病床数の変化と私立病院病床数の推移をそれぞれ見ていくと、1957 年の国公立病院病床数が 15037、1967 年には 33023、1977 年には 39544 であった。対して私立病院のそれは 1957 年 49688、1967 年に 168785、1977 年には 247761 である。

ではなぜ精神科病床数とくに私立精神科の病床数がこれほど増えたのか。一つに医療制度やの変遷の影響が考えられる。1950－60 年代の医療にかかわる制度・政策を列挙する。

・1950 年　医療法改革
・1960 年　医療機関への低利融資
・1961 年　国民皆保険
・1961 年　措置入院国庫負担割合 1/2→8/10
・1962 年　医療法一部改正→国公立病院の病床数の増加抑制

1950 年の医療法改革では個人病院の法人格取得を容易にする医療法人制度が設けられ、1960 年の医療機関への低利融資を目的とした医療金融公庫の設立や国民皆保険制度の成立した。翌年には医療法の一部改正され「国公立病院の病床増加抑制」が謳われる。これらは医療全般にかかわること

だが、精神医療における私立病院が増加する条件としても考えられる。他方、私立精神科病院の病床数の増加は経営という問題抜きには考えにくい。経営者にとって「増床したが病院経営は悪化した」という結果は回避したいと考えられる。次に経営悪化にならない仕組みとはどういったものかについて述べる。

1958 年 10 月 02 日 厚生事務次官通達がいわゆる精神科特例(発医第 132 号) の通達がなされた。精神科特例とは精神病院を特殊病院と規定・医師の数は一般病院の 3 分の 1・看護婦数は 3 分 2 を可とするものである。手厚い医療を行うという点では批判がおおい。しかし実際には病院経営の観点からは人件費抑制策としてとらえられ採用された。また、1962 年の措置入院国庫負担割が 1/2 から 8/10 に上がったことは、1961 年の厚生省事務次官通知(衛発 311 号:1961 年 9 月 11 日)「自傷・他害のおそれのある精神障害者は、できるだけ措置入院させることによって、社会不安を積極的に除去することを意図した」と相まって措置入院患者を増加させた。ここからも行政が精神科病院に求めた役割が見て取れる。

他方、措置入院制度は家族にとっても治療行為の供給源としての病院ではない別の意味が付与される意図が含まれていたという見解もある。

2010 年に精神科医へのインタビューの際に入所施設・精神病院建設の話しを聞いた際、その医師は次のようなことを述べた。「アメリカでは 1960 年代から精神病院の病床数減った。しかし日本はそのころから逆に増えた。僕らが医者になった頃からだ。理由として池田勇人総理が高度成長政策を打ち出した。安保が終わり、高度成長政策ではそれまでの労働力では足りない。そこで、家庭の主婦などがどんどん労働力として引き出される。ただ、家庭に障害者がいるとその労働力を引き出せない。だから施設を作らないといけないということで、施設や精神病院を作りだしたわけです。」彼は障害者施設・精神病院建設に関して、本人の介助をしていた家族の家庭外での労働に要因があると述べた[iv]。

この見識が正確であるか否かの検証を筆者は行っていないが、入院費用を負担できない家族・障害者のために、措置入院 はその本来の要件が満たされない場合であっても「柔軟」に適応された「経済措置」といわれるものが存在した[v]。

精神科病院は社会的防衛としての機能や家族の（経済的に限らない）負担の担い手としての役割を引き受けた。その結果、措置入院患者の増加となり病床数の増大となった。これまで述べた視点は精神科病院が様々な要請を受けた結果の病床数増加である。ただ、精神科病院が積極的に患者を捜し入院させ病床数を増やしていったという指摘もある。

戦直後、府下の精神病院は 6 病院を数えるのみであった。しかし、戦後の大阪駅周辺の浮浪者など「あぶれ者の収容施設」として精神病院は増えていった。昭和 30 年代前半までに、このような病院は入院患者の蓄積により経営基盤を安定させ、その後は当時使用され始めた向精神薬により入院管理が比較的容易となった分裂病患者の収容に専念するようになる。次に昭和 30 年代後半から 40 年代前半にかけて、精神病院開設のラッシュを迎えるのだが、この時期はちょう

ど高度経済成長期にあたる。わが国が農村から都市部への未曾有の人口移動を経験した時期でもある。この頃から精神病院は機能分化をし始める。新興の精神病院は、大都市で経済成長を支える底辺部の労働者の中から、生活破綻者としてはじき出された人たちを、アルコール中毒あるいは精神病質などの病名で収容し、開設初期の入院患者を確保していった。このような病院では、入院患者の収容を維持するため、ときに暴力的な管理体制を組んでいた。昭和 40 年代になって多発した不祥事件は、まさにこうした病院で発生したのである。昭和 50 年代以降に開設した病院には、アルコール依存症や老人精神障害のみを取り扱う専門病院など、さらに機能の分化が認められる。（黒田 2006）

黒田の指摘からは、社会や家族の要請にこたえた結果としてだけで精神科病院数・病床数がふえたのではなく、精神科病院が積極的に病床数を増やしていったことがわかる。つまり精神科病院・病床数の増加は、一つに政策として精神科病院特に私立の精神科病院を増やす方向性が打ち出されたことと―それは精神医療の対象者の範囲を広げるということにおいても―、精神科病院を経営することに益があった経営者がいたことが関係しながらそれぞれの思惑によって進展した結果であろう。

前掲した黒田の「向精神薬により入院管理が比較的容易となった分裂病患者の収容」といった表現からもあるように、精神科以外への入院と精神科病院への入院とは違った趣がある。それはもちろん措置入院に見られるような本人の意思とは違った力の介在や、治療ではなく病院経営という理屈で患者が扱われている点からもわかる。黒田の表現にある「向精神薬による入院管理」からもわかるように患者を管理するという点が、治療のために管理することが、患者のためであるのか医師たちの都合かという論点でもあるが、その後医師たち自身によっても問題視された。

ここで再度、「脱精神科病院」が何を意味するのか考えてみたい。病院を出ることの困難さや入院生活自体の問題は確かにある。ただ筆者は「脱精神科病院」は病院を退院することと同義であると素直に結論付けられない。では何から脱することを「脱精神科病院」というのか。なぜ、「脱精神科病院」＝退院と結論付けられないのか。次に知的障害者の大規模入所施設の設立と解体について述べ「脱精神科病院」を考える一助としたい。

1960 年代の知的障害者入所施設建設

精神科病院・病床数が飛躍的に増えた 1960-70 年代には知的障害者大規模入所施設の建設が行われている。知的障害者の大規模入所施設建設は、1965 年首相の諮問機関である「社会開発懇談会」の中間報告が大規模コロニーの設置推進策をうちだしたことから始まる。同年、厚生省の「コロニー座談会」が示した「国、自治体に 1 ブロック程度コロニーを設立する」という意見書に基づき国立コロニーや各都道府県単位の大規模入所施設が建設されている。この時に入所施設の意義として呈された考えは、知的障害者を保護し入所施設での生活に適応させるための枠であるというものだった。

入所施設設立の動きは 1965 年の「コロニー座談会」が重症心身障害者の総合施設プラン

の意見書を厚相に提出する以前から動きは

あった。1952 年に現在の「手をつなぐ育成会」の前身である精神薄弱児育成会が結成される。会の結成の目的は「わが子を保護し、養育する場としての施設の設立」を国に対して要望するためであったという。そして、1953 年に精神薄弱児育成会の要望に答える形で精神薄弱児対策基本要綱（次官会議決定）が成立している。要綱の項目には、知的障害者を「収容している少年院の拡充強化」、不良行為を伴う知的障害児を「国立救護員に収容設備を整備充実」、知的障害児の「医療のための精神病院の増床」、遺伝性の知的障害者に対する「優生手術の実施促進」という差別的な内容も含まれていた。（井上・岡田 2007）

1960 年には精神薄弱者福祉法が制定され、成人した知的障害者福祉施策が始まる。そして冒頭で述べたようなコロニーの建設が始まる。その後 1970 年に心身障害者対策基本法ができ、翌年に「社会福祉施設整備緊急５ヵ年計画」が策定され入所施設の量的な拡大が図られる。1977 年には共同作業所全国連絡会発足が発足し、1981 年の国際障害者年以降ノーマライゼーションという言葉が知られるようになり知的障害者の権利意識が高まっていく。入所施設の量的拡大は 1977 年に厚生省が「精神薄弱者通所援護事業補助要綱」を策定し、地域生活支援の方向性を打ち出すまで続いた。

2000 年に入ってから脱施設の動きが具体的に現れるが、それより以前から様々な制度・政策が整備され地域生活移行の準備が始められていた。1987 年には国民年金法改正され障害基礎年金が新設された。障害基礎年金は経済的な自立を考える上で重要あり、地域移行と障害基礎年金の創設に関する経緯については、田島良昭（1999）が言及している。1996 年にはグループホームの公営住宅開設が可能となり、2000 年にはグループホームの就労要件が撤廃される。同時にホームヘルプサービス事業の対象を重度者から中軽度者に拡充されなどの支援策がとられた。

2006 年 6 月施行の障害者自立支援法を受け地域移行がすすむと、地域での生活＝グループホーム・ケアホーム入居という方策が強調される。もちろんホームヘルプなどを利用して一人暮らしをするという方法もあり得る筈だが、都道府県の障害担当課は「グループホーム設置が急務である」とした。また新聞などのメディアも地域での生活＝グループホームという前提のもと報道を行った。このような潮流は現在でも変わっておらず、筆者が 2011 年 3 月まで所属した社会福祉法人においても、2 年の間でおよそ 20 人分グループホーム・ケアホームが開設されている[5)]。

2002 年 12 月生活支援分野施策の施設サービスの再構築を行い、施設等から地域生活への移行推進として入所者の地域生活移行の促進と入所施設は、真に必要なものに限定するという閣議決定がなされた。この方向性について多くのメディア、福祉実践者や研究者はノーマライゼーションの具現化であると好意的な反応を示した。

2003 年の「障害者基本計画」では入所施設の建設抑制を明言し入所施設整備の数値目標設定を取りやめた。また同年 3 月、厚生労働省の「国立コロニー独立行政法人化検討委員会」は、国が管理する唯一の重度知的障害者入所施設「国立コロニーのぞみの園」（群馬県高崎市）の５１１人の入所者

を段階的に地域のグループホームなどへ移すべきだとの中間意見をまとめ、大規模入所施設から地域生活へ生活の場を移す政策動向が具体的な動きとして現れる。

何から脱しようとしているのか

ここで、グループホーム・ケアホームは入所施設ではないのかという問題がある。少なくとも国はそう判断していない。平成17年に行われた「知的障害児（者）基礎調査結果の概要」の調査対象者はその目的に「在宅知的障害児（者）の生活の実状とニーズを正しく把握し、今後における知的障害児（者）福祉行政の企画・推進の基礎資料を得ることを目的とした」とあるように、社会福祉施設入所者（知的障害児施設、自閉症児施設、重症心身障害児施設、知的障害者更生施設（入所）、知的障害者授産施設（入所）は対象とされていないが、グループホーム、通勤寮、福祉ホーム利用者は対象としている。また、将来の生活の場の希望の項目では、「「親と暮らしたい」「施設」等が減少しているのに対し、「ひとりで」「グループホーム」が増えている。」と明言していることから、施設とグループホームは別であるという認識を持っているといえよう。他方、知的障害のあるその人たちは違った考えをもっている。

ピープルファースト東京の佐々木信行（2009）は「親と暮らしている知的しょうがいのある仲間の自立生活についてその家族や親に話をすると「施設のほうが安心だ」と言われることが少ない」と述べている。加えて、入所施設では未だに虐待がたくさんあり安心ではないことを話している。同様な見解としてピープルファースト東久留米の小田島栄一は、「入所経験は小学6年生から。人生の多くを施設で過ごした。アパートでの自立生活開始は6年前、50歳を超えていた。入りたくなかった。もっと若いときに出ていれば――。その怒りや悲しみが原点だ。」「施設ではまわりが見えていない。だから社会に出て、自分で決めて自分でやってみたかった。入所施設はいらない。本当は地域で楽しく自立していくことがよい。」と述べている[vi]。

ピープルファーストに関わる人たちは、単に地域で暮らすことをゴールとしていない。前述したように、地域生活移行支援施策の射程にはグループホーム・ケアホーム利用を含んだ生活が考えられている。しかし、ピープルファーストはグループホーム・ケアホームをゴールではなく通過施設にしか過ぎないと考える。そして彼らは自立生活について説得する相手は家族・親であるとしている。ただ、家族・親と話すと「自立生活はダメだがグループホーム・ケアホームであればよい」との反応が少なからずあることも、グループホーム・ケアホームという選択肢の必要性を示すものだという[vii]。

ピープルファーストは、単に入所施設から地域に生活する場を移すのではなく、自分で決めて自分で生活することを目的としていると主張する。それは福祉や支援が管理を生むことを示し、それについては支援者も同じように感じている。入所施設の職員である藤内昌信（2009）は、「支援者も見守りが本人にとって「監視」となっていることを意識する必要がある」といい、尾中文哉は「「施設を出た」にも拘らず、施設にいたときと類似した生活になってしまう危

険である。この可能性は、「ケア付き住宅」に住む場合でも、介助者を自ら集めて一般住宅に住む場合ですら（例えば、福祉的配慮を行き渡らせるヘルパーに頼ってしまうようになれば、定員一名の施設となりかねない)、存在する」（尾中 1995）と書いている。

では、親（家族）は施設についてどう考えている／いたのだろうか。2002 年に発表された宮城県船形コロニー解体宣言及び関連の報道について多くの家族・親が不安や反対を表明している。この意見表明から家族・親の施設に対しての思いが読み取れる。「いいことだと思うが、今まで施設に頼ってきているので不安だ」「いつ実現できるか分からない目標で、入所希望の子供が入れなくなる」「受け皿となるグループホームが少ないのに大丈夫か」「地域生活になじめない人もいる。そういう人のために施設を続けてほしい」という内容の訴えである[viii]。これらの意見通りに、地域移行に反対する親の説得に苦労する施設も多いとの報道もある。

2009 年に新潟県で行われた育成会研修会において育成会の副島理事長は入所施設の役割は終わっていないという考えを示している。副島理事長は当事者のニーズが地域の中で、ふつうの暮らしをしたいというものに変化したこと。その思いを実現することこそが親の願いであり育成会の運動方針にもなったことを認めながらも、入所施設以外の社会資源がほとんどなく、住処としての機能を入所施設に残し働く場を別に設けることが必要である。と述べている。この考えは先に紹介した家族・親の思いと同質のものであり、「地域の中で、ふつうの暮らしをしたい」という当事者の望みとノーマライゼーション理念は肯定しつつも、入所施設をなくすことは制度や効果を考えると現実的でないという主張である。また、2003 年に育成会の室崎富恵副理事長[ix]は「30 年以上にわたって施設で生活せざるを得なかった入所者に謝罪したい」、「ユートピアのようなものができると期待していたが、障害者の意思は無視され、親の気持ちで入所させただけだった。地域移行によって家族に負担をかけてはいけないが、本人が生き方を選択できるような場所を与えてあげることが大切」との見解を示した。これは同年 5 月に「全日本手をつなぐ育成会」と関係福祉施設で作る「日本知的障害者福祉協会」が「戻っておいで」と呼びかけるメッセージを出た際に報道されたものである。

小括

「精神衛生法」が精神病者監護法の性質を受け継ぎ、その端的な例である措置入院に関する行政の考えを紹介した。同時に措置入院を利用した病院と家族についても言及した。1960 年代には脱すべき「精神科病院」はその数を増やした。ただ、単純に「脱精神科病院」＝精神科病院からの退院ではないことも指摘した。それは、知的障害者の脱施設化の言説紹介で「脱施設とは、ただ住処をグループホームに移すだけでも、一人暮らしでも支援で生活を包囲するのでもない。」といったピープル・ファーストの人たちの考えからもわかる。では、障害に対する支援ではなく「病」に対する治療ではどうか。まず、精神衛生法成立時に治療対象の範囲を広げた。この対象者の拡大よ

って治療の恩恵を受ける者が増えたことは間違いないだろう。しかし治療の恩恵以外にも様々な現象が生まれることとなった。「精神科病院の何から脱するのか」という問いはこれらの中に回答があるように思える。

次回は 1965 年の精神衛生法改正とその内容、同時期に用いられた療法への批判についてと「脱精神科病院の必要性」が謳われる際に紹介される精神科病院の閉鎖性がもたらした人権侵害について述べたい。

参考・引用文献、URL

秋元 波留夫 1980 『心の医療――生きる権利の原点をもとめて』 大月書店

天田 城介・角崎 洋平・櫻井 悟史 編著 2013『体制の歴史――時代の線を引きなおす』洛北出版

浅野 弘毅 2000 『精神医療論争史――わが国における「社会復帰」論争批判』 批評社

安積 純子・尾中 文哉・岡原 正幸・立岩 真也 1995 『生の技法――家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補・改訂版』, 藤原書店

藤井賢一郎 2004「精神障害者の生活と医療の費用負担に関する研究」http://homepage2.nifty.com/fujiken_0330/home/html/ronbun3_1.html （2013 年 8 月 21 日閲覧）

広田 伊蘇夫 2004『立法百年史～精神保健・医療・福祉関連法規の立法史 増補改訂版』批評社

井上 照美 岡田 進一 2007 「知的障害者入所更生施設の歴史的課題の検討―知的障害者の 「地域移行」に焦点を当てて―」 『生活科学研究雑誌』vol6:pp.209-223 大阪市立大 学大学院生活科学研究科・生活科学部『生活科学研究誌』編集委員会

小林 司 1972 『精神医療と現代』 日本放送出版界

黒田 研二 2006 『大阪の精神医療』 大阪公立大学共同出版会

毎日新聞 2002 年 12 月 14 日 「[みんなの広場] 障害者入所施設の充実も願う―」

三野 宏治 2013 「脱精神科病院 「わが国の脱精神科病院① 補遺

水野 昭夫 2007『脳電気ショックの恐怖再び』現代書館

岡田 靖雄 編 1964 『精神医療』 勁草書房

佐々木 信行 2009 「知的しょうがい者の立場と介護派遣事業所の代表者の立場とは」『季刊 福祉労働』124,pp66-73, 現代書館

田島 良昭 編著 1999『ふつうの場所でふつうの暮らしを―コロニー雲仙の挑戦〈1〉くらす篇』ぶどう社

全国精神衛生連絡協議会 編 1969 『精神医療の展開』 医学書院

[i]三野（2013）で浅野（2000）の記述を次のように紹介した。「精神科外科療法が広まった時期も同じであると述べている。同じく浅野も戦争による精神科医療の荒廃とロボトミーの関係について、1975 年の日本精神神経学会シンポジウムでの野瀬の発言を次のように紹介している。治療という治療には、何でもいい、すがりつきたい我々の気持ちが、時あたかもちょうど導入され始めたロボトミーにタイミングが合い、しかもこれが経済的にもイ

ンシュリンに比べ我々医師の労力と汗のみで全く費用が要らないという点も、大いにロボトミーの全盛を迎えた理由でもあった。」

[ii]作業療法や精神療法は時間と手間がかかる。他方、電気痙攣療法（電気ショック療法）あるいは薬物療法は作業療法や精神療法に比べると治療者の負担が軽減するのは想像に難くない。また患者・家族の経済的な問題を起点として次のような記述がある。「国民健康保険が成立するまでの「精神障害者家族の経済的負担」はかなり大きかったようです。(…)ＥＳのために使用する電流は十円ほどもしませんから経営者としては気楽に使えたということでしょう。　同じ程度の鎮静効果を上げるのに使用する薬物の代金は千円をはるかに超えるのです。すると、「お金持ちには薬物療法、貧乏人にはＥＳ」という時代もあったようなのです。「国民健康保険」が成立して、経済的負担が軽くなる」ことはこの問題を解決して、多くの人に薬物療法を提供する幅を広げてくれました」（水野 2007）

[iii]広田は餓死者が多く出た松沢病院について次のような事例を紹介している。

“「その頃の死体は脂っ気なんかありゃしないから，焼けやしないぞといわれ，一体につき薪 10 把，石油一升を火葬場にもっていった」との看護者の発言を記すだけで充分に過ぎよう。”

また、江副、台は次のように回想している。

“第二次世界大戦は,筆舌につくし難い物質的･精神的犠牲を諸国民に強制したが，わが松沢病院も亦有形無形の大きな損害をまぬかれることは出来なかった，昭和 21 年初頭に，南方の戦線から復員してきた筆者等は，病院の荒れ果てた姿に驚きの眼をみばった，中 1 病棟，西 7 病棟をはじめ十数棟の院内北側の建物は，昭和 20 年 5 月 25 日の第 2 回東京大空襲のさいの焼夷弾攻撃によって焼失しており，その焼跡はもちろんのこと院内のあらゆる可耕地は，食糧増産のための畑となり，かつての美しい自然は荒涼たるむのであった．しかし，われわれの心を最も悲痛にしたものは，在院患者の状態であった.”

“精神病院在院患者が引けだ最も大きな苦しみは食糧の不足によるものであった. 院内作業治療による若干の農畜生産物のほかは，患者達は真正直に政府の配給計画に従わねばならなかった．そしてその大半の運命は．飢餓一栄養失調･･死の転帰であった.”

[iv] 小林（1972）は次のように指摘をしている。「精神衛生法ができてからは、この二九条の「おそれがある」という点を拡大解釈して精神障害者の隔離収容が積極的にすすめられることとなった。……　そのうちに、措置入院の手続きが、患者の症状よりむしろ、家族の経済的負担を軽くするために用いられるようになったのも、公然の秘密といってよかろう。」

[v] 藤井賢一郎　2004「精神障害者の生活と医療の費用負担に関する研究」http://homepage2.nifty.com/fujiken_0330/home/html/ronbun3_1.html　（2013 年 8 月 21 日閲覧）には次のような記述がある。

措置入院とは、精神衛生鑑定医（現在の名称は精神保健指定医）２名 の診察により、精神障害者に「自傷他害」のおそれが認められた場合 に、都道府県知事の権限によって強制的に入院措置がとられる場合の 入院の形式である（費用は、国、都道府県が負担）。本来措置入院は 人権を大きく制限するためその適応は慎重であるべきである。しかし、 この時期、入院費用を負担できない家族・障害者のために、措置入院 はその本来の要件を十分を満たさない場合にも「柔軟」に適応された （これを、家族の「経済的」な状況を考えて、本来の主旨を「拡大解釈して」、措置制度を運用するため、通称「経済措置」と呼ばれた）。これにより措置制度による入院患者は最高 7 万 6 千人余りに達した

[vi] 2003 年 8 月 13 日　朝日新聞「小田島栄一さん　知的障害者が脱施設を訴え（ぴーぷる）」

[vii] グループホーム・ケアホームの利用を望む人もいる。厚生労働省「新しい障害者基本計画に関する懇談会　議事録」には、「親が亡くなった後は 4 人ぐらいで住める地域で暮らしたいという人が多く、グループホームがたくさん地域の町にできるといいと思う。」という当事者の意見が記載されている。

[viii] 2002 年 12 月 16 日付けの毎日新聞の記事より。この他にも同様の訴えが報道されている。（2002 年 11 月 25 日朝日新聞「「親なき後」に、やはり施設を（声）」。

[ix]室崎富恵副理事長はかつて国立コロニー設立の運動にかかわり入所施設の量的拡大を進めた立場であった。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第8回

棒たおし（2003）

１．裸教育

連載も今回で 8 回目だ。このあたりで、そろそろ、これまで書いてきたことを振り返らなくてはならないと思っている。

この連載を読んできて、「男の裸」の話が多いことに気付いた人は多いと思う。これは何よりも、僕が中学 3 年生の秋から半年間、一貫して、男子全員上半身裸で体育の授業を受けさせられたせいである。最初の連載にも書いたと思うが、この時の体育教師は大学を出た後、5 年ほど浪人し、やっと採用試験に受かって僕の学校にやってきた教師で、当時まだ 20 代だった。僕が中 2 の時にやってきたのだが、上半身裸を強要するようになったのは、中 3 の秋。本当は 1 年目から、裸教育をしたかったのだろうが、さすがに 1 年目から極端なことをするのは気が引ける。それが 2 年目になってある程度自信をつけて、それでこういう男根的な教育に出たのだと思う。

僕がこの教師から受けたトラウマを、どうにか母に打ち明けたのは、大学を卒業する間際のことだった。高校に入ってすぐに不登校になり、その後、少しずつ母に、それまでのトラウマを打ち明けてはいたものの、この核心の部分だけは、どうしても話せなかった。もちろん、僕が不登校になったのには、様々な理由が絡み合っていて、この問題だけで不登校になったわけではない。僕は小学校の高学年の頃から男であることに理不尽さを感じ始め、中学に入ってからは学校になじめず、日を追うごとに少しずつ学校嫌いが深まっていた。1 年生の頃から、先生たちからは誤解され、理不尽に怒鳴りつけられ、女の子たちの

執拗ないやがらせの日々が続いていたのだ。裸教育が始まる以前から、僕の心は弱り切っていた。その弱っていた僕の心を完全に壊したのは、この裸教育だった。母は、この教師が男子全員に上半身裸を強いていたことは知っていたのだが、女性だから、男が裸を強要されることの屈辱にはピンと来ていない部分があった。また僕がこの教師から受けた暴言や恥辱の数々は具体的には知らなかった。忌わしい体験を僕が語った時、「ごめんなさいね。それも知らずに、『学校に行きなさい』とうるさく言って」と母は涙ぐんだ。「あの人は見るからにそういう人だったからね」と母はもの思いに浸ったような顔で述懐したものだ。母は、この教師を学校の集まりなどで、数回しか見たことがないはずなのだが、その母の目にも、この教師は、一目瞭然、威圧的で権威主義的な人物に見えていたのである。

岡崎勝さんの本に『体育教師をブッとばせ！』(風媒社、1986) という本がある。一般に体育教師は体罰など、生徒の自尊心を傷つけることにかけてはプロフェッショナルなので、このタイトルを見ただけで買いたくなる人も多いに違いないが、僕にトラウマを負わせたこの教師は、悪評高い体育教師のなかでも、とりわけ極端なタイプだった。一歩間違えれば、生徒を自殺に追い込むようなことであっても、この人だったらしていただろう。今年も体罰で自殺する子が出て、体育教師の体罰がその原因であると騒がれたが、僕はあのニュースを聞いた時に、自殺した子よりもむしろ教師のほうに同情してしまった。なぜなら、僕を自殺の寸前まで追い詰め、僕を不登校に追いやったこの体育教師は、その後解雇になることもなく、最終的には校長におさまったと聞いているからである。僕があの時、自殺していたら、この教師もマスコミにたたかれて懲戒免職に追いやられていただろうか。いや、僕の経験は 30 年以上も前のことだから、僕が命をたっていたにしても、「それくらいのことで死ぬなんて、弱い子だ」と、僕のほうが情けない目で見られていただけだっただろう。まだ不登校や引きこもりという言葉もなかった頃、今みたいにモンスターペアレントの時代でもなく、むしろ、先生が絶対の時代だったのである。

僕はあの頃、自分が同一性障害（当時はそういう言葉はなかったけれど）と思って悩んでいた。他の男の子たちは、皆、先生に素直に従い、冬の厳寒のなかで裸になって、走り回っていた。最初は抵抗があったやつもいたはずだ。しかし、いったんそれを受け入れてしまうと、それが普通の状態になってしまうのである。とはいうものの、冬のマラソンの時に、学校のグラウンドではなく外を走るということになった時ばかりは、他の男子たちも動揺していた。さすがに「恥ずかしいよー」とぼやいていた子もいた。「まさか外を裸じゃないだろう」と言って、この日だけはシャツを用意していた子もいたが、一方で、「あの先生のことだから、外であっても裸で走らされる」と見越して、体育の授業を休むことに決めたやつもいた。

僕はというと、必死の思いで、「風邪をひいているんです。だからシャツをつけさせてください」とこの教師に懇願した。この教師は、「こんな薄い半袖シャツを着て、風邪ひいているもあるものかねー（爆）」と僕を他の生徒たちの前で嘲笑した。あの時のこの教師の顔は、いじめっ子のガキ大将そのものであり、

教師なんて言うものではなかった。女性が男性に凌辱されるというのはこういう気分なのだろう。しかし、この時ばかりは、この教師も僕の必死の抵抗に応えるしかなかった。これ以上僕を追い詰めたら、親が出てきて、他の先生に訴えに行かれるかもしれない、という一抹の危惧が浮かんだのだろう。この教師は自分のしていることが行き過ぎだということがわかっていながら、自分の欲望をどうしても抑えられなくて、男子全員を裸にしていたのである。マッチョ大好きで独善的、自分を大きく見せたい、相手を小さくみせたい。無茶なしごきを生徒たちに強要し、生徒たちがそれに服従してくれることにサディスティックな快感を得るタイプの人だった。

結局、他の男子たちは真冬の雪が降ってもおかしくない日に、短パン一枚で学校の外を走らされることになった。今思い出しても恥ずかしい、痛々しい男子中学生たちの裸身だった。幸い、人通りは少なかったが、通りがかりのおばさんたちがあきれて見ていた。あの時のことを思い出すと、「男って、なんて悲しいものなんだろう」と今でも思うのだ。明らかにこの教師のしていたことは、教育という名の支配であり、鍛錬のためと言い訳してはいたけれど、実際には自分の支配欲を満たしたいだけのエゴイズムだった。そのことに反発を感じていた子は、僕以外にもいたはずなのだが、従わなかったら、男の落ちこぼれと見なされる。男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番怖い。だから他の連中が裸を見せることに耐えているのに、自分ひとりが耐えることができないとなると「男」から転落してしまう。そして、いったん転落した男は、もう敗北者として生きるしかなくなってしまう。事実、このことで心のバランスを崩し、不登校になってしまった僕は、男の落ちこぼれの烙印を押され、白眼視される日々が続いた。そして、僕は 50 近くになった今も、PTSD に苦しみ続けいているのだ。

僕は小学校の高学年の時点で、男であることに拒否反応を示し始めていた。スポーツがまったくできなかったため、体育の授業ができずに毎日が憂鬱だった。野球やサッカーなど男の子らしい遊びがしたくてもできず、女の子からも馬鹿にされ続けた。男性度という点からすれば、他の男の子たちに勝てるわけがない、ビリでしかないということは自覚していた。自分がビリにしかなれないとわかっている分野に一生懸命になることはできず、その分、芸術や芸能をこよなく愛した。おかげで、感受性は人一倍磨かれて、体育はビリだったけど、音楽や作文はトップだった。しかし、感受性なんて、男が男の世界を生きていくうえで、何の役に立つのだろうか。

結局、「男らしさ」とは、家畜と同然の扱いを受けても、歯を食いしばって克己しようとし、虚勢をはることなのではないか。男は女よりも「強い」わけではない、女よりも「強がる」のだ。そのことに価値を見いだせるやつはいいが、僕は虚勢をはるなんて愚行だと子供の頃から思っていたのだった。

２．男の羞恥心

男には肌をさらすことの羞恥心はないのか。そのことを僕はずっと考えてきた。僕自身は裸になるのがどうしても抵抗があったわけだが、他の男子たちには、抵抗はなかったのだろうか。裸になることが嫌で、不登校になっ

てしまった僕は、男ではないのではないか。その思いに悩まされた。

おそらく、世間の人は、男は女よりも本質的に裸になることの羞恥心がないのだと思い込んでいる。でも、これは違っている。アメリカで文化人類学の授業を受講した時だ。原住民族の女性のなかには、乳房を出して生活している女性もいるが、彼女たちは元々そういう文化に生まれ育っているので、そのことに抵抗を感じないということを女の先生から教わった。一方、男性でもヴィクトリア朝の時代などは肌を見せることを極端に嫌がったという話も聞いたことがある。裸になることの羞恥心は、文化が規定していることであって、性差のせいではないのだ。

事実、僕の知る限り、大抵の男は上半身裸になることに羞恥心がある。プールや海は、それが規範だから仕方がないと割り切るしかない。最近は男の人でも全身を覆うような競泳用水着が出ているが、あれをつけている人は、ごく少数派なので、裸になることの恥ずかしさよりも、マイノリティの居心地の悪さのほうが上回ってしまう。ちなみに最近の高校では、女子学生にスカートとズボンの制服のどちらかを選択する権利を与えているところもあるとのことだが、ズボンの制服を選ぶ女子は、学年に 1 人くらいだと聞いている。実際にはズボンのほうが好きな子もいるはずなのだが、皆と違うことをするのは勇気のいることなのだ。

大抵の男は、「男だから、仕方がない」と割り切って、男の規範に合わせている。しかし、あの当時の僕は「仕方がない」と割り切ることはできなかった。あの頃の僕は男っぽいことをすることに激しい嫌悪感を抱いていた。しかし、この教師にそれを訴えても、この教師が理解してくれるわけがない、他の教師だって理解できないだろう、仮に理解してもらえたにしても、他の子が皆裸なのに一人だけシャツを着用というのでは、それもまた立場がなくなる。僕はどんどん袋小路に追い込まれていった。

僕は男じゃないのかもしれない。僕は「運動神経ゼロ」で、「女の腐ったようなやつ」で、「オカマ」と言われて育った。男でない男が男として世の中を生きていくことに希望などもてるわけがなかった。世の中は男社会だ。男の規範に合わない男は、不良品であり、男からも女からもさげずまれる。将来に希望がもてない。俺は、どうしたらいいのか。僕はどんどん、心のバランスを崩していった。それまでも学校が楽しかったわけじゃない。大して勉強もしていたわけじゃない。クラブ活動もしていなかった。早くに学校を終えて家に帰りたい。毎日、その一心で生きていた。

そこにこの裸教育が始まった。僕の心は福島のような状況になってしまった。それまでも地震の兆しはあったのに、ほっておいたがために、取り返しのつかない惨事が起きた。僕は自殺か精神病院かというところまで、追い込まれていったのだった。

あの時、死んだ方がよかったのかもしれない。精神病院に入っておいたほうがよかったのかもしれない。僕はどうにかそうはならなかったが、僕がトラウマ・サバイバーと言えるのだろうか。僕は 50 近くになって、仕事は非常勤のまま、パートナーも子供ももてなかった。普通の男が、普通のこととして通過していくことを僕は何一つしていないのだ。僕は未だに「男」に同一化していない。そして、

そのことに僕は今でも大きな劣等感を抱いている。非常勤であることや、シングルであることに誇りをもって生きている人もいるが、僕の場合は、積極的にそういう生き方を選んだのではなく、そうするしかないという消極的選択だったからである。

3．ドジ？　マッチョ？　ホモ？

僕が、中学の裸教育の問題を、昨年の援助学会で語った時のことだ。会場にいる何人かの女性がクスッと笑っていたのを覚えている。確かに男が裸になることが恥ずかしいとかいっているのを聞くと笑いたくなる。そういう反応しかできなくなる。「性の境界は女の側から超えやすく、男の側から超えづらい」というのは依然として真理だ。しかし、笑ごとにされたのでは困るのである。

肌をさらすという問題は、同一性障害で悩んだ人の本を読むと必ず出てくる。同時に、男性差別を訴えるブログやサイトでも必ず出てくる。重大な男性問題である。同一性障害の問題と男性問題は地続きであり、女性の身体に変えたいとまで思う人とマッチョに完全に同一化してしまう人の間にはグラデーションがあって、同一性障害とまではいかない男性でも、他の男性との同一化に悩んだ男性はいるはずなのである。

もちろん、世の中には裸になることが好きな男もいる。あれは自分の男らしさを見せびらかしたいというナルシズムである。「男だから裸を見られても平気だよ」という強がりでもあるのだ。裸になることはマッチョの証だ。しかし、僕はマッチョじゃなかった。おそらくクラスの誰よりもマッチョじゃなかった。自分と不似合いなことをやらされるのは恥ずかしかった。

じゃあ、マッチョになれない男はどうしたらいいのか。男性ジェンダーの問題を扱った古典的な本である『ピーターパン・シンドローム』（祥伝社、1984）のなかで、ドジかマッチョかホモが男の子のシナリオだとダン・カイリーは訴えている。マッチョになれない男に残された選択肢は、ドジかホモ。ドジを選んだ場合は、「俺はどうせ、男らしくない男だよ」と自分で自分を笑うことができなくてはならない。すなわち、開き直って三枚目役を演じることだ。しかし、三枚目になるのも僕には理不尽だった。なぜ、マッチョじゃないから、笑われ役にならなくてはならないのだろうか。

僕はホモを選んだ。とはいうものの、あの当時、僕が恋していた男性は、生身の男性ではなく、おおかた映画に出てくる男性スターだった。自分もあんなふうになれたらいいなあと思うような男性だった。当時の僕にとって、現実の男性は魅力的ではなかった。したがって、同一化したいとも思わなかった。

僕が現実の男性に恋をして、同一化したいという欲望を抱き始めたのは、18 歳の時、予備校の時だったとは、以前、この連載にも書いた。しかし、僕は不登校という大きな十字架を背負っていた。高校に行かずに大学に行く子なんて、マイノリティのなかのマイノリティ。僕がどれだけ同一化を求めても、経歴が他の男子とかけ離れているため同一化できないのである。予備校時代、大学時代の僕は、言ってみれば「みにくいあひるの子」。一人だけ違っているがゆえに、誰も同一化してくれる男子がいなくて、つらい毎日が続いた。大

学院に入ると男性の数が周りから少なくなるため、同一化したいと思う男性自体がいなくなる。同一化したいという欲望はいつまでも昇華できないまま、僕は 30 を過ぎた。

そして 37 歳の時に、やっと親密な男友達が一人でき、40 を過ぎてからは、次々に男友達は増えて行った。不登校のトラウマも、さすがに遠い昔のことになってしまったし、高校に行かない人も少しずつ増えて行き、以前ほどマイノリティではなくなった。僕の不登校体験もカムアウトしやすくなった。

とはいうものの、もう遅い。僕は普通の男性たちが、思春期の頃に通過する問題を、50 までも持ち越してしまったのである。そして、普通の男性たちはその苦しみを理解してくれない。少年期に男性ジェンダーを受け入れ、他の男と同一化し、男のアイデンティティを築いてしまった男性は、もうその時の思いなんて思いだすこともない。忘れてしまっている。前に男女共同参画センターで、男性相談のカウンセリングを受けた時、「僕だって、男のアイデンティティなんて考えたことがないですからね」と理解に苦しむような顔で、男性カウンセラーから言われた。ジェンダーのカウンセリングをしている男性だってわからないのに、普通の男性がわかってくれるだろうか……。

僕だって、裸教育がなかったら、あるいは運動神経がよかったら、どうにか不登校にならなかったら、少しでも感受性が鈍かったら、もし同一化できるいい友人に恵まれていたら、どうにか思春期のジェンダー危機を生き延びて、男のアイデンティティを築けていたかもしれない。僕は、とにかく悪い条件が重なり過ぎたのである。

４．なぜ、裸が問題なのか？

同一性障害の人の本を読んでいると、大抵は、水着のときの違和感で悩んだと語っている。他にも様々な悩みはあったはずなのだが、その部分が突出しているように思える。それは、何故なのか？

水着は、最も男子と女子の差異が強調される部分だからである。水着は男はパンツだけなのに、女はワンピースである。男のほうが３～4 分の一くらい隠す面積が狭い。これは逆説的なことでもある。普段の生活の中では、女性のほうが肌の露出度ははるかに大きくて、水着も同然のかっこうをして仕事に行く女性はいるのに、だけどプールだけは、男のほうが狭くなる。男のほうが、普段の格好と水着になった時のギャップがはるかに大きいのだ。

水着は別にして考えた場合でも、男女の肌の露出に対する意識は非対称だ。女性の場合は、もし人前で胸を出したりしたら、猥褻行為と摘発される。ところが男子の場合は、公の場で上半身裸になることを、教育の場である学校が奨励するのである。体育祭の騎馬戦や組体操などを男子全員上半身裸でやらせる学校は今でも存在していると聞いている。

なんとなく変だと思いながら、僕はこの問題を考えてきた。しかし、裸になるのが嫌で不登校にまでなった自分が情けなくて、大学の 3 回生の頃からプールに通い始めた。最初は YMCA のフリースイミング。ある程度、自信がついてからは、由緒ある京都踏水会の成人コースでたっぷり何キロも泳いでいた。毎日のように女性も含めた他の人の前で、裸身を披露していたのだ。今は毎日ではないが、

近くのスポーツクラブのプールに通っている。したがって、普通の男の人よりもはるかに人前で裸になった回数は多いので、裸を見られることにはすっかり慣れてしまった。しかし、今でも違和感は残っている。男の性的な部分はペニスだけではないはず。大体、裸になった時に他人の目の位置にくるのは胸なわけで、そう考えれば、男でも胸を隠すのが道理のような気もするのである。

でも、やはり、俺は考え過ぎなのだろう。普通の人は違和感があっても、それが男の規範なのであれば、受け入れてしまう。羞恥心よりも、同一化の欲望のほうが上回っているのだ。しかし、僕は、男の子に同一化することにどうしても反発があった。どうしても嫌だったことを、教師から無理矢理強要されたことが、心が壊れる原因となってしまったのである。

ジェンダーの催しなどで、話を聞くと、思春期の頃、どうしてもジェンダーに違和感があったと語る人は女性のほうに多い。ある知り合いの女性は、「私は中学の時に、皆で一緒にトイレに行ったりだとか、女の子がよくするパターンのことはどうしても抵抗があって、できませんでしたね」と語っていたし、また別の女性は、「私は中学の頃、一人称がなかったの。自分が女だっていうことに反発していたから『私』とはいいたくなかったし、だけど、『俺』とか『僕』っていうわけにもいかないし……」。

男性でも、小谷野敦や伏見憲明のように、すでにジェンダーやセクシュアリティの世界では有名になっている人たちは、著書のなかで、ジェンダーに対する違和感を吐露している。しかし、一般の男性で、こういう問題をカムアウトする人は、女性に比べて極めて少ない。やはり、男のほうが自分の性にこだわっている。実際には同性愛や同一性障害に陥るのは、女性よりも男性のほうがはるかに多いので、男性のほうがジェンダーへの違和感は強いのではないかと思うのだが、男は女のように正直になることができないのである。繰り返すが、男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番、怖いのである。

５．疑似ゲイな生活

僕は今でも同一化できる男性を探し続けている。そして、ある面、親密さを分かち合うことのできる男性は、たくさん見つかった。そして不安になると彼らに会ってもらう。

今年の 2 月入院した時、初めて全身麻酔の手術だったため、不安だった。僕は前の日、何人もの人にメールして、その不安をぼやいた。返事をくれた人が何人もいた。すべて男である。

この原稿を書いている今日は、実は、30 代の男友達と須磨に行く予定だった。海水浴だ。しかし、残念ながら雨でつぶれてしまった。でも彼は僕の部屋にやってきて、「残念ですよね。今日のためにタンクトップ買っておいたんですよ。俺とお揃いですよ」とグレイの薄いタンクトップをプレゼントしてくれた。彼のは黒だ。彼と僕は、ペアルックを着るくらい仲良しなのだ。

また、これも雨でも降ればつぶれるだろうが、20 代の男友達と川遊びに行こうかという計画をしている。彼からは、「僕のバイクの後ろでいいですか」と言われた。「いや、それはまずいよ。俺は頭が大きいからヘルメットが

入らないし(笑)、電車で行こうよ」と答えた。しかし、彼が、僕を自分のバイクの後ろに乗せてくれてもかまわないと思ってくれていることがわかって、嬉しかった。細マッチョのイケメンである。

明日は、10 年来の友人と大阪のスパワールドに行く。彼と会う時は必ずスパワールドだ。スパワールドは、温泉、プール、レストラン、マッサージなどたっぷり 4 時間は 2 人で遊べて、話ができるので、2 人のデートスポットみたいになっている。

夏休みは、東京に遊びに行く予定だが、ここではかつて京都にいらした鍼灸の先生とかつて京大生だった友人と会うことになっている。2 人とも僕よりはるかに年下だけど、鍼灸の先生は安らぎを、後者の友人は刺激を与えてくれる。

僕の生活は疑似ゲイである。これだけ僕が男とばかり付き合うのは、同一化を求めての旅なのである。『妖怪人間ベム』の「早く人間になりたい」という台詞は有名だが、僕の場合は、「早く男になりたい」のである。僕は 50 近くになって、まだ「男」がつかめないのだ。

6．男はみんな男が好きだ。

男をつかむためには、ホモエロティックな男同士の絆が必要だ。

『狂った果実』(1956) は、石原慎太郎の原作で、石原裕次郎の出世作だが、この映画を見ると、これがあのホモ嫌いで有名な慎太郎の原作かと思う。避暑地で若い男たちが遊びまわる話だが、男同士の裸の戯れが満載である。今の基準で考えれば間違いなくゲイ映画と見られるだろう。

『火まつり』(1986)は、中上健次の原作で、主演の北大路欣也が数々の主演男優賞を受賞したが、和歌山の山奥を舞台に男っぽい山の男たちの裸をたっぷり見せる、神話的なドラマを描いている。北大路欣也の美しい身体があってこそ成功した映画で、「男がうずうずする」という台詞が今でも印象に残っている。これも今の基準では同性愛である。

『MISHIMA』(1985) は、三島由紀夫の伝記映画で、ハリウッドの監督により製作・監督されて、日本では三島の家族の反対でお蔵入りとなった幻の映画だが、僕は見る機会があった。緒方拳が三島に扮しており、彼が雪のなかを他の男たちと上半身裸で走る場面が出てきて、僕の中学の時のことを思い出した。三島に同性愛傾向があったことは、自明のことである。

そして、『棒たおし』(2003) は、ほとんど話題にもならなかった小品だが、城戸賞受賞の脚本を映画化したもので、男子高校生たちが、上半身裸で棒倒しをする場面がクライマックスとなっている。この映画は、太宰治の『走れメロス』の少年版であり、少年同士の友情と男に同一化したいという心理が微笑ましく描かれていて、誰も見ていないような映画なのに、僕は思わず論文の材料にしてしまった。(関心のある人は、國友万裕「メイル・ボディ」という論文を探して欲しい。この論文で、僕は、この『棒たおし』と『ウォーター・ボーイズ』を重ね合わせて、男の裸の問題を論じている。関心のある人はそちらを読んでもらうということで、今回は紙数がつきてきたので、映画の分析は割愛したいと思う。)

ちなみに『棒たおし』は、ほとんど誰も知

らない映画だが、ゲイサイトに大きく紹介されていた。体育祭の棒たおしを男子全員裸でやらせるのは、男根の力を見せつけたい演出だが、それはゲイとオーバーラップする。男らしさの絶対条件は「異性愛」であるはずなのだが、男らしさを追求することは、皮肉なことに同性愛につながるのだ。

男って、結局、本質的に皆同性愛なのである。それは、男はつらいから、痛いから、男同士で傷をなめ合わなかったら、やっていけないからだと僕は解釈している。僕も、男の友人たちと男同士の語らいをする時、男に生まれてよかったと思う。男は痛い、つらい、損だと思いながら、こいつらと同じ男でよかったと思う。とはいっても、彼らと僕は身体の関係はない。でも、精神的には十分同性愛なのだ。「俺たち、精神的には同性愛だよね」と僕が言うと、ある友人は「いや友情ですよ。でも、男の友情は、女性との恋愛よりも重いんです（笑)」と答えてくれた。

これから僕が男のアイデンティティをつかめる日がくるのだろうか。でも、男のアイデンティティって何なの？　おそらく、普通の男たちは、思春期の時点でいつの間にか自分が男だと思い込み、そのことについて深く考えずに男をまっとうするのだと思う。しかし、思春期に、「僕は男ではないのではないか」というジェンダー・パニックにぶつかった僕は、50 近くになって、自分が男だという確信がもてないのである。

誰か僕を男にしてください！！！

援助職のリカバリー

《７》

～２９才で、「引きこもり」になりました～

袴田　洋子

大学院で「ゼミ」というものを体験しています。私が所属しているゼミの担当教員は、栃木で開業医をされていて、地域医療や在宅医療などに力を注いでいるＴ先生。とにかく穏やかで優しい人で、ゼミ仲間と「ほんとによかった」といつも言っています。

Ｔ先生の医師としての仕事と、私の仕事が重なっていることもあり、Ｔ先生は研究テーマ以外の、私のケアマネジャー業務のことや、地域での活動のことなども気にかけてくれるなど、先生のサポートのおかげで、不安がいっぱいだった院生生活でしたが、徐々に気持ちが落ちついてきています。的確な提案や、失敗をしても丁寧に指導してくれ､否定せず､私は安心して、また次の作業に取りかかろうと思えます。Ｔ先生の言動は、援助職のモデルだ、と思っています。

こんなふうに親や上司がしてくれたなら、もう少し「自己肯定感」を持てたのだろうか、と意味の無い「たられば」を考えたりしてしまいます。

〈病棟は「辛かった」んだね…〉

逃げる様に大学病院を辞めてオーストラリアにホームステイに行き、帰国後、夫の住まいに転がり込んだ私は､「また､看護婦として働く…か…？」と考え始めた途端に、原因のわからない息苦しさに襲われて、就職活動ができなくなりました。そして､「なんで看護婦としてまた働くことを考えると、こんなに苦しくなるのだろう」と、しばらく振り返ってみたところ、この「援助職のリカバリー」連載４からの､「必要とされていなかった、いつも要らないと思われていた、居場所が無いと感じながら働いていたのが、辛くて、苦しくて、情けなかった」という当時の気持ちを見つけました。そして、また同じ様に思われるのではないか、と無意識のうちに想像し、恐ろしくなり、病棟ナースに戻ろうという行動ができなくなりました。

〈私は、アダルトチルドレン、なの？〉

そして、ちょうどその頃、友人が「今、流行っているんだよ、知っている？　アダルトチルドレン（AC）っていうやつ」と言って、ACの

ことが書かれた本をくれました。AC とは、「Adult Children of Alcoholics」の略語で、「アルコール依存症の親を持つ成人した子ども」という意味ですが、徐々に、「Adult Children of Dysfunctional Family」＝「子どもの成長に悪影響を与える親の元で育った成人した子ども」という意味などに、時代と共に変わってきていますが、主旨としては「あなたの生きづらさは、子ども時代に親からされたことにある。原因は親にある。だから、あなたは悪くない」というものです。

当時の私は、もらった AC の本を何度読みかえしても、本に書かれている「生きづらさ」と自分の感じている何か胸の奥につかえているものが、同じものかどうかわからず、インターネットで「アダルトチルドレン」を検索して、夢中になって情報を見ていました。この連載に書いている「自分のイケテナサ、生きづらさ」は、今の自分だからこそアセスメントできているのであり、当時の自分は知識も何もないため、自分をアセスメントできず、自分が AC に該当するのかどうかがわからなかった、ということが言えます。

〈元ダメナースは、引きこもりました〉

なぜ、自分はこんなにもダメな人間なのか、ダメな看護婦だったのか、ダメな生き方しかできないのか、と、ダメになった理由を見つけるのに、毎日必死になっていました。

朝、夫がとっくに出勤した後、10 時頃に起きてきて、朝食を食べてから、顔も洗わず着替えもせず、ただひたすら、アダルトチルドレンの投稿サイトを読んでいき、ようやく夕方４時過ぎにシャワーを浴びて、近所のスーパーに食料を買いに行き、ちょっと家事をして、再びパソコンに向かって、アダルトチルドレンのサイトを読み続けるという生活。今、こうやって書き起こしてみると、自分がダメ人間になった理由をただひたすらネットで探す作業自体が、自分をダメ人間に思うことを強化しているのが分かります。

自分のことを分析しようと必死になっているけれども、一向に埒があかずに、一日中パソコンの前に座り続けるその状況は、強化因子であり、引きこもりであり、依存症でありました。そうして、ほんとうに、「自分のような人間は、死んだ方がマシだ」と思っていましたが、「自殺は夫に迷惑がかかる」と思い実行には至りませんでした。ただ勇気が無かっただけかもしれませんが。

〈死ねなければ、生きるしかないし〉

仕事もせず、たいして家事もせず、だらだら日々生きていることで、夫に対する申し訳なさと、みじめさと、情けなさでいっぱい。自分がダメ人間になった理由をなんとか見つけたい。自分を AC としてしまいたい。自分のダメさを親のせいにしてしまいたい。でも、なんだかはっきりしない。自分などは死んだ方がいい人間。生きている価値はない。でも、死ぬ事はできない。そんな状態で半年ほどが経過したところ、なぜか、変化が起こりました。

毎日、アダルトチルドレンのサイトに投稿している人たちの生い立ちの話を読むうち、自分は親から、常に身体的暴力をふるわれていたわけではないし、無視をされていたわけではないし、言葉の暴力を浴びせられたわけではないし、親が問題飲酒をしてしょっちゅう仕事を休むとかもないし、など、「うちの親は、ここまでこんなひどいことはしていないから、私は AC とは

違うのかもしれない」という考えが出てきました。では、AC ではないとしたら、自分がダメ人間になった理由はなにか。私は、突如として、連載３にある「一人っ子、と言われることが死ぬほど嫌だった」ことを峻烈に思い出し、なんの根拠もないけれど、「自分がダメナースになったのは、一人っ子だからだ」という結論を導き出しました。

〈前に進むには、意味付けこじつけ〉

「一人っ子」だから、きょうだいと競うこともなく、のんびりと育った、我慢することもなく、のほほんと育った。だから、我慢、忍耐が苦手で、カコクな病棟看護業務で生じるストレスなどに、対処することができない自分だったのだ、というふうに結論づけました。

今となっては、この連載４以降にあるように、私の感じていた「働きづらさ（生きづらさ）」のキーワードは、「一人っ子」というよりは、「自己肯定感の低さ」や「愛着障害ゆえ？の、発達障害」というようなものだとアセスメントしますが、当時は、「自分は一人っ子だから、我慢や忍耐を知らないから、病棟業務がストレスに感じていたのだ」で、自分を納得させることができました。そして、「一人っ子」ゆえに、「許容量、器」が小さい自分だから、大学病院などのカコクな業務の病棟看護ではなくて、もっと小さな病院にしたらいいのだ、と考えて、近隣のベッド数 100 床の小さな公立病院に、パートで勤務することになりました（大学病院育ちの自分は、この後、小さな公立病院での業務にふたたび悪戦苦闘するわけですが）。

こう振り返ると、ずいぶんと「一人っ子」にひどいこじつけをしているように思いますが、人は、正しいか正しくないか、当たっているか当たっていないかは関係なく、「前に進むために、その時に必要な理由」を見つけるものなのかもしれません。いじいじと原因探しをしている自分に、いい加減嫌気がさした、というものもあったように思います。

〈原因探しは、ほどほどに〉

半年間、引きこもった結果、「もう、何だっていいじゃん」と開き直り、自分に無理せず、背伸びせずにやれることをやっていければいいじゃないか、と思ったことを覚えています。「原因」に囚われ過ぎて動けなくなっていた私は、死ぬわけにはいかないのだから、生きていかなくてはならないのだから、原因を追求することから距離を置き、「今後、どうしたらいいのか、何を考えたらいいのか」に焦点を移すことで、引きこもりを終わらせることができたということでしょうか。

ここで特筆すべきことは、うちの夫です。私が半年間、引きこもっている間、私に何の指図もアドバイスもせず、怒る事も無く、嫌味を言う事も無く、ただ、淡々と生活をしていました。響きのよい言葉で言い換えれば「見守る」ということでしょうか。我が夫は、自分で言うのもなんですが、非常によく出来た人間で、一緒に暮らして 16 年になりますが、もっと感謝しなくてはいけないと思ってはいるのですが。

ひとつのどん底的な時間を経験した後、めでたく再び看護婦として働き始めましたが、「医師と看護婦は対等！」と大学病院で教育を受けた私は、病院長を「院長様」と言う総婦長がいる小さな病院で、またまた違ったストレスを味わうことになりました。

周旋家日記⑦

しゅうせんかにっき

「住職の依頼をどうしよう？」

乾 明紀

今回は、前号で書けなかった前々号の続きを書こうと思う。前々号では、「祖母の死と浄土真宗との佛縁」をテーマに、祖母の死によって菩提寺の住職と出会い、その住職の説明によって浄土真宗に関心を抱いたところ、住職から思いもよらない依頼を受けた、というところで筆を置いた。

98歳の大往生した祖母は、信心深い人だった。その祖母に導かれたのかもしれないが、本当に思いもよらない依頼だった。その依頼とは、親鸞聖人750回御遠忌法要のディレクションであった。浄土真宗では、東本願寺だけでなく、末寺においても、50年に一度、宗祖の遺徳を偲び、大きな法要が営まれる。住職にとっては、恐らく一生に一度の非常に大きな行事だ。その一大行事を企画・運営するために、住職は私に、ディレクターとして協力してくれというのである。

私は何度もごまかし、はぐらかした。いくら檀家とはいえ、私のような若輩者に勤まるわけかがないと感じたからだ。さらに、住職のこともこれまで知らなかったし、もちろんお寺の歴史も教団のこともしらない。また、総代会的な組織があるのかどうかも知らなかった。しかし、住職は、祖母の仏事がある7日ごとに、私に協力を要請するのである。住職と最初の挨拶を交わした際に、「周旋家」として様々なプロジェクトのプロデュースやディレクションをしていることを伝えてしまっていたので、住職はそこに期待したようだ。

やがて、四十九日が過ぎ、少し落ち着いたので、私は、受けるか受けないかを正式に回答するために、本格的に住職の話を聞くことにした。2011年の11月だった。これを期に菩提寺のことを深く知ることも悪くない。よく知らないお寺にお参りしたり、されたりしてもありがたくもないし、先祖代々だからといって無批判に信じることに違和感を覚える世代でもある。そこで、まずはヒアリングをさせていただくことにした。

私は、本堂を前に住職にいろいろと尋ねた。特に聞いておきたかったことは、お寺の歴史、どのようなことをされたいのか、どのような特徴があるお寺なのかということであった。

まず、歴史であるが、住職の話によると、私の菩提寺は、宇治川の合戦で梶原景季と先陣争いをしたことで有名な佐々木四郎高綱の弟が、親鸞聖人と出会い、それまで荒廃していた天台宗の塔頭を真宗道場として、嘉禎2（1236）年に再興したのが始まりで

あるという。現在の住職は、開基から数えて 23 代目であり、俗名も佐々木氏を名乗られている。また、現在の所在には、5 代前の住職のとき、蛤御門の変（どんどん焼け）か鳥羽伏見の戦いのどちらかに巻き込まれ、焼失したことが原因で移転したそうだ。このような危機があった菩提寺であったが、移転先も京都市内中心部に近く、また、21 世住職の人徳もあり、多くの門信徒が帰依したという。

21 世住職の人柄については、私も良く聞いた。月参りなどの際に、子どもがお参りしていると、必ずといっていいほど、袈裟の袖からお菓子を出して渡されたそうで、檀家の間では、人柄を表す有名なエピソードとなっている。22 世住職は、念仏にも通じる合唱活動に熱心に取り組まれ、大学生の指導や国体開会式での指揮者なども担当された。そして、私に思い切った依頼をする（笑）当代の 23 世住職は、様々な経験をされているユニークな方であった。私がとくにそう感じたことのひとつは、住職が仏教に関する探求のために、太平洋を越えて大学院に進学され、そこで家族で暮らされていたことだった。その結果、子どもたちも全員英語を話し（4 人中 3 人はネイティブ！）、一般的な日本人の家族と生活様式が少し異なるのである。私は、これは可能性だと感じた。伝統的なことと対立することもあるだろうが、お寺も変化しないといけない時代に、これはお寺の強みとなると直感した。

そんな可能性のあるファミリーを持つ住職の想いは、この時点では、まだ明確なビジョンにはなっていなかったが、私なりに住職の言葉を紡いでいくと、大法要を機に、檀家との紐帯を深め、自坊の歩んでいく方向性を定めていきたいのであろうと理解した。様々な分野で活躍されている檀家各位のことも伺った。

また、お話を聞く中で、お寺というものが、対人援助実践のプラットフォームや人々のネットワークのハブとして、様々な可能性があることが見えてきた。仏教では、人間には、「生老病死」という逃れられない 4 つの苦しみがあるというが、それぞれの苦しみに対して様々なアプローチで支援することが可能であろう。既に、菩提寺でも、社会的対応などが苦手で就労が困難になっている方を支援する NPO に協力されている。これは、「生」あるいは「病」への支援だ。また、お寺の空間は、人が集るように設計されているため、様々なイベントを開催することも可能なのである。

私は、大それたことを考えた訳ではないが、気付けばお寺の可能性を頭に描くようになっていた。そして、仏教（浄土真宗）を学びながら、社会的な貢献ができるのであれば、40 歳を過ぎた私の節目としても良い機会であると考えた。私は、丁度そのころ、これまでを振り返り、そして、これからの人生をどのように歩むべきかで大いに悩み、また期するところもあった。亡くなった祖母は、そのような私を浄土から見守り、私のために必要な環境を出現させたのではと思うようになった。私は、住職を通じて、祖母そして阿弥陀仏の本願に救われようとしていたといえる。私は、住職の依頼を承諾し、法要のお手伝いをすることにした。＜つづく＞

トランスジェンダーをいきる（6）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生（3）1 内発的男性性

1　始めに

前項では、外発的男性性について、女性性の高い A とのコミュニケーションにおいて、彼の行為が、自己の定義付けた男性性より下位にあると判断した場合、つまり、彼の行為より、自己の行為の方が上位の男性性を獲得している、と判断した場合に鼓舞されることを明らかにした。したがって、絶えず彼とのコミュニケーションにおいて、特に男性性に関して、そのつど優劣を意識しなければ構築することができない脆弱性を持った男性性の領域であることを示した。

本稿は、そのような外発的男性性とは別に、A の高い感情表出を利用しながらも、それとは別にほとんど信仰的に内面化している男性性を「内発的男性性」と定義付けた上で、外発的男性性との相互補完性によって、どのような男性性を構築してきたかについて考察す。。

2　内発的男性性に関わるエピソード分析

内発的男性性は、外界からの刺激によって構築・強化される男性性の領域とは異なり、すでに内面化し、半ば信仰的な男性性の領域、すなわち、外界からの刺激とは無関係に、すでに確固として出来上がった男性性の骨格をなしている部分である。

その内発的男性性強化を下支えしているアイテムが「骨っぽさ」、「怒りっぽさ」、「悪戯っぽさ」、「理窟っぽさ」、「荒っぽさ」、「不良っぽさ」である。これを総称して「6 っぽさ」と呼んでいる。次のエピソード分析は、この「6 っぽさ」が見事に凝縮された内容である。

① エピソードの概要

現在でもそうであるが、私は極めて正義感の強い子供であったから、教師がある特定の生徒をえこひいきする場面には敏感に反応していた。前項で詳述したように、常に優秀な成績を収めていた A は、よく女性教師たちからのえこひいきの対象になっていた。彼に対して憧れと羨望を抱きながらも、女性教師たちからのえこひいき行為に対する彼の盲目的な受け入れに対して、少なからず怒りの感情を抱いていた私は、よく「寡黙になる」という手段で女性教師たちや A に抗議していた。

小学校 4 年生のある日、授業中に考え事をしていたところを、担任の若い女性教師に叱責された。そのとき、体調が優れなかったのか、嫌なことがあったのかは忘れてしまったが、その彼女の叱責が気に障って、2、3 日ほど寡黙に陥った。

いったん寡黙に陥った私を再び会話の中に引き戻すのは至難の業であることは、彼女も含め、クラス全員が知っていた。だが A は授業中や休み時間を問わず、無言の私にあれこれ話かけてきた。にも関わらず、私はそのような彼の関わり方に一切答えないことで、かえって一種の快楽を覚えた。それは、普段彼女からのえこひいき行為を盲目的に受け取っている彼に対する「反抗」が、私を「寡黙」へと駆り立てていることを、彼にも知ってもらいたかったからである。

しかし、いつまでも黙っていてよいのかという疑問が沸きあがってきた。そこで、作文の時間、私は思い切って次のような内容を、彼女にぶつけるようにして抗議文を書いた。

「なんであのとき、いきなり私に「天井向いて」なんて怒ったんや。A がちょっとでも上の空やっても怒らへんのに、なんで私やったら怒るねん。A と私はおんなじ人間ちゃうんか。、、、A と私でもし人間が違うんやったら、どれだけ違うんか言うてみい」

抗議文は、彼女によって読み上げられた。それを聞き終わったとき、クラスは一瞬騒然としたが、A と泣き虫の女の子が、なんとしても私の口を開かせようと説得にかかり、彼女は泣きながら謝っていた。しかし、私はそれにも動じず、今度どんな作戦に出るか、ずっと観察していた。というのは、次の時間が校外学習で、1 年から 6 年まで全員集まるので、そのときに他の学年の教師や生徒たちから話しかけられても黙ったままでいると、彼女の立場を悪くするだろう。だからなんとしてでも私をしゃべらせるために、わざわざこんな時間を設けたのでは？という疑念を抱いていたので、心中で駆け引きをしながらも寡黙を守り続けていた。しかし、A の次のような言葉によって、その形勢を揺るがされた。すなわち、今にも泣き出しそうな声で、「もういい加減にしてよ。僕、そんな牛若さんを見るのがつらいし嫌だ。頼むから僕のためになんかしゃべってくれよ」と言われたのである。「僕」という一人称で感情を吐露した彼の言葉にびっくりしながらも、今にも泣き出しそうな声と哀願の仕方に、ますます男性性が鼓舞されていった。そうだ。もともと寡黙を継続している目的は、確かに彼への反抗ではあったものの、授業中に突然叱責した彼女への抗議である。したがって、これ以上寡黙を継続することは、彼を泣かせてし

まう結果になり、彼女への抗議という当初の目的からは大いに逸脱してしまう。そう考えた私は、いきなりAの方に振り向きざまに、足をばーんと開いて、「わかったよ。あんたのためにしゃべってやる」と、何か決断や覚悟を決めたように男らしく言い放った。周囲は一瞬騒然としながらも、彼は「やったあ！牛若さんがしゃべってくれたあ！」と言って、女の子のように無邪気に喜んでいた。そんな彼の様子に、男として「可愛いやつ」と思いながらも、態度では、「なんて単純なやつめ」というようにふくれ面を決め込んでいた。このようにして、彼の前で乱暴な態度で沈黙を破って男らしくアピールしたこと、そのような態度による彼の女性性を引き出したことに成功したという喜びを味わったのである。

②エピソード分析

上記のエピソードを考察すると、次のようなことが言える。授業中に考え事をしている場面を教師から注意されることは一見どこにでもある光景だが、上記のエピソードでは、そのときの体調や心理状態、更には私に注意した彼女の口調などのさまざまな要因が複雑に絡み合って「寡黙」を引き起こした。その「寡黙」の中核にあったのは、「男は感情を表に出さない」という前節の定義であり、この「寡黙」が「骨っぽさ」と「怒りっぽさ」を象徴している。更に、私が「寡黙」に陥ったことで、Aの女性性が発揮された。すなわち、黙して一言も話さなかった私を無視するのではなく、授業中や休み時間を問わず、粘り強く話しかけていた光景は、ともすれば痛々しささえ感じたほどであった。そのような彼の涙ぐましい関わりに対して、なおいっそう「寡黙」を強め、男性性を誇示した。この場面では、寡黙を継続することで、女性性の高い彼に対して、普段から彼女たちからのえこひいきの対象になっていることへの抗議の意味を含めた「悪戯っぽさ」によって、黙して語らない私を前に、手を焼いている彼をあざ笑うかのように楽しむという心性を垣間見ることができる。

その一方で、「これ以上黙り続けていいのか？」という疑問が沸き上がってきた。なぜなら、寡黙に陥った私への彼の女性性の高い関わり方に対する事実上の「敗北」、つまり、彼の私への粘り強い関わりが、私をそれ以上、寡黙にさせることを躊躇わせたからである。

それと同時に今度は、「男だったらただ黙っていていいのか？」という、自己の男性性を問う疑問が沸きあがってきた。そこで、沈黙を破って自己の感情を言語化して彼女に抗議したのかといえばそうではなかった。私の中では、「沈黙を破る行為」は、たとえ感情を言語化しなくても、無条件に彼女に敗北し、自己の発声によって、今まで堅持してきた男性性が崩壊し、一気に女性に引き戻される危険を意味していた。そこで、次の手段としてとったのが、「寡黙」を継続しつつも、作文の時間に「彼女への抗議文を書く」という行為であり、「理窟っぽさ」を持って自己主張したのである。

彼女によって代読された私の「抗議文」を聞き終わったとき、クラスの中は騒然としていたが、次の校外学習のために、なんとかして私の口を開かせようとする戦略的態度が見

て取れた。彼女の涙を含んだ謝罪・泣き虫の女の子の執拗なまでの説得というのは、私にとってはどちらも女性性を利用した手段での対応であったため、半ば辟易し、疑念を抱きながらも、「沈黙を破る機会」を伺っていた。そこに、A の決め台詞、つまり、「僕」という一人称を背景に、感情を吐露したフレーズによって、形勢を揺るがされ、彼の私への接近行為によって、これ以上の寡黙継続の目的や必要性までもが疑わされた。このことは、私の強固な男性性より、彼の高い女性性の方が勝っていたこと、つまり、女性性の高い彼の関わり方への「全面敗北」を男らしく認めた。その結果、彼の方に振り向きざまに沈黙を破ったことで、「男らしく全面敗北したこと」を態度表明したのである。この態度表明の仕方が「荒っぽさ」、「不良っぽさ」の一面を示している。

しかし、女性性の高い彼への全面敗北を態度表明した先に、更に自己の男性性を揺るがされるような泥沼の敗北が待っていたのかといえばそうではなかった。男らしく全面敗北したことへの態度表明によって、更に彼の高い女性性が引き出されその引き出された彼の高い女性性を自己の心中に取り込むことで、全面敗北した男性性を復元させた。要するに、「負けるが勝ち」と言う言葉通り、全面敗北の中に、ある種の「勝利感」を見出したことによって、それ以上の敗北感を味わうことを食い止めたのである。

上記に示したエピソードには、内発的男性性強化に欠かせない「6 っぽさ」のアイテムが見事に凝縮されている。この「6 っぽさ」は、場面によって単独・複合し、強弱の差を生じさせ、年齢と共に手を変え、品を変えて変容している。

3　外発的男性性との相互補完性――本場の「男」より、更に 1 段高い「男」を目指す

このように、内発的男性性は、A の女性性の高い感情表出を利用しながらも、最終的には自己の信念に基づき、納得した上で行動を規定するという意味で、男性性を半ば信仰的に位置づけ、内面化した領域である。では、このような内発的男性性と、前項で詳述した外発的男性性がどのような相互補完性を持って、男性性を強化していったのだろうか。

「自己物語の記述」では、特に FTM トランスジェンダーとの関連、つまり、服装や行動様式・言葉使いなどの社会的な女性ジェンダーの役割を、周囲から押し付けられたことへの抗議や反発を、どのように外在化してきたかが問われた。ここで明らかになったことは、「本場の「男」より、さらに 1 段高い「男」を目指すこと」であった。すなわち、A を含めた周囲の男の子の服装や行動様式・言葉遣いといった外界からの男性文化を、外発的に自己の体内に取り入れる。しかし、外発的に取り入れた男の子の行動様式や言葉使いの中には、必ずしも男性性を誘発させるものばかりではない。したがって、それらをただ一方的に内面化するだけではなく、前項で示した内発的男性性を強化している「6 っぽさ」を総動員し、ときに脆弱な反応を示す外発的男性性の作用を制するように働く。このことが、さらに 1 段高い男性性を強化する結果になり、「本場の「男」より、さらに 1 段高い「おと

こ」を目指す」という目的達成を生み出すのである。そこには、女性の身体を持ちながら、ジェンダーレベルにおいては、周囲の男の子より、さらに 1 段高い男の子象をいつも信仰的に強化して言った（現在でもそうである）という構図が浮かび上がってくる。「女性の身体である、ましてや視覚に障碍がある」という二重に客体化されやすい現状に対する強い反発と欲望が、外発的・内発的男性性という２種類の男性性を生み出すことで、より男性性を強化させている、といっても過言ではないだろう。

４　終わりに――次回の予告

このようなプロセスで男性性を強化してきたが、早くも危機が訪れる。次回からは２回にわたって、「男性性存続の危機」と題して詳述する。（続く）

立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程

役場の対人援助論

（６）

岡崎　正明

（広島市）

役割コミュニケーションについての考察　その1

「コミュニケーション」という言葉を辞書で引いてみると、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる」などと書いてある。なるほどその通り。これに異論をはさむ人はいないだろう。

ではお役所がするコミュニケーションとは何であろうか。分かりやすいのは窓口での対応だ。職員から市民に対し、意思の伝達がなされる。まさしくコミュニケーションそのもの。変わったところでは、自治体主催のイベントなどもその範疇に含まれるかもしれない。市民に向けて「こんなことがありますよ」「こんな世の中にしたいですね」という意思・メッセージを発しているからだ。

ほかにも意思の発信は、広報誌や通知文書などの紙媒体を使って行われたりもする。住民税納付のお知らせがきたならば、それは役所があなたに「税金を払ってください。この街のために使いたいのです！」と、メッセージを伝えているということだ。上手く伝わっているかはともかくとして。

そんな「お役所のコミュニケーション」。中でも福祉関係の現場では、窓口でのやりとりが中心となる。これはもちろん職員と市民の間でなされるが、通常の私人間の（例えば友人同士の）コミュニケーションとは少し事情が違う。なぜなら職員は、その役所の人間という、ある種の「役割」を背負っているからだ。

組織に属した経験がある人なら誰しも、ある一定の「役割」を担ったことがあるだろう。店員・コック・講師・ホテルマン・警備員・政治家などなど…。数え上げればきりが無いほど、世の中には様々な役割がある。私たちは個人的な事情はちょっと横に置いて、それぞれいろんな役割を担って働き、社会的な活動をする。

例えばここにＡさんという青年がいるとする。彼は幼い頃に両親を事故で無く

し、祖母に引き取られた。苦学の末に国立大学に入り、その後税務署に就職した。今は働きながら、毎晩祖母の介護をしている。真面目だが少し人見知り。趣味は釣り。好きな食べ物はエビフライ…この辺でいいだろう。

そのＡさんが仕事で税金の滞納者に督促をする。真面目なＡさんは上司から言われた通りに期限を守り、規則を守って仕事をする。相手がどんな事情を話そうと、断固たる態度で臨む。するとＡさんに対し、少なからず不満を訴える市民が存在する。大声で怒る人、しぶしぶ応じるが嫌味をさんざん言う人、泣いて苦情を訴える人。

Ａさんは真面目に仕事をしているだけである。何も間違っていない。人間性も素晴らしい。だけど不満をいう人からすると、「そんなの知ったこっちゃない」。ここではＡさん個人の人柄や事情は関係ない。極端な話、Ａさんの実家が裕福で趣味がサーフィンだとしても、不満については大きく変化しない。

ここで問題になっているのは、Ａさんの仕事の持つ「役割」（＝税金の徴収）と、その役割を担ったコミュニケーションである。

Ａさんに限らず、ある一定の人々から不満を向けられやすい職業や役割というものは、確かに存在するものだ。代表的なものとしては警察官、弁護士、医師など。そこには以下のような共通点が見えてくる。

① 仕事に強制力（相手を従わせる力）を持った部分が強く存在する。警察などはまさしくそのもの。医師も法律的な強制力はないが、「ここにガンがあるから手術しましょう」と言われて、逆らえる人は中々いない。
② 法律や科学的データなど、反論の余地が無い「根拠」を背景に持つ。
③ 強制力が強い分、相手方の抵抗も大きくなる。「北風と太陽」の寓話や、物理の「作用反作用の法則」にもあるように、強い力が加わるほど、反発力も増すもの。
④ 専門性が高く、対象者に対して優位性を持ちやすい。

このような特性は、その役割がするコミュニケーションにももちろん影響を及ぼす。指導や命令といった役回りが多くなるため、立ち位置が法律など、根拠の側に立ちやすくなる。語尾も「～してください」「～しませんか」より、「～しなさい」「～はできません」が増える（最終項参照）。

学校で例えるなら先生の立場。生徒に対して専門性と優位性を保持し、校則やルールに従わせる側。黒板に目標ややるべきこと（例えば宿題やテストなど）を書き、「明日やるぞ」と強制力を発動すれば、生徒に反論の余地はない。

医師など現場で先生と呼ばれる仕事も多いので、これを「先生ポジジョン」の役割と呼ぶこととする。

この「先生ポジション」。その特性自体を変更することは中々難しい。警察官に強制力が無くなってしまっては、いざという時に頼れなくなってしまうように、上記の特性がその仕事に不可欠なものでもあるからだ。

だがその役割を担って行うコミュニケーション＝役割コミュニケーションは、常に指導・命令的で、強制させるような語尾である必要はない。いやむしろ「先生ポジション」の役割コミュニケーションにばかり引っ張られていると、余計な抵抗を生んでしまうことすらある。

だから教師が生徒を褒めたり、上手に意見を引き出したりするように、「先生ポジジョン」のコミュニケーション場面でも、状況によって様々な工夫をする必要がある。実際豊富な対話のバリエーションを駆使する医師を私は知っているし、低姿勢な弁護士に出会ったこともある。多くの現場で、様々なコミュニケーショ

ンの努力がされているのだ。

最近でいえばＤＪポリスがそのいい例だ。
「皆さんは１２番目の選手。日本代表のようなチームワークでゆっくり進んでください」
「怖い顔したお巡りさん。皆さんが憎くてやっているのではありません。心ではＷ杯出場を喜んでいるのです」
法律違反を取り締まり、厳しい態度で接してくるはずの警察官が、ユーモアを交えて語りかけた。先生というよりクラスメイトのポジションから。
この意外性と落差が群衆の腑に落ちた。めずらしく警察を称賛するニュースとなったのは、記憶に新しいところだ。

ＤＪポリスは本来の警察が持つ役割コミュニケーションの癖というものを分かっていたのだろう。そして場面を見極め、あえて違う役割コミュニケーションをすることで、強制力を発動させることなく、その目的を達成したのである。

Ａさんの話に帰れば、彼がその役割に忠実なのは構わない。むしろすばらしいことである。ただ常に「断固たる態度で臨む」だけのコミュニケーションでは、プロとして工夫が足りないのではないだろうか。

福祉の窓口も同じ公務員。法律を根拠にする仕事のため、「先生ポジション」の役割コミュニケーションになることがあるし、実際にそれが必要かつ有効な場面も存在する。
しかしそれ１本でいけるほど、人相手の仕事は単純ではない。
まず自分の仕事の特性と、その役割コミュニケーションをしっかり理解する。そしてその上で、単に「下手に出る」とか「厳しく接する」といったことではない、場面に応じた意図的なコミュニケーションを狙う。そのほうがずっと効果的で、市民もお役所も互いに幸せに近づけるような気がするのだが。

次回は引き続き「役割コミュニケーション」についての勝手な考察を深めていくこととしたい。

「先生ポジション」の役割とコミュニケーションのまとめ

- **役回りは指導・命令・審査・規制などが多い**
- **立ち位置がルールや目標側になりやすい**
- **主な職業　⇒警察官、裁判所、医師、弁護士、公務員等**
- **法律や科学的データなどの明確な根拠を背景に持つ**
- **専門性、優位性、強制力**
- **対象者からの反発や抵抗も大きくなりやすい**
- **語尾は「～しなさい」「～できません」「するな」が増える**

導　入

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その５

大谷　多加志

発達検査を行う際、子どもと出会う場面つまり導入場面は最初の山場です。どんな表情でやってくるか、こちらの声かけに応じてくれるか・・・、検査の経験が少ない頃はとにかく緊張する場面でした。特に、初対面の子どもに検査を実施する場合は、多少の事前情報はあったとしても、予測の立たない部分が多くなります。その分、検査者がその場で臨機応変に対応しないといけなくなるわけで、負担を感じることもありました。

このように、当初は「なるべく平穏に過ぎてほしい」と願うばかりであった検査の「導入」場面ですが、多くの子どもと出会う中で、検査自体とはまた違った発見がある、注目すべき部分だと思うようになってきました。

今回はこの「導入」をキーワードに、発達検査の意義について考えたいと思います。

子どもが泣き出した！

初心者の頃、導入場面で子どもに泣かれるというのは、最も困ることの１つでした。顔を見ただけ、部屋に入っただけで泣かれたら、この先検査なんてできるのだろうか・・・と不安に駆られました。平静を装い、必死に取り繕った笑顔を子どもに向けながら、内心は声をかけていいか少し様子を見るのがよいかさえわからず、パニック状態でした。

そもそも、なぜこんなに焦ってしまっていたのかと言えば、「検査ができない」という状況を強く恐れていたためだと思います。検査不能という結果が、検査者としての適性がないということとイコールのように思えて、何とか検査を実施しようと焦り、応じてもらえないことにパニックになり、と悪循環に陥っていたように思います。

しかし、時には検査ができないという経験も何度か重ねる中で、一言に「泣いている」といっても、よく見ると子どもの様子や反応はまちまちだということに気がつくようになりました。開き直って、ようやく少し余裕が出てきたのかもしれません。

例えば泣いて母親に抱きついている時でも、よく見るとだっこされる腕の隙間から検査者に眼を向けていたりします。もちろん警戒感いっぱいの視線ですので思わずひるみそうになりますが、こちらを完全にシャットアウトしているわけではないというところは、注目すべき点です。踏み込み過ぎて引かれてしまうリスクをなるべく避け

ながら、子どもの方から反応してくれるように誘いかけます。どこかで用具に手を出してくれたり、何か言葉を発してくれれば、多くの場合はそれが突破口になりました。

突破口はどこ？

突破口を探す時、焦りは禁物です。通常検査を行う時と同じように、検査者の関わりに対して子どもがどのように反応するかを丁寧に観察します。

検査者が提示した用具に手を出してくれればそれに越したことはないのですが、チラッと視線は送ったり、あるいは音には反応したりと、何らかの反応があれば脈ありというところです。

興味がありそうなものが見つかれば、次は誘いかけです。手続き上許されている場合であれば、検査者が実際用具を扱ってみせるのも、有効な誘いかけの１つです。何を求められているかが具体的にわかりますし、人がやっているのを見ると“思わずやってみたくなる”という気持ちも働きやすいです。

また、微妙なところなのですが、子どもに見せる時の検査者のスタンスも、時に重要になってきます。検査者が例示し、子どもがその様子を見て実際に用具を扱ってくれればよいのですが、検査者が“見ててね”とアピールした途端、子どもが視線を逸らしてしまうこともあります。そんな時には、検査者はただ勝手に玩具で遊ぶかのように用具を扱って見せたりします。もちろん子どもが見ているかどうかはきちんとチェックしていますが、子どもに向けての直接の働きかけはせず、ただ「見せる」ことを重視します。

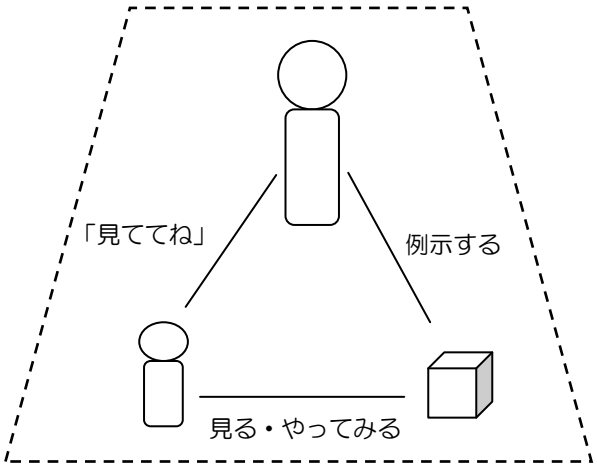


図１．例示のやりとりと三項関係

人と人が何らかの物を共有する関係のことを「三項関係」と言います。図１は三項関係の図に、先程の例示のやりとりを重ね合わせたものです。三項関係は人と人のコミュニケーションの重要な基盤になるものですが、この三項関係に基づいて物と関わる時、背景にいる人（この場合、検査者）が強く意識されることになります。まだ検査者と十分に関係が出来ていない場合、あるいはこのような三項関係を他者と築くこと自体が苦手な子どもの場合、この誘いかけではうまく応じてもらえないことがあるかもしれません。

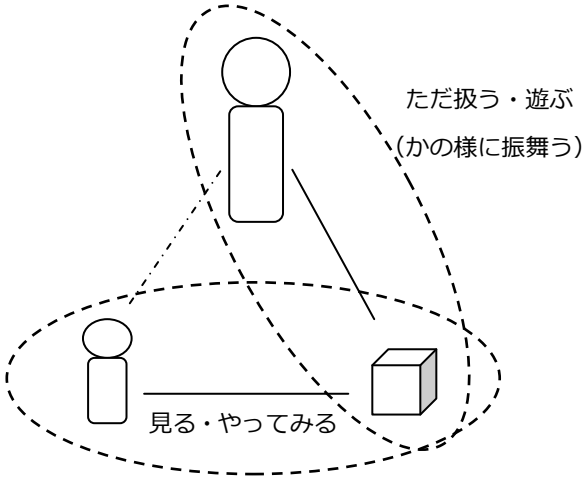


図２．二項関係的な検査場面

次の図２は、「見せる」ことを重視した際の関わりを図式化したものです。「検査者と物」「子どもと物」の二項関係が組み合わさった形になります。検査者からの直接の働きかけがない分、子どもは純粋に課題に対する興味によって、やってみようという気持ちになりやすいかもしれません。

二項関係的な関わりの方が導入しやすかった場合、その関係性が後の関わりの中で変化していくかどうかも、重要な観察のポイントです。検査者に慣れていくと三項関係で検査者と共感・共有することができるようになる場合もありますし、最後まで三項関係に基づくやりとりが難しい場合もあります。人との関わりのベースである三項関係のとり方がどのような様子であるかを知っておくことは、後の相談においても非常に重要になります。

人と場所

また「導入」にあたっては、誰が検査をするか、どこで検査をするかいう、外的な要因も大きな影響があります。発達検査を行う人と場所には、大まかに分けて２つのパターンがあります。

１つは普段からその子どもと関わりのある人が日常的に通う場所で検査を実施する場合です。例えば療育施設の支援者が日頃関わっている子どもに検査を行うのは、これにあたります。もう１つは、初対面の人が、なじみのない場所で検査を行うケースです。子どものことが心配になった保護者が、児童相談所や医療機関などに相談し、発達検査を受ける場合はこれに該当します。

一見すると慣れた人と場所で検査を実施する方がメリットがあるように思うかもしれませんが、初めての人や場所で適度な緊張感がある方が結果的によく取り組めたというケースもあり、一概にどちらがよいとは言えません。ですが、人や場所という外的な要因が、子どもにどのように影響したかは、考慮しておく必要があります。

遊び？お勉強？

次に、子どもが部屋に入って、いざ検査が始まるという場面を考えてみましょう。部屋には入り、席には着いたものの、子どもからするとまだ何が始まるのか「？？」という状態かもしれません。“今からこんなことをするよ”という一定の説明を、検査者がする必要があります。どのような説明をするかは特に決まりがあるわけではありませんし、子どもの年齢や状態によっても変わってくるだろうと思います。

よくある声かけとしては「遊び」あるいは「お勉強」という説明があります。「積木とかカードとかがあるから、遊んでみようか」「積木で遊んだり、問題を考えてもらうお勉強みたいなこともするんだけど、いい

かな？」と言ったりします。

これも、特にこの声かけがよい、というものはありません。子どもの捉え方は様々で、「お勉強」と聞いた途端、「算数嫌いやー！」とすっかり意気消沈してしまう場合もありますし、「遊び」と説明されて自分の好きなように扱えると思って検査者の指示に全然応じてくれない、というような場合もあります。この場合は、その後どのように状況を捉え直したり、気持ちを切り替えていけるかを探っていくことになるでしょう。

転んでもただでは起きない

導入でつまずいたり、検査が完了できないという結果になることは、当然検査者にとって避けたい事態です。しかし、いつでも、どんな子どもでもスムーズに導入して検査が実施できるということは、あり得ないだろうと思います。どのように導入するのがよいか、準備と心構えをしながらも、思った通りにいかない時にも子どもの反応を丁寧に観ることで、１つでも役立つことを発見しようという「転んでもただでは起きない」姿勢が必要だと思います。

10 代の母という生き方④

大川　聡子

★まえがき

前回の連載では国内の文献検討を通して、若年母親には、経済的問題、学業の中断、家族の問題、そして若年で子どもを持つことによるスティグマの付与等、多くの課題があることをお示ししました。しかし現状において、若年母親に対しては「予防」に向けた対策のみが行われており、出産した母親への支援は乏しい状況にあります。そこで今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析したいと思います。

★研究背景

10 代で妊娠した女性のうち、約 6 割と半数以上が人工妊娠中絶を選択し、出産を選択するのは約 4 割です（マガジン 11 号)。出産した母親に対しては様々な問題が指摘されており、若年で妊娠した多くの女性は中絶を選択しています。こうした中、若年母親はどのように出産を決意したのでしょうか。さらに、これまでの若年母親の研究の多くは、出産したことによる社会的問題を主眼としています。このため、出産前の社会的特徴についての調査はなされていません。今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が主体的に出産を選択していく過程と周囲の関わりについて明らかにし、その内容から、若年母親の社会的特徴について考察します。

★対象者の概要とインタビュー方法

研究対象は、既婚・未婚を問わず 10 代で出産して子どもが乳幼児である方としました。対象者は筆者の友人からの紹介や、インターネット上での協力依頼、また 2 市町村に協力依頼を行ないました。

面接が可能であった方 10 名に対して、半構成的面接を行いました。母親の年齢は 14 歳から 22 歳であり、平均は 19.3 歳でした。出産時の年齢は 13 歳から 20 歳であり、平均は 17.3 歳でした。また、夫の現在の年齢は 17 歳から 32 歳であり、平均は 22.8 歳でした。なお今回、L さんが出産時に誕生日を過ぎ 20 歳になっていましたが、妊娠時は 10 代であり、10 代で出産した母親と共通の要素が見られ、実質的な影響はないと考えデータに含めました。

内容は家族構成、学生時代の思い出、夫と交際したきっかけ、避妊の有無、出産を決意した過程、出産時の状況、母親になって変化したこと、周囲の関わり、育児の不安、社会サービスについて等です。面接することができなかった方 2 名については、E メールにてデータを収集しました。データについては、対象者のホームページに書かれていた内容についても、本人から同意を得られたため、データとして用いました。また 2 市町村の対象者においては、担当職員から受けた申し送りについてもデータに

含めています。

面接は 200＊年 5 月から 9 月にかけて行いました。インタビューに応じた 12 名のうち、夫が同席されたのは 2 名、夫の母親が同席された方、本人の妹が同席された方がそれぞれ 1 名ずつでした。また、紹介者が同席された方が 4 名、市職員が同席された方が 1 名でした。全ての対象者について録音の可否を尋ねましたが、お 1 人は録音を拒否されたため、インタビュー中に記録した文章を基にインタビュー記録を作成しています。

同席者が多かった理由として、1 つ目はケースを紹介した紹介者に会いたいという母親側からの希望があり、紹介者と共にインタビューを行った事、2 つ目に市職員が同席した母親については、職員の同席を前提として母親を紹介していただいた事があります。3 つ目に、夫や夫の母親など家族が同席したケースについては、面接当日夫や夫の母親も面接体制を整えており、席を外していただくことで、インタビューに答えていただくための信頼関係が築けなくなることを危惧し、面接にそのまま同席していただきました。母親の一人は「(筆者が)どのような人か分からなかったので、旦那についてきてもらった」と語っています。こうした同席者が多いことは、同席者の意向に左右され本人の率直な思いが引き出せないことも考えられ、インタビューの方法論としては正確なものではないでしょう。しかし、同席者との相互作用により、若年母親の生育歴や家族関係などを詳細に話していただくことが可能となったことも事実です。

面接所要時間は一人あたり 40 分から 151 分でした。面接場所は対象者の母校の保健室や対象者の自宅の近所の喫茶店、対象者の自宅等です。

分析方法は質的記述的研究とし、インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリー別に類型化しました。

対象者については、対象者の出産年齢順に事例 1 から A、その後 B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L とし、C のみ夫の母が同席したため、C の夫の母を CM としました。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については、第 3 者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、加筆修正をしています。

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しています。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮しました。

★インタビュー結果

分析した結果、1.若年母親の出産前の社会的特徴、2.生きづらさの自覚、3.行き渡らない支援、4.母親になるための努力、の 4 つのカテゴリーが導き出されました。抽出された内容をカテゴリー別に記します。以下、サブカテゴリーを【　】、コードを《　》または〈　〉で示します。

1. 若年母親の出産前の社会的特徴

(1)【出生から妊娠までの経過】

①《妊娠前の社会的特徴》

〈家族との葛藤と思慕〉

若年母親の中には、両親の離婚あるいは別居に伴い施設で育った人や、里親の元で育った人もいました。家族のしつけが厳しかったり、母親から暴力的なしつけ、虐待を受けてきた人もいます。その一方で、良好な関係を築いていた家族も複数あります。

F さんは、小学校 3 年生で両親が離婚しました。とても辛い経験をしたために、嫌だったと言うことしか覚えていないと言います。その後児童養護施設から児童自立支援施設に入所したため、父親と同居していた期間はとても短いものでした。このため、父親とは親子という雰囲気ではなく、今でも敬語を使って話す間柄だそうです。離別期間が長かったために、実の父親にも娘として甘えることが出来ないといった、複雑な思いがうかがえました。

F さん　お父さんね、F とお父さんね、F 施設入ったりとか、関係微妙じゃんか。それでお父さん女の人つくってるじゃんか。じゃけ、お互いそういう、親子っていう雰囲気じゃなくてね、お互い遠慮感がすっごいあるけんね。お父さん、F 意識しとるけんね、あんまりしゃべらん。F も敬語でしゃべる。

〈短い修学年数〉

対象者の学歴は中学在学中、中学卒業、高校中退、高校卒業、小学校・中学校から施設入所など様々でした。今回の調査対象者に、大学に入学された方はいませんでした。

彼女達の学生時代の過ごし方も様々です。楽しかった思い出を語る人が多かったのですが、小学生時代にいじめにあっていたり、小・中学校で家庭内の問題や暴走行為などで施設に入所していた人もいました。

D さんは中学校に通ったのは 1 年だけで、その後は鑑別所、矯正施設、少年院を転々としています。こうした経験を「自分にはいい経験やった」ととらえています。

Dさん　まあ、世間からしたら恥ずかしいけど、全然自分にはいい経験やから言うけど、中学校は 1 年生まで入ったけど、中学校 1 年生までなんです、行ってんのは。なんでか言うたら、まず 1 回目、いろいろ悪いことして(矯正施設から)鑑別所入ってたんですよ。

筆者　その時の悪いことってどういう？

D さん　暴走とかじゃない？

〈進路に向き合えない家族〉

インタビューした母親の中には、高校を退学している人が複数いました。高校退学の理由にあたっては、専門的な勉強をしたかったのに、親に言われるまま普通科に進学した等、自分の希望する進路を選択できなかったことが原因で中退に至る人が目立ちました。そこから、家族間の葛藤も読みとれます。

筆者　高校の時、辞めるにしろ何にしろお母さんにけっこう言われたりとか

J さん　言われた。辞めるな辞めるなって言われた。もともと専門学校行きたかったからー、それで、反対されて無理やり入ったって感じだから、余計にとくに辞めたいって。

E さんは、中学生の時から休みがちであり、高校進学にも関心が持てなかったと言います。しかし、親が家業で忙しく相談できず、何となく「周りに流されて」高校に進学したそうです。高校に入学はしたものの、校則違反により高校 1 年の 1 学期に退学することになります。E さんは、（中）学校に行かなかったことを「できちゃった結婚の代表的なパターン」であると認識していました。

E さん　できちゃった結婚の一番代表的なパターンやと思うんですけど、学校には行ってない。中学校はろくに、3 年生くらいから全然行ってない。で、高校一応入ったけど、その入ったのもね、みんなが高校入るって言うとったのに、うちは別に入りたいとも入りたくないとも分からんかったのに、親に相談した時も、親が、ちょっと引っ越しして、店経営しだしたんですよ。それでちょっと忙しかった時期やから、受験のことで相談っていうのが一切できへんくて。自分がどうしたいんかも分からんまんま、周りに流されて一人だけ就職するとかがイヤやからっていうのんで、高校決めたみたいな感じやった。まあ案の定、辞めて、退学で。はは(笑)。

〈不安定な就労〉

若年母親は学校卒業もしくは中退後、勤務経験のある人が多いです。その職種は飲食業、衣料品店員、コンビニエンスストア店員、パチンコ店員、子ども服販売員、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、派遣社員、自宅での内職等です。出産後に全員が退職されています。

D さんは、妊娠中に色々な内職をしていましたが、内職で収入を得るのは困難だったと言います。現在は乳児の子どもに細かい道具が散らかされることを恐れ、内職をすることもできません。

筆者　内職とかって、お金になりますかね？
D さん　全然。もう、ほとんどただ働き状態。3000 個くらいやっても、5000 円いかないね。1 円 10 銭とかそんなんかな。

②《若年母親が語る夫の社会的特徴》

〈母子を養うことができる夫〉

若年母親の夫は、母親と出会った時には中学や高校を卒業し、働いていた人が多いです。職種は内装業、左官業、とび職、建設業、公設市場勤務、パチンコ店店員、荷物運搬業、家業手伝い、アルバイトなどでした。

〈身近な場やツールでの出会い〉

夫と知り合った場は、中学、高校、妹や弟の紹介、職場・バイト先等でした。また、共通の場はなくとも、道で声をかけられたり、出会いを目的としたインターネットサイト等を通じて知り合っている人もいました。交際から入籍までの期間は 1 年未満の人が多いです。

③《妊娠した理由》

〈結婚するための妊娠〉

交際が進む過程でお互いに結婚したいと思っても、若過ぎる等の理由で親に反対されると感じ、親を説得するため、自立するために計画的に妊娠した人もいました。彼女達は、結婚願望がとても強かったと言い

ます。

H さんは当時「何もすることがなかった」ので早く結婚しようと思い、避妊せず妊娠を希望したと答えています。

H さん (子ども)できてみたかった。早く結婚して、私は早く結婚したかったし。

K さん できたらこっちのもんやー、言うてたもんな。

H さん 別に何もすることなかったし、結婚しよー思って。

D さんは、排卵検査薬を購入し排卵日に合わせて性行為をし、計画的に妊娠していました。D さんは小学校の時から「お嫁さんになりたい」と言い、周囲の人々や親に結婚を伝えても、「もう結婚したん？」という反応ではなく、「夢がかなって良かったね」と言われるそうです。

筆者 もう、じゃあ、妊娠されたって分かった時は、やった！って感じ？

D さん うん。計画通り！

筆者 検査薬とか買ったりして？

D さん うん。やったかな。検査薬とあと、排卵日の検査できるやつ。排卵を狙ったから。一発でできた。

〈子どもが欲しかった〉

B さんは妊娠時、中学を卒業しラーメン店でアルバイトをしていましたが、3～4 ヵ月で退職して、その後は家にいる毎日でした。夫は旧知の知り合いで、家族と別離し一人暮らしをしていました。B さん夫婦は、結婚する前から子どもが欲しいと考え、あえて避妊せず子どもを「作った」と答えています。

B さん おろすって言うのは絶対したくなかったんで。2 人が欲しいから作ったから、責任もって育てようっていうことで。

〈友人の影響〉

L さんの周りには子どもを持つ同年代の友達が多かったため、L さんは妊娠前から子どもが欲しかったと言います。妊娠して出産を決意する際も、その友人達が出産への決意に大きな影響を及ぼしていました。出産後も同じ年の子どもを持つ友人がたくさんおり、一緒に遊ぶこともあるそうです。

L さん 周りが産んではったから、友達が。友達の子どもとか見ててもすごいかわいいし、うわ、子ども欲しいなーって。でもすごい大変やでーって言われたけど、大変なん承知で。うん。産もうかなって。周りの影響もあるかもしれん。(略)周りがそういう環境やったし、たぶん周りが子ども産んでへんかって、私一人が妊娠してて子ども産むか産まへんかってなったら、まあちょっと迷うかもしれへんけど、産んでると思うけど、やっぱり周りの影響も大きかった。すごい。

〈避妊をしなかった〉

若年母親は、計画的に妊娠を考えていた人以外、ほとんどの人が避妊していませんでした。避妊していたとしても膣外射精など避妊効果が不確実なものであり、さらにその効果を過剰に期待する傾向が見られました。避妊をしなかった理由については、

「なにも考えてなかった」、「大丈夫だと思っていた」、「妊娠してもいいと思っていた」と語っています。母親たちは学校で性教育を学んではいましたが、実際の場では生かされなかったようです。

K さん　避妊は、めんどくさくてしてなかった。

H さん　私らの周り、してる人いんの？

このように K さんは、「めんどくさくて」避妊をしていなかったと言い、H さんも、自分の周りで避妊している人など誰もいないかのように認識していました。

④《出産への決意》

〈困難は承知で子どもを産みたい〉

妊娠した時は嬉しいと思う反面、戸惑いを感じた人もいました。しかし、戸惑いを感じても、妊娠したら「産むもの」だと考え、中絶することに抵抗を感じています。また中絶することへの恐怖感もあり、出産を選択しています。

筆者　妊娠したって分かった時は、産もうと思いました？

F さん　うん。若かったけか知らんけど、おろすってことは考えれんくて、もう、もし困っても、何しても、赤ちゃんおろしたらいけん。なんか、産むもんじゃないですか、おろすって簡単なもんじゃないですよね、どんだけ大変かわからんけど、とにかく産まんにゃあ、って思って。

また、妊娠した時期にちょうど進路の選択を迫られた時期にあり、周囲が進路や就職を考えるのと同様、出産して母親になるという選択をした人もいました。

〈中絶は二度としたくない〉

K さん、J さんは 1 度中絶経験があり、あのような経験は 2 度としたくない、と出産を強く望んでいました。K さんは、高校在学中に当時交際していた恋人との間にできた児を妊娠 5 ヵ月で中絶しています。K さん自身は出産を希望していたのですが、恋人や母親に反対され、中絶せざるを得ませんでした。その時の様子を「産むより痛かった」と語っています。

K さん　おろした赤ちゃん、ほんま見たらあかんやって、おろしたら、お母さんは。でも見してもらって、見るともっとなんかすごい、なんかもう、だって、人間の形になってるし、もう大っきいし。だからその結婚した時に、おろそうかなーって思ったけど、またあんななるのもイヤやしなーと思って。すっごい痛かったんです。おろす時、なんか知らんけど、産むより痛かった。

〈高卒後の進路としての母親〉

G さんは、高校 3 年生の 10 月頃に妊娠が判明し、進路を決めるのが「面倒」になり、子どもを産もうと決意し、出産しています。出産前はアパレル関係のプレスや管理部門への就職を希望していたそうです。

G さん　とりあえず、もうおろすんが嫌やって、怖そうで。でなんか、高 3 やって、10 月か 11 月にその妊娠してることが分かって、進路とかのこと決めなあかんかった時で、なんかもうめんどくさくなって、じゃあ子ども産も

うかなってなって、私は産もうと思った。

⑵【妊娠から出産までの経過】

①《出産を容認する周囲の人々》

〈父親になることを決意する夫〉

母親が出産することをすぐに決意していたのに対し、計画出産を考えていた人以外は、夫の反応は様々でした。妊娠を喜び、すぐに出産の準備を整えた夫もいれば、「嬉しそうじゃなかった」など戸惑いを感じる夫、また(妻には)無理だと中絶を勧めたり、中絶可能な日の直前まで悩んだ夫もいます。しかし最終的には全員が妻の希望に応え、妊娠を継続し父親になることを決意しています。一度は中絶を考えた夫も、本人や妻や子どもの将来を考え熟慮した結果、妊娠の継続を選択しています。

E さん　段々段々病院代とか、出産費用どうしようとか言う話になってきたら、もう現実が見えてきて、初めダンナさんおろそうって。5ヵ月でおろせって言われた。もうほんまに、自信がないからって(略)。じゃあもうおろすわーって、病院も決めて明日が手術ってなった時に、なんか、目先のことばっか考えて、自分が遊ばれへんっていうのばっか考えて、(夫は)おろせって言ったけど、ほんまにおろしていいんかなって思って。手術の当日にいきなりやっぱなしって。やっぱ産んでくれって。

また、夫自身の育ってきた環境が複雑であったことから、子どもに父親としてどう関わって良いかわからず、親になることに不安を持った夫もいました。

〈出産を後押しする家族〉

妊娠を知った家族の反応は様々ですが、妊娠前に結婚していた人以外は、すぐに出産を認めた家族は少ないです。しかし、家族の中でも出産を賛成してくれた人がいて、その人が他の家族を説得したりなど、家族の中で本人の決意を支えてくれた人がいることが多いです。妻方の父親は断固出産に反対していたり、また出産に賛成し反対する母親を逆に説得したり、全く意見を言わなかったりなど、対応には個別性が高くみられます。

妻方の母親は、妊娠に驚き中絶を勧めたり、暗に中絶をほのめかすような示唆をしたり、母親として出産の厳しさを教えたり、これからどうしたいのか前向きに話を進めるなどの対応をしていました。しかし、出産することを決めてから、積極的に本人をサポートしているのは妻方の母親であることが多いです。

夫方の両親は、出産に反対しないことが多いです。妻方の両親に出産するよう説得した夫方の母親もいます。C さんの夫方の母親は、妊娠が分かった時の思いをこう語っています。

CM さん　子ども達は今から楽しまなきゃいけないっていう、親としてのあれはあったけど、親が犠牲になってもいい、育児に協力しようと。そうでなきゃできないでしょ。

夫方の両親の場合、施設で育った、また今回の結婚以前に婚姻歴がある等の理由で親との関係が浅かった人もいます。妊娠時の家族の反応については、個別性が高く見られました。

〈学校側の配慮と支援〉

妊娠時、在学中だった 2 人は教師に妊娠した事を告げ、その後の経過を教師がフォローしています。学校に伝えた人については、始業式で校長から全校生徒に伝えたりなど、妊娠を教員だけでなく学校全体でサポートされていました。一方で一部の教師のみに伝え、学校に内密にしていた人については、体育などの授業も休まず参加していました。

②《マイナートラブルの発生》

妊娠中の異常については、貧血があった人が最も多かったです。その他蛋白尿、尿糖などがありました。事情があり実家を離れ夫と 2 人で暮らしていた F さんは、妊娠 9 ヵ月ごろに祖母に妊娠したことを伝えても、喜んでもらえなかったそうです。F さんは、故郷から離れ知り合いもおらず、夫が不在がちなこともあり、自分は一人ぼっちだと感じ、精神的に不安定になった時期もあったと言います。

F さん　なんか一番悲しかったって考えたのは、子ども産んだら誰が祝ってくれるんだろうと思って。誰かが、なんか、祝って欲しくて、子ども産まれたのを。でもみんな喜んでないし、F は知り合いおらんし、誰も、親身になって喜んでくれる人おらんなあ、って思ったら悲しくなってきてね。旦那も仕事でおらんしなと思って、したら淋しくなってきて。もうどうしよう、ぼーっと、もうなんか、一人ぼっちみたいな感じになってね。

③《出産を重大事とは考えない》

出産時の状況では、体重 2500g 以下の低出生体重児が 4 人、正規出生体重児が 7 名、在胎週数が 36 週以前の早期産であった人が 2 人、正規産であった人が 9 人でした。また、産後の子どもの経過としては、低体重であったために保育器に入ったり、心疾患のため出生後すぐ手術した人もいました。出産時に病院に行く際も、一人でタクシーに乗った、自転車で行ったなど、出産という大きな出来事にも、他人の手を借りずに母親一人で対処しようとしています。分娩経過については陣痛が 3～4 日続いた人もいますが、全体的には安産だった人が多いです。

筆者　帝王切開は大変じゃなかったですか？

J さん　全然大変じゃない。ほんとケロっとしてたんだよね。初めだけだよね。終わってすぐ。歩くまでは痛かったんだけど、歩いたらもう何てことない。

また、治療が必要な合併症があっても、経済的理由から薬を買うことができずにいた人もいましたが、周囲の勧めにより薬を買い服薬し、症状を改善させていました。

⑶【出産後の経過】

①《家族の転機》

〈子どもを迎えるための家族の変化〉

出産は、家族や周囲の人々にも影響を与えます。夫については、ギャンブルに行かなくなった、外泊を全くしなくなった、などの変化が挙げられました。要介護認定を受けている祖母と同居している L さんは、

子どもが産まれてから祖母が食欲旺盛になったと言います。

〈入籍できない父と母〉

夫が 18 歳に満たないために、出産しても入籍できないケースも見られました。夫が 17 歳の時に出産した C さんは、夫が 18 歳になった際に入籍すると言います。

〈離婚後の元夫との関係〉

出産後に離婚し、新しい人生を歩んでいる母親もいます。少し距離を置くことで、元夫の付き合い方も変化しているようで、「別れてからのほうが仲がいいかもしれない」という語りもありました。

(次号へ続く)

電脳援助 Ver.4

浅田 菜輔

効果的なプレゼン　パワーポイントを上手に使おう。

　電脳ネタを書いておりますが、私も児童相談所で働いておりますし、臨床心理士でもあります。普段はホントに「対人援助業務」をしております。ホントです。10年以上この仕事をしていると、普段の相談業務もそうですが、講師役を引き受ける場面もでてきます。何かしら発表するという場面もありますね。そういうときにパワーポイントを使う機会も多いです。多いというか、使うのが好きなんですけどね。研修会なんかに参加しても、内容はもちろんですが、パワーポイントの使い方もじっくりみていたりします。

　細かい文章があってそれを読み上げているものなど、「紙わたせば聞かなくていいじゃん」なんて思ったりします。細かいグラフの説明されると、「んなもんみえねえよ」なんて言いたくなったりします。

★ パワーポイントを作るときの大事なポイント3つ

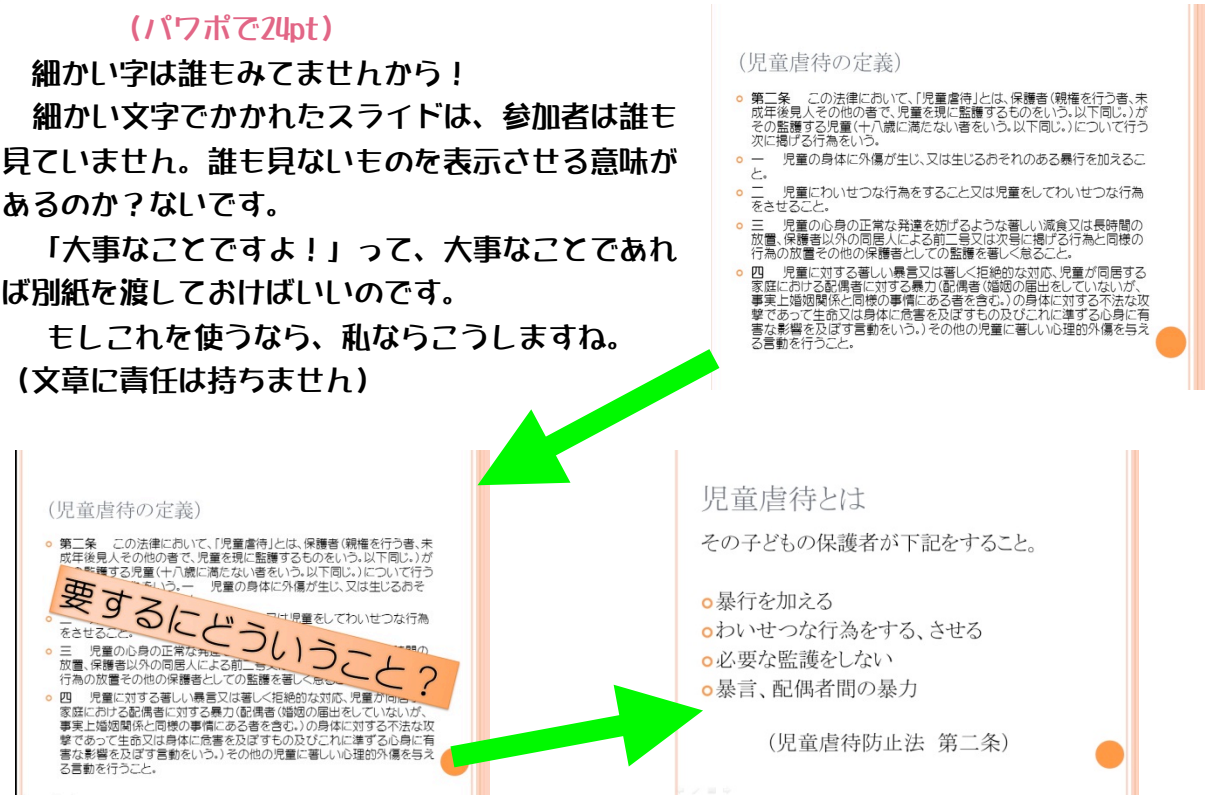
最小限の文字＋大きな文字
（パワポで24pt）

　細かい字は誰もみてませんから！

　細かい文字でかかれたスライドは、参加者は誰も見ていません。誰も見ないものを表示させる意味があるのか？ないです。

　「大事なことですよ！」って、大事なことであれば別紙を渡しておけばいいのです。

　もしこれを使うなら、私ならこうしますね。
（文章に責任は持ちません）



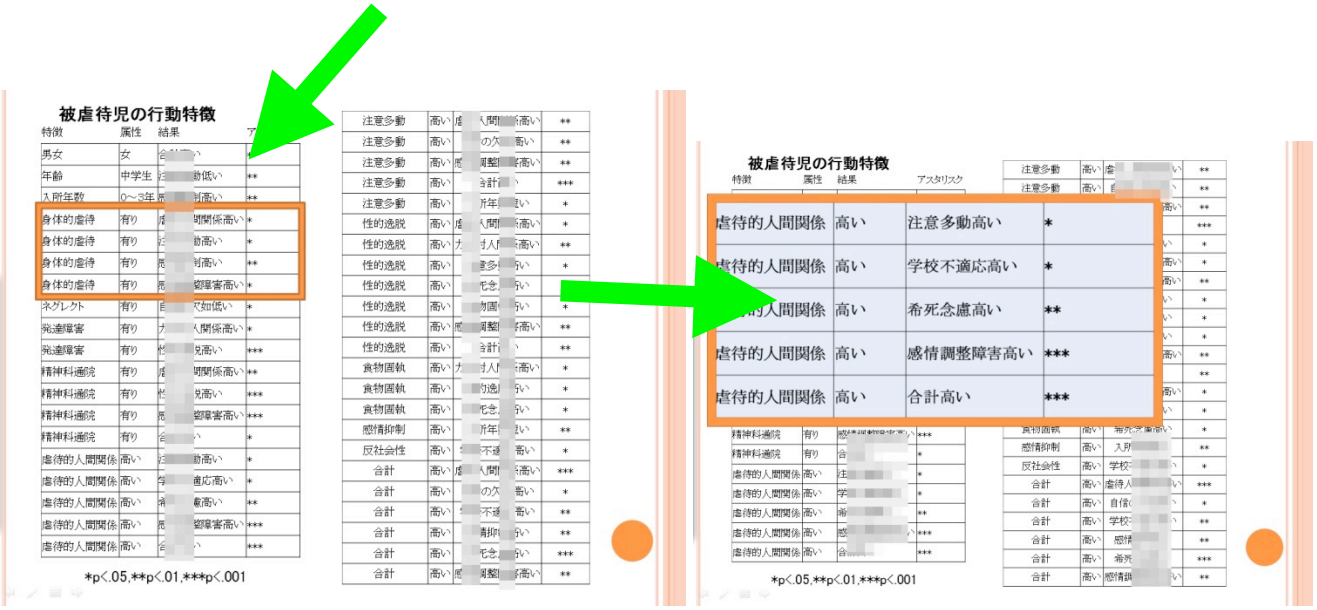
細かい表も見にくい！わしゃ老眼なんね！

まだ老眼ではありませんが、近視なのでどっちにしてもみえません。

こんなのはこうしてやります。

オレンジの枠をアニメーションで出現させます。

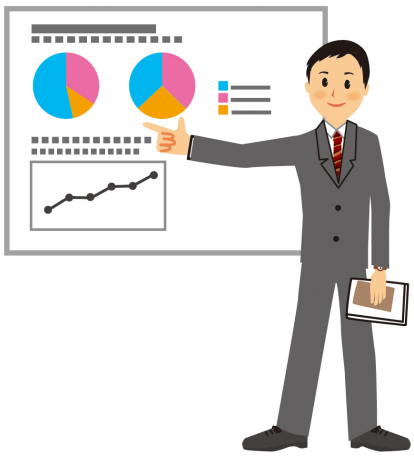
その後で、作っておいた拡大バージョンを出現させます。



こういう表でも、本当にみせたいところがありますよね？見せたいところだけみせればいいのです。

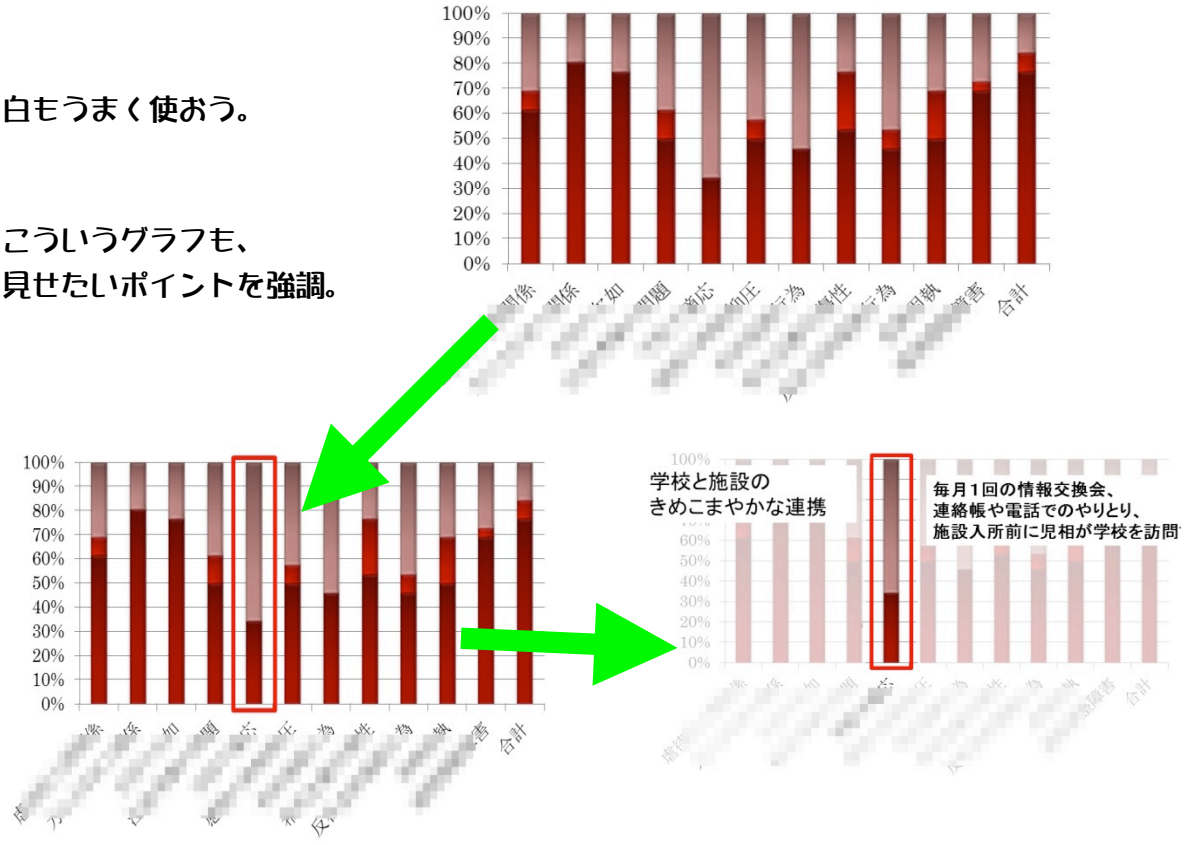
細かい字のパワーポイントは「本当に伝えたいことを絞れていない証拠」ですね。

話す時間は限られています。言いたいことを全部伝えるのは無理なのです。うまく絞りましょう。

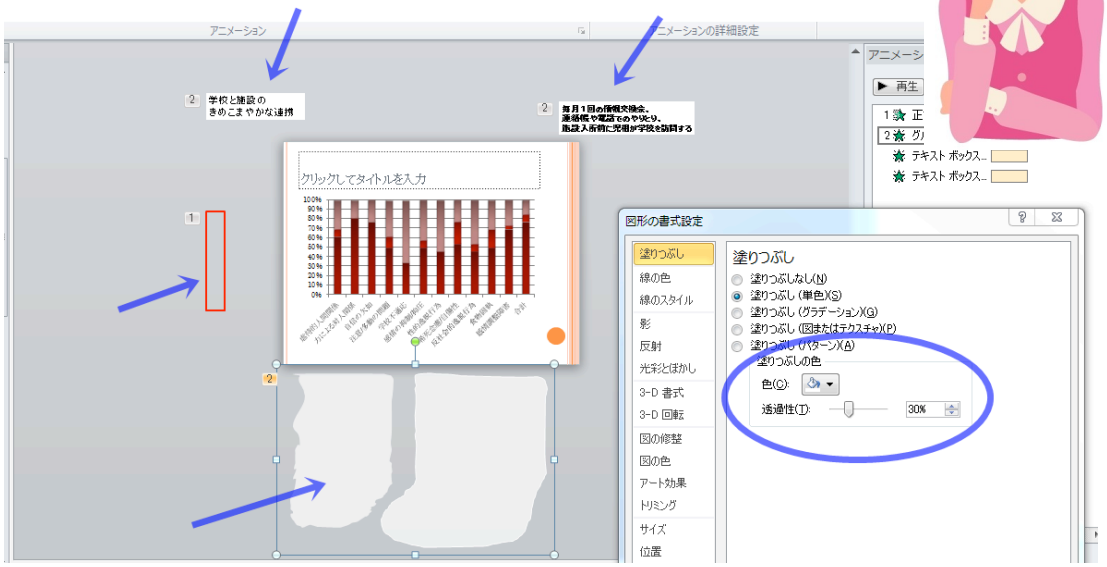


白もうまく使おう。

こういうグラフも、
見せたいポイントを強調。



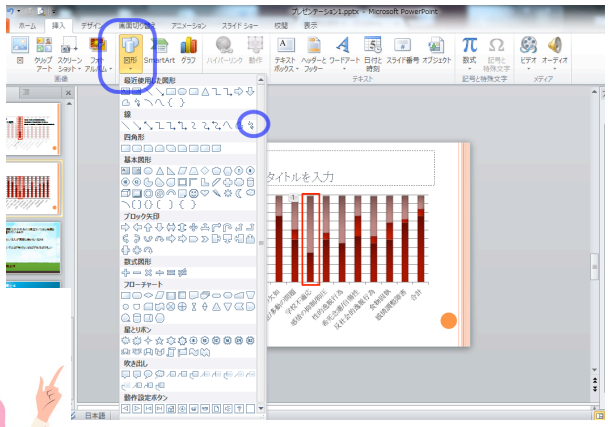
※このスライドの作りかた※

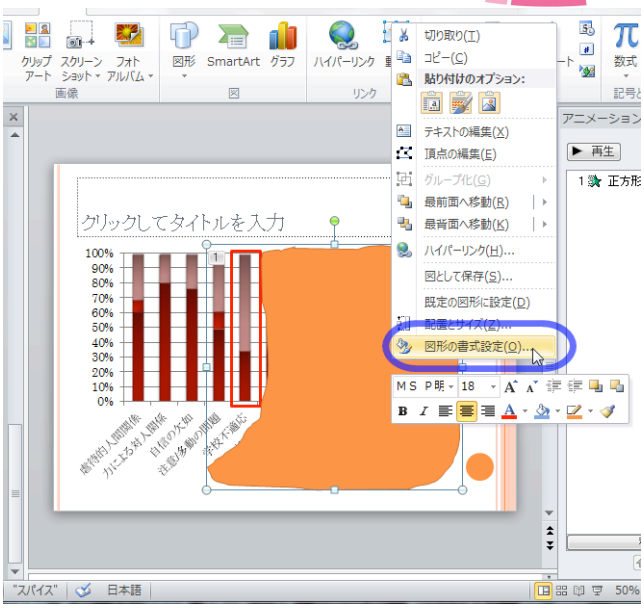


使うパーツは文字枠、赤枠、白いやつです。右側の青い丸はあとでまた説明します。

文字枠は「テキストボックス」、赤い枠は「図形」→「四角形」で作ります。

白いやつは「図形」のフリーハンドですね。



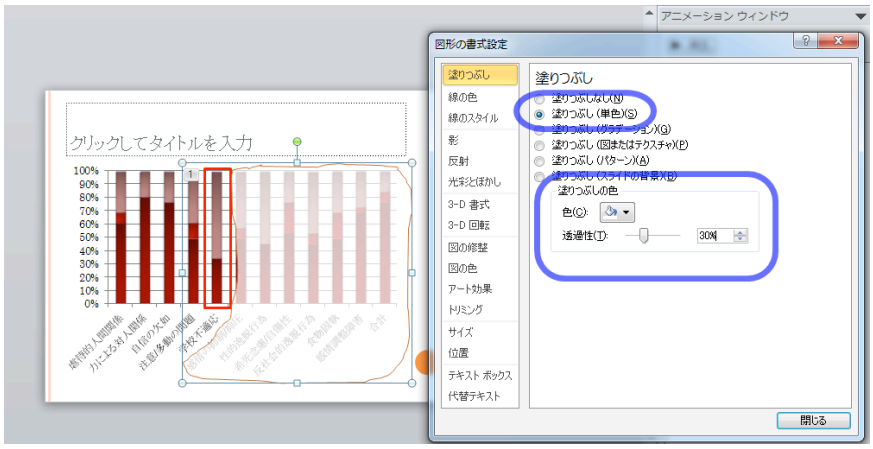


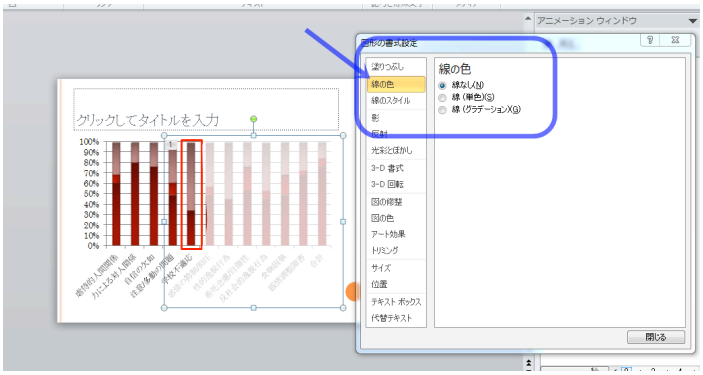
隠したい部分を囲みます。スタートしたポイントと、ゴールを結びつけるようにしましょう。そうすると、こんな感じになります。（オレンジではないかも）

オレンジの部分を右クリックして「図形の書式設定」をクリックします。

「塗りつぶし」の色を単色、塗りつぶしの色を白にして、透過性を30％くらいにします。パーセンテージは好みです。

（上で「あとで」とあるのはここです）



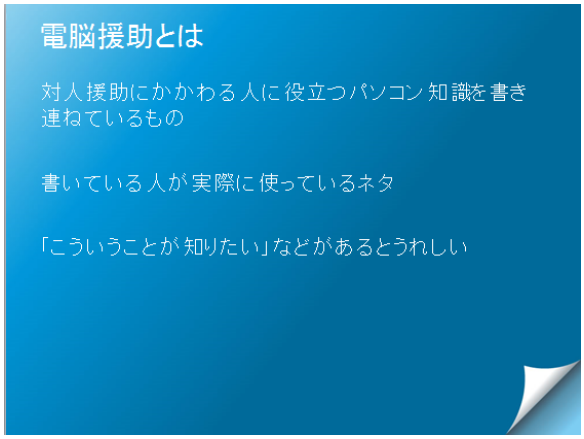


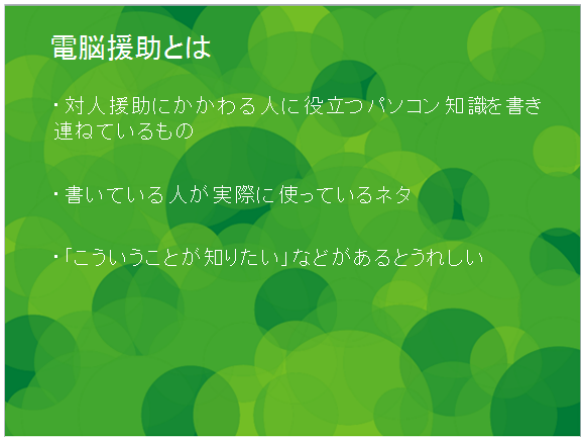
枠線の色が残るので、「線」は「線なし」にします。
同じように左側も作ります。
「半透明で枠線のないフリーハンドの領域」を作るわけです。

あとはこれらをアニメーションで同時に動かすだけでです。
一個ずつクリックするのも億劫なので「前の動作と同時処理」するようにしましょう。手間はかかりますが、動くと楽しいですよ！

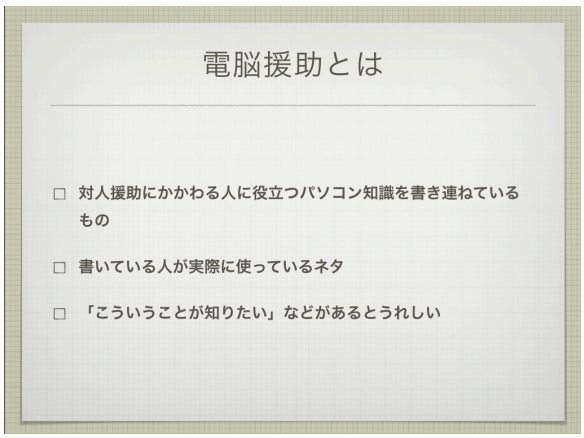
色について

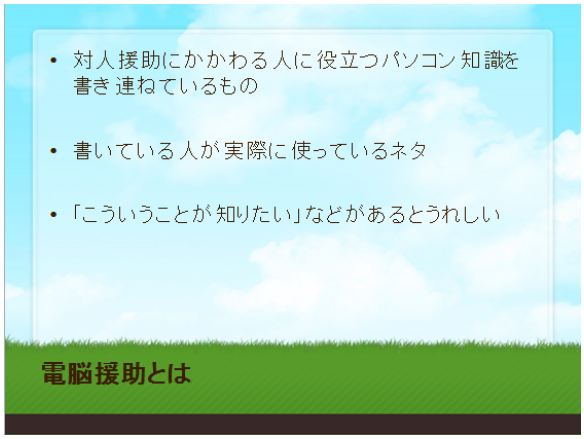
やはり見やすいのは、白地に黒。淡色の上に濃色。なぜかテンプレートには逆も多い。会場にあるプロジェクターは最新型でなくてやたら暗かったりすることも多いです。暗いとなおさら見えにくいです。
[濃地・淡字]　これはオシャレな感じがするが、スクリーンに映すと見にくい。





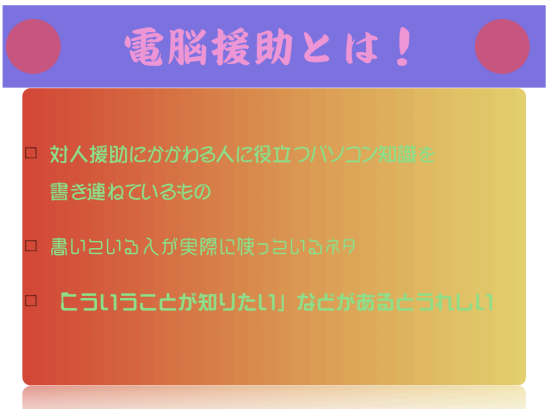
[淡地・濃字]　これはみやすい。





ギラギラとたくさんの色を使うのも考えものです。目的は、「伝えたいことを伝わるようにする」ですから、伝えたい部分を目立たせることが重要なのです。

これだとどっか具合でも悪いのか心配になりますね。



アニメーションは最低限、効果的に使う

最初はたくさん動かしたくなるので、覚えたてはむしろ過剰に使ってみるとよいですよ。「やったことない」より「できるけどやらない」ほうが余裕が持てます。あとで見直すと恥ずかしいのですが。

箇条書きをアニメーションで出すのは過剰とは思いませんが、「一気にだしたほうがいいのか」「一行ずつ出したほうがいいのか」、場合によって使い分けるといいですね。「話しながらクリックするタイミング」を練習してみるといいです。

常時動いているアニメーションは、はっきりいって邪魔です。かわいいキャラクターも、最初に目立たせておけばあとは黙っているべきです。

アニメーションをいっぱい使っているのは「ボク、パワーポイント使い始めたら楽しくなってきたところなの！」という証です。自戒。

Simple is best.っていう言葉はやはり名言だなあと思います。

シンプルで見やすい、それでいて伝えたいことが伝わるプレゼンテーションを目指しましょう。もちろん、パワーポイントなんかよりも大事なのは、どう話すかです。これも場数、経験が大事ですね。「慣れればできる」のです。

練習するのは恥ずかしいし時間がかかりますが、やってみるとひっかかるポイントとかがわかってとてもオススメです。時間配分なんかもわかります。

「人前で話すのが苦手」という人（実際苦手なのかわかりませんが）はほんと多いですね。せっかく「人と話す仕事」をしているのだから、複数相手にもやってみましょう。

Let'sプレゼン！

疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで！

日曜寺子屋家族塾の取り組み 3

古川　秀明

スクールカウンセラー（以下SCと表記）をしていて、勉強に関する家族の問題を多く扱う中で、その解決に以下の２点が必要であると思われた。

１．親に「勉強する意味」を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう。
２．子どもに勉強する楽しさを経験してもらう。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」

方法

保護者対象の講演会やカウンセリングで「勉強する意味」を話すと、今までそのような話を聞いたことがないという感想が多く寄せられた。

高校までの学校教育の中で「勉強する意味」を教えてくれる授業はない。大学の哲学や教育などの専門的な授業のなかでも取り上げられることは珍しい。

「勉強の意味」教える義務がある機関もない。勿論私が教える義務もない。

食うために勉強をして、資格や能力、学歴を身につける。その考え方にケチをつける必要もないし、この先もその考え方は機能するだろう。

私一人が「勉強する意味」をギャーギャー騒ぎ立てても世の中何も変わらない。

そんなことをするより、趣味の魚釣りをしているほうが楽しい。

よし決めた。勉強する意味など知らない顔して、見て見ぬふり振りをしよう。

そのうち誰かがやってくれるだろう。

だいたい私がこれでいいと思っている「勉強の意味」も本当にそれで良いのかどうかは疑問だ。

何もしなければ誰からも批判や非難されることもない。

そのように思う反面、これでいいのだろうかと思う自分もいた。

敗戦で、焼け野原の何もない所から、ここまで這いあがってきた親世代の勉強スピリッツには説得力もあるし、物質的にここまで豊かな国にした実績もある。

だけどそのやり方で育てられる子どもや若者が、不登校や引きこもり、いじめや自殺という社会や大人に対する地味なク

ーデターを起こしているようにも見える。

だけど、そんな考え方も私の片寄った考え方かもしれない。

それならばもう少し私のやり方で私の考えを人々に投げかけてみよう。

それで反応がなかったら何もしないでおこうと決めた。

そこで最初に思いついたのが講演会。

「つながりを考える」「孤独を考える」「勉強を考える」という演題で講演を始めた。

対象が大人の場合、どこの会場でも手ごたえがあった。

対象が子どもの場合、どんな反応するのだろうか・・・。

子ども達の感想を聞いてみたい

そこで、講演の対象が小学生（５、６年生）や中学生の時は、子ども達に講演の感想を書いてもらった。

学校は、講演会を授業の一環として位置付けているので子どもの感想記入について積極的に協力してもらえた。

感想は講演前と講演後に記入してもらい、講演前には孤独や勉強についての話をどう思うか？という質問に答えてもらい、講演後は講演を聞いた後の感想を書いてもらった。
その結果、小学校、中学校を問わず似たような結果になった。

講演前の感想
「わからへん」「早く終わって欲しい」「退屈そう」「なんでこんなんすんの？」
「もうええし」「はよ帰って遊びたい」「書く意味なし」「勉強嫌い」「孤独て意味不明」「手品ある？」

記入は任意にしたので、中学生では７割が未記入、２割が講演会に対する批判や非難。残りの１割が講演に少し期待している内容だったが、「どうすれば成績が上げられるのか聞きたい」といった内容がほとんどだった。

小学生では誰か一人が「わからへん」と書くと、それをみんなで写したのだと思われるが、その後１０人くらいが「わからへん」ということを書いている。

つまりほとんどの子どもが勉強に関する講演会に関心がなかったのだ。

講演後の感想
小学生では、講演前の、「わからへん」「知らん」というような同じ言葉が何枚も続く感想がほとんどなくなった。

中学生では講演後の感想提出率が８割を超えた。

そして、「勉強」の話をしたのだが、その話を聞いて、家族や友達の悩みを書く子

どもが多くいた。

「勉強する意味」は自分の生活に大きく関わっていることを何となく感じてくれたようだ。

＜小学校５年の女の子の感想＞

「私はいつも友達から仲間はずれにされます。今もＡ子ちゃんとＢ子ちゃんにハミられ（仲間はずれにされること）てます。お母さんに言うたら、仲間はずれにされて悔しかったら、勉強で一番になって仲間はずれにした奴を地獄に落としたりてゆわはりました。そやから塾に行けて言われて塾に行ってます。けど私はＡ子ちゃんやＢ子ちゃんと仲良くなりたいだけやし、地獄には落としたくありません。今日のお話を聞いて、勉強は誰かを地獄に落とすためではないことがわかってうれしかったです」

＜中学３年生男子、Ａ君のエピソード＞

Ａ君は大変素行が悪く、地域や学校でも有名な非行少年。学年集会や行事でみんなが集まると必ず騒ぎを起こしていた。私の講演会の時も二人の屈強な教師に両脇を抱えられ、それでも「話なんかだるいんじゃ、はよ帰らせ！」とわめきちらし、その度に両脇の教師にきつく指導されていた。話の流れの中で、そんなＡ君に私が「君は誰かに親切にして喜ばれたことあるか？」と尋ねるとＡ君は「他中の奴とグループで喧嘩になった時に、ツレがやられそうになったんを助けたったんや。ほんならごっつう喜びよってな。それから俺ら親友になったんや」と得意げに答えてくれた。Ａ君の一言で会場は爆笑に包まれた。和やかな空気になったところで、私はＡ君に「そのツレに感謝された時、君はどんな気持ちになった？」と尋ねると、「そらうれしい気持ちになったに決まってるやんけ」と答えてくれた。「なんでうれしい気持ちになったん？」と尋ねると、Ａ君はう～ん、う～んと考え出した。「ほんなら今から私がなんでうれしい気持ちになったか教えたげるから聞いてくれるか」と言うと、Ａ君は最後まで静かに聞いてくれた。講演の最後に「Ａ君、最後まで静かに聞いてくれてありがとう。Ａ君が静かに聞いてくれるという親切な行動を私にしてくれたので、私はとても助かりました」と話すと、Ａ君は私に右手でピースサインを送ってくれ、会場のみんながＡ君に拍手をした。後日Ａ君の担任の先生から、「Ａ君が３０分以上みんなの中で静かに座って誰かの話を聞いたのを見て、学年の教師全員が驚きました」という話を聞いた。

私は子ども達に非行防止や健全育成や友情のことについて語ったのではない。
なぜ勉強するのかを話したのである。

その勉強の話を聞いた子どもたちは勉強以外の大切なことに気づき、自分の心の中に小さな変化を起こし動き出した。

これらの感想やエピソードは「勉強する意味」の話は大人だけではなく、子どもにも伝わるものがあるということをわからせてくれた。

そして、親だけではなく、子どもだけでもなく、親と子が一緒に勉強をする意味を学んだらどんなことが起こるのだろう・・・ということに興味を持った。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」という私の考えはいつのまにか、親と子が一緒に勉強する意味を学び、そのことを共有して、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら、何かもっと良い変化が起こるかもしれないという考えに変化していた。

（次号に続く）

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.2

浅野　貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

今年の5月から8月にかけて、京都に滞在しながら博士論文のためのフィールドワークを実施していたのですが、調査にご協力頂いた方などから、「どうして留学をしようと思ったのですか？」という質問を受けることが度々ありました。今回は、その質問にお答えするような形で、私の思いを綴りたいと思います。

***Clifford Tower*:**
ヨーク市内の中心部に位置する。タワーの上からは市内が一望でき、ヨーク観光には外せない人気スポット。

留学をしようと思ったきっかけ

前号で触れましたが、留学する以前は、対人援助職の養成及び継続研修等を実施する民間機関である、京都国際社会福祉センター（以下、KISWEC）に勤務していました。留学をしようと思ったきっかけとして第一に挙げられるのは、このKISWECでの経験です。

KISWECには、海外研修・交流事業の一環として、社会福祉分野での博士号(PhD)の取得をサポートする制度があります。KISWECの元スタッフで、この制度を利用してアメリカやイギリス等の大学院で博士号(PhD)を取得した後、日本の大学で教員をしている方が数名います。そうした方の留学経験を直に聞き、様々な刺激を受けたことが、留学を考える大きなきっかけになりました。正直なところ、それまでは自分の将来のキャリアパスの選択肢として、留学を考えたことは全くありませんでした。

またKISWECでは、スイスから招聘した講師が研修を担当したり（※現在は在籍していません）、 海外研修・交流事業として、京都市内のメンバーになっている社会福祉施設から、

毎年2名をスイスへ3ヶ月間派遣する事業を実施しています。そうした環境にいたおかげで、少しづつ海外を身近に考えるようになったように思います。

次に、今後、研究に携わっていく上で、博士号の取得が必須になるであろうことを考えた時に、日本の大学院の博士課程に進むのか、それとも 海外の大学院に留学をするのかという2つの選択肢がありました。KISWECの研修事業を通して、多くの研究者と接する機会があったこともあり、前者を選んだ場合の大まかなキャリアパスは予想することができました。つまり、KISWECで働きながら、大学院の博士課程に進み、論文や学会発表等の業績を積みながら、大学の教員のポジションを目指すというルートです。

そして、前述の通り、留学をしてみたいという気持ちはあったものの、いざ実現させようと思うと、現実的にクリアしなければならないことが色々とありました。英語の問題はもちろんですが、 結婚や第一子の誕生という大きなライフイベントがあり、 家族のことを考えると、留学をあきらめざるを得ないかという思いは、幾度となくよぎりました。しかし一方では、そうしたことを理由にしてあきらめたら、後悔し続けるだろうという思いもありました。

そのような中、どちらの選択肢を選ぶべきかについて迷っていた際に、留学するという決断を後押ししたのは、聖書にある「狭い門からはいれ」 （マタイによる福音書 7 章 13,14 節）という言葉でした。私はクリスチャンではありませんが、何となくこの言葉が心に残っていました。 現実的なことを考えると、「広い門」を選んだ方がきっと無難だろうが、 留学という険しく苦労が多いであろう「狭い門」 に思い切って進んだ方が、長いスパンで見たときには、きっと得られるものは多いだろうと信じて、最終的に留学を決断しました。その決断に至るまでには、家族はもちろんのこと、様々な方々のサポートがありました。

留学を決断してからは、英語圏の大学・大学院に留学する際には必須となるTOEFLという、英語能力の判定テストの対策のために、大阪にある予備校に通ったり、留学についての様々な情報を集めるなどの具体的な準備をしながら、留学に備えました。

アメリカへの留学

Gateway Arch:
セントルイスのシンボル。1962年に完成し、その高さは約192mあり、頂上部分には展望台がある。

留学先については、早い段階からアメリカ、またはカナダを目指すことは決めていました。その理由のひとつとして、日本の社会

福祉分野において、海外に留学して修士号(Master)や博士号(PhD)を取得し（※博士号の取得者数は非常に少ないですが）、日本の大学で教員をしている研究者の多くが、アメリカに留学していることが挙げられます。そうした研究者の書籍や論文等を通して、ソーシャルワークの理論や調査方法等を学んでいたので、アメリカかカナダの教育システムの中でソーシャルワークを学び直したいと思いました。

さらに、特にアメリカの大学は、奨学金(scholarship)のシステムが充実していることが、もうひとつの理由として挙げられます。これは、例えば、日本育英会の奨学金のような貸与型(loan)ではなく、給付型であるため返済義務はありません。実際に、私が留学したワシントン大学（Washington University in St. Louis）から、この給付型の奨学金を得ていたため、経済的には非常に助かりました。また、私の同期の留学生の中にも、同様の奨学金を得て留学している人が少なからずいました。アメリカの大学（特に私立大学）の授業料は驚く程の高さですが、様々な形で奨学金を付与し、経済的にサポートするシステムがあることが、世界中から多様な学生が集まってくる理由のひとつだと思います。

また、私はKISWECに就職する以前に、日本の大学院で社会福祉の修士号を得ていたのですが、留学にあたり、最終的な目標である博士号の取得に向けて、修士課程を経て博士課程に進学するのか、それとも直接博士課程に進学するかの2つの選択肢がありました。先述の通り、 KISWECの元スタッフで、アメリカやイギリスに留学した方々の経験を聞いたり、その他にも色々と調べた結果、直接博士課程に進学するルートは非常に難しいことが分かったため、修士課程でsecond masterを取得した後、博士課程に進学するルートを選びました。

現在、イギリスのヨーク大学（University of York）の博士課程に在籍している立場として、自分の選択は間違っていなかったと実感しています。分野にもよるので一概には言えませんが、何より英語の問題が一番大きく、それに関連して、英語圏のアカデミックなルールや慣習に慣れるのは容易なことではありません。私にとって、修士課程の2年間（※アメリカのソーシャルワーク分野の場合）というのは、そうしたことにadjustするには必要な期間でした。ワシントン大学の同期の留学生の中にも、同様の選択をして、博士課程に進学している人たちが何人もいます。逆に、ヨーク大学で、英語圏の大学の修士課程を経ずに、直接博士課程に進学して、色々と苦労している留学生の同僚もいます。

Brookings Hall :
ワシントン大学の正門。1904年に、セントルイスで開催された万国博覧会で使われた建物が移設された。

アメリカからイギリスへ

上述のように、アメリカでMSW(Master of Social Work)を取得した後、博士課程に進学するためにイギリスに移ったのですが、「なぜ、アメリカではなく、イギリスの大学を選んだのか？」という質問を、イギリスに来た時によく受けました。この質問の背景には、その逆のケース、つまりイギリスからアメリカという選択はあっても、私のようなケースは非常に珍しいということがあります。

日本の大学でも博士課程の場合は同様だと思いますが、修士課程と違い、博士課程に進学する際は、ある程度明確にされた研究テーマと研究方法について、指導教授(supervisor)が興味を持ち、指導をしてもいいとならないと学生として受け入れてはもらえません。ある意味では、お見合いのような側面があると言えます。そのため、 まず、アメリカ及びカナダの大学のホームページで公開されている情報を元に、 自分の研究テーマと近い研究をしている研究者を調べました。しかし、ソーシャルワーク分野で似たような研究をしている研究者はあまりいなかったため、イギリスとオーストラリアにも範囲を拡げて調べました。その結果、自分の興味と近い研究をしている研究者を見つけることができたので、メールでコンタクトをとったところ、そのうちの何人かの研究者が、私の研究に興味を示してくれました。その中でも、現在、私が ヨーク大学で 指導を受けているIan Shaw先生（http://www.york.ac.uk/spsw/staff/ian-shaw/）は、最も早く返事を下さり、進学を熱心に勧めて下さいました。そのことがイギリス、そしてヨーク大学を進学先として選択した最も大きな理由です。

さらに、アメリカとは違った環境に身を置いて、ソーシャルワークを研究したいと思ったことも、イギリスを選んだ理由として挙げられます。海外で暮らす中で、強く実感することなのですが、ある物事を考える際に、違った文脈から考えてみて、その比較を通して、よりそのことの特質が見えてくるということがあります。そして、その比較する文脈がより多様な方が、様々な側面からそのことを捉えるchanceが生まれます。その意味で、ソーシャルワークについて研究する上で、アメリカだけではなく、イギリスの文脈も比較対象とすることを通して、より多様な視点を得られるのではと思い、イギリスで研究をすることを選びました。

おわりに

この第14号が刊行される頃は、すでにイギリスに戻っています。 留学して以降、長期で日本に滞在したのは約5年ぶりだったのですが、今回の滞在の中で、留学前と変わらない風景を別の視点から捉えている自分に気付くことが度々ありました。今後の連載を通して、そうしたことも取り上げていきたいと思っています。

養育里親

～もうひとつの家族～

2

坂口　伊都

はじめに

今回は、養育里親登録を開始するまでの家族に焦点を当てて、書いていきたいと思います。私以外の家族が、何を思っているのか今も把握しているわけではありません。内心、迷惑だと感じているかもしれません。それでも、新しい家族を迎え入れるための気持ちの準備をし、待ってくれています。

里親をするには、家族の理解がなければできませんし、その中でも子どもの気持ちや意見と丁寧に向き合っていく必要を感じて、対話をするように心がけているつもりです。まだまだ、その行動が足りないのかもしれませんが、家族あっての養育里親登録につながったのは確かです。

児童相談所

養育里親を目指すためには、まず自分が住んでいる地域管轄の児童相談所に電話をするところから始まります。私は仕事で、幾つかの児童相談所に出入りしていましたが、自分自身が利用者として児童相談所に連絡をする経験は初めてでした。また、居住地管轄の児童相談所に面識はなく、電話をかけるまでに勇気がいりました。

児童相談所に電話をすれば、事態が動き出す覚悟を決めなければならないし、利用者として電話をかけるという行為は、想像以上にためらいがありましたが、思いきって電話をすると、まずは児童相談所に来ていただいてお話を聞か

せてくださいと言われました。

行ったことがない児童相談所に利用者として出向く前は、どんな人がどんな対応をするのだろうと考え、何となく気が重い感じがしていました。

児童相談所に着くと、相談内容を記す用紙が渡されました。養育里親になりたいので、相談に来ましたぐらいしか思いつかず、書きにくい用紙だなぁが、利用者としての感想。ここで、敷居が一段高くなったような気がして、余計に落ち着かない気分になりました。

現れたのは、地域担当ワーカーと里親担当ワーカーの方でした。養育里親になりたいという趣旨と苦手な理由を告げると、養子縁組を希望しているわけではないのですねと聞かれました。

児童相談所に里親になりたいと相談に来る人の多くが、子どもに恵まれず、いろいろと悩んだ上、たとえ血のつながりがなくても家族として迎え入れたいという養子縁組を希望する里親だそうです。確かに、里親研修でお会いした方は、養子縁組を希望する里親のご夫婦 2 組でした。養育里親をしたいですと名乗りをあげる夫婦は稀であることを再確認しました。ただ、里親委託率がとても低い地域だからという部分もあるのだと思います。

児童相談所のワーカーは、現実の里親の姿を伝えようと必死になっていると感じました。預かる子どもの難しさや子どもが委託されるまでに時間がかかること等の説明を受けました。

「あなたも里親になりませんか？」という里親委託を推進するポスターを見かける時代になっていますが、児童相談所は、「よく来てくださいました。是非、里親を考えてください」ではなく、「里親はそんな簡単なものではありません。それでもやりますか」と問われるので、この初回で止めようとする人も出てくるだろうと想像できます。

ワーカーの方とこれまでの経緯や私の想いについて話をしていく内に、里親委託される子どもの背景についても理解しているということになり、専門里親を考えてみる気はないかという展開になりました。中高校生で、できれば里親宅に行ければと感じる子どもは多く、ニーズはあるが行き先がないと語られました。専門里親は、中高生専門の里親ではありませんが、

① 児童虐待等の行為により心身に有害な影響を受けた児童
② 非行等の問題を有する児童
③ 身体障害、知的障害又は精神障害がある児童

という枠組みがあり、より専門的なケアを提供する里親になります。

まずは、児童相談所で聞いた話を家族に伝え、里親登録を希望するかどうかが決まったら、改めて児童相談所に行き、申請書類をもらう段取りを言われました。なかなか、手間暇がかかる作業だなぁが率直な感想でした。

家族会議

夫とその当時中 1 の息子、小 5 の娘に児童相談所で言われた事を話しました。専門里親になったら、あなた達よりも大きなお兄ちゃんやお姉ちゃんが来て、時には怒鳴ったり、暴れたりすることも出てくるかもしれないと話をした時、重い空気が漂いました。3 人とも無言です。そして、「ママ、取られちゃうの？」と娘が涙を流しました。「ママは、何が起こってもあなたのママだよ」と答え、「あのさぁ、こうやって話をすると、すごく怖くなっちゃうよね。でもね、化けものが来るんじゃなくて、来るのは人間だからね」と言うと、息子も娘もクスッと笑い、表情が明るくなりました。

息子は、専門里親でもいいと言います。不思議なことに息子は、里親をすることに対してぶれないのです。もともと多くを語る子ではない

ので、真意はわかりませんが、「いいよ」という言葉に力強さがあります。それは、今でも変わりません。息子は、どのように理解して、感じているのだろうと心配に思うところはありますが、覚悟を決めているのかもしれません。

我が家が、里親としてやっていくために子ども達に意見を出してもらい、条件を出してくれればいいと伝えました。あなた達が、里親をするのが嫌だと言えば、無理をしてまでもしようとはしないし、いつでも嫌だという権利がある。家に来る子とは、必ず事前に家族全員が会って交流をし、息子、娘、その子の 3 人共が一緒に暮らしてもいいと言ってくれたら、里親としての生活が始まる。里親としての生活が始まったら、こちらの都合で預かれませんとは言えないと伝えました。そして、「ママはね、あなた達が家族でいてくれるから里親ができそうな気がしたの。自分達だけが幸せだったらそれでいいとは、どうしても思えなくてね。だから、里親をしたいと思ったの」と言い、少し時間をかけて考えてもらう事にしました。

私の父と母には、婚姻関係がありません。物心ついた時から、私は母との二人生活で、母親から「あなたには家族がいないから、自分の家族を作りなさい」と言われて育ちました。母が言う家族とは、世の中の理想的な家族像なのでしょう。私は、自分を普通ではない子どもと認識していました。そんな私が結婚をし、子どもを産み育て、母親になるイメージを持てずにいました。不幸を支えに生きていると、人並みの幸せというものが眩しすぎて、尻込みしてしまいます。誰よりも幸せに憧れているのに、自分は幸せになってはいけない部類の人間だと目を伏せようとする。妊娠した時も、いつかは子どもに恨まれることを母になる私は、覚悟しなければいけないなどと感じていました。わざわざ疲れるように生きていた頃の思考です。

子どもを産んでからも、上手く回らない感じが続きました。私の母は、何事も一所懸命取り組む人間なのですが、時としてピントがずれることがあります。出産前後は、母が私に付き添い、心配そうに手伝ってくれていました。ただ、子どもが泣くと「あぁ、可愛そうに。こんなに泣かせて」と子どもを抱き、静かな場所に連れて行き、「ほら、私（母）が抱くと子どもは泣き止むでしょう」と言いながら戻ってくるのです。そのやり方では、新米ママの私が子どもを泣き止ませる術を学べません。

育児に心身ともに疲れきった時、私たち夫婦は、夫の実家に助けを求めました。その時、姑さんは「子どもは、泣くのが仕事。子どもにリズムを合わせてトントンすれば泣きやむよ。やってごらん」と教えてくれました。こうして、不器用ながら、母としての生活が前に進み始めました。子どもを育てることは大変です。数多くの失敗も重ねてきました。私は、母としてやっていけるのだろうかと気落ちした事もあり、その当時の私なら、自分の子一人を育てるのもしんどいのに、里親なんて絶対に無理と言うでしょう。

子どもとしても、妻としても、母としても躓いてきました。今は、できの悪い私を夫と子どもが支えてくれ、ここまで一緒に成長させてもらったと感じています。だから、この家族がついていてくれるなら里親ができるかもしれないと感じられたのです。さぁ、家族からどんな返事がもらえるのでしょうか。

再び、家族会議で集結。夫は、子ども達を護っていけるのなら里親をしてもいいと言います。とにかく、子ども第一。息子は、相変わらず落ち着いた様子で、不愛想にいいよと言います。でも、年上は嫌だと言いました。娘は、モジモジしています。それは、いいよと言いたいけど、言いたくない、そんな複雑な気持ちなのでしょう。

そこで、「とりあえず里親の登録をしてから考

えよう」となりました。登録しなければ、新しい家族は来ないので、登録できてから、また話し合おうと決めました。この決定は、私の気持ちも軽くしました。新しい家族を迎え入れてと考えると、言いようのない不安に襲われますが、とりあえず登録からと考えると、やれそうな気がしてきます。

その後、児童相談所に出向き、家族の意向を伝えました。子ども達は、自分たちよりも年下の子を希望している事もあり、まずは養育里親からのスタートに落ち着きました。

家族のその後

この時から、徐々に養育里親という事を家族が意識するようになりました。娘は、「来る子は男の子？女の子？女の子がいいな。小学校１年生がいいかな、保育園の子がいいかな」と具体的なイメージを膨らませ、要求してきます。そして、「本当に来るの？やさしくできるかなぁ。やっぱりやめる？」とも言います。娘は、登録を進めている間、ずっと揺れていました。この話をし始めてから１年ぐらい経った頃、急に「決めた。覚悟できた。いいよ、来ていいよ。児童相談所に電話して」と言い出しました。その宣言後は、やめようと言わなくなりました。娘の中にどのような葛藤があったのでしょうか。何回もお風呂の中で話をしてきました。家にやって来る子は、親がいるという説明もしていますが、難しくてわからないそうです。

息子は、今でも落ち着いて、別にいいよと言います。何で、そんなに余裕なの？と聞くと、「俺は、部活の卓球に行ければそれでいい」と返ってきます。やはり、息子の真意はよくわかりません。

一番負担が多いのは、夫でしょう。これから一緒に里親研修と実習を受けなければならないですし、子どもが来たら、夫の役割は大きくなります。それでも渋らずにいる理由も、私にはよくわかりません。どこか楽天的な性格の夫は、何とかなるさと思っているのかもしれません。夫と一緒に養育里親登録を目指していて、気づくことがありました。夫は子ども達の話を聞くと高齢者に置き換えて理解をしようとするのです。高齢者福祉施設の職員だけあって、ああこういう利用者さんいるなぁ、うんあるある了解という感じです。自分の経験に引き寄せて、理解しているようです。

この家族達の行動は、養育里親に向けて準備体操をしているように見えます。一人ひとり違う準備体操ですが、必要な期間なのだと感じています。里親家族としての準備は、子どもが、知らない家族の元にやってくる事を考え、いかに我が家に来てくれてありがとうと迎えられるかではないかと思います。その子（里子）の居場所を作っていこうという感覚を里親家族に育てることが、その子の安心につながると考えています。

編集後記

編集長（ダン シロウ）

自分がこのマガジンの中で執筆者として、どのような位置取りをするかは、いつも意識している。多くの執筆者には渾身の連載をお願いしている。無期限連載とはそれくらいのエネルギーを強いるものだ。

だから編集長でもある私の連載は、一冊のマガジンとして、いろどりを考えたメニューでなければならない。一冊丸ごと読む人はないとしても、ピックアップして毎回読んでいますという読者のために、多様なものでなければならない。

そんなことも考えつつ始めた新連載「蟷螂の斧　part2」でつまずいた。

夏休みに入って比較的時間もあったので、じっくり思案してみた。その結果、新たな執筆には、思いがけないほどの時間を取られた。それにもかかわらず今、十分満足な結果というわけではない。上手くいく時はスッスッと出来てしまうものだ。難渋して、苦労を積み重ねても、結果がよいとは限らないのは他でもたくさん経験している。まぁ、こういう事もたまにはしてみるのが良いかもしれないとは思う。

硬軟長短、様々な記事で一冊が構成されてこそのマガジンである。査読の入る論文は「対人援助学会誌（望月編集長）」として同じく学会 Web 上で別に発行されている。そちらも是非、ご覧下さい。

編集員（チバ アキオ）

「引っ越しました　屋久島に移り住みました。機会がありましたら、ぜひ遊びに来てください。大野睦」という転居の知らせをもらったのが 1996 年。1979 年に小学 1 年生で出会って、地元で当たり前のように一緒に歳を重ねた。大学時代は大学は違ってもお互いに福祉の道に行った。そんなある日、屋久島に移住の知らせ。どんなところだろう？是非行ってみたいと思ってから 17 年。やっと屋久島に上陸！

この対人援助学マガジンの連載もしている大野睦氏が代表を務めるネイティブヴィジョンさんの事務所へ。「おっす！」いつも通りのあいさつ！カヌーに、「もののけ姫」のモデルになった白谷水雲峡、ウミガメの誕生、ヤクシカ、ヤクザル…大野さんのおかげで本当にあっという間の 2 泊 3 日がすぎた。

京都より涼しいのも印象に残りました。大野さんはよく言います「屋久島の自然がそうさせるねん」この言葉の意味が少し分かるようになりました。是非、一度屋久島に行かれることをお勧めしますよ！最高！

編集員（オオタニタカシ）

仕事を始めて 10 年、結婚して 5 年、親になって 3 年、編集委員になって 1 年が経過しました。今の生活、仕事を見渡してみて、まずまず自分がやりたいと思っていることができていると思う。そして、これはきっと幸運なことなのだとも思う。

新しいことをスタートさせるのは、いつもスムーズだったわけではない。「〇〇になったらどうする！？」というリスクを危惧する声に、流れが差し戻されることもあった。けれど、一度スタートさせたものは、止まるべき必然にたどり着くまでは止まることはない。マガジンの連載を見ても、1 つのテーマで長く展開されているものが多く目にとまる。きっと、終着点まで止まることなく突き進んでいかれるのだろうと思う。

私も負けないように、自分の持ち場で力を尽くそうと思う。この仕事に就いて初め

て、長期プロジェクトに取り組み始めた。7ヵ年計画です。無事全うして、7 年後にマガジンで報告することが、今の目標です。

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８
ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻14号

第四巻　第二号

２０１３年０９月１５日発行

http://humanservices.jp/

第十五号は2013年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切11月25日！

新規連載者を募っています。編集部ま

で執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のイラストは2004年の産経新聞、正月紙面を飾ったイラストだ。

出先からケータイ電話で照明や暖房の操作ができる。みんなが出払った家の電気を、防犯上の理由でつけておく。帰宅した時に寒くないように、帰路のどこかで、あらかじめ暖房を入れておく。

こんなことを言っていた10年後の2013年夏、家にいて節電を心がけすぎてクーラーを使わずに、熱中症で死亡する人がいた。わずか10年である。仰天するような違いではないか。

このイラストを依頼されて描いたとき、今を想像することなど出来なかった。

しかしこれが世の中というものである。今、自分たちのしていることを、少し先にはもう覚えていない。そして、その時その時で、それ風なことを言う。

60年以上前の戦争のことを覚えている人は、ごく僅かになった。

「戦争を知らない子ども達」が爺、婆になった。団塊ジュニア世代に、戦争などピンと来なくなっていても仕方がない。その下世代が育ちつつあるのだ。

だから、具体的に警告する。我が子を殺したくなかったら、勇ましいことは言うな。近隣諸国との関係について、やたら勇ましいことを言う輩を黙認していると、戦争にかり出されるのはあなたの子だ。言った奴はたいてい行かない。昔からそうだ。

被災支援の一環として始めた木陰の物語特別版。第一集は、主に幼稚園や保育園、児童相談所や子育て支援施設経由で配布させていただきましたが、第二集からは、読者の皆さまに協力いただいて配布しています。

「そういえばあの人に…」「これが何かのきっかけになれば…」「私の気持ちを添えて」等。冊子は10冊単位でご指定の住所にお送りします（おひとり50冊まで）。送料は弊社にて負担します。「届ける！プロジェクト」へのご参加、よろしくお願いします。

本について

「木陰の物語 –side by side–」 著者：団士郎

小雨の行列／ふたたび／贖罪／貝殻／団塊の選択

プロジェクト参加方法のご案内

(1)下記の所定の欄に必要事項を記入し、FAXにてご返送ください。

(2)ホンブロックから、ご連絡します。1週間たっても連絡が来ない場合は、未達の可能性がありますので、お手数ですが再度ご連絡をお願いします。

(3)お手元に“木陰の物語”が届きます。受付完了から1～2週間程度お時間を頂きます。

(4)あなたの周りの大切な方々へ“木陰の物語”をお渡しください。

お申し込み

お名前	
施設・団体名	
おところ	〒
TEL	
申込冊数	冊

FAX返送先 **03-5775-1613**

届ける！プロジェクト専用サイト

http://facebook.com/kokagenomonogatari

子どもと家族を想う出版社
ホンブロック
〒107-0062 東京都港区南青山2-14-7
アソブロック株式会社内　TEL.03-5775-1612

対人援助学会

第5回年次大会

2013年11月9・10日　立命館大学　敬学館
（衣笠キャンパス）

基調講演　**「被災者の心を支える、思い出工学の考え方と実践」**

仲谷善雄 氏　立命館大学情報理工学部教授

連携

11月9日（土）

12：00～
受付開始

13：00～15：20
ポスターセッション

15：30～17：00
理事会企画ワークショップ
企画1ワークショップ

17：20～18：30
懇親会

大会参加費

★事前申込
　会　員 2,500円　非会員 3,000円
★当日申込
　会　員 3,000円　非会員 3,500円
★基調講演のみ 1,000円
★懇親会 2,000円

■事前申込について

事前申込をされる方は、氏名・所属・連絡先を明記の上、2013年10月31日迄にFAXまたはE-mailで大会事務局までお申込ください。尚、大会参加費は、同日までに下記指定口座にお振込を頂きますようお願い申し上げます。

口ゆうちょ銀行　四一八（ヨンイチハチ）店
　普通預金:3544210　名義:対人援助学会
口ゆうちょ銀行の窓口をご利用される場合は、
　記号:14120　番号:35442101　名義:対人援助学会
※お振込の際、氏名は必ず申込氏名でお願いいたします。
（お振込手数料は、各自ご負担をお願いいたします。）

11月10日（日）

10：30～11：30
企画シンポジウム

11：30～12：10
理事会

12：10～12：50
会務総会

13：00～14：00
基調講演

14：10～15：40
企画2ワークショップ
企画3ワークショップ

15：50～17：00
口頭発表Aグループ
口頭発表Bグループ

※プログラムは予告なく変更する場合がございます。

【仲谷善雄 氏 紹介サイト】